

---

# 仮面ライダー 打ち砕け！暗黒魔術師の野望

t-rex

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダー 打ち砕け！暗黒魔術師の野望

### 【Nコード】

N7925S

### 【作者名】

t - r e x

### 【あらすじ】

仮面ライダー、本郷猛は改造人間である。彼は人間の自由のために悪の秘密結社ゲルショッカーとの戦いを繰り広げていた。『正義の系譜』事件から数ヶ月後、ゲルショッカーとの戦いに戻ったある日、改造人間ネズミマムシを倒したその時現れた謎の怪人タコガラス、次々と現れる戦闘員を一文字隼人に任せ、その野望を阻止する為にタコガラスの後を追う仮面ライダー一号。そして彼がたどり着いた世界は三国志の英雄達の名を名乗る少女達が平和の為に闘い続ける世界であった。

## 謎の怪人（前書き）

これはもしもの話、真・恋姫無双の世界に來た天の御使いが北郷  
刀ではなく、本郷猛だったら・・・

## 謎の怪人

仮面ライダー、本郷猛、一文字隼人は改造人間である。彼らの敵であるゲルショッカーは

世界征服を企む悪の秘密結社である。仮面ライダーは人間の自由のためにゲルショッカー

と戦うのだ！

1972年4月2日、今日も仮面ライダーは人間の自由のために悪の秘密結社ゲルショッカー

との戦いを繰り広げていた。そして今回の戦いに決着がつこうとしている。

(挿入曲：レッツゴー！ライダーキック)

(ピュイイン！)

仮面ライダー一号

「トオツ！トオツ！」

ゲルショッカー戦闘員

「ギイイイイイイイイッ！」

一号に立ち向かっていった戦闘員達は次々と殴り払われ、

(ピュイイイイン！)

仮面ライダー二号

「セアツ！セアツ！」

二号に戦いを挑んだ戦闘員は次々と蹴り飛ばされていった。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイイイイイイッ！」

そして戦闘員があらかたダブルライダーに倒されると、今回の事件の黒幕と思われる

驚に蛇が巻き付いたシンボルマークのベルト、左手にママシの頭、ネズミの体を持ち合わ

せたゲルシヨツカーの怪人ネズミママシが姿を現した。

ネズミママシ

「己！仮面ライダーっ！」

仮面ライダー一号

「ネズミママシ！ お前のネズミビールス作戦はもう終わりだ！」

仮面ライダー二号

「今頃、滝とおやつさんがお前達のアジトに忍びこんで、ビールスのワクチンを  
手に入れた筈だ！」

ネズミママシ

「な、なんだとっ！？」

どうやらこの怪人の計画はネズミビールスと呼ばれるウィルスをまき散らし、人々を

病気にしてしまう作戦だったようだが、ダブルライダーの陽動作戦にはまり外におびき出

された揚句、人間である滝和也と立花藤兵衛にワクチンを盗られてしまったのである。

この事実をしったネズミママシは慌てだす。

ネズミママシ

「くそっ！このままではブラック將軍どころか首領にも顔向けできない。作戦に失敗した

俺はゲルシヨツカーの掟により処刑されるだろう。だが、その前にライダーっ！貴様らを

道ずれにしてやる！ 死ねええええ！ チュチュウウウウウウン  
！」

ネズミママシは左手のママシの頭から毒ガスを出したが、ダブルライダーはとっさにジャ

ンプで交わした。

ダブルライダー

「トオッ！」「

そして、ネズミママシの後ろに立つとダブルライダーは一斉にネズミママシに攻撃しだす。

仮面ライダー一号

「あいにくだが、悪魔に魂を売ったゲルショッカーに負ける我々ではない！トオツ！トオツ！」

仮面ライダー二号

「お前に殺された人々の痛みを思い知れ！セアツ！セアツ！」

一号、二号が交互にパンチでネズミマムシにダメージを与えていき、

ネズミマムシ

「チュチュウウウウウン！」

ネズミマムシは反撃してきたが、ライダーは後転して、敵の攻撃をかわした。

仮面ライダー一号

「トオツ！トオツ！」

仮面ライダー二号

「セアツ！セアツ！」

ダブルライダーは今度は蹴りでネズミマムシを攻撃し始め、そして

ダブルライダー

「トオオオオツ」「

同時の蹴りでネズミマムシを前方に吹っ飛ばす。

蹴り飛ばされたネズミマムシは何とか起き上がるも、体からは煙が出ており、もう戦える

状態ではなかった。

これを見た一号は二号に合図する。

仮面ライダー一号

「行くぞ一文字！」

仮面ライダー二号

「おおっ！ いつでもいいぜ本郷！」

ダブルライダーはキックの体制をとりそして……

(ピュイイイイイン！)

ダブルライダー

「トオオオオオオオオオオッ！」

ダブルライダーは同時に高くジャンプし、空中で体系を整え、蹴りの体制になると前方に

いるネズミマムシに突っ込んでいった。

ダブルライダー

「ライダアアアアアアアアア・ダブルキイイイイイイイイイイイイック！」

(ドガッ！)

ネズミマムシ





者かがいる空の方を見上げる。

??????

「カカカカカカ………  
ネズミマムシを倒すとは中々やりま  
すね。仮面ライダー」

## 謎の怪人（後書き）

果たしてダブルライダーの前に現れた怪人はっ！？

## 異世界への旅立ち（前書き）

このSSに登場するオリジナルゲルショッカー怪人タコガラスはかなりの強敵になるでしょう。

（ギルガラスにイカデビルの能力を持たせたような怪人）

## 異世界への旅立ち

ネズミマムシを倒したその時、ダブルライダーは何者かに背後から攻撃され、

前方に吹っ飛ばされた。

何とか体制を立て直し、攻撃が飛んできた方向の空をみると

そこにはカラスにタコが巻き付いたような姿、そしてネズミマムシと同じく驚に蛇が絡み

ついたシンボルのベルトをした怪人がいた。

仮面ライダー二号

「お前は何者だ!?!」

タコガラス

「カラスにタコの能力を移植した改造人間。その名もタコガラスです。」

クワワワカカカカカッ!」

仮面ライダー一号

「タコガラス……ネズミマムシの仇でも取りに来たか!?!」

タコガラス

「いいえ仮面ライダー。ネズミマムシは単なる捨て駒。首領の本当の目的は

貴方達を疲れさせる事だったんですよ!」

仮面ライダー一号

「何っ？」

タコガラス

「気づきませんでしたか？いつもより戦闘員の数も多かった筈ですが・・・」

仮面ライダーは少し考え始める。確かに戦闘員はいつもより多かった。

しかし、余りその事を気にせず闘っていたがまさか別の怪人の策だったとは・・・

仮面ライダー一号

「我々の体力を消耗させて、お前が止めを刺す作戦か!？」

タコガラス

「いいえ・・・首領の目的は今から私を過去のある場所に送り込む事なんですよ

貴方たちに計画を知られ邪魔されると困るのでね・・・」

仮面ライダー二号

「何っ!? 過去だと!？」

タコガラス

「その世界には首領に是非献上したい宝物があるのです」

ダブルライダーは目の前の怪人の言う事を今一信じられなかったが、かつて

時空を超えた戦い「正義の系譜事件」にて邪悪の化身「邪眼」が過去と未来の時空を利用

して世界を滅ぼそうとした事を思い出す。その時はそれぞれの時間の仮面ライダーが協力

して邪眼を倒し、何とか野望を阻止できた。だとすればこの怪人の言っている事は本当に

なる。

仮面ライダー一号

「お前は過去へ行き、何を首領に献上する気だ！」

タコガラス

「それは知りたければ、私を捕まえる事ですね。最も彼らを倒す事が出来たらの話ですが

……行きなさい戦闘員の諸君！ クワワワカカカッ！」

タコガラスが合図したのと同時にダブルライダーの周りに戦闘員が現れた。

しかもネズミマムシの時より数が多い。

仮面ライダー二号

「くそっ！まだこんないやがったのか！」

タコガラス

「せいぜい彼らを相手に頑張るんですね。クワワカカカッ！」

タコガラスは後方の方に飛んでいき、目の前にある時空の裂け目みたいな物に入ろうとした。  
た。

仮面ライダー一号

「まずい！過去に行く気だ！」

仮面ライダー二号

「本郷！ここは俺に任せて奴の後をおえ！」

仮面ライダー一号

「一字！？ し、しかし・・・」

仮面ライダー二号

「奴が何を首領にプレゼントしようとしているのかは分からねえ。だがこれだけはいえる。それが首領の手に渡ったら大変な事になる事だけはな！」

仮面ライダー一号

「・・・分かった すまん一字」

一号はそういうと近くに留めてあった自分の愛車新サイクロンに乗るとタコガ

ラスが飛び込んだ今にも消えそうな時空の裂け目へと向かっていった。

仮面ライダー一号



「タコガラス！ 思うどおりにはさせない！ 例え戻れなくなったとしても」

貴様の野望は何としても打ち砕いてやる！」

（ブウウウウウウウウ）

一号はそういうと時空の裂け目に飛び込み、そしてそれと同時に裂け目が閉じてしまった。

仮面ライダー二号

「いったな……さあお前らの相手は俺だ！ かかってこい！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイイイイイッ！」

ゲルシヨツカーの戦闘員一斉に二号に向かっていった。二号は迫りくる戦闘員達を

ある者は殴り払い、ある者は蹴り払っていった。

異世界への旅立ち（後書き）

次回はゲルショッカー SIDEの話です。

## 恐るべき心理作戦計画（前書き）

今回はゲルショッカーSIDEの話です。

## 恐るべき心理作戦計画

ここは世界征服を企む悪の秘密結社ゲルシヨッカー本部。

そこにはこの戦いを映像で冷静に見ていたブラック將軍がいた。

彼はタコガラスがライダーに目的を話してしまった事に不安を感じていた。

ブラック將軍

「タコガラスめ……ライダーに目的をばらすとは何を考えておるのだ！」

おまけに目的の世界にライダーがついてきてしまった！」

ブラック將軍がいらただしげに鞭を振るったその時、驚に蛇が絡みついたレリーフが輝き

だし、ゲルシヨッカーを支配する首領の声が響き渡る。

(ピイン……ピイン……ピイン)

ゲルシヨッカー首領の声

「奴はワザとライダーを誘い出したにすぎん……目的の過去で始末するつもりなのだ」

ブラック將軍

「なるほど……我々に例の物を献上するだけでなく、味方がいない世界でライダーも始末するという事ですか。正に一石二鳥とはこの事ですな首領」

ゲルシヨツカー首領の声

「唯一の計算違いは二号がこの世界に残った事だ。ブラック將軍、大至急作戦を立て我々の世界征服計画の邪魔をする仮面ライダーを倒すのだ！」

ブラック將軍

「はっ！首領の仰せのままに！」

この会話の様子をブラック將軍には見えないところで見ている少年がいた。

髪は銀髪で平安時代の貴族の衣装に似た服を着ているが、ゲルシヨツカーの紋章が

服についている事からつい最近ゲルシヨツカーに加入したばかりだと思える。

???

「これがゲルシヨツカー……。さすがに悪の組織を自称するだけにすごい施設と凄い組織力だ。あの時、本郷猛があの世界に導かれる前に消そうとした時、彼らにスカウトされ、ゲルシヨツカーに入ったがむしろこの方が良かったかもしれないな。奴らを敵に回すのは得策ではない。……。さあ、首領の所にいくか」

その少年は回想を終えるとブラック將軍、そしてゲルシヨツカー首領の声がする所

に姿を現した。

??

「首領。仮面ライダーの抹殺は是非、この私にお任せを・・・」

ブラック將軍

「貴様か。何かいい作戦があるのか？仮面ライダーは強敵だ。並大抵の作戦では勝てんぞ」

??

「はいブラック將軍。仮面ライダー、奴らは確かに強い。しかし脳改造を受けていないだけに他の怪人とは違い必ず精神的な弱点があるはずです。」

ゲルシヨツカー首領の声

「精神的な弱点？それは何だ？」

??

「はい奴らには風車ダイナモの回転を止められるだけでなく精神的な弱点があります。それは・・・心の優しさです。」

ゲルシヨツカー首領の声

「心の優しさ？」

??

「はい、奴らは人間を守るためなら無限の力を発揮しているといっても過言ではありません。なら、私が・・・」

その少年はそついうと着ている服を脱ぎ捨て小学生くらいの姿になった。

???

「その守るべき人間になり済まし、奴を油断させてしまえばいいのです。」

ブラック將軍

「成程。ガキの姿なら奴らも油断するな。しかしどうやって一文字隼人に近づくつもりだ？」

???

「それには首領。そしてブラック將軍貴方がたの協力が必要です。それは……」

その少年は自分の作戦内容を首領達に話し、協力してくれるよう頼み始めた。

ブラック將軍

「成程……それはおもしろい」

ゲルシヨツカー首領の声

「いいだろう。その貴様の作戦に協力してやろう。しかし分かっているな？」

もし作戦に失敗した場合は……」

???

「我が命亡きものと心得ます」

ゲルシヨツカー首領の声

「よし。その意気だ……。我がゲルシヨツカーには作戦に失敗した者は必要ない。」

その事を忘れず、作戦を実行し一文字隼人の息の根を止めるのだ！」

その時、少年の姿が変化し今度はゲルシヨッカーのシンボルマークが入ったベルトをした

ワニとアルマジロを合成した怪人ワニマジロと呼ばれる姿になる。

ワニマジロ

「グワン！グワン！グワン！ 必ず偉大なるゲルシヨッカーの為に  
一文字隼人を倒して見せます。」

はたしてこのワニマジロの正体はいったい何者なのか？ そしてその頃、仮面ライダー一号は

タコガラスを追って今だ時空の中を走り抜けている最中であつた。



## 恐るべき心理作戦計画（後書き）

次回戦闘シーンになりますが、敵はゲルショッカーではなく恋姫無双でお馴染みのあの小悪党達です。

**本郷猛、三悪党を撃退すること（前書き）**

今回本郷猛の前に立ちふさがる敵は怪人ではなく、恋姫無双シリーズでお馴染みのあの悪党達です。

## 本郷猛、三悪党を撃退すること

その頃、本郷猛こと仮面ライダー一号はタコガラスを追って今だ時空の中をサイクロンで

走っていた。

仮面ライダー一号

「タコガラスめ。かなり前の過去にいったな。どこにいこうとしているんだ。」

その時ライダーの目の前に眩しい閃光が輝きだす。

仮面ライダー一号

「あれは出口か？」

出口まで向かう彼だったが、光が晴れるとそこには・・・遙か彼方を見渡せるような大陸

があった。しかし出口に出たと同時に彼は慌て始める。

仮面ライダー一号

「何っ！？ 空・・・うわあああああっ！」

そう出口はその大陸を見渡せる空と繋がっていたのだ。

どうやら後を着いてきた事に気付いたタコガラスが細工を施していたようである。

仮面ライダー一号

「くそっ！……サイクロオオオオオオオオオ！」

一号は咄嗟にレバーを廻して、サイクロンに内蔵されていた翼を露出させる。

仮面ライダー一号

「ジャアアアアアアアアアンプ！」

すると落下の速度はどんどん遅くなっていき、そして最後にそのまま地面に

着地した。

仮面ライダー一号

「危なかった……タコガラスめ……せこい前をしてくれる」

（ボシユン！）

彼はこの姿のままだと目立つと判断したのか変身を解除し、本郷猛の姿に戻り

本郷猛

「（まずはここはどこなのか調べなくてはいけないな）」

そう考えた結果、彼は付近を模索することにした。そしてその成果は意外にも早く訪れた。

三人の人影を見つけたのだ。三人組も気付いたらしく、こちらへと歩いてくるのが分った。

向こうの三人組が近づくとつれ、三人の容姿がはっきりと見えてくる。

一人は如何にも小悪党と言った顔つきの中年男。

一人は背丈の低い、少し鼻が尖がった男。

一人は凡庸そうな、肥満の巨漢。

そして注目すべきは、三人とも頭に黄色の布をつけている事であった。

本郷猛

「（なんだあいつら…初めてみる格好なのに昔中国に関する歴史書で見たような気がするな）」

ある程度、近づいた所で問うとした矢先、三人組の真ん中にいる中年が声をかけてきた。

兄貴

「おい、兄ちゃん。見た事無え格好してんな。まあ、いい。死にたくないなら身包み全部置いていきな。」

中年の男が突然そんな事を言い出し、何のつもりだと聞こうとした時、その男の合図で

兄貴

「やっちまえ！」

手下の男二人は剣を構え自分に斬りかかってこようとしたが、本郷はとっさに二人の

男の攻撃を避けた。

そして、背丈の低い、少し鼻が尖がった男が再び、斬りかかってきた時、剣を振りかざ

してきた手を受け止め地面にたたき付けた。

本郷猛

「とおっ！」

チビ

「ぐえっ！」

そして本郷は次に斬りかかってきた肥満の巨漢の攻撃をよけると、後ろに回り

急所にチョップをする。

本郷猛

「ふんっ！」

(ドガッ！)

デク

「がはっ！」

デクは痛みを感じる前に地面に倒れこんでしまう。

そして、今度は3人のリーダー格と思われる中年の男が自分の前に立ちふさがった。

兄貴

「へえ〜兄ちゃん中々やるじゃあねえか。益々仕留めがいがあるぜ！」

今度はその男が自分に斬りかかってきたが、本郷は攻撃をかわし、そして

男の攻撃を受け止めると、そのままカウンターのパンチを喰らわす。

本郷猛

「とおっ！」

兄貴

「があっ!?!」

中年の男は目の前の男の人間とは思えない力に耐えきれずひるんだ時、

連続で腹部を殴られ、完全に抵抗できなくなった時、背後に回った本郷に

動きを封じられてしまう。

兄貴

「っ、強い!なんだよお前……」

本来なら本郷はこの三人を完全にKOしていただろうが、聞きたい事があったので

手加減していた。しかし手加減したとはいえ、3人は立っているのがやっこのようである。

本郷猛

「さあ、答えろ！何故俺を殺そうとした！？ お前たちはゲルシヨツカーの刺客か！」

兄貴

「ぐ、苦しい・・・げ、げるしょっかー？ そんなの知らねえよ！」

チビ

「俺たちはためえから金目の物を頂こうとしただけだよ！」

デク

「そうなんだな・・・僕たちはそのゲル何とかとは関係ないんだな」

3人は何かこの男に誤解されていると思ったのか、必死に自分達は

そのゲルシヨツカーとは関係ないただの悪党だと猛に伝える。

本郷猛

「そうか・・・。だがお前達は俺の命を狙った事に変わりはない。これ以上痛い目に遭いたくなかったら・・・とつとと失せる！」

本郷は動きを封じていた中年の男を手下二人に投げつける。



二人は投げつけられた兄貴に直撃し、そのまま地面に倒れこみ、

そして起き上がると……

兄貴

「くっ！……逃げるぞお前ら！ こいつやばい！」

チビ

「分かってますよ！ こんな奴相手にしていたら命がいくつあっても足りない。」

デク

「お、覚えているんだな！」

三人はそのまま全速力で走り去っていき、やがてその姿は見えなくなってしまう。

本郷猛

「捨て台詞を吐いてにげるなんてどうやら奴らはただのチンピラだったようだな。さてと……いるのは分かっている。其処に隠れている奴ら出てこい！」

???

「ほづ？我々の存在に気づくとは見事です。」

**本郷猛、三悪党を撃退すること（後書き）**

次回遂に、本郷猛は恋姫無双シリーズの世界の住人と接触します。  
ちなみに蜀ルートの人物達です。

**本郷猛、桃香達と接触すること(前書き)**

今回は戦闘シーンはありません。

## 本郷猛、桃香達と接触すること

本郷は咄嗟に茂みの方に指を刺し、呼びかけるとそこから声が出たのと同時に3人の

少女達が姿を現した。

鈴々

「凄いな！素手であいつらに勝っただけじゃなく、このお兄ちゃん鈴々達にも気づいたのだ」

桃香

「愛紗ちゃん。この人が私達の探していた『天の御使い様』かな？」

愛紗

「分かりません。ですが剣を持っていた相手に素手で勝利した相手です。」

「只者ではないのは確かでしょう」

本郷猛

「話しあっている最中申し訳ないが、君達は何者だ？」

本郷は見構える。可憐な少女の姿をしているが、ゲルシヨッカーの戦闘員ではないのかと疑ったのだ。

3人は男に警戒されていると悟り、慌ててこう言い始める。

愛紗

「お、お待ち下さい！ 私達はさっきの男達の仲間ではありません。いきなり現れた無礼はお詫びします。私達はただ『天の御使い様』  
であ

る貴方様をお迎えに……」

本郷猛

「天の御使い？」

本郷は天の御使いという聞いたこともない言葉に反応し、思わず首をかしげる。

愛紗

「はい。数日前この戦乱を治める為に天より遣わされた方が天から落ちてくる、と管路という占い師に聞いたのです。貴方以外に誰が天の御使いだと言うのですか？」

桃香

「それにそこにある見た事もない乗り物らしきもの。それは貴方がそれに乗ってやってきた天の御使い様である何よりの証拠です」

本郷猛は後ろにある自分の愛車サイクロンを見る。

しかしおかしい。これは子供でも知っているバイクなのにこの少女達はバイクを

初めて見たような眼をしているのだ。

本郷猛

「君達、これはバイクと呼ばれる乗り物だ。本当にこれを見た事がないのか？」

桃香

「ば、ばいくというんですか？ 申し訳ありませんが本当に見た事がないんです」

鈴々

「鈴々もはじめてみたのだ」

愛紗

「あのそもそもバイクというのは……？」

本郷猛

「俺の国での乗り物の一つだ。馬なんかより圧倒的に速い」

本郷は彼女達が乗ってきたと思われる馬の方をみる。

どうやら、さっきまで彼女達と同じく隠れていたようだ。

愛紗

「馬よりも……？さすが天の国の乗り物です」

本郷猛

「そろそろ聞いてもいいか？」

桃香

「何ですか？」

本郷猛

「ここはどこなんだ？」

愛紗

「ここは三国の大陸の一つ。幽州です。あ、名乗り忘れましたが私は姓は関、名は羽、字を雲長と申します。」

桃香

「私は姓は劉、名は備、字は玄德です。」

鈴々

「鈴々はね、姓は張、字は飛、字は翼徳。真名は鈴々なのだ」

本郷猛

「何っ!？」

3人はそれぞれ挨拶を済ませた途端、本郷の顔が自分達の名に驚いている事に

気づいた。まるで自分達の名を知っていたかのように……

愛紗

「あ、あのどうされたのですか？」

本郷猛

「い、いや何でも……(関羽、劉備、張飛だっつ? 中国史における

三国志に登場する蜀の国の武将達の名前だ。すると俺は1700年以上も前の中国にやってきたのか? タコガラスめ。こんな世界に何を取りに来たんだ? いやそれよりも何故、俺の知っている武将達がこんな少女達なんだ? まさかここは全く別の世界の中国か?)」

桃香

「あの〜どうしたんですか？」

突然考え事を始めた本郷猛を心配して今度は桃香が話しかける。

本郷猛

「いや何でもない。それより君達に聞きたい事はもう二つある。」

愛紗

「何でしょうか？」

本郷猛

「その『天の御使い』というのは何だ？」

愛紗

「はい、『天の御使い』というのはこの戦乱を治める為に天より遣わされた方の事です。」

そして管路という占い師がいうには『天の御使い』はこの戦乱の世を治め、そして人々を脅かす災いと対峙し、平和をもたらすと聞いております。」

愛紗の「そして人々を脅かす災い」という単語に本郷は反応する。

本郷猛

「そして人々を脅かす災い？・・・まさか・・・」

桃香

「あの何か心あたりでも・・・？」

本郷猛

「いや何でもない・・・（俺がその『天の御使い』なら『そして人



々を脅かす災い」  
とはゲルシヨツカーの事か？ いやまさか奴らがこんな時代にいるわけが・・・」

愛紗

「あゝ」

本郷猛

「何だ？」

愛紗

「できれば詳しい話がしたいので一旦私達が滞在している町まで来てもらってもよろしいでしょうか？」

本郷猛

「・・・分かった。」

本郷は詳しい事を知るために彼女達の後をついていくことにした。

数分後、馬に乗っていた愛紗達は愕然とする。あの男の言っていた通りあの「バイク」

という乗り物は圧倒的に馬よりも早かったのだから。しかも何かやたら凄い音を立てながら・・・

(ブウウウウウウウー！)

鈴々

「あのお兄ちゃんの乗り物。お兄ちゃんの言つとおりホントに速いのだ！」

愛紗

「ああ我々の馬が全く追いつけないなんて・・・」

桃香

「あの人の話ではあれでもゆっくりならしいよ。本気で走らせれば短時間で遠くにある目的地までいけるらしいよ」

鈴々

「天の国というのは凄いところなのだ」

3人の少女は話しながら、天の御使いと信じる男の後を追いかけて行った。

その頃、本郷猛に撃退された三悪党に怪しい影が忍び寄っていた事に誰も気づかないでいた。

本郷猛、桃香達と接触すること（後書き）

次回、三悪党に近づく怪しい影とはっ!？

## 誕生！暗黒魔術師（前書き）

今回、改造手術の場面をなるべく分かりやすく表現してみました。

## 誕生！暗黒魔術師

その頃、本郷猛を襲おうとして返り討ちにあつた黄巾党の三人組は痛手を負いながらも、

アジトに帰っている最中であつた。

兄貴

「くっ！ あの男むちゃくちゃ強かつたぜ・・・ いててっ・・・！」

兄貴は本郷に殴られた腹を抑えながら、痛みを何とか堪えようとした。

チビ

「こっちは皮の鎧を着ているのに、まるで意味がありませんでしたね。」

デク

「僕達は剣を持っていたのに全く意味が無かつたんだ・・・」

兄貴

「あの野郎。次あつたらぶっ殺してやる！ あの野郎に勝てるんだつたら俺は悪魔に魂を売ってもいいぜ！」

???

「ほう？ では貴方達の魂を買わせていただきますでしょうか？」

三人は突然声のした方向をみると木の枝に眼鏡をかけ、少し長めの髪、そして頭部に鷲に

蛇が絡みついた刺青を入れた青年がいた。

兄貴

「な、何だ！？ てめえはっ!？」

干吉

「我が名は干吉。貴方達が困っている様子を見まして失礼と思いましたが、あえて声を掛けさせていただきました。」

チビ

「その干吉が何の様だよ！」

干吉

「力をあげましようか？あの男に勝てる力をね・・・」

兄貴

「ああん？ 力だあつ？ 何言つてんだ？ まあいいや。こつちとら野郎にブツ飛ばされて機嫌が悪いんだ。命が惜しかったら金目の物を置いて行きなっ！」

兄貴の合図で二人は剣を鞘から抜きその干吉に襲いかかるうとする。

その男が自分達よりも恐ろしい存在だとは知らずに・・・。

干吉

「やれやれっ・・・せつかく力を貸そうと思いましたが・・・  
まあこれだけ冷酷な

人間ならきつと素晴らしい怪人ができるでしょうね。」

デク

「か、怪人・・・？」

干吉が突然意味不明な事を言い出した事に動揺し3人は思わず動きを止めてしまう。

干吉

「そうです。怪人です。・・・捕まえて下さい！」

干吉が誰かに向かって合図をしたその時、

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギーッ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギーッ！」

何とこの時代にいない筈のゲルシヨツカーの戦闘員達が次々と姿を現し、

あっという間に3人を取り囲んだ。

チビ

「な、何だよっ？ お前ら」

3人は見た事もない服を着て、蝙蝠の様な赤い模様が入った青いマスクをした男達に驚愕し

た。

兄貴

「くそっ！やられてたまるか！ やっちまえ！」

チビ、デク

「「お、おうっ！」」

3人は咄嗟に抵抗しようと男達に向かうも……

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

やはり数が多い戦闘員に敵うわけがなく、あっという間に捕まってしまう。

兄貴

「く、くそっ！ 離せ！」

チビ

「離しやがれ！」

デク

「僕達をどこに連れていく気なんだな！？」

干吉

「やれやれ……少し静かにしてもらいましょうかね」

干吉が合図をすると、3人の戦闘員が黄巾党の3人を後頭部を殴り、

(ドカッ！)



兄貴、チビ、デク  
「くぐえっ！」「」

気絶させてしまう。

数時間後、黄巾党の3人が目を覚ますと、自分達が寝台の様な場所に寝かされ

そして周りに、白装束を着て白いマスクをかぶった男達が自分達の周りを囲んでいる

のを見て、驚き思わず逃げようとしたが、両手両足が鎖で固定されており、逃げる事が

できなかった。

兄貴

「こ、ここはどこなんだっ！ てめえら一体何者だっ！？」

チビ

「俺達に何をする気だよっ！」

デク

「僕達を離すんだなっ！」

3人が叫んだその時、どこからか不気味な声が聞こえてくる。

ゲルシヨツカー首領の声

「ハッハッハッ！ ようこそ黄巾党の諸君。よくぞ我がゲルシヨツ

カーに来てくれた。」

兄貴

「げ、げるしょっかーだって!？」

3人は聞き覚えのある単語に驚愕する。そう自分達が襲おうとして  
返り討ちにした

男がいつていた言葉である。

チビ

「そのゲルシヨツカーが俺達に何をしようというんだよ!」

ゲルシヨツカー首領の声

「心配する事はない。別に危害を加えるわけではないのだ。君達は  
本郷猛を倒す為なら  
悪魔に魂を売ってもいいとっていたたそうではないか ならその倒  
す為の力を与えるだけだ」

兄貴

「本郷猛? あの野郎の名前か・・・ それと俺達を縛り付けるの  
に何の関係があるんだよ!」

干吉

「改造手術の際、貴方達が暴れないようにするためですよ」

扉らしき物が開いた時、ここに自分達を連れてきた男が姿を現した。

兄貴

「てめえ・・・改造手術だって・・・?」

干吉  
「そうです。今から貴方達を二種類の動植物の能力を持った怪人に作り変えるんですよ。」

チビ

「や、やめてくれ！ そんな訳の分かんねえ手術なんか受けるきねえよー！」

干吉

「大丈夫ですよ・・・痛みは感じませんから・・・ふふふっ・・・」

干吉が不気味に笑いだすと、三人は背筋が凍る思いをしてしまう。

兄貴

「（こいつら、散々ひどい事をしてきた俺達よりもつとヤバい！）」

干吉

「さあ改造手術開始！」

ゲルシヨツカー科学戦闘員

「ギーー！」

干吉が合図したのと同時にゲルシヨツカー科学戦闘員はメスを手に持ち、

三悪党に向ける。

チビ

「や、やめてくれー！」

必死の叫びもむなしく、彼らは骨は人口の骨、筋肉は人工筋肉、心臓は人工心臓に取り替

えられ、そしてそれぞれ動植物の一部を体に移植された。

3人

「ぎゃあああああああああああ！」

干吉の言うとおり、痛みはゲルシヨツカーの開発した特殊麻醉のおかげでなかったが、

自分達が人間ではない姿にどんどん変化していく事に耐えきれず、思わず悲鳴をあげてし

まう。

数時間後、3人の黄巾党の男達の改造手術は完了した。

そこには怪人に改造された3人がいたのだ。

三人のリーダー格であった兄貴はオオカミとクワガタの怪人に

チビは猿とウツボカズラの怪人に、そしてデクはクマとヤスデの能力を

持った怪人になっていたのだ。そして三人ともゲルシヨツカーのシンボルが

入ったベルトをしていた。

兄貴

「ウオオオオオン。こ、これが俺達？」

チビ

「キイーキキキ！ いままでよりも気分がいい」

デク

「体の奥底から力がみなぎってくるんだな グオオオオオン」

その時、再びゲルシヨツカー首領の声が響き渡ってきた。

(ピイン・・・ピイン・・・ピイン・・・ピイン)

ゲルシヨツカー首領の声

「貴様らをそれぞれクワガオオカミ、サルカズラン、クマヤステと命名する。」

兄貴(以後、クワガオオカミ)

「それが俺達の新しい名前か？ ウオオオオオン！」

チビ(以後、サルカズラン)

「感謝するぜ。これならあの野郎に仕返しできるぜ キイーキキキ！」

デク(以後、クマヤステ)

「負ける気がしないんだな。 グオオオオン！」

干吉

「感謝して下さいよ。貴方達が怪人に生まれ変わったのは、首領に

選ばれた事にあるんですから」

クワガオオカミ

「ああ分かっている」

干吉

「ではまずゲルシヨツカーのメンバーになったからには基本的には覚えなければ  
ならない事があります。」

サルカズラン

「それは何だ？」

干吉

「それは首領に対する忠誠の儀式です。見ていて下さい。偉大なる  
ゲルシヨツカーに栄光を！」

干吉が首領の音がするシンボルマークに忠誠の儀式を行うと、周りにいた戦闘員達も

つられて一斉に整列し首領に対する忠誠心を見せる。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギーー！」

全員手を挙げて首領の栄光を願った。

クマヤステ

「こ、これをするんだな？」

干吉

「そうです。一度やってみますか？」

クワガオオカミ

「……おもしれえ！ やってやるぜ。やるぞお前ら」

サルカズラン、クマヤステ

「おおっ！ いいぜクワガ兄貴」

そして3体の怪人は前にでると忠誠の挨拶を行う。

三怪人

「「偉大なるゲルシヨツカーに栄光を！」」

すると戦闘員達が拍手を始めたと同時に首領の声が響き渡ってきた。

ゲルシヨツカー首領の声

「新しくゲルシヨツカーに入った君達に栄光あれ。我々は君達を歓迎する」

どうやら歓迎されているようであった。

そして首領は今度はこんな事を言い始めた。

ゲルシヨツカー首領の声

「では早速君達に頼みたい仕事がある。」

クワガオオカミ

「それは何だ？ い、いや何でしょうか？ 首領」

ゲルシヨツカー首領の声

「今後ゲルシヨツカー三国時代支部は世界征服の為、勢力を拡大しなければならぬ。君達のような怪人を生み出す必要があるのだ」

サルカズラン

「それで・・・？」

ゲルシヨツカー首領の声

「以前君達が襲った街には優れた人間が大勢おる。まずはそいつらを捕獲し、ゲルシヨツカーの為に働く怪人に作り変えるのだ！」

クワガオオカミ

「そんな事か？ いいぜ任せておけ！ 弱い奴を捕まえるのは大得意だ」

クワガオオカミは戦闘員を連れて外に出ようとしたその時、干吉に呼び止められる。

干吉

「おっと一つ言い忘れた事がありました。」

サルカズラン

「何だよ？」

干吉

「我々ゲルシヨツカーには恐ろしい敵がいます。そいつの名は仮面ライダー。」

今までに多くの怪人がそいつに倒されました。 気をつけて下さいねそいつは

手ごわいですから・・・。」



クマヤステ

「分かったんだな。」

そして三怪人はそのまま外に出ると、干吉に首領が話しかけてきた。

ゲルシヨツカー首領の声

「やつらは果たしてライダーに勝てると思うか？干吉よ」

干吉

「さあそれは奴らの実力次第でしょう。もし倒されたとしても所詮はライダーの力を計測するための捨て駒。また新しい怪人を作れば

いいだけの話です。」

ゲルシヨツカー首領の声

「よろしい。・・・例の物ができるまでの時間は？」

干吉

「約数カ月ですね。その間ライダーの気を怪人でそらす必要があります。」

ゲルシヨツカー首領の声

「よろしい。例の物がライダーにばれぬ様気をつけるのだ。今日よりお前に「暗黒魔術師」の名を与える。その名に懸けて必ずライダーを倒すのだ。」

干吉（以後、暗黒魔術師）

「その名前。ありがたく頂戴いたします。その名に恥じぬよう必ずライダーを倒して見せましょう。」

こうして三国時代に恐るべきゲルシヨッカーの新幹部暗黒魔術師が誕生してしまった。

果たして彼はどんな罫をライダーに向けるのか？ 一方その頃本郷達は桃香達が滞在して

いる町で食事をとっている最中であつた。

## 誕生！暗黒魔術師（後書き）

次回、本郷は桃香達の主になる事を決めます。そしてそれと同時にあの三人組が

桃香達の滞在する町に襲いかかります。恐ろしい力を身につけて。

ゲルシヨツカー 街を襲撃すること（前書き）

今回、ゲルシヨツカーの怪人として生まれ変わったあの3人が愛紗達と

戦い、圧倒的な力で追い詰めていきます。

## ゲルシヨツカー 街を襲撃すること

新たなゲルシヨツカーの怪人となった三人の黄巾党が部下を連れて街に向かっている時

本郷達は街で食事をしていた。

外に停めていた愛車のサイクロンが珍しいのか、食堂の外には人がいっぱい集まっていた。

(あのお方が噂の天の御使い様らしい・・・)

(言われてみればあの凛々しい顔つき。その雰囲気がある・・・)

(何にせよありがたや・・・ありがたや・・・)

外での会話が聞こえるなか、本郷猛はなぜ天の御使いを探していたのかを桃香達に聞いて

いた。

本郷猛

「さてとそろそろ聞いてもいいか？」

桃香

「何でしょうか？御使い様」

本郷猛

「そもそもなんで君達は天の御使いを探していたんだ？」

桃香

「はい私達はこの乱世の世を救うために闘っていたのですが、さっきの黄巾党の人達のように皆の幸せを奪う人が多く出てきて私達の力だけじゃどうしようもなく困り果てた時、管路という占い師に会い、占って貰った所近いうちにこの世界を救ってくれる天の御使い様が現れると予言を聞いたのです。」

本郷猛

「黄巾党!? 奴らか?」

愛紗

「はい、私達はあの日天から光が降りが注ぎ、我々3人でその場所に向かっている時奴らと闘っていた貴方を見つけました。」

本郷猛

「そついう訳だったのか」

鈴々

「最初お兄ちゃんを助けようと思ったけど、素手で闘ってあいつらを追い払っちゃうなんて凄いのだ!」

桃香

「その強さ! 貴方こそ天より私達を救いに来てくれた御使い様に間違ひありません。」

愛紗

「その強さを見込んでお願いがあります。　お願いしますどうか私達と一緒に戦って下さいご主人様！」

(ドテツ！)

愛紗から突然、「ご主人様」と呼ばれ、思わず座っている椅子から本郷はこけてしまう。

愛紗

「だ、大丈夫ですか！？　ご主人様！？」

本郷猛

「ああ、大丈夫だ・・・それよりもその「ご主人様」はよしてくれ。俺にもちゃんと名前がある。」

桃香

「そういえばまだ貴方様から名前を聞いていませんでしたね。何とこの名前なんですか？」

本郷猛

「俺の名は本郷・・・本郷猛だ」

鈴々

「本郷猛・・・よく分かんないけど、カッコいい名前なのだ！」

愛紗

「これ・・・鈴々　ご主人様に失礼だろ。」

本郷猛

「鈴々？この子の名前は張飛じゃないのか？」

愛紗

「あ、いえ鈴々とはこの子の真名なんです」

本郷猛

「真名？」

桃香

「ええ、家族や親しい者の間だけで呼ぶ事を許される本当の名前で許可なくその人の

真名を呼んだら殺されても文句が言えないんです。」

本郷は桃香の言葉に驚愕した。真名を呼んだだけで殺される。それだけ、その名前に

自分の誇り、志がある事を理解する。

本郷猛

「つまり許可なく真名を呼ぶ事はその人から、何かを奪うことと同じくらい

許されない事なのか」

愛紗

「ええそうですね。．．．それよりも一緒に戦ってくれますか？」

本郷猛

「その答えは．．．駄目だ」

桃香

「ど、どうしてですか!？」



本郷猛

「答えは簡単だ。俺は『天の御使い』じゃないからだ」

愛紗

「ええっ!？」

本郷猛

「俺は偶々この世界にやってきただけだ。恐ろしい敵を追ってな」

桃香

「敵？」

愛紗

「あの、その敵というのは？」

本郷猛

「言っても信じないさ。それよりも君達は自分達だけではどうしようもないから

その『天の御使い』という訳のわからない存在に頼る気か？ 君達

だって必死に

人々の為に戦った筈だ」

愛紗

「ええ確かに戦いましたよ。でも黄巾党は数が多く、県令が逃げたしまった為に

多くの人がもう朝廷を信じられなくなっているんです。この村だって私達が滞在

する前から何度も奴らに襲われました。何とかして追い払いましたが、もう私達

だけでは手に負えなくなってきたんです。」

本郷猛

「そういえば、この村、壊れている建物が何件かあったな。あれは黄巾党の襲撃によるものか？」

桃香

「はい・・・やっと・・・やっと・・・皆を助けてくれる人が来てくれたと  
思ったのに・・・貴方が天の御使い様では無いのでは仕方ありませんね。」

彼女達は次第に落ち込み始めて、本郷猛はこう思い始める。

本郷猛

「（この子達も必死に人々を守るため戦って来たに違いない。時には涙を流す事もあつただろう・・・苦しんでいる人々を助けたい一心で『天の御使い』を探して、俺を『天の御使い』と思ったのか？ 歴史の書でしか見た事ないからよくわからなかったが、この時代はこの様な少女達まで戦わなければならぬのか？）」

本郷は彼女達の事情を察してか『天の御使い』ではないといった事に申し訳ない

気持ちになり、彼女達に協力する事を決めた。ゲルシヨツカーの怪人タコガラスを

探さなければならぬが、困っている人を見て黙っている彼ではなかった。

本郷猛

「・・・フリだけでいいか？」

桃香

「えっ？」

本郷猛

「だから、フリだけでいいのかと聞いている。俺が天の御使いと名乗れば  
兵達の士気も高まるはずだ」

愛紗

「そ、それでは私達の主になって下さるのですか!？」

本郷猛

「ああ、少なくとも俺は悲しんでいる人の涙を見たくないし、困っている女性を  
見捨てる程冷酷にも冷静にもなれない。」

桃香、愛紗、鈴々

「・・・・・・・・」

本郷猛

「そういう訳だ。よろしく頼むぞ。劉備、関羽、張飛」

愛紗

「は、はいよろしく願います！ ご主人様」

桃香

「私達はあなたこそが天の御使い様であると確信いたしました。」

鈴々

「これからは鈴々達を真名で呼んでほしいのだ！」

愛紗

「そうですね。私の真名は愛紗です。」

桃香

「私は桃香。」

鈴々

「鈴々は鈴々なのだ」

本郷猛

「ああ改めてよろしく。桃香、愛紗、鈴々」

3人

「はいっ！（なのだ！）」

4人は本郷と手を合わせようとした時、街でなんか騒ぎが起こりだした。

「うわあああああ！た、大変だ！黄巾党がまた攻めてきた」

愛紗

「何っ！？ あいつらこりもせず！ 鈴々行くぞ！」

鈴々

「応なのだ！」

愛紗

「桃香様！危険ですからご主人様とここにいて下さい！」

桃香

「うん分かった」

本郷猛

「待て！俺も行く！」

愛紗

「駄目です！ご主人様はここにいて下さい！」

愛紗と鈴々はそういうと黄巾党の男達が襲撃している場所へ向かう。

現場へたどり着いた彼女達が見たものは男達、それも村で優れた武術の心得を

持つ男達を捕まえている黄巾党達であった。

しかし何か様子がおかしい。奴らは金品、食糧、女には一切手をつけず、男だけを

捕まえていたのだから。

疑問に思うところがあつたが取りあえず、愛紗達は黄巾党の悪事を止める為、奴らに向か

っていった。

愛紗

「待て黄巾党！それ以上その人達を傷つけるなら、この私関羽雲長が相手になる！大人しく立ち去るならそれでよし！それでも向かってくるなら我が青龍偃月刀の錆にしてくれる！」

鈴々

「鈴々も手加減しないのだ！」

大抵の悪党は愛紗達の一括で逃げるが、時には実力の差も理解せず、向かってくる

者もいた。ましてや目の前にいるのは戦った事のある黄巾党の三人組。

自分達の実力は知っている筈なので自分達の姿を見たら逃げるだろうと愛紗は

考えたのだ。

だが、三人の様子がおかしい。自分達の姿を見て逃げるところか部下と思われる男達を連

れてこちらに向かってきたのだ。しかもただならぬ殺気を発して・  
・

そしてある程度近づくと、兄貴が愛紗に剣を向けてこういつ。

兄貴

「ゲルシヨッカーにはむかうとはいい度胸だな関羽！」

鈴々

「げ、ゲルシヨッカー？ お前達は黄巾党じゃないのかなのだ！」

チビ

「これよりこの村は我々が占拠する！死にたくない奴は抵抗するな  
！」

デク

「抵抗しなければお前達には素晴らしい力が与えられるんだな！」

愛紗

「貴様ら何を訳のわからない事を言っている！」

愛紗は青龍偃月刀をフンツと兄貴に振り下ろした。しかし……

愛紗

「何っ！？」

兄貴

「ふふふ……」

何と愛紗の一撃が受け止められたのだ。しかも自分よりも強い力で受け止めており

これ以上押しだせない。

兄貴

「ふんっ！」

愛紗

「きゃあ！」

そして愛紗は兄貴に青龍偃月刀ごとはじき返されてしまっ。

鈴々

「愛紗！」

鈴々は急いで姉である愛紗の元へと向かう。

鈴々

「大丈夫かなのだ！？」

愛紗

「ああ大丈夫だ。奴ら以前とは段違いの強さだ」

兄貴

「ふふふ・・・理解したようだな。関羽、お前も捕まえてやる。そうすりゃ首領もほめてくれるだろうよ」

チビ

「きつとおいら達はすぐにも幹部になれるぜ。兄貴」

デク

「ふふふ・・・僕達はゲルシヨッカー三国時代支部最初の幹部になるんだな！」



愛紗

「お前達さつきから、ゲルシヨツカーとか三国時代支部とか訳のわからない事をいつているがそれは一体なんなんだ！」

鈴々

「お前達は一体何者なのだ！」

兄貴

「知りたいか？ なら正体を見せてやる・・・」

3人

「ハハハハハハッ！」

三人が突然笑い出すと兄貴はクワガオオカミに、チビはサルカズラに、そしてデクはク

マヤステに変身した。

クワガオオカミ

「ウオオオオオン！」

サルカズラン

「キィーキキキ！」

クマヤステ

「グオオオオン！」

そしてそれと同時に黄巾党の男達も来ている服を脱ぎ捨てると、ゲ

ルシヨツカー

の戦闘員になった。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイツ！」

愛紗

「なっ！なっ！？ば、化け物……」

愛紗は目の前で起こった現実が信じられなかった。三人が突然怪人に変身し

、そして配下の黄巾党の男達も見ただ事もない服を身につけたのだから。

クワガオオカミ

「ウオオオン……化け物か……違うな俺達は怪人だ」

鈴々

「怪人？」

サルカズラン

「キィーキキキ！ 人間を超えた存在に俺達は生まれ変わったのだ！」

クマヤスデ

「さあおとなしく降参して僕達に従うんだな！ そうすればこの力と同時に

安全が保障されるんだな！ グオオオオオン！」

愛紗

「ふざけるなっ！ 誰がお前らみたいな化け物の仲間になるか！」

クワガオオカミ

「くくく・・・やはり断つたな。これでお前を殺す理由ができたぜ」

愛紗

「何っ！？」

クワガオオカミは突然意味不明な事を言い出し、そしてクワガタの  
鋏のような剣を

愛紗、鈴々に向けて襲いかかってきた。

クワガオオカミ

「ウオオオオオン！」

愛紗

「くっ！」

鈴々

「うにゃあ！」

二人はクワガオオカミの攻撃を協力して受け止めたが、人間の時よりも凄まじい力で

押し返され後方に飛ばされてしまう。

（ドガッ！）

愛紗

「あ、あああ……」

鈴々

「うん……」

建物の壁に激突し、二人はもう戦える状態ではなかった。

「嘘だろ？ あの二人が負けた？」

今まで二人に守って貰っていた人々は唯一の希望である二人が倒された事に驚愕する。

鈴々

「っ、強すぎるのだった……」

そして三体の怪人は一気に二人に近づいてきた。

サルカズラン

「兄貴、いつその事殺しちまいましたよっぜ！ そうすりゃ奴らも抵抗する

意思をなくすはずだぜ キーキーキキ！」

クワガオオカミ

「そうだな……それも悪くない。」

クマヤステ

「こいつらを痛めつけられるなんて気分がいいんだな」

そしてクワガオオカミは一気に愛紗達に近づき、剣を振り下ろそうとする。

クワガオオカミ

「くくく・・・今までのお礼をしてやるぜ・・・死ねい！」

愛紗

「くっ！」

鈴々

「うっ！」

愛紗、そして鈴々が死を覚悟して目を閉じたその時、

????

「待ていつ！」

突如どこから声がしてきた事に怪人、そして戦闘員達も驚き、声が出た方向をみる。

愛紗達もその方向をみるとそこには自分達が主と認めた男がいた。

愛紗

「えっ！？ ご、ご主人様？」

鈴々

「お兄ちゃん？」

本郷猛

「まさかこんな時代にまで手を出そうとしているとは、何を考えて

いる！

「ゲルシヨッカー！」

本郷猛はその3体の怪人と戦闘員達を上から睨みつけた。

（ル・ル・ル〜ルルルツ！『アイキャッチ 新一号』）

**ゲルシヨツカー 街を襲撃すること（後書き）**

次回、仮面ライダー、三国時代での初戦闘！

果たして我らが仮面ライダーは、本郷猛は3体の怪人に勝てるのか！

**戦え仮面ライダー！前編（前書き）**

長めの話になりそうなので、前編、後編に分けます。  
（挿入曲：シヨツカー襲来）



## 戦え仮面ライダー！前編

(ル・ル・ル〜ルルルッ！『アイキャッチ 新一号』)

(挿入曲：シヨツカー襲来！)

本郷猛は建物の屋根の上からこの時代にいない筈のゲルシヨツカーの改造人間を

見てやはりこの時代にタコガラスが来た事を確信する。

クワガオオカミ

「出たな！本郷猛！」

本郷猛

「貴様らゲルシヨツカーの改造人間か！？」

クワガオオカミ

「その通り！俺はクワガオオカミだ！ ガアアアア！」

サルカズラン

「おいらの名前はサルカズラン！ キーキーキキ！」

クマヤステ

「おらはクマヤステなんだな！ グオオオオオオン！」

クワガオオカミ

「そして俺達は貴様に撃退された黄巾党の男達よ！」

本郷猛

「何っ！？ 貴様らさっきの奴らか！？」

クワガオオカミ

「その通り！俺達は貴様に敗れ、逃げた後ゲルシヨツカーの勧誘を受け、改造された。」

俺達は人間以上の力を手に入れたのだ！」

サルカズラン

「そして俺達はこの時代最初の幹部になるのだ！その手はずにまずは貴様に復讐してやる！ やれっ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「グイイイッ！」

サルカズランが戦闘員に命令すると、戦闘員達は一齐に弓矢を構え、本郷猛をねらい打つ

た。しかし・・・

本郷猛

「トオオオオッ！」

何と本郷猛は人間ではありえない高さまでジャンプして戦闘員の攻撃を避けると、

一気にこっちに近づいてきて戦闘員達に立ち向かっていった。

クマヤステ

「小癩な！やるんだなっ！」

今度はクマヤステの合図で戦闘員達は本郷に襲いかかり、短剣で斬りかかろうとする。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

本郷は間一髪で攻撃をかわし、戦闘員の後頭部を殴り、怯んだ隙に短剣を取り上げた。

本郷猛

「フンっ！ フンっ！」

本郷は取り上げた短剣で戦闘員達を次々と斬り倒し、徐々に追い詰めていく。

そして少し離れた所から隠れていた戦闘員が自分を狙っている事に気づき、其処に向かつて短剣を投げつけた。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイイイツ……………」

短剣は見事に戦闘員の頭部に命中し、短剣が刺さった戦闘員はそのまま地面に倒れこんで

しまう。

クワガオオカミ

「くそっ！ 失敗か・・・」

本郷猛

「伏兵を忍ばせて、俺を狙うとはゲルショッカーらしいやり方だな。だが俺には通用しない！」

クワガオオカミ

「今度は俺達が相手だ！死ね本郷猛！ウオオオオオオン」

クワガオオカミは剣で斬りかかろうと剣を振り回すがかわされ、そして

本郷猛

「フンッ！ フンっ！」

本郷に頭部を殴られ、そして腹部を数回攻撃されてしまう。

サルカズラン

「兄貴！ くそっ・・・これでもくええ！ キーキーキキ！」

サルカズランは右手にあるウツボカズラから何か液体のような物をだし、

本郷猛を攻撃しようとする。

本郷猛

「っ！？ ふん！」

本郷はとっさに近くにいた戦闘員を使って攻撃を塞ぐ。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイイイツ……」

液体を浴びた戦闘員は突然地面に倒れこみ、そしてそのまま溶けてしまった。

どうやら強力な溶解液だったらしくこれを見た本郷猛は思わずゾツとするが

すぐに目の前の怪人たちに立ち向かう。だがここで奇妙な事に気付いた。

3体いた筈の怪人が2体しかないのだ。

本郷猛

「なっ！ クワガオオカミ！ クマヤステはどこいった!？」

クワガオオカミ

「くくくっ！ 気づいたか 本郷、あれを見る！」

本郷は怪人が指差した所をみるとそこには何と桃香を人質にとっていた

クマヤステがいたのだ。どうやら必死の制止をした桃香がついてきた時

、彼女に気づいたクマヤステに人質にされた様だ。

桃香

「い、嫌あああああっ！ た、助けてええええ！ ……ご主人様

！愛紗ちゃん、鈴々ちゃん」

愛紗

「桃香様！」

鈴々

「桃香お姉ちゃん！」

二人は自分の姉が怪人達に人質に取られている事に気づき、直ぐに助けにいきたかったが、

怪人との力の差はさっきの戦いで歴然で手を出せないでいた。

本郷猛

「己っ！卑怯な！」

クワガオオカミ

「本郷！劉備を殺されたくなければ、抵抗をやめろ！」

本郷猛

「くっ！」

さすがの本郷も手が出せず、手を下した。

クワガオオカミ

「賢明な判断だ！ 行くぞサルカズラン ウオオオオン」

サルカズラン

「キィーキキキ！ 分かったぜ兄貴」

クワガオオカミ  
「ウオオオン！」

サルカズラン  
「キイーキキキ！」

二体の怪人はジャンプして空中で反転すると、クマヤステの傍までいくと今度は

クワガオオカミが桃香の首元に剣を押しあてた。

桃香  
「ひいっ……」

桃香は恐怖のあまり、声も出なかった。

クワガオオカミ

「本郷猛！こいつらを返してほしければ、仮面ライダーを連れてこい！」

本郷猛

「何っ！？ 仮面ライダーだと!?!」

本郷はクワガオオカミの言葉に驚愕する。「仮面ライダーを連れてこい」

その言葉からどうやら自分がその仮面ライダーだとは知らないようである。

クマヤステ

「ライダーを倒せばきつと首領は僕達を幹部にしてくれるんだな！」

クワガオオカミ

「ライダーに伝える！ この近くの谷で待っているとなっ！ ウオオン！」

クワガオオカミは手に持っていた煙幕弾らしきものを地面に投げると煙が発生し

煙が晴れるとそこには誰もいなかった。

本郷猛

「くっ！ 逃げたか」

本郷は急いでサイクロンのところに向かおうとすると、愛紗、鈴々が目の前に立った。

愛紗

「お待ち下さいご主人様！」

本郷猛

「どけっ！ 愛紗、鈴々」

愛紗

「ご主人様！お願いします。私達にも桃香様を助けるのを手伝わせて下さい！」

本郷猛

「駄目だっ！ さっきゲルシヨッカーと戦って、その力の差を理解しただろうか？」



殺されに行くようなものだ！」

鈴々

「さつきからゴキだかゲルだか訳わかんない事を聞いているけど、それは一体何なのだ!？」

愛紗

「そういえば、私も聞いていません。ご主人様。奴らについて何か知っていますね  
奴らは一体何者なんですか？」

本郷猛

「俺の世界、君達という「天国」からやってきた世界征服を企む悪の秘密結社だ」

愛紗

「ええっ!？ ご主人様と同じ「天国」の?」

鈴々

「悪の秘密結社?」

本郷猛

「ああそうだ」

本郷猛は彼女達に言う。今自分の世界「天国」はゲルシヨッカーという悪の組織

に狙われている事。奴らの目的は優れた能力を持つ人間を捕獲して、怪人に改造し

それ以外の人間を滅ぼして「世界征服」をすること。自分はそのゲルシヨツカーを

倒す為に戦っていたこと。ある日仲間と共に怪人を倒した時、怪人タコガラスがこの

世界まで何かを取りにやってきて、自分はその後を追ってきた事を話した。

愛紗

「ご、ご主人様の世界は今そんな奴らに狙われているのですか!？」

愛紗は本郷の言葉に耳を疑ったが、さっきの怪人、そして覆面の男達をみて

その話を信じざるを得なかった。信じられない話だった為、これが先ほど

本郷が「いつでも信じない」という理由であると分かった。

鈴々

「だけど、そのタコ何とかは何を取りにきたのだ？」

本郷猛

「それは分らん。だがわざわざ時空を越えてまでこの世界に来たんだ。

かなり拙い物に違いない。それが首領の手に渡ったら俺の世界は奴らに

支配されてしまう。俺は何としても奴を止めなければならぬ」

愛紗

「……分かりました。ならなおの事私達に力を貸させて下さい。」

本郷猛

「愛紗！？ まだそんな事を……」

愛紗

「確かに私たちではさっきの化け物には敵わない事は分かっています。ですが、人質の救出ぐらいならできます。彼らがいたのではご主人様は満足に戦えない筈です。」

鈴々

「それに覆面のやつらだったら鈴々達でも勝てるのだ！」

本郷猛

「……そうか。分かった。ならついてこい！」

二人

「はいっ（なのだ）！」

そして二人はサイクロンに向かう本郷の後を追っていった。

## 戦え仮面ライダー！前編（後書き）

次回、仮面ライダーVSゲルショッカー三大怪人！  
果たして3体の怪人に勝てるのか！？

**戦え仮面ライダー！ 後編（前書き）**

今回は仮面ライダー 三国時代での初の戦闘シーンとなります。

## 戦え仮面ライダー！ 後編

本郷は愛紗達を連れて三怪人が逃げ込んだと思われる谷の近くまで来た。

しかしそこには誰もいない。

本郷猛

「いない。だがこの辺にいるのは間違いない。くまなく探すんだ！」

愛紗

「でもご主人様。あいつらのいる場所が分かるのですか？」

本郷猛

「心配ない。こんなこともあるかと・・・」

本郷は徐に懐から何かを出した。何かの道具みたいだ。

愛紗

「あの・・・これは何ですか？」

本郷猛

「これは俺の世界の道具受信機というものだ」

鈴々

「じゅしんき？」

聞いたこともない言葉に鈴々はおもわず困惑してしまつ。

本郷猛

「これは特定の音を出す発信機という道具の音を探して、受信機を持った者に敵の居場所を教えてくれる道具だ。さっきの戦いでクワガオオカミにこっそりつけておいた。」

愛紗

「そ、それは便利な道具ですね」

そして受信機は発信機の音波をキャッチしたらしく、反応し始める。

本郷猛

「さっそく反応があった。どうやらこの先にいるみたいだ。」

愛紗

「こ、この先に桃香様がおられるのですね!？」

本郷猛

「いる。ここからは二手に分かれるぞ。俺が怪人達の気を引きつける。」

その隙に君達は桃香達を助けるんだ。」

鈴々

「はいなのだ!」

そして、ゲルシヨツカーの新怪人クワガオオカミ、サルカズラン、クマヤステデが

いる場所では、桃香達を中心に捕えられた人々が逃げないようにゲルシヨツカーの

戦闘員が困っていた。

その時、クワガオオカミが何かを話し始める。

クワガオオカミ

「いいかよく聞け人間共！貴様らはゲルシヨツカーの改造人間になる為に選ばれた

最も優れた人間達だ。大人しく我々に従え！」

「ふざけるなっ！　なんで俺達がお前らみたいな化け物に・・・！」

クワガオオカミ

「黙れっ！」

（バシッ！）

「ぐはっ！」

抵抗しようとしていた村人の一人はクワガオオカミにはたかれてしまっ。

桃香

「だ、大丈夫ですか？　なんでこんな事をするのですか」

サルカズラン

「人間共を恐怖のどん底に落とすのが俺達ゲルシヨツカーの目的なのだ！」

クマヤステ

「お前らは生きなければ、大人しく僕達の言う事を聞けばいいのだ



！」

桃香

「そ、そんな身勝手な理由でこんな事を……貴方達は人間の心を無くしたのですか!？」

クワガオオカミ

「黙れ! そんなもの、俺達に必要ないわ!」

サルカズラン

「兄貴、こいつらへの見せしめだ。こいつを殺しちまいましようぜ。この女がいるからこいつら、俺達の恐ろしさを理解できないんだ」

クワガオオカミ

「成程。ならクマヤステお前がやれ!」

クマヤステ

「グオオオオオオン! 任せるんだな兄貴」

そしてクマヤステは桃香に近づき、武器であるヤステの足で桃香を毒殺しようとする。

桃香

「私を殺しても、この人達を支配するなんてできません!」

クマヤステ

「それは貴様を葬ってから確認させてもらおう! 死ねえ!」

クマヤステがヤステの足を振り下ろそうとしたその時、

(ピッ！)

クマヤステ

「ぐはっ？」

何かが手に刺さった。よく見るとそれは戦闘員が使うタイプの短剣だった。

クワガオオカミ

「これは我々の武器！？ 誰がやったんだ」

本郷猛

「俺だ！」

怪人達が声のした方向をみるとそこにはここにいる事を知らない筈の本郷猛が

いたのだ。あの時、近くの谷とはいったがここにいるとまでは言っていない筈だ！

桃香

「ご、ご主人様！」

クワガオオカミ

「き、貴様は本郷猛？ どうしてここがっ！？」

本郷猛

「クワガオオカミ！ 貴様の醜い体をよく見てみる！」

クワガオオカミ

「な、何っ!？」

本郷猛にそういわれ、クワガオオカミは自分の体をくまなく探ってみると

みた事もない玉が自分から出てきた。

クワガオオカミ

「これは何だ!？」

本郷猛

「それは発信機というものだ!それが俺に貴様らの居場所を教えてくださいましたのだ!」

クワガオオカミ

「何っ!？ こんな豆粒が？ くそっ!」

クワガオオカミは悔しさのあまり、発信機を地面に投げ捨ててしま

サルカズラン

「兄貴!落ち着いて下さい! こっちには人質がいるんです。奴は手出しできない筈ですよ!」

クワガオオカミ

「そうだな。 それよりも・・・本郷猛! 仮面ライダーはどうした!？」

サルカズラン

「俺達は言った筈だぜ。 人質を助けたければ仮面ライダーと連れて

「こいと！」

桃香

「か、仮面雷蛇？」

仮面ライダーを知らない為か桃香は怪人の言っている事が理解できず、困惑し始めた。

本郷猛

「そんなに仮面ライダーに会いたいか？ フフフフ・・・ハハハハハハハッ！」

クワガオオカミ

「何が可笑しい！？」

本郷猛

「お前達の探している仮面ライダーは目の前にいる！」

クワガオオカミ

「何だと！？ き、貴様がつ！？」

そして本郷は怪人達のリクエストに答え、変身する事にした。

本郷猛

「お見せしよう。仮面ライダー・・・フンっ！」

（ピュイイイイン！）

本郷猛

「ライダー・・・」

本郷は左手を腰に当て、右腕を左側に持ってきてポーズをとると、右腕をまた右側に持ってきて、今度は右腕を腰に当て、左腕を右側に持つ

てきた。

本郷猛

「変身っ！」

(ゴウン！)

すると本郷の腰から赤い風車のついたベルトが現れ、

本郷猛

「トオッ！」

本郷がそのままジャンプすると、ベルトから発した凄まじい光が彼を覆い、光が晴れると

そこに昆虫のバッタを模した仮面をかぶり、緑色の胸、二本の銀色の線、銀色の手袋、ブ

ーツ、そして赤いマフラーをした男がクワガオオカミ達の近くに着地してきた。

(ピュイイイーン！)

(挿入曲：レッツゴー！ライダーキック)

桃香

「えっ！？ご、ご主人様が！？」

クワガオオカミ

「き、貴様が仮面ライダーだったのか！」

仮面ライダー号

「そうだ。そして俺がいる限りゲルシヨツカーの好きにはさせない！」

今まで自分達が復讐しようとしていた相手がゲルシヨツカーの敵、仮面ライダー

だと知ったとたん彼らは慌てだす。自分達を怪人にした干吉からは多くの怪人がライダー

に倒されたと聞いていたからだ。

クワガオオカミ

「己っ！だが数だけならこっちの方が上だ！ やれ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイー！」

クワガオオカミの合図で人質を囲んでいた戦闘員達が一斉にライダーに襲いかかる。

ある戦闘員はライダーに斬りかかろうとするが、

仮面ライダー一号

「フンっ！ トオツ！」

ゲルシヨッカー戦闘員

「ギイツ……」

短剣を持っていた手を取り押さえられ、そして武器を取り上げられてしまう。

武器を持った仮面ライダーは次々に襲いかかる戦闘員達を次々と斬り倒していく。

ゲルシヨッカー戦闘員

「ギイ！」

そして短剣を地面に投げ捨てると、背後から襲いかかろうとした戦闘員を蹴り倒した。

ゲルシヨッカー戦闘員

「ギイー！」

戦闘員は予期せぬ反撃にあい、地面に倒れこんでしまった。

そして今度は正面から襲い来る敵を

（バキッ！バキッ！ボゴッ！）

殴り払い次々と倒していった。

仮面ライダー一号

「トオオオオっ！」

そして仮面ライダーは今度は怪人達から遠く離れた場所にジャンプして移動する。

仮面ライダー一号

「こいッ！」

クマヤスデ

「ちっ！ 逃がさないんだな！ グオオオオオン！」

サルカズラン

「追え！ 追ええ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイッ！」

サルカズランの合図で戦闘員達は仮面ライダーの方へと向かった。

誘い出されていると気づかずに……

その戦いの様子を桃香、そして捕えられた人々は真剣に見つめていた。

桃香

「ご主人様が戦っている。 皆の為に……」

「あれが噂に聞いた天の御使い様か？」

「なんて強いんだ。 俺たちじゃ手も足も出なかった奴らを次々と倒



している。」

そう話している最中、そこに愛紗達が駆け寄ってきた。

愛紗

「桃香様！ ご無事ですか？」

鈴々

「桃香お姉ちゃん達！ 助けに来たのだ！」

桃香

「愛紗ちゃん！ 鈴々ちゃん！」

その時、愛紗達は自分達から離れている場所で怪人が昆虫の様な仮面を被った

男と戦っているのを見る。

愛紗

「なっ！ 誰かがゲルシヨッカーと戦っている」

鈴々

「あいつは一体誰なのだ？」

桃香

「あれはご主人様だよ」

愛紗

「えっ！？ ご、ご主人様？」

鈴々

「あれはお兄ちゃんなのかなのだ？」

愛紗と鈴々は今戦っているのが自分達の主だと聞いて驚きだす。

桃香

「ご主人様が突然何か構えの体制をとって「雷蛇・・・変身」と言  
ったかと思ったら、  
高く跳んであんなすがたになったの！」

愛紗

「ら、雷蛇？」

桃香

「あの怪人さん達はご主人様を「仮面雷蛇」って呼んでたよ」

鈴々

「か、仮面雷蛇？」

愛紗達には「ライダー」という発音が「雷蛇」と聞こえてしまうの  
だ。

一体なぜあんな姿になったのか彼女達は疑問に思ったが、今は捕ま  
った人達を逃が

す事を最優先することにした。

桃香

「それよりも皆さん！今のうちにはやく逃げて下さいー！」

「あ、ああ……そうさせてもらいます。」

捕えられた人達はライダーと戦っている怪人達に気づかれないうちにこっそりと逃げ出す。

一方で仮面ライダー一号は戦闘員を全て倒し、残すは3体の怪人のみとなった。

サルカズラン

「キイーキキキ！う、嘘だろ？ 手下どもが全滅？」

クワガオオカミ

「これが仮面ライダーの力？ もしかして俺達、とんでもない奴に喧嘩を売ってしまったのか？」

仮面ライダー一号

「クワガオオカミ！ サルカズラン！ クマヤスデ！ 残るは貴様らだけだ！」

クワガオオカミ

「くそっ！ こうなったら行くぞ！ お前ら！ ウオオオン！」

サルカズラン

「キイーキキキ！」

クマヤスデ

「グオオオオオオン！」

3体の怪人はジャンプしてライダーの周りを囲み、周りを移動しながら、時には

前転、後転を繰り返しながら、ライダーを困惑させ始める。

そしてライダーの注意がサルカズランに向いた時、クマヤステは

必殺のヤステの手でライダーの首を締め始める。

仮面ライダー一号

「ぐああああっ！」

クマヤステ

「死ぬんだな！仮面ライダー　グオオオン！」

仮面ライダー一号

「くっ！……ライダーチョップ！」

ライダーはとっさにライダーチョップでクマヤステのヤステの手を斬り落とし、

拘束から脱出した。一方で斬り落とされたクマヤステの手からは激しく失血

している。

クマヤステ

「ギャアアアアアアア！　い、痛いんだな！」

サルカズラン

「クマヤスデ！ くそっ！ライダーこれでも喰らえ！ キーキーキ！」

サルカズランは必殺の溶解液でライダーを攻撃しようとする。

しかし、サルカズランの動きに気づいたライダーは

仮面ライダー一号

「トオオオオオッ！」

（ビュオオオオオオン！）

ジャンプで攻撃をかわし、そして狙いが外れた溶解液は

クマヤスデ

「グオオオン……………！！！」

誤ってクマヤスデに命中してしまい、そして倒れこむとそのまま溶けて消滅してしまった。

サルカズラン

「ああっ！しまった！」

クワガオオカミ

「バカヤロ！ クマヤスデを殺してどうするんだ！」

二体の怪人が誤って仲間を殺した事に動揺し隙ができたのをみた仮面ライダー

素早くサルカズランに近づく。

サルカズラン

「し、しまった。」

サルカズランはとっさに避けようとしたが間に合わず、

(ピュイイイイン！)

仮面ライダー一号

「ライダーアアアアアアアッ・パアアアアアンチ！」

(ドゴンッ！)

鈍い音がしたのと同時にサルカズランは後方まで殴り飛ばされ、

崖に叩きつけられてしまう。

何とか立ちあがるサルカズランだったが、余りのダメージの大きさに

耐えきれずとうとう……

サルカズラン

「キキイー……………！」

(ドオオオオオオオオオオオオオオ！)

前に倒れこんだのと同時に、激しく爆発してしまった。

クワガオオカミ

「己っ！ よくも俺の可愛い部下を……許さん、許さんぞライ

ダー！」

クワガオオカミは二人の手下をライダーに倒され、怒りに震える。

仮面ライダー一号

「かかってこい！クワガオオカミ」

クワガオオカミ

「ガアアアアッ！」

怒りで我を忘れたクワガオオカミはライダーに斬りかかろうとした。

しかし、冷静な判断ができなくなった怪人の攻撃はライダーには当たらず、

そして次に斬りかかろうとした時、足で剣を止められてしまう。

クワガオオカミ

「ウオオオン？」

仮面ライダー一号

「トオオッ！」

自慢の武器である剣を蹴り飛ばされ、丸腰になった所を今度は

(ピュイイイイイイン！)

仮面ライダー一号

「ライダーチョップ！」

半分オオカミ半分クワガタ虫顔の頭に生えた自慢の角を切断されてしまう。

クワガオオカミ

「ぐわああああああっ！ 俺の！ 俺の角があああっ！」

どうやら角が弱点だったらしく、怪人に戦う能力はもう残っていないようであった。

そしてこれを見たライダーは

(ピュイイイイイン！)

仮面ライダー一号

「行くぞ！トオオオオオオオっ！」

(ビュオオオオオオン！)

仮面ライダー一号

「ライダーアアアアア・キイイイイック！」

大空高く跳び上がったライダーは必殺のキックを怪人に命中させる。

(ドゴッ！)

クワガオオカミ

「ウオオオオオオオオン！」

クワガオオカミは10メートルまで跳ばされ、地面に叩きつけられる。



何とか立ちあがったが、キックのダメージに耐えきれず……

クワガオオカミ

「ウオオオオオオオオオン……！」

(ドオオオオオオオオオオン！)

そのまま倒れこみ、爆発炎上するのであった。

3体の怪人を倒し、急いで桃香達の所に向かおうとした時

??????

「ふふふ……あの三体の怪人を倒すなんて……成程。首領が貴方を警戒するのも分かります。」

突如不気味な声が後ろから聞こえたので、振り返るとそこには

頭部にゲルシヨツカーのシンボルマークの刺青を入れた長めの

髪の方がいた。

仮面ライダー一号

「なっ!? いつからそこに? 貴様は何者だ!？」

暗黒魔術師

「我が名はゲルシヨツカーの新大幹部 干吉……といたいところですが、本日首領より暗黒魔術師の名を承りました。」

仮面ライダー一号

「何っ！？ 暗黒魔術師だっ！？」

暗黒魔術師

「そうです。それが今の私の名前です。以後お見知り置きを」

仮面ライダー一号

「ゲルシヨツカー、この時代まで来て何を企んでいるか  
知らんが貴様らの野望は俺が打ち砕く！」

暗黒魔術師

「おお怖い怖い。そうですか。精々頑張ってくださいね。  
我々を相手に・・・ハハハハッ！」

暗黒魔術師はそのまま消えた。

そしてその頃さらわれた男達は愛紗達の案内の元、村に帰りついでいた。

(挿入曲：仮面ライダーの歌：歌詞なし)

「父ちゃん！」

「アンタ！」

夫、父親が二度と戻らないと思い、絶望していた者達にも笑顔が戻ってきた。

桃香

「良かった。皆無事で・・・」

「ありがとうございます。これも劉備様、関羽様のお陰です。」

夫を助けられた女性は劉備達にお礼を言い出す。

桃香

「いえ実はみなさんを助けたのは実は私達じゃないんです」

「では誰ですか？ 是非あつてお礼を・・・」

桃香

「それは私達のご主人様です」

愛紗

「そついえばご主人様はっ？」

鈴々

「あっ！来たのだ！」

鈴々が指差した方向をみると、サイクロンに乗り、こちらに近づいてくる

本郷の姿があつた。

ゲルシヨッカー三大怪人を倒し、村人の男達を助け出し、ゲルシヨッカー

の戦闘員増員計画は未然に阻止できた。

しかし突如現れた謎の新幹部暗黒魔術師はどんな罠を用意しているか

分からない。この世界にゲルショッカーがいる限り、本郷猛の戦いは

終わることはない。

戦え！ 我らの仮面ライダー！

続く

**戦え仮面ライダー！ 後編（後書き）**

次回、「本郷猛、自分のいきさを桃香達に話すのこと」  
にご期待下さい。

**本郷猛、自分のいきさを桃香達に話すのこと(前書き)**

今回は本郷猛が桃香達に自分が仮面ライダーになった経緯を話すS  
Sです。

## 本郷猛、自分のいきさつを桃香達に話すのこと

仮面ライダーが怪人達を倒した翌日、本郷猛の命令で愛紗達は村人達を集め、改めて

本郷は愛紗達に自分の事を紹介させていた。

愛紗

「皆の物。集まってくれた事に感謝する。本日ここに来てもらったのはこの方を紹介する為だ！今こそ立ち上がれ！共に立ち上がろう！我らにはこの方がいて下さる！何を隠そうこのお方は苦しむ我らをお守りする為に天の国よりやってきた御使い様だ！」

「おおっ！やはりそうだったのか！」

「我らの声が届いて天神様がお助けに来て下さったんじゃ！」

「ありがたやっ！ありがたやっ！」

本郷は自分を拝む人々をみて本当にこの人達が苦しんでいたのを理解する。

この事から彼はこの人達をゲルシヨッカーから守ると同時に、自分が必要なく

なるまで戦う事を決めた。

しかし現時点でゲルシヨッカーの存在、その恐ろしさを言えば人々の士気が低くなるのを

予測して彼は今の時点ではゲルシヨツカーの存在をいうのを伏せた。

一部、きのうの怪人にさらわれた人達もいたが、その事をいつても誰も信じず、

もし信じたとしたら、士気が下がるのを恐れていてかあえて、その事を黙っていた。

その時、本郷の演説が始まる。

本郷猛

「皆さん。集まってくれた事に感謝します。私が天の御使い「本郷猛」です。

さあ、共に戦いましょう！今こそ反撃の時です！平和を乱す黄巾党から愛する者

を守るため、そして平和を奴らから取り返す為っ！これ以上、黄巾党の好き勝手に

させていいのでしょうか！？否、断じて好き勝手にさせていいわけがないっ！

敵はこちらの倍の大軍ですが、愛する者を守りたい・・・その思いがあれば、

貴方達は決して負けない！そして私だけではないっ！私の配下となつた劉備、

関羽、張飛も皆さんの力になります。我々の力、そして皆さんの力があれば、

その歩みは確かな物でしょう。皆さん、奴らを倒し、平和を守るため、私達に

力を貸して下さい！・・・ここが新たな歴史の出発点だ！行こう！貴方達



には私と配下達がついているっ！」

「そうだ！そうだ！これ以上奴らに好き勝手にさせてたまるか！」

「俺達には本郷さまがついている！もう負ける気がしねえっ！」

「貴方を信じればきっと奴らに勝てるっ！」

「うおおおおおおおっ！」

村人、特に今まで黄巾党にひどい目に遭っていた人達の士気と闘志は本郷の演説でたかま

っていた。

これを見た愛紗達は驚愕する。今まで戦う意思まで無くなりかけていた人達に

本郷が呼びかけた事で、再び士気が戻っていったのだから……

桃香

「凄い……ご主人様の演説で人々がやる気になっている」

愛紗

「これがあのお方の演説の効果か……」

鈴々

「これならもうあいつらにも負けないのだっ！」

愛紗

「そうだな、だがその前に……」

桃香

「うん。分かっているよ。」

桃香達は人々の士気が高まったのがよいが、一つ疑問に思う事があった。

それは本郷の変身した姿「仮面ライダー」についてである。

なぜ彼は圧倒的な力で化け物達と戦い、そしてあの姿になれるのか。それがまだ分からないでいたのだ。

桃香

「なぜ、あの人は変身できるのかなっ？」

桃香はゲルシヨッカーの事だけは愛紗達から聞いて知っており、最初は驚き

慌てだしたが、今は黄巾党を倒す為にも、士気を下げるのはよくない。その事はまだ村人

達に言わないでくれとゲルシヨッカーにさらわれた人達同様愛紗に説得されていたのだ。

その時、鈴々がこんな事をいう。

鈴々

「分からないなら、お兄ちゃんから直接聞けばいいのだった！」

愛紗

「鈴々つ！なんてことをっ！もし話しづらい事情だったらどうする？」

鈴々

「ここで何か聞かないとお兄ちゃんがああ姿に何故なれるのかは永久に分らないままなのだ！」

桃香

「……………そうだね。今夜、ご主人様の部屋に行って聞いてみよう。」

愛紗

「で、ですが……………」

桃香

「確かに話しづらい事情があるかもしれないけど、それをあえて聞いておかないとあの人とは分かりあえない気がするのっ」

愛紗

「わ、分かりました……………」

愛紗は渋々その事を了承した。

そしてその夜、黄巾党との戦いを控えた前夜、本郷は愛車サイクロンを磨き、携帯用とし

て持っていたサイクロンの燃料を注入していた。数が少ないため、

大切に使わなければな

らない。

その時、桃香達が部屋に入ってくる。

桃香

「失礼しますご主人様」

本郷猛

「何だ桃香達か。こんな夜中にどうした？明日は黄巾党との戦いがあるのに」

愛紗

「すいません。それよりご主人様の方こそ何をされているのでしょうか？」

本郷猛

「これかっ？愛車サイクロンを調整しているのさ」

鈴々

「さいくろん？そのバイクの名前なのかなのだ？」

本郷猛

「そつだ。それより君達は俺に何か様があつてきたんじゃないのか？」

愛紗

「あ、いや実はその……ご主人様に聞きたい事があつてきたんですが」

・・・」

愛紗は突然話しづらそうな雰囲気になる。

本郷猛

「何だっ？ 俺に答えられる事か？」

愛紗

「いや、ですからその・・・」

愛紗が話しづらそうになった時、桃香は我慢できなくなり、とっさにこう言います。

桃香

「ああ、もう！私が聞く！ご主人様！「雷蛇」というのは貴方の真名なのですか？」

愛紗

「と、桃香様っ!?!」

本郷猛

「雷蛇？」

桃香が突然意味不明な事を言い出したので彼は困惑し始めた。しかし発音自体は聞き覚え

があったので、もしかあの姿の時の名前かと思い、桃香にこう答える。

本郷猛

「それはもしかや仮面ライダーの事か？」

彼女達は本郷からあれは雷蛇ではなく、ライダーという名であると聞いた。

鈴々

「か、かめんらいだあ？」

本郷猛

「そつだ。あの名は真名ではなく、俺が変身した時の名だ」

桃香

「では何故、貴方は変身できるのっ？　そして何故、愛紗ちゃん達が敵わなかった昨日の化け物と互角に戦えたのですか？」

本郷猛

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

本郷は今、話すべきか一瞬悩むが・・・

桃香

「どうか教えて下さい。貴方の事をよく知って理解しなければならなと思うんです。」

私達はあなたのことをもっと知りたいんです。」

この時、桃香の自分と分かりあいたい思いに心打たれた彼はまだ彼女達に言っていない事

を話しました。

本郷猛

「俺も奴らと同じ存在だ……」

愛紗

「同じ存在？」

本郷猛

「俺は奴らと同じ改造人間なんだよ」

桃香

「改造人間？」

本郷猛

「俺は昔、ゲルシヨツカーが誕生する前、その前の悪の組織『シヨツカー』に捕まり  
脳以外を全て改造されたんだ」

愛紗

「えっ？」

本郷が突然何かを話しだし、3人は動揺する。

本郷猛

「あれは忘れもしない。昭和43年4月3日。まだ人間だった頃の俺はバイクテクニクの訓練中にシヨツカーに捕まり、強制的に一週間かけて改造手術をされたんだ」

本郷は何故、自分が仮面ライダーに変身できるのかを説明しだした。

本郷猛。彼は知能指数600、スポーツ万能、格闘技も優れそして

世界に通用するほどのオー

トレースの腕を持った優秀な男であり、誰もが彼の明るい未来を見ていた。

だが…その未来は奴らに理不尽に奪われた。

世界征服を企む悪の組織の手により……

本郷猛

「う…う…」

本郷は冷たい手術台の上で目を覚ます。目を覚ました彼はあの時、蜘蛛の化け物に捕まり

そして、くののりのような女達に捕えられた事を思い出す。そして手術台の周りは白衣を着て

不気味なメイクを施した怪しげな科学者らしき者達によって囲まれていた。

本郷猛

「ここは一体どこだ？…俺を自由にしろ！」

すると何処からとも無く怪しい声が聞こえてきた。

シヨツカー首領の声

「ハハハッようこそ本郷猛君！よくぞ我がシヨツカーに来てくれた」

本郷猛



「シヨツカー…一体何のことだ!？」

本郷猛が耳にしたシヨツカー。それは全世界のあらゆる所に網が張られる悪の組織で、本

郷猛は日本の人里離れたその秘密基地に運び込まれた。シヨツカーは世界各国の人間を改

造し、その意のままに動かして世界征服を計画する恐るべき悪魔の様な団体なのだ。

シヨツカー首領の声

「我々が求めているのは頭脳明晰、スポーツ万能の人間。それらを改造し、動植物の能力を持った怪人に作り変える。改造人間が世界を支配し、その改造人間を支配するのが私だ。世界はやがて私の意のままになる。君はその偉大なるシヨツカーに選ばれたのだ」

本郷猛

「馬鹿なっ！俺はシヨツカーに入った覚えはない！」

シヨツカー首領の声

「もう遅い……。君が気を失って既に一週間。その間に我々は君の体に改造を施した。知能指数600、スポーツ万能の君は最も優れた改造人間になったのだ」

本郷猛

「改造人間……。八八ハッ！そんな話信じられるか！」

シヨツカー首領の声

「信じざるを得ないように見せてやれ……」

シヨツカー 科学者 A

「ハッ！……これより君の体に5万ボルトの電流を流す。並みの人間なら一瞬で

黒焦げの死体になる。だが改造された君には全く効かない。」

そういうとその科学者は電流を流すスイッチを入れる。

(バリバリバリッ！)

本郷 猛

「ぎゃああああああああああっ！」

本郷はその電流に苦しみます。しかしおかしい。5万ボルトの電流を流されているのにし

びれるだけで、それ以外は何ともない。死んでもおかしくないはずだ……。

この事で本郷は自分が本当にもう人間ではなく、シヨツカーのいう「改造人間」に

なった事を信じざるを得なかった。

シヨツカー 科学者 A

「どうだね？何ともないだろう？だが、痛みも伝わってきた筈だ。それは脳改造がまだ

行われていない為。脳の改造が済めば、君はシヨツカーで優秀な改造人間になれる！」

本郷猛

「ぐっ！……死んでも貴様の思い通りにはならんぞ！」

シヨツカー 科学者 A

「初めは誰もがそう思う！そしてシヨツカーに選ばれた事に感謝するようになるのだ！」

そして、改造手術が再開されかけたその時、異常事態がおこる。

何と、基地の電源が突然落ちたのだ。それと同時に戦闘員の一人が

手術室に入ってくる。

シヨツカー 戦闘員 A

「発電室がやられました！」

シヨツカー 科学者 A

「なにっ！？いくぞ！火を消すんだ！」

科学者 A に続いて、その場にいた物は本郷を残して、火災が起こった

発電室に向かった。

誰もいなくなったのを確認した本郷は何とか自分を縛っている鎖を外せないか

試してみた。すると、自分を縛っていた鎖がまるで噛んだガムをちぎった様に

簡単に引きちぎれたのだ。

ますます、自分が人間でない事に最初は取り乱しかけた。

その時、見覚えのある影が本郷の前に立っていた。

その影が自分に近づいてきた時、それは自分のよく知る人物であると知った。

本郷猛

「あなたは緑川先生？」

緑川博士

「・・・・・・」

そう、そこにいたのは本郷猛の恩師であり、生化学博士である「緑川博士」だったのだ

どうやら、彼が発電室を破壊したらしい。

3人

「・・・・・・」

本郷猛

「そして、俺は緑川博士の協力で、脳改造される前に逃げ出すことには成功した。

だが、もうこの体は人間に戻る事ができない。そして俺に協力してくれた先生は

俺を逃がした引き換えに裏切り者としてショッカーに殺されてしまった。」

桃香

「・・・・・・・・・・」

本郷猛

「しかも、その現場を先生の娘さんに見られ、俺が先生を殺したと誤解までされた。

その後に娘さんがショックにさらわれたが、戦って助け出す事ができた。

その後、誤解は解けたが、俺は哀しみを背負ったまま、『正義と平和の使者』仮面ライ

ダーとして、人々を守るためにショックと戦うことを決意したんだ。」

愛紗

「・・・・・・・・・・」

鈴々

「・・・・・・・・・・」

本郷猛

「これが…この俺、仮面ライダーが誕生した理由だ。」

本郷は話す事は全て話した。これで彼女達は自分を化け物扱いするかもしれないが

、本当の事をいったので彼には後悔が無かった。

そして彼女達の方をしてみる。すると彼女達は自分を化け物を見るような眼で

見ておらず、むしろ無理やり改造人間にされ、本郷が全てをシヨックカーに奪われた事を知

った彼女達は悲しみ、大粒の涙を流していたのだ。

(挿入曲：ロンリー仮面ライダー)

桃香

「ご、ご主人様に・・・そんな事が・・・」

愛紗

「ひ、酷すぎますよ・・・そのシヨックカーは人間じゃありません・・・  
うっうっ・・・」

鈴々

「うええん！ お兄ちゃんが可愛そうなのだ！」

本郷猛

「君達・・・俺が怖くないのか？ 俺は人間じゃないって話した筈だぞ」

愛紗

「怖くありません。貴方は確かに体は人間じゃないかもしれませんが、心だけは私達と同じ人間です。」

桃香

「そんな悲しい事情があつたのに私達はその事を知らず・・・貴方を勝手に「天の御使い」

とまで呼んで……」

鈴々

「ごめんなさい……ごめんなさいなのだ……お兄ちゃん」

彼女達は泣きやもうとしない。平和な世界にしたい為とはいえ、本郷の事情をしらず

「天の御使い」として、協力してもらおうと思ったからだ。その事を申し訳なく思っていたが本郷は意外な事を口にする。

本郷猛

「俺は気にしていない。むしろ俺の事を聞いてくれて、それに俺を人間として

受け入れてくれた事に感謝しているよ。それに俺は今は「改造人間」である事に誇りを持っている。」

桃香

「誇り……?」

本郷猛

「奴らが俺を拉致したことで、奴らの野望を知ることができ、そして改造人間になったことで奴らと戦える存在になったんだからな。人間の自由の為に戦えるんだ。これ以上うれしい事はない。」

愛紗

「ご主人様……」

本郷猛

「そしてこの世界が今、黄巾党の他にゲルシヨッカーに狙われている事を知った

今、俺はこの世界を守るために戦う。その為に力を貸してほしい。

桃香、愛紗、

鈴々」

3人

「……は、はい（なのだ）！」「」

3人は本郷の決意が伝わったのか、頬を垂れていた涙をぬぐい、彼に従い、

人々の為に戦う事を決意し、本郷と3人の少女達の絆はさらに深まっていた。

（ル・ル・ル〜ルルルツ！『アイキャッチ 新一号』）



**本郷猛、自分のいきさを桃香達に話すのこと(後書き)**

次回、朱里、雛里そして星登場。

**義勇軍、反撃を開始すること（前書き）**

今回は黄巾党との戦闘がメインです。

## 義勇軍、反撃を開始すること

(ル・ル・ル〜ルルルッ！『アイキャッチ 新一号』)

その頃、ゲルシヨツカー三国時代支部では、ゲルシヨツカーの技術、暗黒魔術師の妖術に

より新たな怪人が生み出されていた。

そしてその虎とゾウガメを合成した新怪人、トラゾウガメはゆっく  
りと起き上がり、不気

味な鳴き声を上げる。

トラゾウガメ

「グルルルルル………」

暗黒魔術師

「遂に完成いたしました。首領これが新しい怪人トラゾウガメです。」

その時、ゲルシヨツカー首領の不気味な声が響き渡ってきた。

(ピイン……ピイン……ピイン……)

ゲルシヨツカー首領の声

「トラゾウガメ……お前の作戦内容は何か答える」

トラゾウガメ

「仮面ライダーの抹殺……そして黄巾党に協力し、奴らにはむかう人間共を皆殺しにする事です。」

ゲルシヨツカー首領の声

「よろしい……では貴様の能力のテストをさせてもらおう。つれてこい」

その時、基地の扉が開き、そこからゲルシヨツカーの戦闘員、そして彼らに捕まった

民間人の男が入ってきた。どうやら、偶然この基地を見つけてしまい、戦闘員に捕まった

ようだ。

「うわあああああつ！や、やめろ！ 助けてくれえっ！」

ゲルシヨツカー首領の声

「この男は我々の基地を見つけ中に潜入してきた。貴様の能力を試すのにちょうどいい。」

「た、頼む。誰にも言わないから……見逃してくれっ！」

暗黒魔術師

「往生際悪いですね。トラゾウガメ……貴方の口から出る炎はあらゆる物を焼きつくしてしまう強力な武器です。その威力を試す為にこの男を殺しなさい！」

「ひ、ひいいいっ！やめてくれ なんで俺がこんな目に……」

その時、男の前に化け物が立った瞬間、トラゾウガメは口から炎を吐きだす。

トラゾウガメ

「ガアアアアッ！」

「ぎゃあああああああ……！」

トラゾウガメが吹いた炎は一瞬にして男を包み込み、焼き尽くしてしまった。

そして男だった黒い灰も消え去ってしまったのである。

トラゾウガメ

「グルルルル、ここまで威力があるとはこれならライダーに勝てる！」

暗黒魔術師

「はははっ！期待してますよトラゾウガメ。明日の戦いで黄巾党が追い詰められたとき

貴方が出て暴れ回れば、本郷もライダーにならざるを得ないでしょう。」

トラゾウガメ

「だが奴の必殺技「ライダーキック」にどう対処すればいい？暗黒魔術師

首領からは、奴のライダーキックで俺の仲間が何百人も葬られたと聞いたぞ」

暗黒魔術師

「心配ありません。貴方はトラとゾウガメの合成改造人間です。トラの力と

亀の甲羅の防御力の前ではライダーといえども歯がたたないはずですよ」

トラゾウガメ

「グオオオオオン！ それを聞いて安心したぜ」

こうして、ゲルシヨツカーの新怪人トラゾウガメはライダーを倒すため

そして黄巾党を利用して混乱した世の中にするため、戦場へと赴いた。

翌日、ゲルシヨツカーの怪人が衝撃した町から少し離れた所にある黄巾党

のアジト。そこから千を越す先進隊が一斉に以前襲撃した町へと向かっていった。

しかし、彼らは知らない。本郷猛の演説で人々の士気が高まり、愛するものを守る為

死ぬ気で戦う気になっていたこと。そして自分達よりも質の悪い地獄の軍団に踊らされて

いる事に気づくこともしなかった。

町に近づいた時、一人の黄巾党がある事に気づいた。

「お、おい・・・あれなんだ？」

「あんつ？」

その男が指さす方向を他の黄巾党の男達がみると、そこには何と町の人間達が

桃香、愛紗、鈴々、そして英雄「本郷猛」の指揮の元、全員、武装し自分達を

待ち構えていたのだ。

「な、なんだ！」

「あいつら、俺たちとやり合う気か？」

「以前の奴らとは違う？ 何があったんだ！」

黄巾党の男達は驚愕する。今自分達が襲撃しようとしていた人間達は以前とは

違うことが分かっていたからだ。そして彼らは自分達をもつ恐れておらず、むしろ

今まで苦しめられた分、憎悪を込めた目で自分達をみていた。

そして、一番中央に立っていた愛紗が青龍偃月刀を天に掲げ、兵士達に一齐に合図をする。

愛紗

「聞けっ！義勇軍の兵士達よ！遂に奴らから平和を取り返すこの時が来た！

これ以上、奴らの悪行を許してはならない！我らは奴らを一人残らず、殲滅

するのだ！そしてこの戦いに勝利すれば我々は英雄としてこの大地に名を残す

であろう！さあ行くぞ！友を、愛する者を守る為にっ！」

「うおおおおおおおっ！」

愛紗の演説に兵士達は一斉に叫び、士気を上げていく。

黄巾党達はこれを見て一瞬ひるんだが……

「……へっ！構うことはねえ！数だけならこっちが上だ！いくぞてめえら！」

「おおっ！」

状況をよく理解していない彼らは、一斉に蜀の軍に向かっていく。

だが、彼らは気づいていない。まっすぐ進めば、弓矢部隊の的になることに……

本郷猛

「まずは充分やつらをひきつけるんだっ！」

「おおっ！」



本郷は大量の弓矢部隊を結集して、黄巾党の数を減らす作戦を考えていたのだ。

そして、黄巾党が一斉に弓矢の射程距離に来たとき

本郷猛

「いまだっ！放て！」

（ビュン！ ビュン！）

本郷の合図で、弓矢部隊は一斉に矢を天に向けて放った。

放たれた大量の弓矢は一斉に黄巾党に向かっていき、次々と命中していった。

「ぎゃあっ！」

「ぐわあっ！」

ある者は脳天に、首元に、時には心臓に、そして馬に矢が命中し次々と倒れていった。

しかし、黄巾党は怯まず、こっちに向かってきた。

先ほどと比べると数は少ないが、それでもかなりの大群だ。

本郷猛

「やはり奴らはまだ向かってくるか。だが所詮奴らは野盗が集結した烏合の衆。」

数だけ多くても、兵法の心得が無ければ勝てるわけが無い」

愛紗

「ご主人様。次の策は？」

本郷猛

「そのまま弓矢での攻撃を続ける。ある程度の距離まできたら、こちらから突撃だ。」

「戦交えた後、退却し奴らをあの狭い岩場まで誘い込む。」

本郷は戦場の近くにある岩場を持っていた剣で示す。

鈴々

「ええっ？ あんな狭いところにいくのかなのだ？」

桃香

「ご主人様。何を考えているのですか？」

本郷猛

「心配するな。俺にいい作戦がある。奴らは数だけはこちらより多い。だがそれが仇になる作戦がな。」

愛紗

「兵士の数が仇になる作戦？・・・！！」

愛紗は本郷が何を考えているのかを理解したのかはつとした顔になる。

愛紗

「分かりました。やってみます。」

桃香

「いくよ！ 愛紗ちゃん 鈴々ちゃん」

愛紗

「はいつ！桃香様」

愛紗達もそのまま黄巾党に向かっていき、愛紗は偃月刀で迫り来る敵を

切り払い、鈴々は丈八蛇矛で敵をなぎ払い、そして桃香は襲ってきた敵を靖王

伝家で倒していく。

愛紗

「はああっ！」

鈴々

「やあああっ！」

桃香

「ええいつ！」

そして、我らが本郷猛の方は自ら進んで黄巾党の方へ向かい、襲い来る敵を

切り倒していく。

本郷猛

「ふんっ！ ふんっ！」

そして地面に剣を刺し、背後にいた敵を

本郷猛

「トオツ！」

「ぐえっ！」

回し蹴りでけり払い、そのまま地面に刺した剣を抜き、再び黄巾党に斬りかかって

いった。

戦闘が始まってから一時間たったその時、そろそろ頃合いだと思っ  
た本郷は

本郷猛

「そろそろ頃合いだな……。全軍あの岩場まで退却だ！」

「おおっ！」

本郷の合図で優勢だったはずの蜀の軍が次々と岩場まで向かってい  
った。

「あいつら逃げるぜ」

???????

「逃がすかよ……。追え！ 奴らを皆殺しだ！」

彼らを率えていると思われる男は仲間達に合図する。

「おおっ！」

そしてその男は

???????

「くくくつ……本郷、貴様が何を企んでいるかすでにお見通しだ。

あえて貴様の策にはまっけてやる」

その男は本郷を知っていたかのようなそぶりをみせる。

そしてこの戦いの様子を年は鈴々と同じぐらいの少女二人が見ていた。

一人はショートヘア、そしてもう一人はツインテールの少女である。

雛里

「あわわっ……あの人達が危ないよ」

朱里

「大丈夫だよ。あれは策の一つで狭い岩場まで敵を誘っているんだよ」

雛里

「えっ？」

朱里

「あそこなら、敵は広範囲での攻撃ができなくなるし、おまけに岩

場の上から

弓矢で狙い撃ちできるんだよ」

雛里

「あわわっ。さすが朱里ちゃん。」

朱里

「きつと先陣を切っているあの人の策だよ」

朱里は蜀の軍の指導者と思われる見たことも無い乗り物に乗っている男を指さす。

雛里

「あの人が噂の「天の御遣い様」かな？」

朱里

「間違いないよ。あんな早い乗り物みたことないよ」

雛里

「じゃあ行こうよ朱里ちゃん」

朱里

「分かった。雛里ちゃん。私たちがここまで来た理由・・・それは・・・」

その時、二人そろってここに来た目的を言い出す。

二人

「私達の知識を義勇軍で生かして、「天の御遣い様」の役に立たせてもらうこと」「

そして二人は黄巾党に見つからないようにこっそりと蜀の軍に近づいていった。

そして別の所では、一人の女がこの戦いを観戦していた。

星

「ふむ。加勢しようと思っていたが、蜀の軍の方が圧倒的ではないか。

どうやら「天の御遣い様」が現れたというのは本当のようだ。さて、その

者は私が仕える価値があるかどうか判断させてもらおう」

この戦いをそれぞれ別の所から朱里、雛里、そして星という名の少女達が見つめていた。

しかし、彼女達もそして蜀の軍も、そして本郷猛も黄巾党は裏からゲルシヨツカーに操ら

れ、しかも怪人が敵の中に混じっていることにこの時はまだ誰もが知るよしもなかった。

つづく

**義勇軍、反撃を開始すること（後書き）**

我らが仮面ライダーを狙う次なるゲルシヨッカーの刺客は火炎魔人トラゾウガメ。

その口から放たれる改造人間をも焼き尽くす強烈な炎、そしてトラの怪力、ライダーキックを跳ね返す甲羅の防御の前に仮面ライダーは為す術がないのか！？ 次回

「トラゾウガメ 大火事作戦」にご期待ください。



トラゾウガメ 大火事作戦 (前編) (前書き)

今回の敵トラゾウガメは前回の三大怪人とは比べものにならないくらい強く、

ライダーを苦戦させるでしょう。

トラゾウガメ 大火事作戦 (前編)

黄巾党は敵の軍を指揮すると思われる男に、驚愕していた。

なぜなら、その男本郷猛はこの時代には存在しないバイクに乗り、仲間の軍を岩場まで誘

導していたからだ。

(ブオオオオオオオオン！)

「何だよあれ！ あの男の乗ってる変なのむちゃくちゃ速ええ！」

「俺達どころか、奴の仲間ですらやつについて行けてねえ！」

「ま、まさか奴が俺達の仲間を倒したと噂がある例の「天の御遣い」か！？」

「馬鹿な事をいうな！ 今は奴らを追うんだ！」

「おおっ！」

黄巾党は岩場まで撤退していく義勇軍を追っていった。誘われているとも知らないで

奴らが岩場まで入っていると奥の方に愛紗、鈴々そしてその後ろにいる義勇軍達がここか

ら先は通さないとやっているかのように待っていた。が

愛紗

「ここから先は通さん！ どうしても通りたければ、我々を倒してからにしてもらおうか！」

鈴々

「かかってくるのだ！黄巾党！」

「くっ！生意気な小娘風情がつ！やっちまえ！」

黄巾党は鈴々の挑発に乗り我を忘れ、一斉に突激してきた。

愛紗

「やああっ！」

鈴々

「とおおおっ！なのだ！」

愛紗、鈴々そして義勇軍は襲いかかる黄巾党達を次々と倒していった。

敵は押されているとも気づかず、そのまま突撃を続けた。

鈴々

「まだなのか！お兄ちゃん」

愛紗

「ご主人様！早くやって下さい！これ以上は長く持ちません」

愛紗達は何かを言い始める。どうやら敵をこの場所に誘い込んだの  
と関係

がありそうだ。

そして本郷猛の策により敵は確かに広範囲に渡る攻撃ができなくな  
り、前に来ては

次々と愛紗達に倒されるだけであった。

「ど、どうなってんだ？俺達が押しているはずなのに、何でこっ  
ちだけがやられてるんだよ！」

「ああ・・・確かにおかしいな」

「おいつ！狭いぞ！前行けよ」

「無理言つな！動きにくいんだよ！」

次第に黄巾党は互いに仲間割れをし始めたその時、戦場に異変が起  
こった。

（ビュオオオオオオオオ！）

「な、なんだ!？」

「うわあああつ！め、目が！」

なんと狭い岩場に突如強い風が吹き、それによって生じた砂埃が敵  
の目を

つぶしたのである。

愛紗達は最初これを好機かと思ったが、すぐにこれが本郷の策だと気づく。

そしてそれと同時に

本郷猛

「今だ！ 攻撃開始！」

岩場の上にあった本郷は率いてきた弓矢部隊に攻撃の命令を下した。

黄巾党は畏だと気づくも時すでに遅し、逃げようとする者もいたが、余りにも仲間の数が多くて身動きがとれず逃げ出せないでいた。

そして義勇軍の弓矢部隊は黄巾党に向けて一斉に弓矢を放った。

(ビュン！ ビュン！ ビュン！)

「ぎゃあー！」

「ぐわあっ！」

何人かに矢が命中して次々と黄巾兵が倒れていき、そして矢が止んだ時、反撃の好機だと

確信した愛紗、鈴々は

愛紗

「今だ！全軍突撃！」

「うおおおおおっ！」

一斉に突撃を開始するが

???????

「ふふふ・・・甘いな」

(ガキイン！)

愛紗

「なっ!？」

なんと愛紗の攻撃を敵の一人が受け止めたのである。しかも、人間とは思えない力で

???????

「くくく・・・」

愛紗

「くっ！ う、動かない・・・この力ま、まさか貴様・・・ゲルシヨ  
ツカー？」

???????

「はははっ！その通りだ！ふんっ！」

愛紗

「わあっ!！」

「か、関羽將軍が力負けした!？」

「し、信じられねえ!」

「あいついつたい何だ!？」

???????

「見てる人間ども 俺の本当の姿を・・・グオオオオオン」

そして男は獣のような鳴き声を出すとその姿をゾウガメと虎を混ぜたような怪物に変えた。

(挿入曲：シヨツカー襲来！)

トラゾウガメ

「グオオオオオオオン!」

「う、うわあつ！ 化け物になった!」

そしてその怪物の周りにいた男達も

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギーー!」

服を脱ぎ捨て、青い覆面、青い服をまとった姿になる。

「なっ！ なんだあいつらの格好!？」

「見たことの無い服だ!」

トラゾウガメ

「黄巾党の諸君！我々ゲルシヨツカーは貴様らの味方だ！ さあ、我々と共に

愚かな義勇軍を倒すのだ グオオオン！」

これをきいた黄巾党達は

「なんだあの化け物・・・俺達の味方か？」

「なんかよく分かんねえけど・・・とりあえず反撃開始だ！」

「うおおおおおおっ！」

トラゾウガメが戦場に出てきたとたん事態は一変した。

何と黄巾党の男達は一斉に義勇軍に突撃してきたのである。

しかも義勇軍は突如現れた怪物と謎の覆面集団に動揺したのか一瞬油断してしまい、

その隙を突かれて

「ぎゃあー！」

「ぐわあっ！」

形勢が逆転してしまうのである。中にはトラゾウガメに向かった兵士もいたが



トラゾウガメ

「ガアアアアッ！」

「ぎゃあああああああ！」

相撃つこと無く、トラゾウガメの口から放たれる炎で一瞬にして全身を焼かれ

黒い灰と化してしまう。

「うわあっ！あの化け物口から火を吹いたぞ！」

仲間が一人倒された事で義勇軍は完全に混乱し、パニック状態になった。

無理も無い、突如現れた怪物に奇怪な方法で仲間を倒されたのだから……。

ゲルシヨツカーの目的は歴史上では義勇軍が勝利していた戦いを黄巾党の勝利に

置き換え、混乱した世の中を長引かせ、人々を苦しめる事だったのだ。しかも、

黄巾党の数が減ったからか、数が少なくなった敵は次々と前に突入してきた。

義勇軍が困惑し、次々と兵士がゲルシヨツカー、そして黄巾党に倒される中

愛紗、鈴々だけは必死に抵抗を続け、戦い続ける。

愛紗

「恐れるな！ 最後まで戦い続けねばきつと勝てる！」

鈴々

「悪い奴らに屈しちゃ駄目なのだ！」

トラゾウガメ

「ほう？ ならば、貴様らを倒し完全に兵士を屈させてくれるわ！」

トラゾウガメは手に持っていた剣で愛紗達に斬りかかるうとしたその時

???????

「まていつ！」

呼び止める声があったのでトラゾウガメはその方向を見るとそこには

ゲルシヨツカーの敵、仮面ライダー一号がいたのだ。

ゲルシヨツカーが戦場に出てきたのを見た彼はとっさにその場にいる桃香に後を

任せ、自分は誰にも見えないところまで行き、仮面ライダーに変身していたのだ。

(ピュイイイイン！)

そしてライダーはポーズをとると、敵怪人がいるところまでジャン

プしてきた。

仮面ライダー一号

「トオオッ！」

空中で反転し、ライダーはトラゾウガメの近くに着地してきた。

愛紗

「ご、ご主人様！」

仮面ライダー一号

「大丈夫か！？ 愛紗」

愛紗

「は、はい何とか！」

トラゾウガメ

「待ってたぞライダー！」

仮面ライダー一号

「ゲルシヨツカーの怪人か？」

トラゾウガメ

「そうだ。俺の名は火炎魔人トラゾウガメだ」

仮面ライダー一号

「トラゾウガメ！ 戦場を混乱させて何を企んでいる！？」

トラゾウガメ

「貴様が知る必要は無い！ かかれ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギーー！」

戦闘員達は一斉にライダーに襲いかかる。

仮面ライダー一号

「トオツ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギーッ！」

(バキッ！バキッ！)

まず最初にライダーに襲いかかった戦闘員は殴りとばされ

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギーッ！」

背後から襲いかかるうとした戦闘員は後一步のところまでライダーに

気付かれ、剣をもった手を止められ、背負い投げされてしまう。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギーイッ！」

そしてその戦闘員が持っていた短剣をもつとライダーは戦闘員に

斬りかかっていった。

仮面ライダー一号

「トオッ！ トオッ！」

次々と戦闘員はライダーに切り倒されていく。戦闘員に気をとられていたからか

ライダーに隙ができたのをみたトラゾウガメは切り札である火を吐く。

トラゾウガメ

「グオオオオオオン！」

(ゴオオオオオオッ！)

仮面ライダー一号

「ハアッ！」

しかし、ライダーはこれを回避し代わりに近くにいた黄巾党の男に命中した。

「ぎゃああああ！」

たちまち男は燃え上がり、やがて黒炭となって消えてしまう。

仮面ライダー一号

「なんて恐ろしい武器なんだ」

トラゾウガメ

「どうだ！これが貴様を倒す為にゲルシヨッカーが開発した改造人間も倒す俺の必殺技

殺人火炎だ！」

仮面ライダー一号

「なるほど。確かに威力は強力だ。だが・・・」

ライダーはそういって一気にトラゾウガメに近づく。

トラゾウガメ

「な、何のまねだ!？」

仮面ライダー一号

「こつ近距離では肝心の殺人火炎も使えまい!改造人間も倒す威力なら、近距離で使えば  
お前も無事では済まないはずだ!」

トラゾウガメ

「己ッ!」

トラゾウガメは自らの必殺技の弱点を指摘され、困惑し、そしてライダーに動きを押さえ

られてしまう。

トラゾウガメ

「何の真似だ!??」

仮面ライダー一号

「戦いの場を変えるだけだ! 愛紗、鈴々 黄巾党の方は頼むぞ!」

愛紗

「分かりました！ところで桃香様の方は？」

仮面ライダー一号

「心配ない。上の岩場で弓矢部隊と一緒にいる」

鈴々

「分かったのだ！」

仮面ライダー一号

「行くぞっ！ トオオッ！」

トラゾウガメ

「グオオオオオン！」

(ビュオオオオオオン！)

仮面ライダー一号はトラゾウガメとの戦いの場を別の場へと移す。

しかし、そこにはなんとこの戦いを見ていた二人の少女朱里、雛里がいたのだ。

雛里

「あわわっどうしよう！お化けと「天の御遣い様」がこっちにきた」

朱里

「はわわわわっ！ お、落ち着いて雛里ちゃん」

朱里は雛里を落ち着くようにいったが彼女も落ち着いてはいられなかった。

「天の御遣い」ならまだしも、もし怪人に見つかればただではすまない。

そんな時ライダーと怪人は激しく死闘を繰り広げた。

トラゾウガメは殴りかかるが、拳を払いのけられ動きを押さえられると

腹部を激しく殴られる。

トラゾウガメ

「グオオオオオン！」

何とか次の拳を受け止め、ライダーを殴りとばす。

仮面ライダー一号

「ぐわあっ！」

トラゾウガメ

「グオオオオオオン！」

殴り飛ばされたライダーはすぐに起き上がり、トラゾウガメの攻撃を受け止めると

そのまま前方に投げ飛ばした。

仮面ライダー一号

「トオッ！」

トラゾウガメ



「グオオオオオン！」

前方に投げ飛ばされたトラゾウガメは激しく前に転がり、

この隙にライダーは空中高く飛び上がった。

仮面ライダー一号

「トオオオオオオオオオっ！」

(ビュオオオオオオオン！)

仮面ライダー一号

「ライドアアアアアア・キイイイイック！」

トラゾウガメ

「甘いわ！ グオオオオオン！」

起き上がったトラゾウガメはよけもせず、ライダーキックにもろ命中してしまう。

しかし、

(ボンッ！)

なんとキックは命中したが、効いておらずライダーははじき返されてしまった。

とっさに空中でライダーは反転し、トラゾウガメから少し離れた所に着地する。

仮面ライダー一号

「馬鹿なっ!? ライダーキックを跳ね返しただと!」

トラゾウガメ

「無駄だ! 俺にはライダーキックは効かん!」

仮面ライダー一号

「くそっ! 防御の方も万全という訳か」

トラゾウガメ

「その通り! そして俺の必殺技は殺人火炎だけではない! くらえ!」

トラゾウガメはそういうと頭、手足を甲羅に引っ込め

トラゾウガメ

「ゾウガメアタック!」

何と空中を飛び、体当たりをしてきたのだ!

仮面ライダー一号

「うわあっ!」

トラゾウガメの体当たりで直撃し、ライダーに吹っ飛ばされてしま  
う。

トラゾウガメ

「どうだ! 俺の体当たり攻撃は?」

仮面ライダー一号

「く、くそっ！……はっ！」

仮面ライダーはこの時、とんでもないことに気づいた。

何と鈴々くらいの少女二人がトラゾウガメには見えないところにいたのだ。

もし見つければただではすまない。あの少女二人を守る為にはトラゾウガメを

退ける必要があった。

トラゾウガメ

「止めだ！死ね仮面ライダー！グオオオオオオン！」

トラゾウガメはとどめの体当たりを仕掛けてきた。

しかし……

仮面ライダー一号

「ふんっ！トオオッ！」

ライダーはとつさにこれを受け止め空中に投げた。

トラゾウガメ

「グオオオオオン！？」

トラゾウガメは何が起こったか理解できず、そのまま地面へと落ちていった。

そしてライダーはそれと同時に飛び上がり、そして

仮面ライダー一号

「ライダーニーブロック！」

トラゾウガメの腹部に膝蹴りをお見舞いした。

トラゾウガメ

「グオオオオオン！」

この攻撃が効いたのかトラゾウガメは悲痛な声を上げながら地面に激突した。

トラゾウガメは何とか起き上がり再びライダーと戦う体制に入る。

トラゾウガメ

「己仮面ライダー！ 俺の實力はこんなもんじゃない！」

仮面ライダー一号

「まだやるかトラゾウガメ！」

両者が再び戦う体制になったその時、

??????

「はいそこまです。」

どこかから声がしたので両者が声のした方向をみると何とそこには

ゲルシヨツカーの大幹部 暗黒魔術師がいた。

仮面ライダー一号

「貴様は暗黒魔術師！」

暗黒魔術師

「おやおや？ 覚えていてくれたんですか？ 光栄ですね」

暗黒魔術師は相変わらず、ふざけた態度をとっていた。

トラゾウガメ

「暗黒魔術師！なぜ止める！」

暗黒魔術師

「我々の目論みが失敗したからですよ。貴方たちが戦っている間に、義勇軍を魏

、呉の国が援護したので黄巾党はあっさり負けましたよ」

トラゾウガメ

「何だとっ！？」

トラゾウガメが暗黒魔術師から衝撃の言葉を聞いて驚愕した。自分がライダーに気を

とられた所為で黄巾党が史実どおりあっさり負けたのだから

暗黒魔術師

「本来なら貴方は処刑されますが、別の作戦を首領が考案いたしましたので

今回だけは貴方を生かすそうです。」

トラゾウガメ

「そ、そうか……」

トラゾウガメは暗黒魔術師からそのことを聞いてほっとした様子になった。

これは首領の責めでの温情であると彼は悟ったのだ。

暗黒魔術師

「さあこっちに来なさいトラゾウガメ」

トラゾウガメ

「ああグオオオオオン！」

トラゾウガメはジャンプして空中で反転して、暗黒魔術師の所までいくと

こんな事をライダーに言う。

トラゾウガメ

「命拾いしたなライダー！ 勝負はひとまずお預けだ！ グオオオオオオン！」

そして暗黒魔術師が呪文を唱えると、トラゾウガメ、暗黒魔術師は光に包まれて

消えてしまった。

仮面ライダー一号

「逃げたか……トラゾウガメ恐ろしい敵だ。ライダーキックを跳ね返すなんて

いや、それよりも……」

(ボシユン！)

仮面ライダー一号は変身を解き、本郷猛の姿に戻る。

本郷猛

「まずはあの子達を保護するのが先だ」

彼はそう言うと朱里、雛里が隠れている所まで向かうのであった。

(ル・ル・ル〜ルルルツ！『アイキャッチ 新一号』)

トラゾウガメ 大火事作戦 (前編) (後書き)

次回ライダーのピンチにあの可憐な蝶々が舞い降りる!?



トラゾウガメ 大火事作戦 (後編) (前書き)

はたして華蝶仮面が投げつけたある物とは!?

トラゾウガメ 大火事作戦 (後編)

(ル・ル・ル〜ルルルッ！『アイキャッチ 新一号』)

本郷猛は朱里、雛里を保護し、仲間達も元へといくと、そこには自分の帰りを待っていた

桃香達、そして自分に賛同してくれた兵士達が待っていた。

既にあの姿、仮面ライダーは自分が変身した姿だと一部の者が話していたからか、彼は熱

烈な歓迎を受けることになる。

「おお、本郷様がお戻りになられた！！」

「きつとあの化け物を退治なされたんだ！」

先ほど、ゲルシヨツカーの予期せぬ武力介入で、士気が下がりがけた兵士達にも士気が戻

っていた。

どうやら、先ほど暗黒魔術師が言っていたように魏、呉の国の援護、そして自分が無事帰

ってきた事による影響だろう。そう思った彼は戦いから戻ってそうそう兵士達にこんな演

説を聴かせる。

本郷猛

「皆さん、心配をかけて申し訳ない。化け物は何とか退けたが、また襲ってくるかもしれない。その時に備えて警戒を怠らないように。そして、黄巾党との戦いに勝利したことを私は嬉しく思います。これは私だけの力だけで無く、皆さんの思いと力があつたからこそその勝利です。しかしまだ黄巾党は滅びたわけではありません。奴らは必ずや、また襲いかかってくるでしょう。ですが、もう恐れることはありません。貴方達に闘う意思がある限り、奴らに負けることはありません！」

「うおおおおおおおっ！」

怪物はまだ生きていると聞いたが、兵士達にはそんな事は関係なく自分が無事であつた

事を喜んでいた。

そして演説を終えると、本郷は朱里、雛里をつれて桃香達の元に向かった。

桃香

「ご主人様！ご無事だったんですね」

本郷猛

「ああ君達も無事でよかつた。ご苦労だつた。桃香、愛紗、鈴々」

愛紗

「ご主人様もお疲れ様でした。」

鈴々

「あんな奴らゲルシヨツカーがいなければ、ちょちょいのちょいなのだ！」

本郷猛

「はははっ！……ところで、トラゾウガメとの戦いの時、別の敵から義勇軍を魏、呉の国が援護したときいたがそれは本当なのか？」

愛紗

「え、ええ本当です。あの戦いの時、黄巾党に追い詰められ、一瞬駄目かと思いましたが

突如、右の岩場から曹操孟徳率いる魏、孫策伯符率いる呉が突如現れて私達を援護してくれたのです。援護のおかげで兵士達にも士気が戻りました。」

本郷猛

「そうか……やはり曹操と孫策がきたか」

桃香

「えっ？ ご主人様はあの人達の事を知っているのですか？」

本郷猛

「ああ名前ぐらいはな……」

皆も知っていると思うが、桃香達から見た本郷猛はSFという未来人に当たる。

ましてや、本郷猛は知能指数600。三国志に登場する英雄の名も

覚えていたのである。

そして、この戦いに魏、呉が介入して黄巾党を討伐するのに協力することも知っていたの

だ。

桃香

「ところでご主人様 後ろにいるその子達はいつたい誰なんですか？」

本郷猛

「ああ、この子達はなトラゾウガメとの戦いの最中に近くに隠れているのに気づいて 奴を退けた後、保護したんだ」

愛紗

「そうかそれは災難だったな。でももう安心だ。君達の安全は我々が保証する」

朱里

「はわわわっ……あ、ありがとうございます。」

鈴々

「良かったのだ」

朱里

「あ、あの〜貴方は「天の御遣い様」で間違いないのでしょうか？」

本郷猛

「あ、ああ……一応……皆は俺をそう呼ぶ」

雛里

「あ、あの〜それでお願ひがあるんですけど……」

本郷猛

「何だ？」

朱里、雛里

「わ、私達を義勇軍に入れてください！」

(ドテツ！)

本郷を除く、3人が思わずこけてしまう。無理も無い。鈴々と同じくらいの少女が自ら進ん

で義勇軍に入りたいと言っているのだから。

愛紗

「は、はあっ!?!」

朱里

「わ、私達は私達の学問を少しでも人々の役に立てたくて……はわわわわっ!」

雛里

「幽州に「天の御遣い様」が現れたと風の噂を聞いてはるはるやってきたんでしゅ!

あわわ……!?!?舌、嚙んじやいましたっ……」

ツインテールの少女の口からは若干血が流れていた。

朱里

「だ、大丈夫？ 雛里ちゃん」

本郷猛

「まあ少し落ち着け君達……義勇軍に入りたい理由は分かったところで君達は  
何という名前なんだ？」

朱里

「はわわ！ す、すみません！ 申し遅れました。私は姓は諸葛。名は亮。字は孔明ですう！」

雛里

「わ、私は姓は鳳統。字は士元ですう！！」

本郷猛

「何っ！？ 諸葛亮孔明に鳳統士元だと？」

本郷は桃香、そして目の前の少女達にも分かるくらい驚いている様子であった。

あの時と同じように自分達の名を知っていたかのように……。

本郷猛

「（諸葛亮孔明、鳳統士元といえば三国志においては劉備玄德に仕えたとして有名な

天才軍師だ。まさか、あの天才軍師までがこんな少女達だとはいえ、確か諸葛亮の方は三願の礼で仲間になったはず……）」

朱里

「あ、あの御遣い様？」

本郷猛

「あ、ああ悪い。しかし、義勇軍で役に立ちたい気持ちは分かるが命の保証は余りできないぞ。」

雛里

「御遣い様のいう事には一理あります。でも逃げてばかりじゃ何もできないんです・・・」

本郷猛

「鳳統・・・」

その時、愛紗が三人に割って入ってきた。

愛紗

「私は反対です。ご主人様」

朱里、雛里

「はわっ！？（あわっ！？）」

愛紗が怖い顔で割って入ってきたので、二人は思わず本郷の後ろの方に隠れてしまう。

本郷猛

「愛紗・・・」

愛紗



「ご主人様の言うとおりの義勇軍に入れば、命の保証はできませんし、それに時には

君達が見たあの化け物と闘わなければならぬんですよ。」

本郷猛

「愛紗の言うことはもっともだ。だが、我々には彼女たちの様に優れた軍師が必要だ。」

桃香

「ぐ、軍師？ この子達がですか？」

桃香達は自分の主である本郷の言葉を信じたいが、目の前にいる少女達が本当に本郷の言

う軍師なのか信じられないでいた。

これを悟った本郷は少女二人にある質問をする。目の前にいるのが本当に天才軍師の諸葛

亮と鳳統なら答えられると思ったのだ。

本郷猛

「・・・諸葛亮孔明に鳳統土元。烏合の衆の黄巾兵とはいえ奴らはこちらの倍の大軍だ  
君達ならどう切り抜ける？」

朱里、雛里

「はあっ・・・」

愛紗

「ご主人様？ いきなり何を！？」

本郷猛

「まあ聞け……」

朱里、雛里

「「ひらめきました！！」」

桃香

「えっ？」

朱里

「陣形も整えないで突撃してくる相手なら包囲陣を敷いて一当てして、中央部分を後退させ縦深陣に誘い込みます！」

雛里

「また数で突撃してくる相手なら通常の倍の旗手を用意して、拳兵を作って自分達の方が大軍だと思ひ込ませます！」

愛紗

「えっ？ ご主人様の質問に一瞬で答えた……なるほど、確かに彼女達は優れた軍師ですね」

本郷猛

「そこでだ。俺は彼女達を軍師として、迎えたいがどうだ？」

桃香

「賛成します。是非私達に力を貸してください」

愛紗

「私は姓は関、名は羽、字を雲長、真名は愛紗だ」

桃香

「私は姓は劉、名は備、字は玄德、真名は桃香だよ」

鈴々

「鈴々はね、姓は張、名は飛、字は翼徳。真名は鈴々なのだ！」

本郷猛

「俺は姓を本郷、名は猛だ」

朱里、雛里

「あ、ありがとうございます！」

朱里

「私の真名は朱里」

雛里

「私は雛里」

二人

「これからは私達を真名で呼んでください！」

本郷猛

「ああ、よろしく。朱里、雛里。さてと・・・仲間が増えたのはいいとして

俺達は黄巾党の他に闘わなければならない敵がいることを二人に言わなければならぬ」

朱里

「黄巾党の他にも？それは一体？」

本郷猛

「それはさつき君達も見た化け物の集団。ゲルシヨツカーだ！」

雛里

「あわわっ！ あのお化け達ですか!？」

本郷猛

「奴らは俺と同じ「天の国」から何かを狙ってやってきた世界征服を企む

悪の秘密結社だ」

朱里

「はわわっ？ 本郷様と同じ世界からですか!？」

本郷猛

「そうだ。俺は奴らから世界を守る為、闘っていた男だ。そして俺はある怪人を追ってこの世界までやってきた」

雛里

「そ、そうだったんですか？ ところでその何かって・・・」

本郷猛

「それはまだ分からない。だが、時空を超えてまで取りに来たんだ。恐ろしい物に違いない」

二人は本郷の話信じた。何故なら本郷の言う化け物を自分達の目

で確認したのだから。

本郷猛

「奴らと闘う為にも君達の軍師としての知恵が必要になる時があるはずだ。だからこの世界のゲルシヨッカーを壊滅させる為、俺に力を貸してくれ二人とも」

二人

「わ、分かりました！」

二人には本物の化け物と戦う方法は分からない。しかし、本郷の話聞いて黙っているこ

とはできなかった。

本郷猛

「(さてと、心強い仲間が増えたのはいいとして、問題はあのトラゾウガメだ。

奴のことだ きっと近いうちに何か仕掛けてくるに違いない！ライダーキックも効

かない相手に俺は勝てるのか?)」

その頃、ゲルシヨッカー三国時代支部では帰還した暗黒魔術師、トラゾウガメを待っている

たかのように首領が話しかけてくる。

(挿入曲：邪悪の気配)

ゲルシヨッカー首領の声

「暗黒魔術師、よくトラゾウガメを連れて帰ってきてくれた。」

暗黒魔術師

「私は忠実なる貴方様の部下として当然の事をしたまです。」

ゲルシヨツカー首領の声

「トラゾウガメ、本来ならゲルシヨツカーの掟 第三条にある「作戦に失敗した者は

殺す」に従い貴様は処刑される運命だった……だが儂がまだ貴様を生かす理由は何か分かるか？」

トラゾウガメ

「そ、それは……私にまだ利用価値があるから……」

ゲルシヨツカー首領の声

「その通り……貴様にはまだ利用価値がある。自分の能力に感謝せよ。そのおかげで死の運命から逃れたのだからな……」

トラゾウガメ

「は、はい……それで首領……暗黒魔術師から新しい作戦を考案したと聞きましたが、その作戦とは一体？」

ゲルシヨツカー首領の声

「これを見る……」

首領がそういったその時、戦闘員が何か黒い粉が入ったケースを持ってきた。

よくみるとそれは火薬の様だ。

トラゾウガメ

「これは火薬？」

ゲルシヨツカー首領の声

「そうだ・・・しかしこれはただの火薬にあらず・・・一度燃えれば、その周辺にある物をすべて焼き尽くす超高性能火薬だ。」

トラゾウガメ

「超高性能火薬？」

ゲルシヨツカー首領の声

「この火薬を本郷猛、そして義勇軍が在住する町にはらまき、貴様の殺人火炎で

点火する。そうすれば、たちまち炎は町全体に拡がり、義勇軍どもは逃げる間もなく  
焼け死ぬだろう。」

暗黒魔術師

「はははっ！ さすが首領。多くの人間の命を奪う為、トラゾウガメの必要だったんですね」

ゲルシヨツカー首領の声

「その通り。トラゾウガメ、今夜この超高性能火薬を義勇軍に感づかれないようにはらまき、我々ゲルシヨツカーに刃向かう恐れのある全ての人間どもを焼き殺すのだ！」

トラゾウガメ

「グオオオオオオン！ 分かりました（ニヤツ）」

ゲルシヨツカー首領の声

「ただし、この計画を知ったらライダーが邪魔してくるだろう。その時は超高性能火薬をばらまくのを戦闘員に任せ、貴様は仮面ライダーを倒すのだ！」

トラゾウガメ

「はっ！」

その頃、本郷猛は戦を終え、街に一度帰った後、後のことを愛紗達に任せ、一人

森の中へと入っていった。

一時間後、なかなか戻ってこない主を心配してか、愛紗は本郷猛がいると思われる

森へとやってきた。

愛紗

「ご主人様は何をなされているのだ？ 黄巾党との戦いで疲れられているはずなのに」

愛紗は改造人間 本郷猛は数十分休むだけで疲労を回復できる肉体であることを知らない。

その時、何か激しい音が聞こえてくる。

（バキッ！ ボゴッ！）



愛紗

「な、何だ!？」

愛紗は驚いて思わず、何かをたたき割るような音がする場所へといくと、

そこには主 本郷猛が変身した「仮面ライダー一号」が自分で用意したと思われる

枝に縄で締め付けた先のとがった大量の木の杭を相手に何かをしていた。よく見ると

足下にはたたき落としたと思われる木の杭がそこら辺にある。

仮面ライダー一号

「トオツ! トオツ!」

次々と迫り来る木の杭を仮面ライダーは避けて、そして横からチップでたたき落とし、

そしてまた次の木の杭をかわしては同じ事を繰り返していた。

最初、愛紗は彼が何をしているのかを理解していなかったが、彼が木の杭を何かに

見立てて、特訓している事に気づいた。

愛紗

「まさか、ご主人様・・・あの木の杭をあの化け物のつもりで特訓

を？」

その時、愛紗の後方から別の角度から襲ってくる木の杭に彼女は気づかないでいた。

しかし、次に襲いかかる木の杭の位置を把握していた仮面ライダー一号はその方向を

みるとそこに愛紗がいるのに気づき、とっさに彼女の前に出て木の杭を止める。

仮面ライダー一号

「危ないっ！」

愛紗

「えっ？」

愛紗は目の前で起こった信じられない光景を見てしまう。何と主が自分を庇い、両手で

木の杭を受け止めたのだ。彼の手から大量の血が流れている。

仮面ライダー一号

「くっ……」

愛紗

「ご、ご主人様！そ、そんな私を庇って……」

(ボシユン！ 変身が解ける)

本郷猛

「愛紗、大丈夫か？」

愛紗

「それはこつちの言葉です！ も、申し訳ありません！ 稽古の最中でしたのに

邪魔してしまった上に、わ、私を庇ってそんな怪我まで……」

愛紗は彼の手から流れる血を見て愕然とする。自分のせいで主を怪我させてしまったのだ

から……

本郷猛

「これか？ 心配ない。こんな怪我すぐになお……」

愛紗

「すぐに治るわけがありません！ とりあえずこつちに来て下さい！」

本郷猛

「あ、あのな……」

本郷猛が何かいおうとしたが、愛紗にその言葉は届かず、とりあえず血を洗い流し、

綺麗にした状態で傷口に布をまく為に川まで連れて行った。

そして川まで連れてこられた本郷はとりあえず、傷を負った手を洗い始める。

愛紗

「はやく手当をしないと……」

本郷猛

「愛紗、洗い終わったぞ」

愛紗

「分かりました。では早速手を見せてください。」

本郷猛

「もう大丈夫だ……」

愛紗

「そんなわけっ！……えっ？」

愛紗は自分の目を疑う。何と怪我していたはずの本郷猛の手が綺麗に治っていたのだ。

まるで最初から怪我をしていなかったように……

愛紗

「そ、そんな。ご主人様 確かに手を怪我されたのに……」

本郷猛

「俺はシヨッカーに改造手術されたことで、自己治癒能力も人間の数十倍になったんだ。

あの程度の怪我なら十分くらいで治る。」

愛紗

「そ、それを早く言ってくださいよ」

本郷猛

「まあいい。そろそろこちら辺で休憩しようと思っていたところだ。」

「

本郷はそういうと川の正面にある丘に座り、愛紗は彼のとなりに立っただけだった。

本郷猛

「愛紗も座ったらどうだ？」

愛紗

「い、いいえっ！ ご主人様の隣に座るなんて恐れ多いこと！」

本郷猛

「構わない。俺は気にしない……」

愛紗

「そ、そうですか？ ではお言葉に甘えて……」

彼女はそういうと俺の隣に座り、こんな事を聞いてくる。

愛紗

「あ、あのご主人様？ 先ほどの稽古……もしかして……」

本郷猛

「そうだ。あれはトラゾウガメと再び戦うことを想定しての稽古だ。」

「

愛紗

「そうでしたか……ご主人様、なぜあんな危険な稽古を  
ま

本郷猛

「……俺は、すなわち仮面ライダーは人間の自由の為に戦う戦  
士だ。

ゲルシヨツカーを倒すのが俺の使命だ。奴らをほおっておくわけ  
はいかないんだ」

愛紗

「た、確かにゲルシヨツカーの恐ろしさは私もよく理解していま  
す  
が……

何もあんな危険な稽古をしなくても……」

本郷猛

「いや、あれでもまだ生ぬるい方だ。トラゾウガメの攻撃は今の木  
の杭の

衝突よりも遙かに上だ。奴の攻撃は一度かわしたが、問題は奴の甲  
羅だ。

あの硬さは尋常じゃない！」

愛紗

「ええっ？」

本郷猛

「それにゲルシヨツカーの事だ。きっと今夜にも何かをしかけてく  
るぞ。

だから俺はあの時義勇軍に警戒を怠るなといったんだ」

愛紗

「そうだったんですか……ですがなぜ貴方はそこまでしてあの化け物達と

戦えるんですか？ 下手をすれば命を落とすかもしれないんですよ」

本郷猛

「俺は戦う事しかできない体だ。俺が戦うことで国、信念に関係なく人々を

奴らから守れるなら、この命落としても惜しくは無いっ！」

愛紗

「……………」

愛紗は本郷の言葉を黙って聞いていた。どうやら、この人は自分達以上に

自分の命を賭けてまで、人の為に戦える男だと……………。

彼の『正義』の前では国、信念は関係ないのだと……………

そして自分達の国の幸せだけでなく、他の国の人の幸せも考えている男で

愛紗の知る曹操、孫策よりもこの人の器が大きく見えた。

その時、本郷の様子が変わる。

本郷猛

「んっ？ なんだこの匂いは？」

愛紗

「どうしたんですか？ ご主人様、別に何も匂いませんですけど……」

愛紗は自分の匂いの事かと思ひ慌てて、自分の体を確かめるが別に臭くはなかった。

本郷猛

「いや、愛紗のことじゃ無い……どこか別の所で鉄を焦がした様な匂いが……」

愛紗

「鉄？」

改造人間 本郷猛の嗅覚は人間の数十倍ある。一キロ先の物体の匂いを嗅ぐことができる

のである。

本郷猛

「そうか……この匂いは硝煙……だとするとこの匂いは火薬だ！」

愛紗

「かやく？」

三国時代にはまだ火薬を用いた兵器はないので、愛紗が火薬のことを知らないのも無理は

無かった。



本郷猛

「こつちから匂ってくる！」

愛紗

「あつ！ ご、ご主人様！」

愛紗は慌てて本郷の後を追い、彼に追いつくと彼は崖の下を眺めていた。

何があるのか見てみると、なんとゲルシヨッカーの戦闘員が何かを馬車に運んでいたの

だ。

愛紗

「なぜ奴らがこんな所に？」

本郷猛

「どつやら俺の感が当たったようだ…… 奴らはきつとあの火薬を

義勇軍のいる街にばらまき、トラゾウガメの炎で点火させて義勇軍を街ごと焼き尽くすつもりだ！」

愛紗

「ま、街ごとっ！？」

本郷猛

「しっ！」

本郷は戦闘員に見つかるはずとまずいとおもったのかおもわず、愛紗を黙らせる。

愛紗

「街ごと焼き尽くすなんてそんなことできるのですか？」

本郷猛

「奴らならやりかねん……多くの人間の命を奪うのがゲルシヨツカーだからな。」

愛紗

「なら、早く止めないと……」

本郷猛

「分かっている。だがここで気づかれてトラゾウガメに逃げられたらおしまいだ。」

「そうだ。いい手がある。ついてこい愛紗」

愛紗

「はい……」

本郷はそう言うと近くにいた戦闘員一名を他の戦闘員に見つからないように

自分達の方に引きずり込んだ。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ!？」

本郷猛

「とおっ！」

(ドカッ！)

本郷は戦闘員二名を気絶させると、服と覆面をはぎ取る。

愛紗

「ご、ご主人様何をっ!？」

愛紗は敵から奪った服を着ている本郷に質問する。

ゲルシヨツカー戦闘員(A?)

「戦闘員に化けて、奴らの中に紛れ込む。ほら愛紗も着ろ」

愛紗

「で、ですが……」

愛紗は戦闘員の服を着るのをなぜか躊躇っていた。無理も無い。

こんな不気味で怪しい服を誰も着たくはない。

ゲルシヨツカー戦闘員(A?)

「躊躇っている場合じゃ無い。奴らをほっておくと間違いなく義勇軍は壊滅だ」

愛紗

「わ、分かりました。う、ううう……」

愛紗はしぶしぶその服を着るしか無かった。

そして戦闘員に化けた二人は他の戦闘員が待つ馬車へと向かう。

そこには本郷が恐れていた通り、大量の火薬が積み重ねられていた。

ゲルシヨツカー戦闘員（A？）

「（やはり、これを街にはらまくつもりだな……。しかし、トラゾウガメはここにはいない。別の所から街に向かっていているのか？）」

そして戦闘員と火薬を詰めた馬車は街までゆっくり向かい、街の誰の见えないところまで

行き、そこで止まる。

夜になった頃、戦闘員が全員外に出て外で待っていると、やがて別の馬車がそこに到着し

そこからトラゾウガメが降りて着た。

そしてトラゾウガメは何か話し始めた。

トラゾウガメ

「グオオオン！ 待たせた戦闘員の諸君！ではこれより「桃花村大  
火事作戦」

について説明する。本日、我々に提供された「超高性能火薬」は一  
粒だけでも

家屋一軒を焼き尽くす火薬だ。 先ほど誰もいない空き家で実験を  
してみたが

その効果は凄まじい物だった。この火薬を大量に街にはらまき、俺  
の「殺人火炎」

で点火する。そうすれば、この街の人間どもは逃げる間もなく、燃

え広がる炎に  
焼き尽くされるのだ……。ただし、この作戦は誰にも気づか  
れない様に実  
行しなければならぬ。諸君、早速この火薬を街にばらまくのだ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

戦闘員が火薬の積んでいる馬車まで向かおうとすると、突如二名の  
戦闘員にそれを阻

まれた。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ!？」

トラゾウガメ

「な、何をする！貴様ら！」

ゲルシヨツカー戦闘員（A？）

「はっはっはっ……。そうか……。やはりこの火薬を街にばらま  
こうとしていたのか  
だが、そうはさせん！」

ゲルシヨツカー戦闘員（B？）

「ご主人様の言うとおり、とんでもない奴らですね！」

トラゾウガメ

「な、何っ!？ その声、き、貴様らまさか！」

ゲルシヨツカー戦闘員（A？）

「その通り！ ふんっ！」

その戦闘員二名は覆面と服を脱ぎ捨て正体を見せる。

トラゾウガメ

「ほ、本郷猛！ それに関羽雲長！」

本郷猛

「俺が戦闘員の近くで貴様を倒す為の稽古をしていたのが運の尽きだったな！」

愛紗

「我々がいる限り貴様らの思い通りにはさせないぞ！」

トラゾウガメ

「なにっ！？ くそ！ やれ！」

トラゾウガメが合図すると、戦闘員達が一斉に襲いかかる。

本郷猛

「トオッ！ トオッ！」

本郷は襲い来る戦闘員を殴り飛ばし、払いのけ、そして投げ飛ばしていき

愛紗

「はあっ！ はああっ！」

愛紗は馬車にこっそり隠してあった青龍偃月刀で迫り来る戦闘員を

払いのける。

トラゾウガメ

「くそっ！ どけっ！ 「超高性能火薬」を奴らに奪われる訳には  
いかないのだ！  
グオオオオオオン！」

トラゾウガメは邪魔になる戦闘員を払いのけ、「超高性能火薬」を  
積んだ馬車に乗り込み

そのまま逃げ出した。

本郷猛

「待て！くっ貴様ら邪魔だ！」

愛紗

「ご主人様！戦闘員は私に任せてトラゾウガメを早く！」

本郷猛

「すまん愛紗……フンっ！」

（ピュイイイイン！）

本郷猛

「ライダー……」

本郷は左手を腰に当て、右腕を左側に持ってきてポーズをとると、  
右腕をまた右側に持ってきて、今度は右腕を腰に当て、左腕を右側  
に持つ

てきた。

本郷猛

「変身っ！」

(ゴウン！)

すると本郷の腰から赤い風車のついたベルトが現れ、

本郷猛

「トオッ！」

本郷がそのままジャンプすると、ベルトから発した凄まじい光が彼を多い光が晴れると

仮面ライダーになった彼が着地してきた。

(ピュイイイイン！)

仮面ライダー一号

「トオッ！」

仮面ライダーはジャンプすると愛車サイクロンに乗り込み、逃走したトラゾウガメを追跡

する。

(挿入曲：レッツゴー！ライダーキック)



(ブオオオオオオオオオオ！)

必死に逃走を図るトラゾウガメであるが所詮馬車ではバイクに敵うわけがなく、

あっという間に仮面ライダーがおいついてきた。

トラゾウガメ

「グオオオオオン！ しつこい奴め！」

そしてサイクロンはトラゾウガメの馬車を追い抜き、目の前で止まった。

トラゾウガメは慌てて馬車を止め、ライダーに向かっていく。

トラゾウガメ

「ライダー！どこまでも邪魔をするか！」

仮面ライダー一号

「トラゾウガメ！平和を願い愛する人々を守るために戦うことを誓った人達の命を奪うことはこの私が断じて許さん！」

トラゾウガメ

「何をつ！ グオオオオオン！」

そしてトラゾウガメはライダーに襲いかかり、パンチを食らわそうとするが、ライダーは

後ろに後転して攻撃を回避した。

そして向かってきたトラゾウガメの攻撃を受け止めると、腹部に力ウンターを決める。

(ボゴッ！)

トラゾウガメ

「グオオオオオオン！」

トラゾウガメは思わずひるみ、後ろに下がるとライダーは跳び蹴りをおみまいした。

仮面ライダー一号

「トオオッ！」

トラゾウガメ

「グオオオオオオンッ！」

後ろに崖があったからかトラゾウガメはそのまま崖の下へと落ちていき、そしてライダー

は落ちていくトラゾウガメを追っていく。

(ピュイイイイイン！)

トラゾウガメに追いつくとトラゾウガメは起き上がってきたどうやら

今までの攻撃はあまり効いていないようである。

トラゾウガメ

「グオオオオオン！ 言ったはずだ仮面ライダー 俺の甲羅は貴様

「ごときでは砕くことはできん！」

仮面ライダー一号

「くっ！やはり、普通の攻撃ではダメージを与えられない。どうすればこいつを倒せるんだ？」

仮面ライダー一号はトラゾウガメに殴りかかるつもりだったが、今度はトラゾウガメに攻撃を

受け止められてしまい、カウンターのパンチを受けてしまう。

仮面ライダー一号

「ああっ！」

そして連続で攻撃を受けたライダーはそのまま首を締められてしまう。

仮面ライダー一号

「うっっ！」

トラゾウガメ

「死ねえ仮面ライダー！」

ライダーはもう駄目かとおもった瞬間

（ビュッ！）

トラゾウガメに何かが飛んできてそれが命中した。

ダメージは与えていないようだがトラゾウガメは思わず、その何かが

飛んできた方向をみるとそこには蝶々の仮面をつけ、武器を持った白装束の

女が立っていた。

トラゾウガメ

「何者だ貴様！」

?????

「ある時は、メンマ好きの旅の武者、またある時は謎の全裸美女、  
しかして

その実態は！」

そしてその女は振り返ると怪人にこういう。

華蝶仮面

「乱世に舞い降りた一匹の蝶！美と正義の使者！ 華蝶仮面推参！」

トラゾウガメ

「何っ！？ 華蝶仮面だ！？？」

華蝶仮面

「話は聞いた！ その怪物よ！ 平和を実現する為に戦う者達の命を奪おうとするとは言語道断！ この華蝶仮面が成敗してくれる！  
トオッ！」

華蝶仮面はそういつとももの凄く速さでライダーとトラゾウガメの近くに降りてきて

ライダーをトラゾウガメから引き離した。

トラゾウガメ

「は、速い！」

華蝶仮面

「仮面ライダーとかいったな。怪我はないか？」

仮面ライダー一号

「あ、ああ大丈夫だ。君は一体？」

華蝶仮面

「私は貴方と同じ志を持つ者だ」

トラゾウガメ

「己っ！何者か知らんが二人一緒に始末してくれる！死ぬグオオオオン！」

(ゴオオオオオオオッ！)

トラゾウガメの口から日が出たのを見たライダーと華蝶仮面はとっさに避ける。

仮面ライダー一号

「気をつける！あの炎に触れたら一瞬で灰と化すぞ！」

華蝶仮面

「ならば近づき過ぎないように戦うまでだ！」

華蝶仮面はそういうと、トラゾウガメの殺人火炎がギリギリ当たらない距離まで近づき

そこから何かを投げつけ始める。

華蝶仮面

「ハアッ！ ハアッ！」

トラゾウガメ

「グオオオオオン！ 何を俺に投げつけている！？」

華蝶仮面が投げつけてきたその何かは跳ね返るだけで大したダメージを与えていないよう

にも見える。そしてトラゾウガメは敵が投げつけてきた物を受け止めるとそれは手裏剣

ではなく、本来武器として扱う物ではなかったそれは・・・

トラゾウガメ

「こ、これは仮面・・・？」

華蝶仮面

「チイッ！」

そう、その何かとは華蝶仮面が持っていた予備の仮面だったのだ。しかし武器として扱う

ものではなくても、その仮面は金属できており、充分武器にもなった。

トラゾウガメ

「なめおって！ こんな仮面で俺を倒せると思うのか！？ グオオオン！」

華蝶仮面

「やってみなければ、分からぬ事がある！」

トラゾウガメ

「こしゃくな！ ならこれならどうだ！」

トラゾウガメはそういうと両手足、そして頭を甲羅に引っ込めて中を飛び攻撃の体制に移

る。

トラゾウガメ

「ゾウガメアタック！」

華蝶仮面

「ぐうつっ！」

（ドゴオオオオオン！）

華蝶仮面はゾウガメアタックに直撃してしまい、その反動で壁に叩き付けられた。

しかも、華蝶仮面は改造人間ではないので、凄まじいダメージを受けたはずだ。

華蝶仮面

「グウツ！　ここまで手強いとは・・・やはり本物の化け物相手には分が悪いか・・・」

トラゾウガメ

「当たり前だ！　人間ごときが俺に勝てると思っっているのか！　その事を後悔しながら死ぬがいい！！　グオオオン！」

トラゾウガメが華蝶仮面に止めを刺そうとしたとき、仮面ライダー一号にそれを阻まれる。

仮面ライダー一号

「俺のことを忘れていたようだな！」

トラゾウガメ

「小癩な！　なら貴様から始末してくれる！」

仮面ライダー一号

「はっ！・・・」

この時、仮面ライダー一号はある事に気づいた。何とトラゾウガメの甲羅にヒビが入って

いたのだ。どうやら華蝶仮面の攻撃で奴の肉体は少しずつではあったが、ダメージを受け

ていたようである。

仮面ライダー一号



「そつだあの傷を狙えば……行くぞトラゾウガメ！ トオッ！」  
仮面ライダーは一気にトラゾウガメにちかづくどヒビの入っている部分に執拗に殴り続けた。

仮面ライダー一号  
「トオッ！ トオッ！」

トラゾウガメ  
「無駄だ！ 貴様の攻撃は俺には効かないといったはずだ！」

トラゾウガメがそういつているにも構わず、ライダーはある部分を必要以上に殴り続けていた。

仮面ライダー一号  
「トオッ！ トオッ！」

トラゾウガメ  
「だから無駄だと……」

トラゾウガメが何かを言おうとしたその時、トラゾウガメに異変が起こる。

（バキッ！）

トラゾウガメ

「グオオオオン！」

何とトラゾウガメの甲羅のひび割れた部分が完全に割れ、さらにひびが甲羅に拡がってい

ったのだ。

トラゾウガメ

「ま、まさか貴様……さっきから同じ所を狙って!？」

仮面ライダー一号

「貴様の甲羅は確かに大した硬さだった。……だが、傷がついた状態で同じ所への集中攻撃には体が耐えられなかったようだな」

トラゾウガメ

「グオオオオン! く、くそおっ！」

そしてそこから仮面ライダーは今度は蹴りで、トラゾウガメにダメージを与えていく。

仮面ライダー一号

「トオッ! トオッ！」

(バシッ! バシッ!)

トラゾウガメ

「グオオオオオン！」

そして、ライダーは怪人を蹴り飛ばして、距離をとると必殺のキックを放つポーズを取っ

た。

(ピュイイイイイン！)

仮面ライダー一号

「トオオオオオオオオっ！」

(ビュオオオオオオオン！)

大空高く跳び上がった仮面ライダーは空中でキックの体制に移ると体をドリルのように回転させる。

仮面ライダー一号

「ライダーアアアアア・スクリューキイイイイイイック！」

大空高く跳び上がったライダーは必殺のキックを怪人に命中させる。

(ドゴッ！)

仮面ライダーのスクリューキックにより、トラゾウガメは火薬を積んだ馬車まで

吹っ飛ばされる。

トラゾウガメ

「グオオオオオン！」

そしてトラゾウガメは馬車ごと反対側の崖まで転落していき

そして馬車から何とか出たが、キックの衝撃にひび割れた状態の甲羅が

耐えきれず……

(バキッ！)

完全に割れると同時にトラゾウガメはダメージに耐えられなくなり、

トラゾウガメ

「グオオオオオオオオン……………」

(ドオオオオオオオオン！)

そのまま後方に倒れてしまい、「超高性能火薬」ごとく爆発してしまっ

た。  
「超高性能火薬」の威力は凄まじく、ライダーとは反対側の崖下を  
炎で

覆い尽くしてしまう。

そして、この事をした暗黒魔術師は基地で悔しそうな顔をする。

暗黒魔術師

「まさかトラゾウガメが倒されるなんて……………エエイッ！  
仮面ライダー！覚えていなさい！」

そして、トラゾウガメを死闘の末に倒した仮面ライダーは自分のピ

ンチを救ってくれた

謎の仮面ヒーロー「華蝶仮面」と向き合い、握手をする。

仮面ライダー一号

「ありがとう華蝶仮面。君の助けがなかったらあの怪人を倒せなかったかもしれない」

華蝶仮面

「いや何、お互い正義と平和を愛する者同士、同じ志を持つ者を助けるのは当然だと思っただけだ」

仮面ライダー一号

「一体君は……?」

華蝶仮面

「申し訳ないが、今は正体を明かすことができない。だが近いうちまた貴方の前に姿を現すだろう。その時までしばしの別れっ！ トオッ！」

華蝶仮面はそう言うと、跳び上がってどこかへと去って行った。

仮面ライダー一号

「改造人間でもなくても、ゲルシヨッカーに立ち向かおうとする人間がいるとは  
彼女は一体何者なんだ？」

仮面ライダー一号は彼女の正体が気になるが、とりあえず義勇軍のいる街まで帰ることに

した。

強敵火炎魔人トラゾウガメを倒し、ゲルショッカーの「桃花村大火  
事作戦」は失敗に終わ

った。だが、この程度で怯むゲルショッカーではない。奴らはまた  
新たな怪人を送りつけ

本郷猛に挑んでくるだろう。そして、仮面ライダー一号の前に突如  
姿を現した謎のヒーロ

ー「華蝶仮面」。果たして彼女は一体何者なのか？ 再び彼の前に  
姿を現すのだろうか。

、そしてその事を考えるよりも先にゲルショッカーと戦う決意を本  
郷猛はさらに固めるの

であった。

つづく。

トラゾウガメ 大火事作戦 (後編) (後書き)

激戦に続く激戦で遂に黄巾党を壊滅寸前まで追い込んだ義勇軍、そして魏、呉の

連合軍。魏の王、曹操孟徳から黄巾党の首領張角、張宝、張梁の三姉妹の居場所を

教えられた本郷猛は一人敵地に乗り込み、ついに黄巾党の首領張角と対峙する。し

かし彼女達には五斗米道の医者「華佗」の探す「太平妖術の書」そして、

ゲルシヨツカーが関与していた事実を本郷猛は知ってしまう。次回、「黄巾党壊滅！隠された真実」にご期待下さい！

**黄巾党壊滅！隠された真実 前編（前書き）**

今回は本郷と白蓮の会話がメインです。



## 黄巾党壊滅！隠された真実 前編

この世界に本郷猛がきて数ヶ月、「天の御遣い」こと本郷猛の指揮する義勇軍は激戦に続く

激戦で黄巾党の戦力を大幅に削ってきた。

そして、より黄巾党の抵抗が激しくなると予測した本郷は、軍議にて仲間達の意見を聞き、

この先どうするかを考えた結果、桃香の親友で幽州の太主である公孫贇伯珪の力

を借りることを決めた。

そして、現在黄巾党を討伐する為、出陣しているという公孫贇軍が駐留している陣地赶赴

く。最初、警備兵に門前払いされかけたが、劉備は自分は公孫贇の親友で今日は「天の御

遣い様」が公孫贇に会いたがっていると話したら、その兵は慌てて自分の太守の方へと案

内し始めた。太守の友人を門前払いなんかしたら、大変無礼と思ったのだろう。しかも、

素手で黄巾党の兵を撃退したと噂がある「天の御遣い」が公孫贇と話がしたいといって

るのだから慌てたのかもしれない。

警備兵

「失礼します公孫贇様。」

白蓮

「どうした？」

警備兵

「はい、今噂の『天の御遣い』様と劉備玄德様が公孫贇様に面会を求められています。」

白蓮

「何？桃香がここに来たのか？ しかも噂の『天の御遣い』も？  
通せ！」

警備兵

「はっ！」

警備兵は白蓮の命を受けると、早速『天の御遣い』本郷猛、大徳劉備玄德、そして

関羽雲長こと愛紗達を連れてきた。

白蓮

「桃香久しぶりだな！ 私塾以来だ元気にしてたか？」

桃香

「うん私は元気だよ白蓮ちゃん。ごめんね突然訪ねて」

白蓮

「何をいう。私達は親友じゃないか気にするな。ところでそなたの後ろにおられるのはもしかして……」

桃香

「うん。この人が『天の御遣い』様だよ。この人のおかげで義勇軍は黄巾党に勝てたの」

白蓮

「おおそうか！ 桃香が世話になったな。私は公孫贇軍の太守の公孫贇伯珪だよ。よろしく！」

本郷猛

「こちらもよろしく。俺が人々から『天の御遣い』と呼ばれる義勇軍の指導者本郷猛だ。」

白蓮

「本郷……それがお主の名前か？ これからはお主を『本郷』と呼んでもかまわないか？」

本郷猛

「ああ構わない。」

白蓮

「では改めてよろしく本郷」

白蓮は本郷と握手しようとして手を出すが、本郷はなぜか手を出そうと

しなかった。

白蓮

「どうした握手しないのか？」

本郷猛

「すまないが、握手はできない」

白蓮

「なぜ？」

本郷猛

「実は天の人間の力はこの世界の人間の力の数十倍だ。うっかり握手してしまうと

君の手を握りつぶしてしまうかもしれない。」

白蓮

「なっ！？」

白蓮は本郷の話が信じられなかったが、噂で彼が素手で黄巾党の兵を撃退したと聞いてお

り、充分あり得ると判断した。

白蓮

「そうか・・・そういう事情では仕方ないな。 気にするな本郷」

本郷猛

「すまない・・・公孫賛さん」

皆も知っているだろうが、改造人間 本郷猛はシヨツカーによって改造手術されたことにより、人間の数十倍の力を得ている。

自らの力を加減することがとても難しいのだ。

しかし、ここで本当の事情を話しても証拠がない為、信じてもらえないと思った本郷は「天の人間」の力は

この世界の人間よりも上といたのである。

白蓮

「おいおい……親友が世話になっているんだ。私も真名で読んでくれ。」

私の真名は白蓮だ 後、敬称は必要ないぞ」

本郷猛

「そうか……よろしく白蓮」

白蓮

「ああ……ところで義勇軍がここにきた目的はなんだ!？」

本郷猛

「ああ、実は黄巾党を討伐する為に君の兵と合流したいんだ。こっちは幽州の青龍刀 関羽雲長」

愛紗

「はいっ!」

本郷猛

「燕人 張飛翼徳……」

鈴々

「なのだっ！」

本郷猛

「天才軍師 諸葛亮孔明と鳳統士元……」

朱里、雛里

「「よ、よろしくお願いします！」」

本郷猛

「そして大徳劉備玄德とこの俺『天の御遣い』本郷猛がいる。」

白蓮

「おおっ！ 心強いな！ そういえばこちらの軍にも客将として招いた趙雲が……」

白蓮が趙雲の名を出した途端、本郷の顔が変わる。

本郷猛

「趙雲っ！？ もしや、趙雲子龍の事か！？」

白蓮

「えっ？ そうだが……彼女とは知り合いなのか？」

本郷猛

「いや、名前を知っているだけだ。（趙雲子龍……蜀の国に集った勇将……）」

確か「黄巾の乱」の後に関羽達の仲間になったはず……」

白蓮

「じつはなその趙雲はお主達がくるついさっきまでついさっきまでこの陣にいたんだ。」

本郷猛

「何？ どういうことだ？」

白蓮

「あいつはちょっと血の気がおおくてな……奴らに兵法を用いる必要はないと一人で敵のいる陣地までいってしまっただ」

本郷猛

「何だつて！？ 何て愚かな……なぜ止めなかった！」

白蓮

「わ、私だつて全力で止めようとしたさ！ いくら雑魚でもあの大群を相手に一人では無茶だつて……だが、あいつは私の言葉も聞かずせつせといてしまっただ」

本郷猛

「くっ！……朱里、雛里！」

朱里

「は、はいっ！」

雛里

「何ですかご主人様!？」

本郷猛

「すぐに出陣の準備だ!趙雲の救出にいくぞ!」

愛紗

「ご主人様!何をいつているんですか!？」

本郷猛

「趙雲子龍はこの乱世を終わらせる為に必要な人間だ。暴虎馮河な行為で死なせる訳にはいかない!」

桃香

「えっ!? その趙雲さんって人、それほどの人物ですか!？」

鈴々

「でも敵はいつぱいいるのだ! どうするのだ?」

本郷猛

「そこでだ! 以前雛里が言っていた策を使う!」

雛里

「えっ? あの時いつた私の策ですか?」

雛里は以前、朱里同様本郷にこちらの倍の大軍をどう切り抜けるかと

聞かれた事がある。その時言った策を使う様だ。

本郷猛



「そつだ・・・君の言っていた策が趙雲を救うことになるだろう」

本郷は雛里の頭を撫でると雛里は嬉しそうに笑う。

雛里

「えへへ〜！」

朱里

「雛里ちゃんいいな〜」

その時、朱里以外にも鈴々、桃香、愛紗が羨ましそうな目で見ていたが

本郷はそれに気づかないでいた。

白蓮

「おいおい？ あいつはそんなにすごい人間なのか？」

本郷猛

「そつだ。 白蓮も趙雲を助ける為に、力を貸してくれ」

白蓮

「だ、だがな・・・」

白蓮は少し躊躇う。人の忠告も聞かず、せっせと敵の陣地まで一人で行ってしまった

人間を救うことに大きな意義があるのかと。

本郷猛

「頼むこの通りだ……」

本郷は白蓮に対して深々と頭を下げる。この場にいた者は本郷の行為を見て、趙雲が

本当に必要な人間であること、そして彼女を救いたいと思う彼の気持ち伝わった。

白蓮

「……………本郷。お主の気持ちはよく分かった。力を貸す。だから頭を上げてくれ」

本郷猛

「白蓮……………ありがとう」

白蓮

「それに彼女を見捨てるほど私は器は小さくないからな」

桃香

「白蓮ちゃん。ありがとう」

白蓮

「ああ、桃香……………では出陣だ！」

全員

「おおっ！」

そして全員が外に出ると白蓮が兵全員に向かって演説を開始する。

白蓮

「皆の者よく聞け。これより我々は敵の本拠地へ行き、先に本拠地に向かった

趙雲子龍を救出する。本日、私を訪ねてきた『天の御遣い』の話によれば、趙雲

子龍はこの乱世を治める為に必要な人間だそうであり、死なせる訳にはいかなく

なった。諸君らの中には勝手に戦場に向かった人間を救うことに意義があるのかと

疑問に思う者もいるだろう。だが、私も『天の御遣い』同様彼女を死なせたくない。

諸君らも知っているとおり敵はこちらの倍の大軍だが、『天の御遣い』率いる義勇軍は

我々と合流し、共に戦いたいと申ししてきた。これ程心強い味方が来てくれた事を私は嬉しく思う。これからは義勇軍も我々と共に戦う

事になる。では行こう！一人の勇氣ある武將を救う為に！」

「うおおおおおおおっ！」

白蓮の演説に兵達の士気はどんどん高まっていく。

そして本郷猛、劉備玄德の率いる義勇軍、そして白蓮の率いる公孫贗軍は趙雲子龍を

救う為に戦場に赴いた。しかし、この時本郷は救おうとしている趙雲が、トラゾウガメと

の戦いの時、窮地に陥った自分を救った『華蝶仮面』であること、ゲルシヨッカーが黄巾

党に手を貸しているだけでなく、陰で操っていた事をまだ知らない

で  
いた。

黄巾党壊滅！隠された真実 前編（後書き）

次回、二人のヒーロー 感動の再会！？

黄巾党壊滅！ 隠された真実 中編 その1（前書き）

果たして義勇軍は先に敵陣に向かった趙雲こと星を救えるのか！？

黄巾党壊滅！ 隠された真実 中編 その1

そして、黄巾党がいる陣地。数万の敵を相手に一人で戦い続ける少女がいた。

そうこの少女こそ公孫軍の客将「趙雲」だ。

星

「ふっ・・・やはり数だけの連中だな 我を恐れる者はこの場を去れ！ 恐れぬ者は  
かかってこい！ 我が名は趙雲子龍。 我が身これ刃なり！」

趙雲がそういいながら迫り来る敵を次々倒していった。

星

「はいはいはいっ！」

「がっ！」

「ぐぎゃあー！」

敵を次々倒し続ける趙雲であったが、長時間に渡る戦闘による疲労と倒した敵で足場が狭

くなっていき、次第に動きが鈍くなってくる。

星

「チッ！ 数ばかりの雑魚の分際で・・・私を手こずらせるとは・・・

おまけに疲労と倒した敵で動きが……」

とうとう、自分の動きが鈍くなっている事に気づいた一人の黄巾党の兵は傷を負いながら

も立ち上がりそして……

「こいつ動きが鈍くなっているぞ！ 取り囲んでなぶり殺しだ！」

合図と同時に多くの敵兵が趙雲に襲いかかってきた。

星

「己っ！ 私は唯では死なんぞ！」

趙雲は死を覚悟して、敵に向かおうとしたとき

???

「待ていつ！」

突如、後ろから聞き覚えのある声がしたと思い敵兵が見つめる方向をみるとそこには

黄巾党を討伐しにきたと思われる大軍がいたのだ。

「げっ！ あんなに義勇軍がっ！」

「嘘だろ！？ 奴らあんなにいやがったのか！？」

黄巾党は通常より倍の敵の旗手を見て、大軍が迫ってきたとうろたえ出す。



これが最近、義勇軍に入った二人の天才軍師の策だと知らずに……

愛紗

「行けっ！ 義勇軍の勇者達よ！ 今こそ我らの力を天下に見せつけるときだ！」

鈴々

「全軍突撃なのだ！」

桃香

「私達は天に守られた誇り高き戦士なり！」

「うおおおおおっ！」

そして義勇軍は敵に突撃してくる。

星

「こ、これは一体!？」

趙雲は自分を助けに来たと思われる義勇軍に驚いていると、自分の近くに黒髪の武将が

近づいてきた。

愛紗

「全く……一人で敵に向かうとはなんて無茶をする。まあその心根こそまさに

武将の鏡ともいえる。」

星 「！・・・その青龍刀・・・もしかや武勇の誉れ高き関羽雲長殿なのか？」

愛紗 「いかにも・・・我ら義勇軍は本郷猛様の命により貴方を助けに来ました。  
共闘願えますか？」

星 「・・・よかるう。貴方に背中を預けられるなら私も本気を出せる。」

愛紗 「頼もしい。ご主人様が貴方を必要な人間というのも理解できます。」

星 「そうか・・・。」

愛紗 「では・・・。」

星 「うぬ・・・。」

星 「我が名は趙雲子龍！！この名を聞いてまだ恐れぬなら我が命を奪ってみせろ！」

愛紗

「我が名は関羽雲長！『天の御遣い』本郷猛の家臣！我が命欲しければかかってこい！」

「な、なんだって！？『天の御遣い』の家臣！？」

敵は『天の御遣い』の名を聞くと同時に狼狽え始める。

そして、戦闘が始まってある程度時間が過ぎ、公孫賛の軍が到着した事を知った

朱里は一時後退の合図を愛紗達に送った。

朱里

「今です！愛紗さん達に合図を！」

（ゴーン！ゴーン！ゴーン！）

愛紗

「合図か！！趙雲殿 一旦引くぞ！」

星

「承知！」

愛紗、星は味方の方まで撤退していき、敵を誘い出してきた。

「チツ！逃がすか！追うぞ！」

黄巾党は誘い出されているとも知らずに、愛紗達を追跡し始める。

しかし、それが諸葛亮の策だと知らずに、そして畏れだと思った時は既に手遅れであった。

「しまった！」

朱里

「今です！ 愛紗さん達が退いたと同時に兵を展開 敵の先陣を半包囲して下さい！」

雛里

「後は公孫贇軍と共に前後から挟撃を開始して下さい！」

「おおおおおおおっ！」

そして公孫贇と義勇軍により完全に周囲を囲まれた黄巾党は次第に弱まり、やがて

その数が徐々に減っていき、ついにその数はわずか数百のみになった。

「こりゃ溜まらん！」

「に、逃げるぞ！ 突破口を開け！」

一部の黄巾党兵は死力を振り絞って、自分達の後方の敵をなぎ払うとそのまま撤退し始める。

偶然愛紗達の近くまで来ていた本郷猛はこれを見ると

本郷猛

「待てっ！ 追うぞ愛紗、鈴々！ 奴らを逃がすわけにはいかない！」

愛紗

「はいっ！」

鈴々

「応なのだ！」

本郷猛

「そして君が趙雲か？」

星

「いかにも……あなたが『天の御遣い』か？」

本郷猛

「そつだ……ん？……君はもしや」

星

「何か？」

すると、本郷は彼女の耳元でこつこつとつぶやく。

本郷猛

「君はあの華蝶仮面なのか？」

星

「・・・・・・・・何の事でしょう？」

趙雲は最初は否定していたが、次に本郷がこう言うと彼女は

本郷猛

「隠さなくてもいい。私はあの時、トラゾウガメと戦っている最中、君に助けられた

あの「仮面ライダー」だ」

星

「なっ？ 貴方があの・・・・・・・・」

本郷猛

「訳あって今は義勇軍の指導者をしている。まさかこんなに早く君と再会するとは思わなかった。」

星

「私事です。あの時公孫贗軍の所に向かっている最中、偶然貴方と化け物の

戦いを目撃しましてな。事情を知った後、貴方が倒されそうになったので

手をかしたのだ」

本郷猛

「そうだったのか・・・おっと今は黄巾党を追うぞ！」

星

「承知！」

そして本郷、星は愛紗達と合流すると逃走する黄巾党を追撃する。

逃走している黄巾党の一人はこんな事を口にする。

「はあ！ はあ！ でも逃げていいんですかい！？ ここで逃げたら俺達命ありませんよ！ 逃げたつてはれたらきつとあの化け物が！」

どうやら、ここの黄巾党は何かの役割をゲルシヨッカーに与えられていたようだ。

「馬鹿野郎！ 今逃げなきゃ義勇軍に殺られるだけだ！ それにここまで」

くればあの化け物だつて追つてこれないはずだ！」

????????

「アゝブラゝ！ 俺が何だつて？ 黄巾党の諸君！」

「うわあああつ！」

黄巾党の兵士達が一斉に驚き始める。声がした崖の上にはトンボにカエルが混ざつた様な

怪人がいたのだ。

そうその怪人は優れた人間を捕獲してはこの場所まで運び、管理を黄巾党兵に任せていた

ゲルシヨッカーの怪人「カエルトンボ」だつたのだ！

カエルトンボ

「俺がちよつと目を離している隙に、敵に負けたばかりでなく、あの場所から逃げようとするとはっ！あの場所の管理は貴様らに任せていたはずだ！」

「ま、待ってくれ！いくら何でも敵が手強すぎるんだよ！あの数を相手にどう戦えと！」

カエルトンボー

「馬鹿者っ！貴様らはホントに奴らが大軍だと思つたのか？あんなもん旗を使ったはったりだ！」

「えっ？」

黄巾党は怪人からこの事を聞くと自分達が敵にだまされたと知る。

カエルトンボー

「まあどの道、負けた貴様らは俺が殺す事になるがなっ！」

「ひ、ひいっ！ま、待ってくれよ！金ならある。だから命だけは……」

一人の黄巾党はその怪人に命乞いしようとするも、それを聞き入れるゲルシヨッカー

ではなく……

カエルトンボー



「アゝブラアアアアアアアッ！」

その怪人が何か液体を黄巾党の男達に吹き付けると

「あ・・・ああああ・・・」

その液体を浴びた男達は地面に倒れて苦しみだし、そして動かなくなってしまう。

その男達の顔色は緑色になり赤い模様が入っている。

カエルトンボー

「見たか俺の猛毒液の威力を！俺の猛毒を浴びた人間はのたうち回り、死んでいくのだアゝブラゝ！」

その時、戦闘員がトンボガエルに何かを伝える。

ゲルシヨツカー戦闘員C

「本郷猛と関羽雲長達がこちらに向かっています。」

カエルトンボー

「何ッ？ そうか、こいつらを追ってきたのか。一旦隠れるぞ！アゝブラゝ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

怪人と戦闘員が隠れたちょうどその時、本郷猛達がその場に到着し、

そこに倒されている黄巾党兵に驚愕した。

本郷猛

「なっ？ こ、これはっ!？」

愛紗

「ご主人様これは一体!？」

本郷は倒れている黄巾党兵に近づき、脈があるか確かめたが、反応がなかった。

本郷猛

「死んでる・・・毒で殺されたな・・・」

本郷は黄巾党兵の顔色を見て毒殺だと判断した。

鈴々

「一体誰がやったのだ？」

本郷猛

「こんな毒を用いた殺し方ができるのはゲルショッカーしかないっ!」

カエルトンボー

「その通りだ!」

本郷達は声のした方向をみると、そこにゲルショッカーの怪人と戦闘員がいた。

(挿入曲：ショッカー襲来!)

鈴々

「はにゃ！ 本当にゲルシヨツカーが出たのだ」

本郷猛

「ゲルシヨツカーの怪人め！」

カエルトンボー

「俺はアマゾンに住む猛毒を持つカエル、ヤドクガエルと南米のハ  
ンター、ハビロイトンボの合成改造人間、その名もカエルトンボ  
ー！ アゝブラゝ！」

本郷猛

「こいつらを殺したのはお前か！」

カエルトンボー

「その通り！ こいつらはせつかく我々が与えてやった役割を果た  
せなかったただけでなく、貴様らに敗れ、逃げた。だから処刑したの  
だ！」

愛紗

「役割？ お前達はこいつらに何をさせていた！」

カエルトンボー

「それを貴様らが知る必要はない！ かかれえええっ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

ゲルシヨツカーの戦闘員達はトンボガエルの指示が出ると、一斉に

武器を持ち

ジャンプして、空中で反転すると本郷達の所に降りてきた。

それと同時に本郷達は戦闘員達に向かっていく。

本郷猛

「ふんっ！ トオッ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

本郷は迫り来る戦闘員を殴り払い、そして蹴り飛ばしていき

愛紗

「はあっ！」

愛紗は戦闘員を青龍偃月刀でなぎ払い

鈴々

「おりゃおりゃなのだ〜！」

鈴々はその小さい体からは想像もできない力で丈八蛇矛を振り回し、戦闘員を蹴散

らしていった。

星

「はあっ！ はあっ！」

星は自分の武器である龍牙を振り回し、そして突く、斬るの攻撃を繰り返す。

ゲルシヨツカー戦闘員

「グイグイグイッ！」

愛紗達が戦闘員と戦っているなか、本郷猛はトンボガエルに接近した。

本郷猛

「カエルトンボー！答えてもらおう！ゲルシヨツカーは黄巾党に何をさせていた!?!」

カエルトンボー

「アゝブラゝ！それを貴様を知る必要はない。なぜなら貴様はここで死ぬのだから！」

そしてトンボガエルは本郷に殴りかかってきたが、彼は敵怪人の攻撃を受け止め、地面に

投げつける。そして怪人が起き上がった時、連続で蹴りをお見舞いした。

本郷猛

「トオツ！トオツ！」

カエルトンボー

「アゝブラゝ！」

そして本郷は今度はパンチを怪人にお見舞いするが、怪人は攻撃を

受け止め、蹴り飛ばし

てしまう。

本郷猛

「アアッ！」

本郷はとっさに起き上がると

カエルトンボー

「死ねっ！ ア〜ブラ〜！」

トンボガエルは口から何か緑色の液体を吐き出してきたのでとっさに避けるとその液体は

戦闘員に命中した。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイイイッ！」

液体を浴びた戦闘員はのたうち回り、やがて動かなくなった。

本郷猛

「なるほど……これが黄巾党兵を殺した猛毒だな」

カエルトンボー

「チッ！ 運のいい奴め！」

これ以上人間の姿で戦っても勝てないと判断した彼はここで変身することにした。

本郷猛

「……………フンっ！」

(ピュイイイイン！)

本郷猛

「ライダー……………」

本郷は左手を腰に当て、右腕を左側に持つてきてポーズをとると、

右腕をまた右側に持つてきて、今度は右腕を腰に当て、左腕を右側に持つ

てきた。

本郷猛

「変身っ！」

(ゴウン！)

すると本郷の腰から赤い風車のついたベルトが現れ、

本郷猛

「トオツ！」

本郷がそのままジャンプすると、ベルトから発した凄まじい光が彼を多い光が晴れると

仮面ライダーになった彼が着地してきた。

(ピュイイイイン！)

カエルトンボー

「仮面ライダー！ 貴様を倒せば、俺はゲルシヨッカーでの地位が上がる

その為に死んでもらうぞ！」

仮面ライダー一号

「やれる者ならやって見せる！ だが、そんな目的では私を倒すことはできない！」

カエルトンボー

「小癩な！ アブラッ！」

カエルトンボーは右手からライダーに攻撃するが、攻撃を受け止められてしまう。

カエルトンボー

「アブラッ!？」

仮面ライダー一号

「トオッ！ トオッ！」

(バキッ！ バキッ！ボゴッ！)

連続で殴られ、そして蹴り飛ばされてしまう。

カエルトンボー

「アブラッ！」



そして起き上がったカエルトンボーは今のままではライダーに勝てないと判断したのか

カエルトンボー

「ええいつ！ まあ、いい。本当なら俺が貴様と戦うのはもっと後の予定だった。いずれ決着をつけてやる！ 覚えているライダー！ ア〜ブラ〜！」

カエルトンボーがトンボの羽を羽ばたかせると、大空高く飛び上がり、どこかへと飛んで

いった。

鈴々

「こら〜！ 逃げるなのだっ！ 正々堂々戦うのだ！」

鈴々は飛び去っていくカエルトンボーに叫ぶが、敵にはその言葉は届かなかった。

鈴々は後を追おうとしたが、本郷、そして愛紗に止められる。

鈴々

「止めるなお兄ちゃん。愛紗」

本郷猛

「やめる鈴々。むやみに怪人を追うのは危険だ」

愛紗

「ご主人様の言うとおりだ。もし畏があったらどうするんだ？」

鈴々

「くっ！ 分かったのだ……」

鈴々は渋々、二人の言うことを聞いた。

本郷猛

「さあ、とりあえず帰ろう。本来の目的は趙雲の救出だったからな。」

星

「その前に猛殿。ゲルシヨッカーが奴らに何をさせていたか一度調べた方が良くと思いますぞ。」

本郷猛

「ああ……分かっている。」

本郷は趙雲もとい星の言うとおりにし、黄巾党があそこで何をしていたかを調べる為

奴らが根城のしていた洞窟を調べてみることにした。

すると……

「た、助けてくれ！」

「おい！」

「誰か！」

洞窟の奥から助けを求める声がしたので驚いた本郷達は奥の方まで  
いってみると

そこには牢屋に入れられていた人々がいたのだ。

愛紗

「なっ？ まさか黄巾党はこの人達を捕まえてこの檻に……」

鈴々

「すぐに助けるのだ！」

本郷猛

「ああすぐに助ける」

この時、本郷達はこの人々を助けた時、本郷達は黄巾党に隠された  
真実を知ることになることを

まだ知らないでいた。

(ル・ル・ルルルルツ！『アイキャッチ 新一号』)

黄巾党壊滅！ 隠された真実 中編 その1（後書き）

次回、華陀&華琳、そして春蘭などのキャラが登場。

黄巾党壊滅！ 隠された真実 中編 その2（前書き）

久しぶりの投稿です。時間がかかって申し訳ございません。  
また夏候惇こと春蘭が左目を失明した経緯を若干変更しました。

黄巾党壊滅！ 隠された真実 中編 その2

(ル・ル・ル〜ルルルッ！『アイキャッチ 新一号』)

本郷は牢屋の鍵がある場所を探し、見つけると捕らえられていた人々を助け出す。

「た、助かった……」

「ありがとうございます。お陰で命拾いしました。」

本郷猛

「無事でよかったです。貴方達は一体？」

「俺達は黄巾党の者です」

一同

「ええっ？」

一同は驚いた。何と閉じ込められていたのは黄巾党の人間達であったのだ。

しかしなぜ黄巾党は仲間であるこの人達を閉じ込めていたのか？

鈴々

「なんで黄巾党はこの人達を閉じ込めていたのだ？」

愛紗

「そつだ。なぜ仲間を……」

「俺達、皆同じ理由でここに居るんです。」

本郷猛

「どついつことだ？」

「俺達黄巾党は元々は張三姉妹という歌い手のただのおっかけだったんです。」

その男は本郷達に事情を話す。元々黄巾党とは張三姉妹の天和、地和、人和という

三姉妹の歌い手を応援する為の集まりだったということ。ある日、いつも通り張三姉妹の

歌を聞いていたら、何やら眠くなり気がついたらこの牢屋の中に入ったこと、その後カエル

とトンボのような化け物と覆面の男達が入ってきて仲間を数人捕縛して外に連れ出して

たこと、何をするのかこつそり外を見たとき、外にいた別の化け物が仲間は何やら暗

示をかけ、暗示にかかった者はおかしくなったこと、そして週に何回か、自分達と同じ事

情で何人が連れてこられた事、そして操られた彼らが外でそんな事をして居るなら、恐ら

く奴らに操られたのが原因で、本郷達の知る悪事を働く黄巾党になったことを話した。

愛紗

「何ということだ。黄巾党を陰で操っていたのはゲルシヨッカーだったのか」

星

「それに話の流れから黄巾党の首領張三姉妹は間違いなくゲルシヨッカーとゲルだ」

鈴々

「でも何で人気のある「張三姉妹」がそんな悪い事をするのだ？」

「天和ちゃん達は悪くねえ！」

鈴々の発言に一人の黄巾党が抗議する。

鈴々

「なぜそう言い切れるのだ？」

「天和ちゃん達はきつとあいつらに脅されてこんな事をしているんだ。」

「そつだ！そつだ！俺達はあの子達を信じているんだ！」

愛紗

「だ、だが仮にも皆は張三姉妹の歌を聴いてこんな所に閉じ込められたのであろう？」



「だけどきつと何かやむを得ない事があってこんな事をしたんだ！」

「俺達が信じてやらなきゃ誰が天和ちゃん達を信じるんだ！」

「だから頼む！ 天和ちゃん達を助けてくれよ！」

「この通りだ！」

牢屋に閉じ込められていた男達は愛紗達に土下座をする。

本郷猛

「……分かりました。貴方達を信じましょう。必ず張三姉妹を助けて見せます」

愛紗

「ご、ご主人様！？」

本郷猛

「この人達が嘘を言っているとは思えない。信じてみてもいいんじゃないのか？」

愛紗

「……分かりました。私達も信じます」

「あ、ありがとうございます！」

黄巾党の男達は本郷に頭を下げる。

本郷猛

「でもまずはあなた達を保護するのが先です。早くここからまし

「よう。」

「は、はいっ！」

黄巾党の男達は本郷に案内され、外に出た。

彼らを保護したものの、一応黄巾党の一味であった事からしばらくは義勇軍の管轄下に

おく事を本郷達は軍議で決めた。

そして夜、黄巾党のとの戦いに勝利し、無事趙雲を救出できたことを記念して

彼らは宴を始めようとしていた。

桃香

「え〜ととりあえず趙雲さんを救出できたことを記念して……乾杯です！」

全員

「かんぱ〜い！」

そして全員が瓶をもって乾杯しあうと、酒を飲み始める。（ただし鈴々、朱里、雛里に

は酒の代わりに桃の天然水を与える）

星

「うぬ上等な酒だな」

愛紗

「おいしいです。」

本郷猛

「それよりも君達のおかげで無事、趙雲を助けることができた。これも皆の協力があっての事だ。」

星

「こんな私を助けてくれて感謝しています。」

白蓮

「そつだもう無茶はしないでくれよ。」

星

「ああ分かった。」

本郷猛

「それよりも趙雲に頼みがある。」

星

「何でしょう?」

本郷猛

「この世界をゲルシヨッカーから守る為に是非、君の力を貸してほしい」

星

「……申し訳ないが、直ぐには返答できない。私は我が主に

相応しい

人間を探して、旅をしている最中なのでな。見つからなかった場合は貴方の家は貴方になりましょう。」

本郷猛

「そうか……なら仕方ないな。」

星

「申し訳ありません。」

本郷猛

「気にするな。それよりも……今日は無礼講だ。皆食事も楽しんでくれっ！」

本郷が合図すると次々と豪華な料理が運ばれてくる。どつやら、料理が得意な朱里

雛里が作ったようである。

鈴々

「すごく美味しそうなのだ！」

鈴々は思わず口からよだれを垂らす。

雛里

「あわわっ……皆さん。たくさん食べて下さいね」

朱里

「おかわりも一杯ありますよ」

そして、本郷が合図すると全員食事を開始する。

「いただきます！」

桃香

「この酢豚おいしいっ！」

星

「うぬ……このメンマもなかなかだな……」

鈴々

「（ガツガツガツッ！）この炒飯すごくいけるのだっ！」

愛紗

「これこれ皆。せっかく朱里、雛里が作ってくれたんだ。もっとゆつくり味わってだな」

鈴々

「はいなのだっ！」

そして宴が始まって、30分くらいした頃、義勇軍の兵が魏の使者を連れて入ってくる。

「お食事中、申し上げますっ！ 曹の旗を掲げた軍が現れ、その将が義勇軍の指揮官に挨拶がしたいとっ」

本郷猛

「んっ？ もしや曹操孟徳がきたのかっ？」

本郷は曹操の名に反応する。

曹操といえ、自分の知る限りでは世間では治世の能臣、乱世の奸雄とも呼ばれる

器量、能力、兵力、財力といった全てを兼ね揃えた官軍一の将だ。

トラゾウガメとの戦いで黄巾党を任せていた桃香達を助けた曹操が自分に会いたいと

言っているのだ。一体何のようなのか？

本郷猛

「会おう・・・曹操を呼んできてもらおうか？」

「はっ！」

魏の使者が外に出ようとしたその時、

???

「その必要はないわよ この軍の手際の良さから会見を断るはずがないと

思い、こちらからきかせてもらったわ」

声が出たのと同時に、3人の少女が入ってきた。

中央の少女は二人より背が低く、髑髏の髪留めをしていて、右側の少女はロングヘアー

、左目に眼帯、左側の少女は右目を髪で隠したショートヘアが特徴であった。

本郷はすぐに中央にいる少女が曹操だと悟る。

華琳

「我が名は曹操孟徳。黄巾党征伐の為、軍を率いてここにやってきたわ。  
そちらの将はいるかしら？」

桃香

「えっと……ご主人様が……」

華琳

「ご主人様あ？」

本郷猛

「初めましてになるな曹操。俺が義勇軍の指導者。本郷猛だ」

華琳

「本郷猛？……その名に聞き覚えがあるわね。確か、天の御遣い、とか言われている？」

本郷猛

「ああ……皆は俺をそう呼ぶ。それとありがとう。義勇軍を援護してくれて……」

華琳

「いいえ、自分達と同じ役目を持った人間を助けるのは当然の事よ。それよりも」

あなたの噂は聞いているわよ」

本郷猛

「噂？　どんな・・・」

華琳

「なんでも素手で剣を持っていた黄巾党を撃退したとか、あの時の戦いで突如戦場に現れた化け物を追い払ったとかよ」

本郷猛

「ほお？　他の国の人間にもそんな噂が流れているのか？」

そして曹操は今度は本郷の顔をじっと見つめる。

本郷猛

「俺の顔に何かついてしているのか？」

華琳

「へえ〜・・・貴方結構凜凜しい顔をしているのね。平和の為に戦う者の顔よ。」

民達が貴方を慕うのも理解できるわ。まあいいわ　で？貴方が軍を率いているの？」

本郷猛

「いや正確には義勇軍を指導しているだけで、劉備玄徳の考えに賛同し協力しているんだ」

華琳

「なるほど、義勇軍の真の統率者は貴方ね。では劉備とやらに問うわ。貴方は何の為に」



黄巾党と戦うの?」

桃香

「わ、私は……理不尽な暴力を振るう人達から平和を望んでいる人々を守りたい。それだけです。」

華琳

「そう……なら劉備に本郷。黄巾党壊滅の為にいまは私に力を貸しなさい。」

それがこの戦いを終わらせる近道よ。違つかしら?」

本郷猛

「確かにそうだな。」

華琳

「ああそうだ。本郷、貴方に聞くことがあるわ。」

本郷猛

「何だ?」

華琳

「黄巾党に味方し、義勇軍を襲っていた青い覆面の連中は何者なの? 我が軍がてこずったんだからただ者じゃないことは分かるわこの通り、私の可愛い部下も奴らとの戦いで左目を失ったわ」

華琳は右側にいる夏侯惇（春蘭）の方をみる。曹操の配下と思われるその少女は左眼に眼

帯をしていた。

本郷猛

「まさかその眼は……」

春蘭

「ああ……奴らが撃ってきた矢が左眼に命中して、傷を負わされたんだ。」

まあ、そいつは私の妹が倒して、見えなくなった左目は引っこ抜いて喰ったがな

……

秋蘭

「姉者！」

春蘭

「なんだ秋蘭？」

秋蘭

「んっ……」

春蘭は妹秋蘭の指さす方をみる。本郷を除く全員が思わず、吐きそうなる素振りを

見せる。食事の最中に「左目を喰った」なんていえば、誰だっけうっかり想像してしま

しまい、吐く素振りをみせるのも当然だ。

華琳

「貴方ねえ……食事の最中にそんな事をいうんじゃないわよ」

春蘭

「しゅ、しゅいません……（ガクッ）」

本郷猛

「はははっ！ 気にするな。それにしてもゲルシヨッカーと戦ってよく無事だったな。」

さすがは曹操が率いる魏軍だ」

華琳

「げ、げるしょっかー？ それが奴らの名前なの？」

本郷猛

「そつだ……奴らは黄巾党とは比べ物にならないくらい手強いぞ」

華琳

「そつなの？」

本郷猛

「奴らについては、今はまだ詳しく説明できない。だが時が来たら全てを話す」

華琳

「分かったわ」

本郷猛

「ところで曹操。ここに来た目的は他にあるんじゃないのか？ ただ挨拶しに来たとは思えない」

華琳

「さすがは天の御遣いね。その通りよ。実はね黄巾党の首領「張三姉妹」の居場所が分かったのよ。その事を義勇軍の貴方達に教えに来たのよ」

一同

「ええっ!？」

一同は驚く。曹操から張三姉妹の居場所が分かったといったのだから。

愛紗

「黄巾党の首領の居場所が分かったのと言うのは本当ですか!」

華琳

「ええ本当よ。……机を借りてもいいかしら?」

桃香

「ええ、いいですよ」

華琳

「秋蘭」

秋蘭

「はっ!」

華琳に呼ばれた秋蘭は持っていた地図らしき物を机に置き、拡げる。

そこには張三姉妹がいる地点とそれを護るかのように大量の敵軍らしき

物が記されていた。

白蓮

「なっ!？ こ、これは!？」

星

「ほお、まだこんなに敵がいたんですか？」

秋蘭

「いや、残っていたというより増え続けているんだ」

鈴々

「どづいことなのだ？」

華琳

「黄巾党の首領「張三姉妹」は野外舞台で、常に歌を歌って兵の士気を高めているだけじゃなくて、彼女達に好意がある者がその歌を聴いた途端、おかしくなつて次々に黄巾党に身をとおじているのよ」

本郷達は華琳達の話聞いて、趙雲を救った戦いで捕縛、いや保護した黄巾党兵がいつて

いた事が嘘では無いことを知る。

彼女達の言っていることが本当なら、張三姉妹の歌を聴いた人々は催眠状態になり、

牢屋に入れられた後、一度正気に戻ってから、もう一度催眠をかけ

られ、凶悪な黄巾党兵

になったと想定できる。

桃香

「そ、そんなじゃあ今まで戦ってきた黄巾党の人達もただ操られてあんな事をしていたというんですか!？」

桃香はこの事実に驚く。

無理も無い。今まで戦っていた黄巾党兵が実はただ操られていただけと知ったのだから。

愛紗

「くっ！ 操られていただけなら、迂闊には手が出せませんね」

春蘭

「だがこのままほおっておけば、奴らはまた近辺の村を襲うぞ。手が出せないといっている場合では無い」

桃香

「で、でも黄巾党の人達はただ操られているだけで、自分の意思で悪いことをしているんじゃないんですよね？ だったら黄巾党の人達も助けるべきじゃないですか？」

華琳

「あなたねえ・・・そんな甘い考えでは、誰も守れないわよ」

本郷猛

「いや劉備の言うとおりだ」

一同は本郷に注目する。

華琳

「ここで黄巾党を倒さないと、奴らは好き勝手に暴れ回るのよ？  
それを分かっているの？」

本郷猛

「確かに奴らをほっておくわけにはいかない。だがもし、我々の軍  
の中にも、魏の軍の中にも「張三姉妹」に好意を持っている人間が  
いたらどうなる？」

一同

「あつ！」

本郷の言葉に皆注目する。もしも本当に本郷の言つとおり、味方  
の中にも張三姉妹に好意

を持っている人間がいたら……。

本郷猛

「張三姉妹の歌を聞いた途端、黄巾党に身をとおじて、かえって敵  
を増やす結果になりかねん」

華琳

「じゃあどうしろっていうのよ？」

本郷猛

「うん朱里、雛里なにかいい策はないか？」

朱里

「そうですね・・・黄巾党の人達を傷つけず、なおかつ敵を増やさずに張三姉妹だけを捕らえる方法は・・・」

雛里

「ええと・・・つええと・・・」

朱里、雛里が数秒首を加えながら考えていたその時、何かを思いついたかのように

朱里、雛里

「「ひらめきました!」」

本郷猛

「何か思いついたのか?」

朱里

「はいっ! 愛紗さん、鈴々ちゃんは黄色い布をできるだけ多く集めて下さい」

愛紗

「分かった」

鈴々

「任せろなのだ!」

雛里

「ご主人様、趙雲さん、公孫贇さんは黄巾党兵が着ていたのと同じ鎧をできるだけ多く用意して下さい」



本郷猛

「分かった」

星

「おやすいご用だ」

白蓮

「できるだけ多くだな？」

華琳

「まさか……」

華琳達は朱里、雛里が何を考えているのか分かったのかあえて黙っていた。

そして義勇軍一の天才軍師で有名な諸葛亮と鳳統がどんな策を思いついたのか

が気になり、あえて見守ることにした。

数十分後、黄色い布と、黄巾党兵が着ていた鎧が集まると朱里、雛里は

今回の策についてを話し始めた。

本郷猛

「さあ、鎧と黄色い布を集めたぞ。」

愛紗

「朱里、雛里……もしかしてお前達の考えていることは……」

朱里

「はいつ・・・黄巾党の兵に変装して、こっそり敵の陣中に入り込んで」

雛里

「黄巾党の首領「張三姉妹」だけを押さえる作戦です」

華琳

「なるほど・・・黄巾党兵に変装すれば、堂々と気づかれずに敵の中に入り込めるし  
余計な犠牲を出さなくて済むわね」

桃香

「そうすれば、操られた人々も解放できますね」

朱里

「ですが・・・大勢で行くと、かえって目立つ恐れがありますのでここは少人数で  
いった方がいいです。」

星

「では私と・・・」

本郷猛

「俺がいく」

春蘭、秋蘭

「「何っ!?!」」

春蘭、秋蘭は驚く。仮にも義勇軍を指導している立場の人間が自ら敵の陣中に入り込むと

いつているのだから。

春蘭

「貴様正気か？ 仮にも貴様は義勇軍を指導している立場だろ！？  
貴様がいないと  
義勇軍はどうなる！？」

本郷猛

「心配ないさ。こっちは関羽、張飛といった將軍がいる。俺の留守の間ぐらい  
義勇軍を指揮できるさ」

春蘭

「そ、そうなのか？」

愛紗

「ええっ……」

鈴々

「お兄ちゃんが留守の間は鈴々達に義勇軍は任せるのだ！」

華琳は二人の発言から、この本郷がどれほど頼られて、信頼されている人間か理解できた。

華琳

「なるほど……いいわ。その策に乗ってあげる。」

本郷猛

「この策に賛成してくれて感謝する曹操。そうだ俺達に力を貸して欲しいっていつていたな？ できれば、君の後ろにいる二人の將軍の力を貸して欲しいのだが・・・」

華琳

「いいわよ」

春蘭

「か、華琳様っ!？」

秋蘭

「し、しかし・・・華琳様以外の人間の指示を受けるのはちよつと抵抗が・・・」

華琳

「今は黄巾党を壊滅させるのが先決よ。だったら義勇軍と手を組むべきだけではなくてこちらの指導者の指示を受けるのも当然ではなくて?」

春蘭

「うっ・・・分かりました」

本郷猛

「よし、作戦は三日後に決行だ！ この地点まで俺、趙雲、そしてそちらの武将二人と人数で敵の陣地に入り込み、『張三姉妹』を押さえるぞ!」

一同

「はいっ!」

一同は三日後に控えた作戦に備え、準備を始めていた頃、一人の男、五斗米道の

医者「華陀」が義勇軍のいる陣地まで向かっている最中であつた。

華陀

「五斗米道の情報で曹操率いる魏軍が義勇軍のいる陣地まで向かつたというが、果たして

曹操は話を聞き入れてくれるか？ あの書は絶対に人間が持つてはいけない。あの黄巾党の首領「張三姉妹」が持つている「太平要術」の書だけはっ！」

どうやらこの華陀は自分の所属する「五斗米道」から何か指令を受けて、「太平要術」の書

を探しているようである。

果たして「太平要術」の書とは一体何なのか？

黄巾党壊滅！ 隠された真実 中編 その2（後書き）

次回、華陀大ピンチ？

黄巾党壊滅！ 隠された真実 後編 その1（前書き）

おまたせしました！ 今回華陀が登場しますが、あることが原因で華琳に殺されかけるハメになります。果たして何があったのか！  
？ それでは本文をどうぞ！

黄巾党壊滅！ 隠された真実 後編 その1

その頃、ゲルシヨツカー三国時代本部では首領がカエルトンボーになぜ逃げ帰ってきたのかを問い詰めている最中であった。

(ピイン・・・ピイン・・・ピイン)

ゲルシヨツカー首領の声

「カエルトンボー！何だあの様はっ！？ 戦いに負けただけでなく、黄

巾党兵にする予定の人間もライダーに奪われたではないかっ！」

カエルトンボー

「そ、それは私の任務はあくまで敵前逃亡を図った黄巾党兵を皆殺しにすることであってライダーと戦う事までは想定していませんでしたので・・・」

ゲルシヨツカー首領の声

「黙れ！ ゲルシヨツカーに敗北は許されん！ よって貴様は即刻死刑だ！」

カエルトンボー

「ひええっ！」

その時、暗黒魔術師はカエルトンボーを庇うように割って入ってきた。

暗黒魔術師



「落ち着いて下さい首領。これはカエルトンボーを弁護するというわけではありませんがライダーが彼らを追跡する事は我々も想定していません。それにもはや捕らえた彼らをあそこに閉じ込めておくこと自体、意味がなくなりました。」

ゲルシヨツカー首領の声

「何ッ!? どういうことだ!？」

暗黒魔術師

「実はですね、我々が陰で操っていた「張三姉妹」の居場所が魏の連中に

ばれてしまったのですよ。戦闘員の報告によれば、彼女達は本郷猛にその事を  
伝えたそうです。」

ゲルシヨツカー首領の声

「奴らの居場所が本郷にばれただっ!?!つまり本郷は

「張三姉妹」の元に向かうとでもいうのか」

暗黒魔術師

「はいっ・・・もし彼女達が取り押さえられる様なことがあれば、彼女達に渡した「太平要術」の書が本郷に処分される恐れがあります。」

あの書がなくなると、貴方に献上する予定の例のあれが作れません。回収の為にカエルトンボーの力が必要なのです。ですから、カエルトンボーには寛大な処置をお願いします。」

ゲルシヨツカー首領の声

「そうか・・・ならカエルトンボー! 今回のことは  
水に流す代わりに暗黒魔術師が「太平要術」の書を回収

するのを邪魔されないように護衛するのだ!」

トンボガエル

「アゝブラゝ! 了解しました」

その頃本郷達は黄巾党の首領「張三姉妹」を取り押さえるべく、敵のいる拠点まで

向かう準備をしていた時、鈴々の様子がおかしくなっていた。

鈴々

「うっうっ……」

鈴々の様子がおかしいことにそばにいた朱里、雛里が気づく。

朱里

「どうしたんですか!? 鈴々ちゃん!」

雛里

「大丈夫ですか!?!」

鈴々

「お……お腹……痛いのだ……」

朱里

「えっ? お腹が? でしたら厠にいけば……」

鈴々

「そんなんじゃないくて……お腹がきりきりして……凄く痛くて……」

うっうっうっ！」

鈴々はそういうと地面にそのまま倒れてしまった。

朱里

「り、鈴々ちゃん!？」

雛里

「あわわっ!」

二人の軍師は目の前で鈴々が倒れた事に動揺した。

朱里

「だ、誰か来て下さい! 鈴々ちゃんが……」

その時、ちょうど水を飲みに来ていた本郷は朱里の音がするので何事かと

思い、すぐに朱里の音がした方に行く。

本郷猛

「どうした朱里? そんなに慌てて……」

朱里

「ご主人様! 鈴々ちゃんが……」

本郷は地面に倒れている鈴々を見て状況を把握すると鈴々に呼びかける。

本郷猛



本郷は鈴々が指さす方を触ってみる。

鈴々

「うっっ！」

本郷は鈴々が痛がる部分を触り、鈴々が苦しんでいる原因は何か理解する。

本郷猛

「これは……虫垂炎の症状だ！」

その時、雛里が桃香、愛紗、星などを連れて入ってきた。

雛里

「ご主人様！ 桃香様達をお連れしました！」

そして鈴々に真っ先に愛紗が駆けつけた。

愛紗

「鈴々しっかりしろ！」

鈴々

「あ……愛紗……」

桃香

「ご主人様！ 鈴々ちゃん一体どうしたんですか？」

本郷猛

「俺は医師ではないから推測にすぎないが、直触してみた結果、今

鈴々は急性虫垂炎になったんだと思う。」

星

「本郷殿 急性虫垂炎とはどのような病気ですか？」

本郷猛

「ああ急性虫垂炎とは何らかの原因で虫垂と呼ばれる臓器が閉塞し、内部で細菌が増殖して感染を起こす病気だ。炎症が進行すると虫垂は壊死を起こして穿孔し、膿汁や腸液が腹腔内へ流れ出して腹膜炎を起こす。重症化すると死ぬこともある。」

愛紗

「ええっ！？ 死ぬ！？」

愛紗は本郷の説明で、妹鈴々が今命に関わる病気になっている事を理解した。

桃香

「そ、そんなっ！ 鈴々ちゃんを治す方法はないんですか？」

本郷猛

「急性虫垂炎の治療には抗菌薬を投与するか、もしくは手術で炎症を起こした虫垂を切除するしかないが、いにくくここには抗菌薬も、鈴々を手術する施設もない。医者呼びにいかせた朱里が早く医者連れて戻ってくるのをまつしかない。」

その時、朱里が本部に戻ってきた。見慣れない男を連れて・・・

朱里

「ご主人様！お医者さんをお連れしました」

華陀

「どこにいるんだ患者は？」

そこには本郷よりも若い青年がいた。赤い髪が特徴で

まるでヒーローの様な雰囲気がある男だ。

本郷猛

「この子だ。今調べてみたが、鈴々は急性虫垂炎という病気になっているかもしれない」

華陀

「急性虫垂炎だと？」

目の前の医者は患者の病名を聞いて、どんな病気であるかを理解する。

本郷猛

「あいにく俺は病気の治療は専門外なんだ。だから頼む鈴々を治してくれ」

華陀

「ああっ！任せておけっ！」

そしてその青年は鈴々の腹部を直触し始めた。

華陀

「痛いのはここか？」





一同が驚いている中、青年は仕上げにこう言い始めた。

華陀

「うおおおおおおおおおっ！ 病魔退散！！！」

すると光が鈴々から離れ、上に上がったと思っただらやがてその光も消えてしまう。

それと同時に鈴々も起き上がる。

鈴々

「あっ あれ・・・？ もうお腹痛くないのだ！」

桃香

「もう大丈夫なのですか！」

鈴々

「うんっ！ チクツとしてピキューンってなって ハッ！と気づいたらもう

治っていたのだ！」

本郷猛

「信じられんな・・・俺の国では手術が必要な急性虫垂炎を鍼で治すなんて・・・」

華陀

「ああっ・・・とりあえず痛くないならもう大丈夫だ」

すると桃香、愛紗はその男の前に立つと礼を言い始める。

愛紗

「妹が苦しんでいたところを救っていただきありがとうございます。」

「

桃香

「このご恩は決して忘れません。」

華陀

「医者は病に苦しむ者を救うのが使命 礼には及ばない。  
ところでここはもしかや、義勇軍の本拠地か？」

愛紗

「ええ・・・申し遅れましたが私は関羽」

鈴々

「鈴々は鈴々なのだ」

桃香

「劉備玄德です。」

朱里

「私は諸葛亮孔明と申します」

雛里

「私は鳳統土元です。」

星

「趙雲子龍だ」

本郷猛

「本郷猛だ」

華陀

「本郷？ そうかあんたが、天の御遣い、か 俺の名は華陀。旅の途中でここに来た医者だ」

その名に本郷、そして朱里が反応する。

朱里

「華陀？ もしかして五斗米道の・・・」

朱里が何か言いかけたとき

華陀

「ち・があああああう！ 五斗米道ではなく、ごっどう えい  
どおおおおおだ！

これは大事な事なので正しい発音を心がけてくれ」

朱里

「は、はいっ！ 気をつけます！」

本郷猛

「それでそのゴッドヴェイダーとは何なんだ？」

本郷が正しい発音をしたとき、華陀が強く反応する。

華陀

「おおっ！ あんたいい発音じゃないか！」

本郷猛

「そ、そうか？ それよりも朱里、ゴッドベイドーとは？」

朱里

「は、はい……じつどう、えいどおおー！とは漢中を中心に布教している道教の教団で貧しい者に施しや病に苦しむ者を治したりという活動をしているんです」

雛里

「私達の聞いたところではその、じつどう、えいどおおー！若干恥ずかしそうに）  
中でも有名な名医らしいです」

愛紗

「ほお……じつどう、えいどおおーの名医かー！」

桃香

「じつどう、えいどおおーとは凄いですね」

鈴々

「じつどう、えいどおおは凄いところなのだ！」

彼女達が騒いでいる中、本郷だけは何か考えている最中であった。

本郷猛

「（華陀か……三国志においても有名な医者だ……だが彼は確か

曹操孟徳を怒らせてしまった為に……）」

未来人である本郷猛は華陀がどういう最後を遂げたのか知っており一瞬、その事を伝えようとしたが、勝手に歴史を変えていいのかと考え、思わず躊躇してしまう。しかし、鈴々を助けてくれた恩があるので

このまま黙っていることができず、後で助言することにした。

華陀

「どうした？ 何をそんなに深く考え込んでいるんだ？」

華陀は思わず本郷の方を見る。

本郷猛

「いや、何でもない。それよりもゴッドヴェイダーの医者なぜ旅をしているんだ？」

華陀

「ああ・・・俺は教団から命を受けて『太平要術』の書を探す為、旅をしているんだ」

本郷猛

「太平要術？ 何だそれは？」

華陀

「ああ太平要術というのはな・・・」

華陀は皆にいう。『太平要術』の書とは本自体が妖力をもつ書物であること。

妖力があるが故に少しばかり妖術の心得があれば様々な術が仕える様になること。

その妖力の源は苦しむ民の怨嗟の声で、乱れた世を恨み平安を希う力ほど強いもの

がないこと。 本来は苦しむ民達を救う為に生み出された書であったが、いつしか

意思を持ったかのごとく妖力を蓄えること自体を目的にするようになったこと。

もし少しでも悪しき心を持つ人間が持てば、心をくすぐられ妖術で世を混乱する

ように仕向けるようになった事を話した。

星

「ほう……。そうすれば民の間に怨嗟の聲が高まり太平要術はより多くの妖力を蓄えられる事になるということか」

本郷猛

「そんな恐ろしい書を探しているのか？」

華陀

「ああ実はな、その『太平要術』の書は黄巾党の首領『張三姉妹』の次女、張宝が持っている事が分かったんだ。」

一同

「ええっ!?!」

一同は驚く。華陀のいうことが真実ならば、張三姉妹の歌を聴いた者がおか

しくなったのも全て『太平要術』の書の妖術で催眠状態にされたことが原因

であると分かった。

その後に、ゲルショツカーの怪人によって催眠状態にされ、恐るべき黄巾党

兵になったのであろう。

愛紗

「それは本当なのですか!?!」

華陀

「ああ・・・後、義勇軍にくるもの俺の目的の一つだったんだ。

皆に『太平要術』の書のことを話して、その危険性を説いて、入手に協力し

てもらったつもりだったんだ」

本郷猛

「分かった・・・「張三姉妹」を捕らえた後に『太平要術』の書は君に渡す」

華陀

「理解してくれた事に感謝する」

その時、星が本郷に話しかけてきた。

星

「本郷殿。そろそろ約束の時間ですぞ。」

本郷猛

「ああそつか……なら直ぐに準備をしないとな」

華陀

「ん？ どこにいくんだ？」

本郷猛

「これから直ぐ、黄巾党を壊滅させる為に、彼らの仲間になりすまして

奴らの本拠地に潜入する。この作戦に魏の將軍達も手を貸してくれる事に

なったんだ。これから直ぐにいかないか……」

華陀

「魏？ 曹操の国のことか？」

華陀は魏の名前に反応し本郷にこう聞いてきた。

本郷猛

「そつだ。曹操を知っているのか？」

華陀



「ああ・・・曹操は『太平要術』を『張三姉妹』から奪おうとしていると聞いてな。  
俺もこれからすぐに曹操の元に行き、『太平要術』の恐ろしさを説いて手に入れる  
を諦めさせなければならぬんだ」

本郷猛

「そうか・・・では鈴々を治してくれたお礼に一つ助言をしてお  
く」

華陀

「何だ？」

本郷猛

「曹操孟徳を怒らせるな」

華陀

「？ 分かった」

華陀は本郷の言った言葉の意味がよく分からないでいた。この言葉が  
自分にとって重要な意味を持つと知らずに・・・。

数時間後、黄巾党兵に変装した本郷、星は春蘭、秋蘭が待っている  
場所までいった。

そこには自分達と同じく黄巾党兵に変装した春蘭、秋蘭があり、春蘭

が彼らが遅れて来たことにご立腹のようだ。

春蘭

「遅いぞ！ 何をしていたのだ！」

本郷猛

「すまない・・・実は張飛が急な病で倒れて付き添っていたんだ。」

春蘭

「何っ？ 張飛が・・・大丈夫なのか？」

星

「問題ない。諸葛亮がすぐに医者を連れてきてくれたからな。」

秋蘭

「そうか・・・それはよかった」

本郷猛

「では行くぞ！ 黄巾党を殲滅する為に！」

3人

「おおっ！」

本郷はそういうと4人は黄巾党のいる本拠地まで赴いた。

全ては罪なき人達を護る為・・・操られている黄巾党の人達を

解放する為・・・彼らはそう考えながら敵の本拠地まで赴いた。

一方その頃、曹操の魏軍がいる本拠地まで赴いた華陀は曹操に会つと直ぐに、『太平要術』の書の恐ろしさを説く。

曹操は『太平要術』の書を理解し、入手を諦めた。

これで万事解決かと思われたが……

(バン！)

いきなり、激しい音がする。その音がした方向には、慌てて外に飛び出し、

尻餅をついている華陀と怒り心頭になり、自らの武器である大鎌「絶」

を華陀に向けている曹操こと華琳の姿があつた。

華琳

「あんたあああつ！ 良くも私に辱めの言葉を聞かせたわね！」

華陀

「だ、だから違つといっているだろう！？ これはあくまで治療であつて

別に変な下心があるわけでは……！！」

華琳

「問答無用おおおおおおつ！」

怒りの余り、華琳には華陀の弁解の言葉が聞こえていない。

華陀

「ひいひいっ！（本郷猛の言っていた『曹操孟徳を怒らせるな』ってこういう意味だったのか！？）」

「曹操孟徳を怒らせるな」それは怒らせたなら、命が無いという意味であつたのだ。

華陀は本郷の言葉の意味に今気づいたが、時既に遅かつた。

しかし何故、この様なことになつたのか？

話は数分前にのぼる。

そこには華琳に『太平要術』の書の恐ろしさを説いている華陀の姿があつた。

華陀

「……というわけなんだ」

華琳

「驚いたわ……『太平要術』がそんなに危険な書だつたなんて……  
分かつたわ華陀。『太平要術』を手に入れるのはやめるわ」

華陀

「理解してくれたことに感謝する。しかし何故『太平要術』の書を手に入れようとしたんだ？」

華琳

「実はねずいぶん前から体の調子が良くないのよ。いろんな薬を試したけどどれも効果がなくて……。それで『太平要術』の事を聞いて……」

華陀

「黄巾党を討伐したついでに『太平要術』の妖術を試してみる気になったのか。だが見たところ重い病を患っているとは思えないが……」

医者である華陀は華琳の顔色を見たが別に異常が無いように思えたが華琳は

言いづらそうにこつこつと呟く。

華琳

「……………な、ないのよ……アレが」

華陀

「え？アレ？……ああ！心配するな。それは病では無くてむしろ

おめでたい事で」

華琳

「違うわ！女以外に興味が無い私が孕むわけないでしょう！」

華陀

「じゃあ何だ？俺は医者だ。恥ずかしがらずにいつてみる。力になるぞ」

華琳

「だ、だからその……えっと……お通じが……」

そう聞いた華陀は華琳が何で悩んでいるのか理解したのか手をポンと叩いたと同時にこう言う。

華陀

「ああ つまり便秘か！」

華琳

「大きな声で叫ばないでよ！ 恥ずかしいじゃない！」

華陀

「でもたかが便秘ぐらいで大げさな……」

華琳

「だから大きな声で言わないで！ もう一ヶ月も前からアレが無いから  
食は進まない！ 肌は荒れる！ イライラして部下に当たる！ 私にとつて結構問題なのよ！」

華陀は華琳が便秘でどれだけ苦しんでいるのか理解し、こう言う。

華陀

「そうか……相当重症だな。 っつそ手術で腹を裂いて溜まってる物を出せばすっきりするが……」

華琳

「馬鹿な事いわないで！ 死ぬじゃない！」

どうやら華琳は今まで手術という治療を受けたことがなく、手術が  
どういう治

療なのか分かっていないようであった。

華陀

「それは問題ない！ 俺の作った秘薬を服用すればあつとい  
う間に眠り・・・その間は腹を裂かれても何も感じない 局  
部をくすぐりその刺激で便を外に押し出すという治療法だ！  
眠りから覚めたら腹はすつきり！というわけだ！」

華琳

「何か怪しいわね・・・本当にそれで治るの？」

華陀

「・・・・・・・・・・・・・・・・大丈夫だ！ 治る！」

華琳

「ちよつと！ 今の間は何っ！？ 今の間は！」

華陀

「まあ・・・俺の手に触れられるのが嫌であれば 他にも治療法  
があるが・・・」

華琳

「なんだ・・・まだあつたのね それはどんな治療法なの？」

華陀

「ああ・・・それはな・・・」

華陀は華琳にその治療法について説明し始めた。しかしその内容は文章では

表現できないほど、恥ずかしい内容であり、その説明を聞いていた華琳の顔も

だんだん険しくなっていた。

華陀

「……最後にこの鍼をそこに刺し、気を流し込めば……」

(ブチッ！)

華陀は説明し終えようとしたその時、堪忍袋の緒が切れた華琳が突然立ち上がり

怒りの形相で大鎌「絶」を持って華陀に斬りかかろうとしたのだ。

華琳

「そんなことできるかーッ！！！」

とこんな事が数分前にあっただのである。

そして尻餅をついた華陀は華琳にこう言い始めた。

華陀

「落ち着け曹操！ 話し合えば分かる。とりあえず今言った治療が一番安全であって

……」



華琳

「うるさいっ！ 私を馬鹿にしたアンタだけはこの手で斬る！ 覚悟しなさい！」

そして華琳は「絶」を華陀に振り下ろした。

華琳

「死になさい！」

華陀

「わっ！」

(ドカツ！)

華陀は間一髪華琳の攻撃を避ける。直撃していたら命は無かつたろう。

これ以上この場にいたら命が無いと悟った華陀はこの場から逃げることにした。

華琳の「便秘」は医者としてほっておけないが、ここで

殺されるわけにはいかない。

華陀

「くっ！ 『太平要術』の書を封印する為、今ここで死ぬわけにはいかない！」

華陀は絶がささっているうちにその場から素早く離れて本郷達が向かっている

黄巾党の本拠地へと赴いた。

華琳

「あつ！ ちょ、ちょっと！」

華琳は急いで、絶を地面から抜こうとしたが、かなり深く

刺さっている為、なかなか抜けない。その為、だんだん姿が

小さくなる華陀を見つめるしかなかった。

華琳

「待ちなさい華陀！ ええいっ！ 次その顔を見たら・・・  
私があんたの首をはねるから覚えていなさいよ！」

華琳が華陀にこう叫んでいた頃、本郷達は黄巾党の本拠地に到着し、

黄巾党の首領「張三姉妹」を捕らえるべく、行動を開始した。

つづく

黄巾党壊滅！ 隠された真実 後編 その1（後書き）

次回、暗黒魔術師が遂に桃香達の前に姿を現します。

暗黒魔術師

「ふふふ……『太平要術』の書を封印させたりはしませんよ」

**黄巾党壊滅！ 隠された真実 後編 その2（前書き）**

今回、暗黒魔術師が桃香達の前に姿を現し、そしてあの華麗なる蝶々が再び

ライダーのピンチに駆けつけます。

黄巾党壊滅！ 隠された真実 後編 その2

華陀が華琳から命かながら逃げ延びた頃、黄巾党兵に変装した

本郷、星、春蘭、秋蘭は目的地である黄巾党の本拠地がある荒野にたどり

着いていた。

そこには黄巾党兵が建てたと思われる天幕が多くあり、黄巾党である事を示す為

かてつぺんに黄色い布が目印になっていた。

本郷猛

「ついに辿り着いたな」

星

「では早速『張三姉妹』がどこにいるのか探しましょう」

春蘭

「分かった」

秋蘭

「心得た」

4人は黄巾党兵に怪しまれないようにしながら行動を開始した。

周りにいる黄巾党兵は、食事をしている最中であり、本郷は次にど

こかを襲

うときに備えての英気を養っている悟る。

黄巾党兵がこれ以上罪を犯す前になんとしても張三姉妹、そして張宝が持つて

いる『太平要術』の書を取り押さえなければならない。

しばらく歩いていた彼らであるが、やがて丘の上にある下の天幕よりも巨大で

豪華な作りである天幕を見つけた。

春蘭

「……………いかにも『ここにいます』って感じだな」

秋蘭

「ああ、呆れるほど豪華な作りだな姉者」

星

「本郷殿、ここでしょうか？」

本郷猛

「ああ間違いない。『張三姉妹』は恐らくここにいる！」

そして四人はその天幕に行こうとしたとき、一人の黄

巾党兵が話しかけてきた。

「おいお前達……」

(ぎくっ！)

本郷以外の三人はばれたのかと思い、思わず硬直してしまう。

思わず、振り返ると話しかけてきたのは隊長格の男で黒いひげ

が特徴であった。

いや、それよりも本郷は彼の目に注目する。やはり操られている為か

、彼の目には生気が感じられなかったのだ。そんなときその男はこう

言ってきた。

「飯喰わねえのか？ 後数刻したら呉の連中を襲撃するのによ」

どうやら、ばれてはいないようだが、ここで3人が返事を

するわけにはいかなかった。

なぜなら黄巾党に『張三姉妹』以外の女はおらず、もし

ここで返事をしたらばれてしまう。その時本郷は

とっさにこう返事する。

本郷猛

「申し訳ありません。『張角様』に報告しなければ

ばならないことができて……」

「……『張角様』にか？」

本郷猛

「……はいっ」

「……分かった 直ぐに戻って飯を食えよ」

本郷猛

「分かりました」

本郷達はそういうとその天幕の方へ向かう。

しかしこの時、彼らは気づいていない。本郷があ

る重大なミスを犯したことに……

そして彼らは巨大な天幕の中に入るが、そこには誰

もいなかった。

春蘭

「いないぞっ！ どういうことだ!？」

秋蘭

「ここには『張三姉妹』がいなかったのか？」

本郷猛

「いや、舞台上で歌を歌う為にもここにいなければならぬはず。



間違いなくここにいるはずだ」

本郷はそういつと天幕の中にある生活家具を調べ出す。

すると、本棚の中に不自然な本が3つあるのを見つけた。

本郷猛

「……………これは!？」

春蘭

「その本がどうかしたのか？」

星

「一見不自然な所はないと思えますが……………」

本郷猛

「いや……………これは本じゃない」

秋蘭

「本じゃない？ どういうことだ」

本郷猛

「まあ、見ている……………」

本郷はそういつと三つの書物を同時に奥の方に押し出す。

すると、突如机が動きだし、下から地下に続くと思われる

階段が現れたのである。

春蘭

「こ、これは!？」

本郷猛

「やはり、この階段を出す為の仕掛けだったか……行くぞ」

星

「分かりました」

4人は本郷の合図で下へと降りていく。その時春蘭が本郷にこう問  
いかけてきた。

春蘭

「しかし、何故分かったのだ？ その本が実は仕掛けだって」

本郷猛

「なに、簡単なことだ。あの本は他の本に比べて埃を  
かぶっていないかったし書名が書かれていない本を同じ箇  
所におくにはきつと何か理由があるんじゃないかと思っ  
たのさ。しかもさつき、本を読むわけでもなく誰かが触  
った痕跡もあつたしな」

星

「さすがは『天の御遣い様』ですな。そこまで推測されるとは」

本郷猛

「あ、ああ……まあな。ん？ 止まれ……」

本郷は突如3人を止めるとその先を指さす。そこには扉があり

奥の光が漏れていたのだ。

本郷猛

「ここか……」

そして4人はその部屋の中に入る。

部屋の中に入った本郷を除く3人は驚愕した。その部屋には

鷲に蛇が絡みついた紋章を中心に見たこともない道具や、

武器が置かれ、そして何やら不

気味な音を発する物があったのだ。

春蘭

「な、なんだ!? ここはっ!」

秋蘭

「見たこともない道具ばかりだ! それにこれは  
もしかや武器か?」

本郷猛

「止める触るな! これは恐らくゲルシヨツカーのアジトだ  
それよりもあれを見る!」

3人は本郷が指さす方をみるとそこには黄色い外套を纏い、そ  
して黄色い覆面をした不気味な3人が座っていたのだ。

正体を隠しているつもりであろうが、本郷はこの3人が黄

巾党の首領『張三姉妹』だと悟る。

ついに『張三姉妹』の元へと辿り着いた四人は鎧、黄色

の布を脱ぎ捨て、正体を現すと

本郷はこういう。

本郷猛

「黄巾党の首領『張三姉妹』は君達だなっ！」

星

「我々は義勇軍だ！ 観念しろっ！ もう逃げ道はない！」

春蘭

「それに手下どもがここまで来るのに時間がかかるしなっ！」

秋蘭

「おとなしく投降すれば、命は奪わないと我らが主は仰っていた！  
もし抵抗するならば、ここで切り捨てる！」

4人は戦闘態勢に移る。しかし『張三姉妹』は逃げるどころが、

立ち上がるとこちらに襲いかかってきたのである。本郷達は彼女

達の攻撃をかわすと、本郷は

一人の覆面をはぎ取った。

(バサッ！)

その覆面の下からは桃色の髪、そして黄巾党の首領であることを表すのか黄色いリボンをした桃香と似たような雰囲気がある少女が顔を見せた。

天和

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

本郷猛

「正体を見せたな・・・君が張角いや・・・天和だな？ もう馬鹿な事はやめる君達がゲルシヨツカーに脅されてこんな事をしているのは分かってるんだ」

本郷は説得しようとしたが、3人は本郷の言葉に耳を貸そうとしない。

よく見ると、天和の様子がおかしいことに本郷が気づく。

本郷猛

「んっ!?!」

星

「どうしました本郷殿？」

本郷猛

「あの子の目をよく見る！」

3人は本郷に言われて天和の目をみた。するとその目には光が宿っておらずおぼろげとしていたのだ。

秋蘭

「まさかこいつら？」

本郷猛

「ああ、この子達も何者かに操られている。倒すわけにはいかない」

春蘭

「ならどうしろと？」

本郷猛

「俺に任せろ！」

本郷は3人に迫り攻撃を避けると、それぞれの腹部に一撃を入れ、気絶させる。

本郷猛

「トオッ！ フンッ！ ハアッ！」

（ドコッ！）

本郷は三人を殺さないように手加減をする。

気絶させると、春蘭、秋蘭が残り二人の覆面をはぎ取る。

(シュッ！)

一人の覆面をはぎ取ると、その下から紫色の髪、眼鏡が特徴でかしこそうな少女が顔をみせる。

そして、秋蘭が最後の一人の覆面をはぎとると

(シュッ！)

4人

「なっ!？」

その顔をみた4人は驚いた。何故ならその覆面の

したの顔は少女ではなくて

星

「この者は黄巾党兵ではないか！」

本郷猛

「くっ! やられた どうやら最後の一人はこの人を影武者にしてどこかにいるらしい」

秋蘭

「なら我々が侵入していたことはとっくにはれていたのか!？」

ゲルシヨッカー首領の声

「その通りだ！」

突如不気味な声が出たのでその方をみると、先ほどの鷲に蛇が絡みついた

紋章の中心が光っていたのだ。

本郷は聞き覚えのある不気味な声にむかってこう叫ぶ。

本郷猛

「ゲルシヨツカーの首領!？」

ゲルシヨツカー首領の声

「ようこそ本郷猛君　そして3人の武将の諸君  
よくここまで来たな」

星

「本郷殿　あの声は一体？」

本郷猛

「あの声の持ち主こそがゲルシヨツカーの首領だ！」

春蘭

「なにっ!？」

星

「ゲルシヨツカーの首領ですと!？」

4人は驚く。今話しかけているのは魏を、そして



義勇軍を手こずらせた

集団の首領だというのだから……。

本郷猛

「お前達は怪人を使って黄巾党兵を操り、この世界を混乱させていたのか!？」

ゲルシヨッカー首領の声

「その通り。黄巾党兵を操り、この世界を混乱させていたのは我々だ……。」

本郷の問いに首領はそう答える。

秋蘭

「お前達は黄巾党兵を操り、何を企んでいる!？」

ゲルシヨッカー首領の声

「ふふふ……殺す前に教えてやろう 我々にはこの時代の人々の怨嗟の声が必要なのだ。『太平要術』に妖術を蓄えさせるためにな……。」

春蘭

「『太平要術』だとっ!？ それは華琳様が探していた書名ではないか!」

本郷猛

「そうだ……こいつらは『太平要術』を張三姉妹に渡し、その妖術で世を混乱させるように仕向けたんだ!」

秋蘭

「そんな恐ろしい書だったのか？」

星

「それよりも本郷殿」

本郷猛

「ああ……首領、『太平要術』を持った張宝はどこだ！」

???

「首領に聞かなくても、さっきから貴方達の後ろにいるわよ」

突如、後ろから声がしたので振り返ると、そこには『太平要術』

の書らしき物を持ち、腕に黄色いリボン、そして黄巾党兵を多く

連れた張宝こと地和がいた。

そして地和も操られているのか目に光がない。

春蘭

「なっ！？ いつの間に!？」

秋蘭

「しかもいつの間にこんなに敵が!？」

本郷猛

「なぜばれたんだ!！」

地和

「教えてあげるわ・・・『天の御遣い』本郷猛  
あんた 天和姉さんのことを『張角様』つてい  
ったそうね？」

本郷猛

「それがどうした!？」

地和

「ば〜か! ちい達はね黄巾党兵皆に「真名」で、  
そして敬称なしで呼ぶことを許しているのよ そ  
れなのに、一人だけ名でしかも、わざわざ『様』  
をつけてよぶなんておかしいでしょ？」

本郷猛

「何だとっ!？」

本郷はさすがにこれには驚いた。まさか、全員に真名  
で呼ばせていたなんて・・・

おそらくばれた後にその兵が何らかの手段で地和に密

告し、こちらに先回りしていたので

あろう。

地和

「一人に声かけられて慌ててそういっ  
ちやったのが運の尽きね」

そして地和はマイクラしき物を持つところ言う。

地和

「ハア〜・・・みんな〜　ちい達の邪魔をするこいつらをやっつけて〜！」

（やっつけて〜！）×3

すると黄巾党兵達はスイッチを入れられた機械のように本郷達に迫ってきた。

「こいつらやっつける・・・」

「こいつら倒す・・・」

「こいつら・・・殺す！」

どうやらより強力な催眠術によってただ戦うだ

けの兵士にされたようであり、

自分で考える力もなくなってしまったようだ。

そして4人は離れないように互いに背を合わせる。

星

「どうします？　操られているだけなら手が出せませんよ」

本郷猛

「ああ……だが戦わなければ、こちらがやられる！  
殺さずして敵を倒すんだ」

春蘭

「……しょうがないーか八かだ」

秋蘭

「わかった」

本郷を除く、3人は武器を逆刃の方にして黄巾党兵に迫っていった。

本郷は迫り来る黄巾党兵の攻撃を避けながら、カウンター

で腹部に重い一撃を入れる

本郷猛

「トオツ！」

「ぐえっ！」

そして後ろから襲ってきた黄巾党兵の攻撃を受け止め、

その兵を叩き付けると武器を取り

上げて、つぎつぎと黄巾党兵を気絶させていく。

そして春蘭は己の武器である七星餓狼を逆刃のほうに

してつぎつぎと敵を気絶させていった。

春蘭

「はっ！ はっ！」

「がはっ？」

しかし、敵に対して手加減をしたことのない彼女にとってはこの戦い方は余りなれていなかった。

秋蘭

「ふんっ！ ふんっ！」

「ぐぐっ……」

一方で妹である秋蘭も本来は弓を使つての戦法

が主である為、白兵戦という慣れない

戦いに苦戦しながら、敵を倒していく。

星

「はいはいはいっー！」

星の方は、苦戦することなく敵を気絶させていく。

そして始まって数十分が経過した今、敵をかなり気

絶させたが、まだかなりの数が

周りにおり、彼らは再び背を合わせる。

本郷猛

「くっ！ 操られているとはいえこんなに手強いとは」

地和

「ふふふ……ちいの兵隊達を相手に良く持った方よ」

その時、天和が目を覚ました。

天和

「う、うう……もう朝なの？……ええ！？」

目を覚ました天和が周りの光景に驚く。周りに自分達の

ファンが気絶しておりそして自分の妹と見たことない

人達が戦っているのだから。

地和

「あら姉さん。正気に戻ったの？」

天和

「ち、地和ちゃんこれはどういう事！？ 何しているの？  
それに正気って？」

地和

「そのまんまの意味よ。このままゲルシヨッカー  
の操り人形として歌い続けていれば良かったのに  
……」

天和

「ゲルシヨツカー？……そうだ！思い出した！

確か私達は干吉って人に『太平要術』の書をもらって……  
それをつかって芸人としてここまで人気が上がったの・でも・

・ある日、役人から身に覚えのない嫌疑をかけられて、私は連れて行かれそうになったの。その時地和ちゃんが妖術を使つて私を助けてくれて……。それと引き替えに私達とその場にいた人達が追われる身に……。私達は身を守る為に私達を護つてくれる人達を増やしていったの……。でもいつまでもこんな事は続かない、と三人で言い争っていたときまた干吉って人が私達の前に出てきて……。その人に見つめられていた途端、気が遠くなつて……。そこからの記憶が……」

天和から、黄巾党が誕生した経緯についてを聞きその場にいた4人は  
驚愕した。

本郷猛

「何てことだ……。黄巾党誕生の裏にそんなことがあったのか  
……」

星

「最初は役人の横暴から身を守る為にしていた事を、ゲルシヨツカーに悪用され人々を脅かす黄巾党を生み出したということですか」

春蘭

「ああ……。私達も今、その事実をしつたぞ」



秋蘭

「事情は分かった　だが、なおさらの事だ　こんな馬鹿な事はいつまで  
も続くわけがない」

本郷猛

「そつだ。　張宝　もうこれ以上罪を重ねるな！　投降すれば、皆に  
今の事情を話して寛大な処置をするように俺が頼む！　君はゲルシヨ  
ツカーに操られているだけなんだ！」

本郷は地和を説得しようとするも・・・

地和

「あんだ・・・お人好しなのね　でもその気はないわ  
だって私はゲルシヨツカーに忠誠を誓った身よ」

本郷猛

「何ツ！？」

地和

「実はね私は、監禁していた人達をあんたが助けた  
ところを『隠しかめら』って奴で見ていたのよ　その時、  
『カエルトンボーとは別に外にいた化け物が人々に  
催眠術をかけていた』って聞かなかった？」

本郷猛

「何がいたい？」

地和

「アハハハハハッ！　まだ分かんないの！？」

その化け物は目の前にいるのよ！」

本郷猛

「何だどつ!？」

地和

「ある時は人気芸人の地和ちゃん。またある時は黄巾党の首領「張三姉妹」の一人張宝、しかしてその実態は！」

地和が両腕で顔を隠すとその姿が変異し、蜂と燕を混ぜたような

怪人に姿を変えた。

ハチツバメ

「ゲルシヨツカーの怪人ハチツバメよ！　ホホホホッ！」

天和

「う、嘘　地和ちゃんが……」

天和は怪人に変身した妹の姿に驚愕した。　そしてそれと

同時に人和も目を覚ます。

人和

「う、うゝん　姉さんどうした……化け物!？」

ハチツバメ

「化け物……酷いわね。お姉ちゃんに対して……」

人和

「お姉ちゃん……」

人和はとなりに天和がいるのを確認したが、もう一人の姉である地和を確認できない。　ということは……

人和

「地和姉さんのの？」

ハチツバメ

「ホホホホっ！　やっと気づいたみたいね」

人和

「何でそんな姿に!？」

ハチツバメ

「偉大なるゲルショッカーに私は選ばれたの！　どう？　私と共に来れば  
もっと私達の為に戦ってくれる人達を増やせるし、邪魔する人達を倒すこともできるのよ!」

天和

「地和ちゃん……そんなのおかしいよ」

ハチツバメ

「ホホホホッ！　何がおかしいのよ!？」

人和

「私達が芸人になったのはそんな事が目的じゃなくて私達の歌を

楽しんでもらって、この乱れた世に苦しむ人達を元気にするのが  
目的だったじゃない！」

天和

「そうだよ・・・それなのに私達の歌で人々を苦しめるなんて  
おかしいよ 元に戻ってよ 地和ちゃん・・・」

二人は姉妹である地和、いやハチツバメを説得しようとした。

しかし、怪人になった彼女にその言葉は届かず・・・

ハチツバメ

「・・・残念ね・・・これで貴方達を殺さ  
なければならなくなっただわ」

天和

「えっ？」

ハチツバメ

「逆らう者には死！ それがゲルシヨツカーの掟なのよ！」

そしてハチツバメは姉妹にちかづこうとするが、本郷がそれを阻む。

本郷猛

「そつはさせん！」

ハチツバメ

「本郷猛！ 邪魔をする気なの！」

本郷猛

「ハチツバメ！ まだ君には人間の心が残っているはずだ！ ゲルシヨツカーの言いなりになるな！」

ハチツバメ

「うるさいっ！ 『太平要術』の妖力はけっこう溜まったけど、まだまだ足りないのよ！ ゲルシヨツカーの目的を達成する為にはもっと乱れた世にして、怨嗟の声を集めるのよ！」

これを聞いた本郷はこれ以上、ハチツバメに何をいつても無駄だと判断し、ここで変身することにした。

本郷猛

「やむを得ん。ならそれを阻止する為にハチツバメ！ お前を倒す！・・・フンっ！」

(ピュイイイイン！)

春蘭

「な、何をする気だ!?!」

春蘭は突如本郷が訳の分からない体制になったことに動揺する。

本郷猛

「ライダー・・・」

本郷は左手を腰に当て、右腕を左側に持ってきてポーズをとると、右腕をまた右側に持ってきて、今度は右腕を腰に当

て、左腕を右側に持ってきた。

本郷猛

「変身っ！」

(ゴウン！)

すると本郷の腰から赤い風車のついたベルトが現れ、

本郷猛

「トオッ！」

本郷がそのままジャンプすると、ベルトから発した凄まじい光が彼を多い光が晴れると

仮面ライダーになった彼が着地してきた。

(ピュイイイイン！)

(挿入曲：レッツゴー！ライダーキック)

ハチツバメ

「出たわね仮面ライダー！」

秋蘭

「か、仮面らいだあ？」

春蘭

「本郷なのか！？ その姿はいつたい！？」

仮面ライダー一号

「説明は後だ！ 黄巾党兵は任せたぞ！」

春蘭

「あ、ああっ！」

星

「お任せ下さい！」

仮面ライダー一号は黄巾党兵を星達に任せるとハチツバメに向かっていく。

ハチツバメ

「いいわ・・・相手してあげる ついてきなさい仮面ライダー  
フフフフ・・・」

ハチツバメは飛びながら外へと向かい、ライダーも外へ向かう。

そして外に出ると、そこには待機していたと思われるゲルシヨツカ  
ーの

戦闘員が待ち構えていた。

そして一人が斬りかかってきたとき、ライダーは攻撃を受け止め、  
地面に戦闘員を叩き付けた。

ゲルシヨツカ 戦闘員

「ギイ！」

そして短剣を取り上げたライダーは戦闘員に向かっ  
ていき、同じく剣で襲い掛かって

きた戦闘員と斬り合い、次々と倒していった。

ゲルシヨッカー戦闘員

「ギイ！」

次々と敵を倒しているとき、後ろから近づいてきた戦闘員に気づかず、背後からの攻撃を受けてしまう。

仮面ライダー一号

「グウツ！」

そして背後から動きを封じられると、他の戦闘員が身動きができなくなったライダーに殴りかかってきた。

（バキッ！バキッ！ボゴツ！）

ゲルシヨッカー戦闘員

「ギイッ！」

両腕を抑えられているライダーはとっさに両足で目の前

の戦闘員を蹴り飛ばす



ゲルシヨツカー戦闘員  
「ギイイイイイッ！」

そして両腕を抑えている戦闘員も振り払い、殴り飛ばした。

仮面ライダー一号

「トオッ！」

(バキッ！バキッ！ボゴッ！)

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイッ！」

そしてあらかた戦闘員を倒した仮面ライダー

はすぐさまハチツバメに向かう。

ハチツバメ

「ホホホホッ！」

仮面ライダー一号

「フンッ！」

(ピュイイイイン！)

仮面ライダーは再び剣を取り、右手が蜂の毒針になっ

ているハチツバメに向かっていく。

(カキーン！ カキーン！ カキーン！)

ライダーとの剣戟で最初は優勢を見せたハチツバメであるが、疲れさせる為にわざと追い込ませたと気づかないでいた。

そして壁にライダーを追い込んだハチツバメは止めをさそうと一気に毒針を刺してきた。

だが、ライダーはとっさに攻撃を避け、外れたハチツバメの毒針はそのままライダーの後ろにあった岩に刺さってしまった。

ハチツバメ

「ウウツ!? ぬ、抜けない!」

ハチツバメは岩に武器である右手の毒針が刺さり、抜けなくなっている。

これがライダーの狙いであった。

そして敵の横側にたったライダーは構えると剣を両手で持ち一気に振り下ろす。

(ピュイイイイン!)

仮面ライダー一号

「ライダースラッシュ!」

(ズバツ!)

ハチツバメ

「ああああああああああっ!!」

ハチツバメの武器であり、そして弱点でもあった毒針を失い、ハチツバメは

苦しみ出す。

ハチツバメ

「ひ、ひいっ! まさかこんなに仮面ライダーが強かったなんて……ここは逃げるきゃっない!」

そういうとハチツバメは右が蜂、左が燕の翼を拡げ、

空へと向かう。

だが、逃げることを彼は許さず……

仮面ライダー一号

「逃がすか!!」

(ピュイイイイイン!)

仮面ライダー一号

「行くぞ! トオオオオオオオオオっ!!」

(ビュオオオオオオオン!)

仮面ライダーは空高く跳び上がり、空にいたハチツバメの近くにき

た。

ハチツバメ

「ホホホホっ？ う、嘘！？ そんなのありっ！？」

これにはハチツバメも驚く。目の前にいるライダー

が跳び上がり、自分の所まできたのだから……そして

怪人の近くまでやってきた仮面ライダーは

敵を倒す為の必殺の蹴りを放つ。

仮面ライダー一号

「ライダーアアアアア・キイイイイック！」

(ドゴンッ！)

蹴りは見事に命中し、ハチツバメは衝撃で地面へと落ちていった。

ハチツバメ

「きゃあああああああ！」

そして地面に激突し、何とか立ち上がったがダメージ

に耐えきれず……

ハチツバメ

「ぎゃあああああああ！」

そのまま後方に倒れてしまう。

仮面ライダー一号

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

仮面ライダーは倒したハチツバメをみつめているとその姿は

黄巾党の首領「張宝」、いや地和に戻る。

地和

「う、ううう・・・・・・・・・・」

声がしたことからまだ生きているようであった。

そして地和は意識を取り戻し、ゆっくりと起き上がった。

地和

「い、今までちいは何を・・・・・・・・？」

どうやら怪人にされた記憶は残っていないようだ。

その時、彼女の姉妹天和、人和が彼女の元まで走ってくる。

天和

「地和ちゃん！」

人和

「地和姉さん！」

地和

「天和姉さん！ 人和！」

天和

「良かった〜！ 元に戻ったんだね 地和ちゃん」

地和

「えっ！？ も、元に戻ったってどういうことなのよ？  
それに今まで私は一体何をつ？」

人和

「姉さん・・・本当に覚えていないの？ 姉さんは干吉って  
人に操られて・・・」

地和

「干吉？・・・あつ！ そういえば、私達の前に  
また干吉が現れてそこからの記憶が・・・」

そして地和は徐々に記憶を取り戻していく。 黄巾党兵を生み出して

世の中を混乱させてしまったこと、そして多くの人を元気にするど  
ころ

か不幸にしてしまったことなど・・・

地和

「私・・・なんてことをっ！」

仮面ライダー一号

「君が気にする必要はない・・・」

その三人の姉妹は昆虫の様な仮面を被り、赤い襟巻を首に巻き付けた人物をみる。仮面で表情は見えないが、その仮面の下は微笑んでいるように見えた。

そして長女天和は仮面ライダーにお礼を言う為近づく。

天和

「本当にありがとうございます。私達を悪い人達から助けてくれただけでなく化け物になった地和ちゃんを元に戻してくれて……」

仮面ライダー一号

「いや、違う……化け物が死んで、妹さんが生き返ったんだ」

人和

「そうなんですか？ 一体貴方は？」

人和がこう聞くと、彼はこう答える。

仮面ライダー一号

「私は仮面ライダー……人々から

「天の御遣い」と呼ばれる者だ」

天和

「天の御遣い？」

地和

「仮面らいだあ？」

天和が困惑しているとき、星がライダーの元まで走ってきた。

星

「ラ、ライダー殿！ すいません！」

仮面ライダー一号

「どうしたんだ？」

星

「必死に黄巾党の兵を食い止めていたのですが、余りにも数が多すぎてこれ以上は限界です。途中で呉の孫策、魏の曹操、そして心配して来てくれた関羽達が手加減しながらの戦いに苦戦しています！」

仮面ライダー一号

「何ッ！？ ハチツバメを倒したのにまだ皆正気に戻っていないのか！？」

どうやら黄巾党兵にかけられた催眠は本人が解かないと解けないようである。

地和

「姉さん達……行くわよ！」

天和

「うん！ 地和ちゃん」



人和

「元はといえば、私達の身勝手が招いた結果だもの。私達がなんとかしないと・・・」

三人はそういつと黄巾党と、義勇軍が戦いを

繰り広げている地へと赴く。

仮面ライダー一号

「一体何をする気だ!？」

地和

「まあ見ててよ」

地和がそういつと三人はそのままいつてしまう。

一方で黄巾党の本部では義勇軍、魏軍、そして事情

を聞いた呉軍が必死に黄巾党兵を食い止めていたが、

そろそろ手加減をしながらの

戦いに皆、限界を感じているようであった。

愛紗

「くっ! ご主人様達はなにをされている?

これ以上はこっちが持たんぞ!」

雪蓮

「義勇軍から事情を聞いて、仕方なく手加減し

ているけどこれ以上はこっちが持たないわよ」

孫呉の王、孫策伯符は仕方なく愛刀南海霸王を鞘から抜かずに  
相手を気絶させる戦法で戦っているが限界が近くなっていた。

冥琳

「我慢しろ！ 操られているだけの人間  
を殺すわけにもいかんだろっ！」

雪蓮

「そっついわれてもっ！」

その時、舞台の上に誰かが立っていた。よく見るとそれは

黄巾党の首領「張三姉妹」であった。

蓮華

「なっ！？ あれは黄巾党の首領達！？」

華琳

「首領達自らのお出ましのようね  
一体何をする気なのかしら？」

その三姉妹は突然マイクのような物を口の前まで持って行き、

それと同時に音楽がなる。

音楽が鳴った事に気づいた黄巾党兵は戦うのを止め、

張三姉妹の方を見た。そして敵の様子が変わった事に気づいた魏、呉、そして義勇軍の兵士も一旦、戦闘を中止し、張三姉妹の方を見る。

そして黄巾党兵全員が自分達の方を向いていると分かった三姉妹は歌い始める。

(挿入曲：Y U M E 蝶ひらり)

すると黄巾党兵全員が剣、弓などを上に掲げながら張三姉妹を応援し始めたのだ。

その歌の面白さ、心地よさは義勇軍、魏、呉の皆にも伝わる。

愛紗

「これが張三姉妹の歌。なんて心地よいんだ」

桃香

「黄巾党の人達が虜になるのも理解できますね」

鈴々

「すっごく上手なのだ!」

そしてライブが終わりを迎えようとした時、三人

は終わり間際にいつも言っている台詞をいう。

天和  
「みんな大好き？」

『天和ちゃん！！』

地和  
「みんなの妹？」

『地和ちゃん！！』

人和  
「とつてもかわいい？」

『人和ちゃん！！』

天和  
「みんな、ありがとう！！」

『ホワワ〜！！』

そして黄巾党兵が自分達の方に注意が向いたと悟った

人和は姉の地和に合図する。

人和  
「今よ！地和姉さん！」

地和  
「ええっ！ 任せて！」

すると張三姉妹の一人、地和はマイクを口に近づけるとこつこつ叫ぶ。

地和

「ハア………みくんなあああああああ  
正気に戻ってええええええええええっ！」

(戻って) × 3

その声があたりに響き当たると、黄巾党の様子がかわる。

次々と全員の目に光が戻り、辺りが騒然となる。

「あ、あれっ？ 俺達は何をしていたんだ？」

「そつだ！ 俺達は変な化け物に何か催眠  
をかけられて……」

鈴々

「これはどういふことなのだ？」

思春

「どつやら、催眠を解いたようだな。あの三人」

黄巾党兵ががやがやしていると、天和はこつこついう。

天和

『皆さん！ 聞いて下さい！』

「あつ！ 天和ちゃんだ！」

「無事だったんだ！」

どうやら皆、天和達はゲルシヨッカーに捕まっていると

思っていたようだ。

その時、天和は驚くべき事を口にする。それは……

天和

『今日で黄巾党は解散します！』

「え〜!？」

その言葉を聞いた黄巾党兵は驚愕し、中にはこける者もいた。

天和

『私達、普通の芸人に戻って一からやり直します！』

天和の言葉には操られていたとはいえ、黄巾党の首領として罪を犯し

ていたのは事実でそれらを償う為にも、一からやり直すといったのだ。

この様子を桃香達は離れた場所で見っていた。

桃香

「ご主人様達、うまくいったみたいね」

その時、本郷猛がその場にやってきた。

本郷猛

「どうやら黄巾党は事実上滅びたみたいだな」

愛紗

「お帰りなさいませご主人様」

鈴々

「お疲れなのだ！お兄ちゃん」

本郷猛

「あ、ああ・・・皆も良くやった。」

その時、一人の伝兵が本郷にこういう。

「ご報告します！ 張三姉妹は魏に投降、

『太平要術』の書も抑えたとのことです！」

本郷猛

「そうか・・・」

数分後、本郷達は呉の軍と共に『太平要術』の書も抑えた魏軍、

そして鈴々の恩人である華陀と合流する。

華陀

「どうやら、黄巾党は解散したようだな・・・」

本郷猛

「そうだ・・・それよりもどうしたんだ？」

そんなに汗だくになって」

華陀が汗だくの姿になっているのを見て本郷達は驚愕する。

よほど激しい運動でもしないとこうならないはずだ。

すると華陀は本郷にこういう。

華陀

「あ、ああ・・・実はな・・・」

その時、華琳が華陀の目の前に現れた。

華琳

「かゝだゝ・・・私に無礼な事をいったのに、また私の前に姿を見せるなんていい度胸しているわね？」

その顔は笑みを浮かべているが、怒っているのは間違いはなかった。

しかし、怒りにまかせて皆の前で華陀を切り捨てれば、自身の評判が

悪くなるのを恐れているか、代わりに満面の笑みを浮かべていた。

その笑みは別の意味で華陀を震え上がらせてしまう。

華陀

「そ、曹操 だ、だからあれは治療の説明であって・・・  
変な目的ではっ！」

華陀の説明を聞いた華琳はここまで慌てている様子を見て、



本当にアレがただの便秘の治療の説明だと分かり、真剣に

自身の事を心配していた華陀を殺そうとした事が恥ずかしく  
なった。

華琳

「はあく……まあいいわ。つまらないことで人を斬る程、  
私も馬鹿じゃないし、今は『太平要術』を封印するのが先よ  
だから今回のことは水に流してあげる」

華陀

「そ、曹操……」

華琳

「た・だ・し……今度、無礼な事をいったらその時は  
問答無用で殺すわよ……」

華琳は殺気のコもった目で華陀を睨む。

華陀

「わ、分かった……それで『太平要術』の書は？」

華琳

「今、持ってこさせてるわ」

そして、その場に張三姉妹がやってきて地和は

『太平要術』の書を華陀に向ける。

華陀

「これが『太平要術』の書か・・・よしっ！」

華陀は両手に鍼を持つと、『太平要術』の書を睨み、

そして本の急所と思われる箇所を探り当てた。

華陀

「そこだ！我が身 我が鍼と一つなり！

一鍼同体！ 全力全快！ 病魔覆滅！」

一気に鍼を『太平要術』の書に振り下ろす。

華陀

「元気にな〜れええええええええ

ええええええええっ！」

その鍼を一気に『太平要術』の書に刺そうとしたその時、

???????

「ちょっと待って下さい」

華陀

「えっ？」

どこかから声がして思わず、その手を止めてしまっ。

???????

「封印するのに『元気にな〜れ』はおかしいんじゃない

ありませんか？」

華陀

「それもそうだな………つて誰だ!？」

暗黒魔術師

「ふふふ………」

何とそこには干吉、もとい暗黒魔術師がどさくさ

に紛れて『太平要術』の書を地和から取り上げていたのだ。

そして地和は見覚えのある男に向かってこういった。

地和

「ああっ! あんた干吉っ!」

三人の少女は突如現れた見覚えのある男に驚愕する。

自分達に「太平妖術」の書を渡し、

地和を変な化け物にした張本人だったのだ。

暗黒魔術師

「干吉……懐かしい名前ですね……最も今の私の名前は暗黒魔術師ですが………」

華琳

「あ、暗黒………」

一同

「魔術師？」

(ビュ〜・・・)

余りにも変わった名前にその場に一瞬冷たい風がながれた。

華琳

「ふざけているの貴方？」

暗黒魔術師

「いいえ、私はいったて真面目ですが・・・」

誰もがやがやいつている時に本郷だけは暗黒魔術師を

睨んでいたのだ。

本郷猛

「何故貴様がここにいるんだ！ 暗黒魔術師！」

地和

「何よ？ あんたこいつ知ってるの？」

雪蓮

「誰なのよこいつ？」

本郷猛

「こいつはゲルシヨツカーの大幹部でこの戦いを裏から引いていた黒幕だ！」

一同

「ええっ!？」

皆は本郷の言葉に驚愕する。目の前にいるのは「黄巾党の乱」を影から操っていた黒幕だというのだから。

愛紗

「ゲ、ゲルシヨツカーの大幹部!？」

暗黒魔術師

「その通り。皆さんにも改めて自己紹介しましょう。私の名前は「暗黒魔術師」ゲルシヨツカー三國時代支部の「大幹部」です。以後お見知りおきを……」

暗黒魔術師は丁寧に頭を下げ、挨拶をする。

そして暗黒魔術師は回収した『太平要術』の書を見て

こう言った。

暗黒魔術師

「ふふふ……かなりの怨嗟の音が集まっていますが、まだまだ足りませんね……首領に献上するアレを作るには」

雪蓮

「よくわかんないけど、アンタを倒せばいいだけの話でしょ!」

雪蓮は暗黒魔術師を南海霸王で切り捨てようとするが、

雪蓮

「えっ？」

何と素早い動きでかわされ、そして

暗黒魔術師

「はあっ！」

雪蓮

「きゃあ！」

なんと暗黒魔術師は手から気の塊のような物を出すとそれを

雪蓮に向けてうち、攻撃に当たった雪蓮は吹っ飛んでしまう。

蓮華

「雪蓮姉様！」

冥琳

「雪蓮！」

その二人は急いで、雪蓮の方に向かった。

暗黒魔術師

「ふふふ・・・虫けらごときが私を倒そうなんていい度胸ですね？  
ですが、私の目的はこれの回収です。皆さんとはいつかお会いしま  
しょう。　ハハハハハッ！」

暗黒魔術師は空高くジャンプすると、いつの間にか用意してい

た馬に飛びのりそのまま逃げてしまっ。

本郷猛

「待て！暗黒魔術師！」

本郷もいつの間にか用意していたバイクに飛び乗り、

暗黒魔術師を追跡する。

（ブオオオオオオオオン！）

激しいエンジン音を立てながら、暗黒魔術師を追跡する本郷猛はジャンプして暗黒魔術師の前に出る。

先回りされた暗黒魔術師は馬を慌てて止める。

暗黒魔術師

「ふふふ・・・やはり追ってきましたね本郷猛！」

本郷猛

「言え！お前達を作ろうとしている物は何だ！？」

暗黒魔術師

「我々が作ろうとしているのは、人間を滅ぼし、怪人軍団の楽園を生み出す事ができる代物です。かつて『邪眼』様が成し遂げそうとして、貴方に阻止された計画の達成も夢ではないのですよ！」

本郷猛

「何っ！？ 邪眼だとっ！？」

本郷は聞き覚えのある名前に驚愕する。

邪眼・・・それはかつて5万年前の世紀王で

「正義の系譜」事件の黒幕だった怪人。

奴の目的は1987年の仮面ライダー、BLACK とシャドーム  
インの

体内にあるキングストーンを手に入れ、創世王になることであった。

その時は、それぞれの時間の4人の仮面ライダー、一号、V3、B  
LACK

アギトが協力して邪眼を倒し、野望を阻止できた。

本郷猛

「貴様っ！邪眼の手下だったのか！？」

暗黒魔術師

「ええかつてはね・・・それよりもいいのですか？  
私を追ってきて」

本郷猛

「どっついう意味だ！？」

暗黒魔術師

「今頃、カエルトンボーが戦闘員を率いて貴方



の仲間を襲っているはずですよまあ、最新の兵器を装備させている戦闘員に敵わないでしょうね」

本郷猛

「何だとっ!? くっ!」

本郷はこの事を聞いた途端、慌てて仲間の元へと向かう。

暗黒魔術師

「そうです。そのまま仲間の元へと向かうのです。私の策だと知りながらも貴方が仲間を見捨てるはずがないと分かっています」

そういうと、暗黒魔術師は黒い炎に包まれて消えてしまう。

そしてバイクに乗った本郷は仲間を助ける為に、全力で仲間達の元に

向かう。

本郷猛

「待っている皆!.....フンッ!」

(ピュイイイイン!)

本郷猛

「ライダー.....」

本郷は左手を腰に当て、右腕を左側に持ってきてポーズをとると、

右腕をまた右側に持ってきて、今度は右腕を腰に当て、

左腕を右側に持ってきた。

本郷猛

「変身っ！」

（ゴウン！）

すると本郷の腰から赤い風車のついたベルトが現れ、

ベルトから発した凄まじい光が彼を多い光が晴れると

仮面ライダーになった彼が愛車サイクロンを飛ばしながら

仲間元へと向かう。

（ブオオオオオオン！）

その頃、桃香達がいる場所では突如現れたカエルトンボー

が戦闘員を率いて

義勇軍、魏、呉に襲い掛かっていた。

カエルトンボー

「アゝブラッ！ やれっ！ もっと撃て！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

(ドガガガガガッ！)

戦闘員はカエルトンボの指揮で機関銃を乱射し、  
義勇軍の兵士達を次々と倒していき、愛紗達は見た  
こともない兵器の威力に為す術もなかった。

愛紗達は壁の方に隠れ込み、何とか攻撃を防いでいた。

愛紗

「何なんだあの武器はっ！？ 弓よりも威力がある  
上に射程距離も遠い！」

秋蘭

「あれは先ほど、見た兵器ではないか！」

春蘭

「まさかこんなに威力があるとはっ！」

蓮華

「これでは手も足も出ません！」

白蓮

「どうすればいいんだ？」

そして今も続く銃撃によって銃弾が桃香に命中してしまっ。

桃香

「きゃあー！」

愛紗

「と、桃香様!?!」

白蓮

「桃香!?!」

愛紗、白蓮は腕を抑えている桃香の元へ

と慌てて駆けつける。

白蓮

「大丈夫か?桃香」

桃香

「う、うん・・・ちょっとかすっただけ・・・」

その時、戦闘員とカエルトンポーが彼女達に迫ってきた。

彼女達は慌てて逃げようとするも、そこは行き止まりであった。

朱里

「はわわっ!　ここに追い込む為の罠だったようです」

カエルトンポー

「アゝブラゝ!　観念しろ女どもっ!　構え!」

華琳

「くっ!　ゲルショッカーがこんなに強力だったなんて  
それに化け物が本当に出るなんて」

カエルトンボー

「黄巾党を壊滅させたことは褒めてやるう！  
だが、この土地が貴様らの墓になるのだ！」

(ジャキン！)

雜里

「あわわっ！ う、撃つ気です！」

カエルトンボー

「くくくっ……うっ！」

カエルトンボーが撃てると合図しようとしたその時、

???????

「待ていっ！」

どこからともなく声がしたので、カエルトンボー、そして戦闘員が後ろを振り向くと愛車サイクロンを全力で走らせ、仮面ライダーがこちらに向かってきた。

(ブオオオオオオオン！)

(挿入曲：レッツゴー！ ライダーキック)

カエルトンボー

「来たな仮面ライダー！ 撃てええっ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

戦闘員は仮面ライダーに向けて、機関銃を乱射させる。

（ドガガガガガッ！）

仮面ライダーは銃弾をかわしながら、愛車サイクロンを

走らせこちらに向かってきた。

カエルトンボー

「撃てっ！ 撃てえっ！」

しかし、銃弾はライダーに当たらず、全てかわされてしまう。

カエルトンボー

「アゝブラゝ！ な、何て奴だっ！」

そしてライダーは敵に近づくと、機関銃を持っている

戦闘員を次々と跳ね倒してしまふ。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイイイツ！」

そして戦闘員を倒すと、桃香達の前につき、カ

エルトンボーの前に立ちふさがった。

仮面ライダー一号

「・・・・・・・・」

カエルトンボー

「ふふふ・・・暗黒魔術師の策通り、こちらに来たようだな  
これで『太平要術回収作戦』は成功だ」

仮面ライダー一号

「承知の上だ！ 戦争を利用したあげく、平和の為  
に戦う者達の命を奪おうとした貴様だけは許さん！」

カエルトンボー

「アゝブラゝ！ ならかかってこい！仮面ライダー」

カエルトンボーの挑発に乗り、サイクロンから降りると

カエルトンボーに向かっていく。

カエルトンボーの攻撃を、彼は受け止めボディー

にカウンターの攻撃を繰り広げる。

（バキッ！ バキッ！ ボゴッ！）

カエルトンボー

「アゝブラゝ！」

仮面ライダー一号

「トオッ！ トオッ！」

二人の戦いを華琳達は冷静に見ていた。

華琳

「何なのあの昆虫野郎はっ！」

愛紗

「あの人の名前は仮面ライダー　ゲルシヨッカーと戦う戦士です」

華琳

「もしかして私達の為に戦っているの？　何で？」

華琳の疑問に鈴々はこう答える。

鈴々

「当たり前なのだ！　仮面ライダーのお兄ちゃんは『正義の味方』なのだっ！」

雪蓮

「せ、正義の……」

冥琳

「味方？」

仮面ライダーになった本郷猛を初めて見た華琳、雪蓮、冥琳はキョトンとした

顔になる。

愛紗



「はいっ……あの方の『正義』の前では国も信念も関係ありません」

白蓮

「もしやあの者は……」

中には仮面ライダーの正体に気づいた者もいたが、今はただ

仮面ライダーと怪人の戦いをみていた。そして仮面ライダーは

今度はカエルトンボーに蹴りを入れる。

仮面ライダー一号

「トオツ！ トオツ！」

カエルトンボー

「くそっ！ これでもくらえっ！ アゝブラゝ！」

カエルトンボーは口から毒液の球を吐きつけるが

ライダーがとっさにかわす。

しかし次に吐いた毒は何と愛紗達に向かっていった。

仮面ライダー一号

「はっ！ まずい！」

仮面ライダーは素早く、愛紗達の前に向かい、

毒を受け止める。

仮面ライダー一号

「ぐっ！」

改造人間である為、死ぬことはないがかなりのダメージを受けているようであった。

カエルトンボー

「ここであの時の借りを返してやる！」

死ね！ 仮面ライダー！

アゝブラゝ！」

そして今度は長い舌で仮面ライダーの首を絞め始めた。

仮面ライダー一号

「くっ……」

ライダーが苦しんでいるその時、

(ビュッ！)

上から何かが飛んできて、ライダーの首を絞めている

カエルトンボーの舌を切り落とした。

カエルトンボー

「ぐはあっ！」

舌を斬られたことで、カエルトンボーは思わず反動でこけてしまい

ライダーは何か飛んできた方を見ると、それは  
見覚えのある仮面だった。

仮面ライダー一号

「この仮面はまさか・・・」

そしてカエルトンボーは起き上がると、仮面が飛んで

きた方向に白装束を着た女がいたのでその女にこう叫ぶ。

カエルトンボー

「誰だっ！貴様！」

（挿入曲：見参！華蝶仮面）

華蝶仮面

「ある時は、メンマ好きの旅の武者、またある時は義勇軍の客将、しかして  
その実態は！」

そしてその女は振り返ると怪人にこういう。

華蝶仮面

「乱世に舞い降りた一匹の蝶！美と正義の使者！  
華蝶仮面推参！」

愛紗

「へっ・・・？」

その場にいた者が一瞬、仮面をつけただけの

趙雲の姿を見て呆れた顔をしていたが、

仮面ライダー一号

「おおっ！ 来てくれたか華蝶仮面！」

華蝶仮面

「仮面ライダー！ 彼女達を命がけで護ろうとした貴方の正義に感激しました。故に加勢いたします！」

カエルトンボー

「何をつ！ 小娘ごときが怪人である俺に勝てると思つのか！  
アゝブラゝ！」

華蝶仮面

「ゆくぞっ！カエルトンボー！ トオオッ！」

華蝶仮面は素早く、木の枝から降りると、素早い動き

でカエルトンボーを翻弄させる。

カエルトンボー

「なっ！？ は、早い！？」

そして敵の後ろの回り込むと、羽を切り落としてしまう。

（ズバッ！）

カエルトンボー

「アゝブラゝ!?!」

そう、これが華蝶仮面の狙いだっただ。 羽を失えば、

もう飛べないはずだ。

華蝶仮面

「今ですっ! 仮面ライダー」

仮面ライダー一号

「任せろ!」

(ピュイイイイン!)

ライダーはカエルトンボーを捕まえると、そのまま

高くジャンプし

仮面ライダー一号

「トオオッ!」

カエルトンボー

「アゝブラゝ?」

ライダーに捕まったカエルトンボーもつられて

ジャンプし、そして

仮面ライダー一号



そして再び共闘をした仮面ライダー一号と華蝶仮面は  
再び堅い握手をする。

(挿入曲：仮面ライダーのうた)

仮面ライダー一号

「まさかまた君に助けられるとは、思わなかったよ  
華蝶仮面」

華蝶仮面

「ええ私も貴方と再び戦えるとは思っていませんでした。」

こう様子を愛紗達は黙って見ていた。そしてこっそり愛紗

は鈴々、朱里、雛里と話す。

愛紗

「もしかしてご主人様……趙雲と前にも合っ  
ていたんじゃない……」

雛里

「様子から見て間違いないと思います。」

鈴々

「もしかしてお兄ちゃん、華蝶仮面の正体に気  
づいていないんじゃない……」

朱里

「いえご主人様の性格からして、それはな

いと思います。きっと正体を知っていても、助けられた手前、黙っているのでしょうだからこのままあわせといた方がいいかもしれません・・・趙雲さんに気分悪くされたら困りますし・・・」

3人

「うんうん・・・」

4人は口を合わせると、再び二人の英雄がいる方向をみる。するといつの間にか華蝶仮面はいなくなっており、仮面ライダー一号も愛車サイクロンに乗り、いずこかへと行ってしまったのだ。

そして華琳はこんな事を言う。

華琳

「偉いわね。国、信念に関係なく、そして自分の命を捨ててまで人の為に戦うなんて・・・」

桃香

「そうです。自分達の国のことばかりでは本当に平和で幸せな世の中はできませんからね。」

そして仮面ライダー一号は本郷猛の姿に戻り、バイクを走らせていた。



義勇軍、本郷猛の活躍により、張三姉妹はゲルシヨツカーから解放

され彼女達自らの手で黄巾党は解散し、カエルトン

ボーも仮面ライダーと華蝶仮面の活躍により倒された。

しかし、それと引き替えに『太平要術』の書は暗黒魔術

師の手に渡ってしまつ。

果たして彼が『太平要術』の書で何をつくり首領に献上しようとしているのか!?

だが、例えそれがどんなに恐ろしい物でも本郷猛が戦いを止めることはないだろう。

何故なら、それが改造人間である自分にしかできない仕事だと

分かっているからである。

戦え！ 仮面ライダー 正義と平和の為に！

つづく

**黄巾党壊滅！ 隠された真実 後編 その2（後書き）**

次回、「義勇軍、魏、呉、『張三姉妹』の処分を検討すること」  
にご期待下さい。

義勇軍、魏、呉、『張三姉妹』の処分を検討すること（前書き）

今回は、張三姉妹と黄巾党の処罰を決める話と本郷がゲルシヨッカ  
ーについてを  
話すすすです。

義勇軍、魏、呉、『張三姉妹』の処分を検討すること

黄巾党が解散して、その首領『張三姉妹』と黄巾党だった者達は全員、魏に投降した。

そして今まで世を混乱させてきたあの者達をどう処罰するか軍議で話し合っている最中であつた。

華琳

「では軍議を始める前に、操られていると知らずに倒してしまつた黄巾党兵と犠牲になつた人々の冥福を祈つて黙祷を行うわ」

華琳がそういうとその場にいた者は全員目をつぶり、彼らの冥福を祈つた。

そんな中、本郷はこつ心の中で思っていた。

本郷猛

「(すまない黄巾党の兵士達よ・・・まさかゲルシヨッカーに操られて

あんな事をしていたとは・・・貴方達の仇は必ずとる。だから今は眠つてくれ・・・)」

そして黙祷が終わると華琳はこついった。

華琳

「さて、『黄巾党の乱』を鎮めたのはいいとして、後は黄巾党兵と『張三姉妹』

どう処罰するかね」

華琳がどうするか考えていたとき、魏の軍師である荀？文若こと桂花が彼女に

こう言う。

桂花

「『太平要術』の書に操られていたとはいえ、彼女達が罪を犯していたのは事実。

見せしめの為にも厳罰を持って処罰するべきです！」

しかし桂花の意見に本郷はこういった・・・

本郷猛

「少し待ってくれ曹操。確かに彼女達は罪を犯したが、黄巾党兵の暴走を

止めて、自ら黄巾党を解散し投降してきた。もし彼女達が黄巾党を止めな

かったら我々はまた彼らを倒すという最悪の道を選んでいたのかもしれない。

それを阻止したのだから、ここは寛大な処置を・・・」

だが元より男嫌いで本郷を快く思っていなかった桂花は・・・

桂花

「あんたね！寛大な処置といっても黄巾党は今まで罪のない人々を苦しめてきたのよ！その首領である『張三姉妹』は死罪になってもおかしくないのよ！」

本郷猛

「だがな……そもそも『張三姉妹』が黄巾党の乱を起こす要因を作ったのは張角に覚えのない嫌疑をかけた役人達じゃないのか？」

桂花

「『天の御遣い』様はどうやら、相当な甘ちゃんのような。よくそれで義勇軍を率いてこれたものよ。今までの活躍はまぐれだったのかしら」

この桂花の言葉が愛紗の逆鱗にふれてしまう。

愛紗

「何ッ!? ……貴様もう一度言ってみろ！ ご主人様に対する侮辱は万死に値するっ！」

そついうと愛紗は持っていた青龍偃月刀を桂花にむけた。

桂花

「な、何よっ！」

一瞬その場に緊張感が募るが、本郷が愛紗を止める。

本郷猛

「止める愛紗」

愛紗

「し、しかしご主人様！ この者はご主人様を侮辱したのですよ！」

本郷猛

「三国共同の軍議の最中に死人を出すわけにはいかないだろ」

愛紗

「……………分かりました」

愛紗はしびしび青龍偃月刀を下ろすと、今度は華琳が

桂花に厳しい事を言う。

華琳

「桂花貴方も悪いわよ 本郷猛に対して『相当な甘ちゃん』  
なんて……………謝りなさい」

桂花

「か、華琳様！？ ですが……………」

華琳

「桂花。そこにいるのは私の……………いや戦場にいた者達の『命の  
恩人』よ 彼が来てくれなかったら、私達は殺されてここにいない  
わ」

本郷猛

「……………何の事だ？」

本郷はとぼけようとしたが、華琳は全てお見通しとでも言うかのよ  
うに

本郷を見つめる。

華琳

「隠しても無駄よ。あなたがあの昆虫の仮面をつけていた戦士なんですよ？一度聞いた声を忘れるほど私は馬鹿じゃないわよ。そして、私達を助ける為に『太平要術』の書を取り返すのを諦めてこっちに来たこともね・・・」

本郷猛

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

どうやら、自身の正体は既に曹操にばれており、ごまかしても無駄なようである。

華琳

「とにかく、謝りなさい桂花。いくら貴方が男嫌いでも私達の恩人に対してまでその様な態度を取るなら、軍師の任を解くわよ」

桂花

「え、ええっ！？それだけはお許しをっ！」

華琳

「なら謝りなさい」

華琳にこういわれ、桂花はしびしび本郷に頭を下げる。

桂花

「は、はい・・・華琳様の命の恩人とは知らず、無礼な事をいつて申し訳ございません」

本郷猛



「い、いや・・・素直に謝ってくれるなら別に気にしていない」

本郷が桂花を許したことでその場はひとまず収まった。

華琳

「やれやれ・・・まあ、貴方とあいつらのことは後で聞くとして今は黄巾党と『張三姉妹』をどう処分するかを決めなくてはね」

その時、つい最近魏の軍師として最近仕官してきた郭嘉こと

真名を稟という少女が華琳にこういう。

稟

「曹操様、その件に関して私に案がございます」

華琳

「あら、何か案があるのかしら？稟」

稟

「はい、私が考えますに、再び悪事をなさぬよう監視するという名目で

黄巾党の者達を丸ごと我が魏軍の管轄下に置くのが良いかと・・・そして平

時は刑罰の意味を含めて荒れ地の開耕に務めさせ、どこかでまた今回のよ

うな乱が起きた時にはそれを鎮圧する為の兵士として使う。『張三姉妹』は人

々を操って人々を苦しめた償いとして、各地に駐屯している官軍への慰問と、

貧しい者への寄付を募る為に舞台を行わせる。そして彼女達に身に覚えのない嫌疑をかけ、『黄巾党の乱』をおこさせた役人達を厳罰に処分して二度とこんなことがないように、各役所の者を厳しく指導するというのはどうでしょうか？」

彼女の案に同じく、最近軍師として曹操に使えた程？こと風は

風

「なるほど・・・厳格に法に則って処罰をすればいたずらに罪人を増やすだけですが、この妙案は国力と兵力を高めますね」

稟

「また、義勇軍の管轄下に置かれているという黄巾党兵に関しましては  
ゲルショッカーとやらに拉致された被害者という形をとって処罰は  
不問  
ということに」

華琳

「へえ・・・悪くはないわ」

稟

「なおこの案は華琳様の名を高める効果ものぞむことができます」

華琳

「そうね」

雪蓮

「でも、黄巾党は皆これまで張三姉妹のおっかけだったんでしょ？  
その者達を兵として使うには相応の訓練が必要になるわよ？」

雪蓮の指摘に皆が目にした時、楽進（凧）、李典（真桜）、干禁（沙和）と

いう少女が曹操にこう言う。

沙和

「華琳様！ その役、私にお任せ下さい！ きっと立派な兵士にしてみせます！」

凧

「お願いします！」

真桜

「うちらも協力しますから！」

華琳

「……いいでしょう。その役、貴方達に任せるわ」

3人

「……はいっ！」「」「」

華琳

「では、黄巾党と張三姉妹の処分が決まったところで……  
本郷猛 分かってるわね？」

本郷猛

「ああっ……」

華琳

「貴方の事とあいつらが何者なのか？　そしてその目的は何なのか？  
今日こそ話してもらおうよ」

本郷猛

「奴らの組織名は『ゲルシヨッカー』、俺と同じ世界、君達の言う  
『天の国』か  
らやってきた世界征服を企む悪の秘密結社だ・・・」

本郷は前に愛紗と鈴々に聞かせた事をこの場にいる者に聞かせ、

そのゲルシヨッカーの恐ろしさと組織力、常に闇から人々を狙っている

存在である為、誰もその存在を信じようとしない事、そして誰にも  
気づか

れずに人々の命を奪っている事、先ほど皆に襲い掛かってきた化け  
物はゲル

シヨッカーの改造人間であること、改造人間とは昔、自分の世界に  
存在した

ある外国の組織で研究されていた人間に動植物の組織の一部を移植  
し、同等の

能力を持たされた人間達の事であること。そしてゲルシヨッカーの  
改造人間は

その組織で研究されていた改造人間より遙かに強力な力があること。自身も改造人間『仮面ライダー』であり、ゲルシヨッカーが誕生する前の悪の組織

『シヨッカー』によって無理矢理改造され、バツタの能力を持った改造人間になった

事。改造手術の最終段階の際に何とか脱出し、それ以来、正義の戦士

『仮面ライダー』として仲間達と共に『シヨッカー』と戦い、倒した事。

そしてその後に見れた『ゲルシヨッカー』と戦っている事。

怪人に勝利したある日、自らを怪人タコガラスと名乗る怪人が現れ、自身の目的を告げた後、この世界に向かった事、自分はその野望を阻止する為

この世界まで追ってきたことを話した。

本郷猛のこの話を初めて聞いた者は愛紗、鈴々、桃香を除いて皆、驚愕し、

そして自身が改造人間になった経緯をしった朱里、雛里は涙を流し、その他の

者達はゲルシヨッカーの恐ろしさを改めて知り、聞いたことを後悔

する者までいた。

華琳

「驚いたわ。ゲルシヨッカーがそんなに恐ろしい奴らだったなんて・・・」

愛紗

「前に桃花村の人達に襲い掛かったあの黄巾党の男達も改造手術とやら

であんな姿になったのですね？」

本郷猛

「ああ、今日奴らに襲われて皆も分かったと思うが、奴らはそこら辺の

山賊とは桁違いに強い。奴らは烏合の衆ではないからなめてかかったり

すると痛い目にあうぞ」

冥琳

「確かに奴らは見たことのない鉄弾が出る武器で我々を圧倒していたな」

本郷猛

「あれは俺の世界に存在する機関銃と呼ばれる武器だ。殺傷力が高く、鎧も貫き、多くの敵を葬りさることができる」

春蘭

「その『きかんじゅう』というのはそんなに強力なのか？」

本郷猛

「ああ、他にも強力な武器はまだあるが俺の国が昔戦争していたとき、敵国が使っていたあの銃には手も足も出なかった。もしもともにつつこんでいったらちのすにされていたぞ」

本郷からこの事を聞いて奴らに真つ正面から戦いを挑もうとした春蘭、

秋蘭、愛紗、鈴々、蓮華などは思わず震え上がり、機関銃を持っていた

戦闘員に向かっていかなくて良かったとほっとする。

春蘭

「(よ、良かった・・・あの武器の威力を知らずに向かっていったら

今頃、私はあの世にいたかもしれない・・・)」

雪蓮

「ねえ・・・それよりも、貴方も改造人間だって言う証拠あるの？」

雪蓮はゲルショッカーの恐ろしさはよく分かったが、本郷も改造人間で

あることがどうしても信じられない為、あえて彼にこう聞いた。

本郷猛

「証拠か・・・そうだ皆、今からすることをよく見ているよ」

本郷は近くにあった剣を手に持つと、

(ズバッ！)

なんと自らの腕を傷つけてしまったのだ。

彼の腕からはおびただしい血が流れている。

本郷猛

「ぐっ……」

白蓮

「ほ、本郷！？」

桃香

「ご、ご主人様！？ 一体何を考えているんですか！？」

朱里

「はわわっ！ ご主人様が……！」

その場にいた者は本郷のしたことの意味がよく分からず、混乱しはじめた。

華琳

「あんだ！ 何考えてるのよ！」

本郷猛

「まあ……よく見てみる」

華琳

「あのね……えっ？」



皆が言われた通り、本郷が斬った腕をよく見るとなんと、彼の腕の傷が徐々に

ふさがり、あっという間に治ってしまったのだ。

雪蓮

「嘘ッ!？」

蓮華

「い、今のは一体!？」

冥琳

「馬鹿なっ! 傷が一瞬で治る人間がいるはずがないっ!」

本郷猛

「これが俺が改造人間である証拠だ。改造手術により俺は人間の数十倍の力と、自己治癒能力を手に入れたんだ」

本郷がこういうと、その場にいた者は彼が知っている事に

嘘偽りがないことを理解した。

華琳

「なるほど……どうやら貴方の言っていることに嘘はないようね」

本郷猛

「ああ……」

華琳

「あなた・・・改造人間とやらにされても、人々を護る為にずっと戦っていたのね？」

華琳の一言で一瞬その場は沈黙するが、しばらくして春蘭が本郷に話しかけてきた。

春蘭

「本郷・・・お前の事情はよく分かった。だが、一つだけ分からないことがある」

本郷猛

「何だ？」

春蘭

「干吉・・・もとい『暗黒魔術師』についてだ。奴はどうやってそのええつと・・・『げるしょつか』に入ったんだ？」

春蘭の指摘に皆注目する。確かに三国時代の人物であるはずの干吉が

どうやって本郷の世界の『ゲルシヨッカー』の大幹部になったのか？

秋蘭

「それもそうだ 『張三姉妹』に『太平要術』の書を渡した干吉はどうやって

お前の世界の悪の組織の幹部に？」

本郷猛

「恐らく奴は何らかの事情で俺の世界に来たときゲルシヨッカーに遭遇し、奴らに惹かれてそのまま大幹部になっただろ」

桃香

「その事情って？」

本郷猛

「恐らくは俺の抹殺……」

一同

「ええっ!?!」

愛紗

「なぜ暗黒魔術師がご主人様の命をつ!?!」

本郷猛

「簡単な答えだ 桃香、愛紗、鈴々 俺に初めて会った時に俺にいった言葉覚えているか？」

桃香

「ええつと……『天の御遣い様』である貴方をお迎えに参りました  
ですか？」

本郷猛

「そうだ……俺は桃香達の言う『天の御遣い』だ 以前桃香達に俺が現れると予言した管路という占い師の言うとおりになって平和な世の中にされる前に俺を抹殺する為に天の国へと来たんだ だが奴には予想していない事があった」

星

「それは？」

本郷猛

「それはこの俺が、仮面ライダーとしてゲルシヨッカーと戦っていたことだ」

雪蓮

「へえ〜つまり今のまま、貴方に向かっていっても勝ち目がないと判断したあいつはゲルシヨッカーに取り入って大幹部になった後、この世界まで戻ってきてゲルシヨッカー何とか時代支部を作ったのね あなたと戦う為に・・・」

本郷猛

「間違いない・・・そして、タコガラスは暗黒魔術師が作った物を天の国まで運ぶ役割を持っている 何を献上するのか分からないが、俺の感ではそれが首領の手に渡ったら大変なことになる気がする」

華琳

「そういえば、黄巾党兵が暴れ回る前から行方不明者や謎の死人があっちこっちで出ていたわね・・・あれも今思えば賊ではなくゲルシヨッカーの仕業だったのかしら・・・」

桂花

「だとしたらすぐにでも周辺の山とかを探索し、奴らが行動を起す前に

叩いた方がよろしいのでは？」

華琳

「貴方、本郷の説明聞いていないの？ むやみに奴らを捜し回ったりしたら、返り討ちにされて殺されるのがオチよ 奴らには天の国の技術と武器があるのよ」

桂花

「も、申し訳ありません」

雪蓮

「そういえば、貴方は天の国にいた時、どうやってどこに隠れているか  
分からないゲルシヨッカーと戦っていたの？ 奴らが人々の生活にまぎれ  
込んでいるならいくら貴方が強くても、一人では限界があるはずよ」

本郷猛

「ああ、天の国ではな・・・」

本郷は皆に今度はこう説明した。

天の国にはもう一人、一文字隼人という仮面ライダーがいること

今は彼が自分の分までゲルシヨッカーと戦っている事。

そして、人々を狙っているゲルシヨッカーの悪巧みを沮止する為

友人である滝和也を隊長に結成された『少年仮面ライダー隊』も

ゲルシヨッカーと戦っている事。

彼らの連絡のおかげで、ゲルシヨッカーと戦う事ができた事を

皆に話した。

桃香

「ご主人様の他にも仮面ライダーがいたんですね」

朱里

「それに凄いですよ。少年仮面ライダー隊のお陰でご主人様が  
ゲルシヨツカーと戦えるなんて」

本郷猛

「ああ・・・だがあの子達も時折、ゲルシヨツカーに狙われること  
が何度か  
あった。俺は、いや俺達はあるの子達も護りながら、奴らと戦って  
いた」

本郷の説明を皆が聞いていた時、華琳がこういう。

華琳

「・・・・・・そう。ならこちらではその『少年仮面ライダー隊』  
の代わりに私達が貴方にできるだけ協力させてもらおう」

本郷猛

「なっ!?　だ、だがな曹操・・・」

華琳

「華琳でいいわよ」

なんと華琳は本郷に自らの真名を教えた。

おそらく彼を認め、そして命を救われた敬意を払ってのことだろう。

そして華琳に後押しされたかのようにまだ本郷に真名をいっていない者が次々名乗り始める。

春蘭

「なら私は春蘭だ」

秋蘭

「その妹、秋蘭だ」

雪蓮

「じゃあ、私は孫策 真名は雪蓮よ」

星

「そういえば、まだ私の真名を教えていませんでしたね。私の真名は星です。 以後お見知りおきを・・・」

本郷猛

「ああ、じゃあ改めてよろしく 皆」

呉の者は雪蓮以外は名乗らなかったが、いずれ名乗る時がくるであらう。

本郷猛

「では改めて聞かせてもらおう。本当にいいのか？ ゲルシヨツカ  
ーとの

戦いは黄巾党以上に激しい大戦になるぞ」

華琳

「みくびらないでちょうだい。確かにゲルシヨッカーは恐ろしい奴らだって分かったけど、だからといって自分達の世界を好き勝手にされるのを黙っていられると思う?。」

本郷猛

「確かにそうだが……。」

雪蓮

「それに貴方には命を助けられた恩があるしね。」

本郷はその場にいた者の目を見ると全員、奴らと戦う事を決意した目であつた。

本郷猛

「分かつた……ならこの世界にいるゲルシヨッカーを駆逐し、計画を阻止する為に皆の力を貸してくれ!。」

一同

「はいっ!。」

こうして、その場にいる者達は本郷を中心に自分達の世界を護る為、ゲルシヨッカーと戦う事を決意したのであつた。

つづく



義勇軍、魏、呉、『張三姉妹』の処分を検討すること（後書き）

次回、ゲルシヨツカー怪人大図鑑 これを見た貴方は怪人達の恐ろしさを改めて知る！？

## ゲルシヨツカー怪人大図鑑（前書き）

今回は、ゲルシヨツカーと怪人達について詳しく書いた文を投稿いたします。

原作の『仮面ライダー』を知らない人はこれを見れば、ゲルシヨツカーの恐ろしさを改めて知る！？

## ゲルシヨツカー怪人大図鑑

ゲルシヨツカーとは？

仮面ライダーに度重なる敗北を続けたシヨツカーを見限った首領が、密かに結成していたアフリカを拠点に暗躍する暗黒宗教ゲルダム団と自身の組織であるシヨツカーを合併させ再編成した悪の秘密結社である。

シヨツカー末期から既に暗躍しており、地獄大使ことシヨツカー最後の怪人、ガラガラランダが仮面ライダー新一号に倒された時に本格的に活動を開始し、生き残っていたシヨツカー戦闘員はガニコウモルとゲルシヨツカー戦闘員に全員殺され、実権を旧ゲルダム団所属が奪いとる。

シヨツカーを遙かに凌ぐ科学力と戦力を誇り、世界征服のためには殺人、暴力、強盗などといった悪の限りを尽くす恐るべき組織である。2種類の動植物の能力をもつ怪人や戦闘員もシヨツカーより遙かに強い。

シンボルマークは、シヨツカーのシンボル（鷲）にゲルダム団のシンボルである蛇が絡みついているマークである。

なお、指揮の方は1971年の日本支部ではブラック将軍が、そして真・恋姫無双の世界では大幹部となった干吉こと暗黒魔術師が取っている。

ゲルシヨツカー首領

シヨツカー、ゲルシヨツカーを支配する首領で改造人間を操り、世界征服を企む。部下達の前には決して姿を見せることはなく、いつもシンボルマークのレリーフを通して、大幹部や怪人達に指示を出している。残忍な性格で、作戦に失敗した者、組織を裏切った者は容赦なく殺す。原作の『仮面ライダー』では最終回時に赤いマントに赤いマスクをした姿で現れる。その正体は無数の蛇が絡みついた

マスクを被った巨大な一つ目の怪人であるが、現時点ではその正体は誰にも知られていない。

### ブラック將軍

1971年の日本においてはゲルシヨツカー日本支部を指揮する大幹部であり、近世ヨーロッパ風の軍服と兜を着用している。冷酷で残忍な性格をしており、大都市を狙った大量殺戮作戦を得意とした天才的な頭腦の持ち主であり、何度も仮面ライダーを自身の作戦で苦戦させてきた。元は旧ロシア帝国の將軍であったが、帝国崩壊後にゲルシヨツカーに入ったと思われる。なお、その正体は原作の仮面ライダーでは吸血怪人ヒルカメレオンであるが、現時点ではまだその正体は明らかになっていない。また剣の名手でもある。

### 暗黒魔術師

本作品オリジナルとなるゲルシヨツカーの大幹部で、三国時代に設立したゲルシヨツカー三国時代支部を指揮している。元は真・恋姫無双の世界における妖術使い干吉であったが、本郷猛が『天の御遣い』として、三国時代に来る前に抹殺しようとして、彼の世界に来たとき、ゲルシヨツカーに遭遇し、その組織力と戦力に惹かれ、彼らの仲間になり、元の世界の戻ったとき、ゲルシヨツカー三国時代支部を設立した功績から、大幹部になったとされる。狡猾かつ狂気に狂った人物で彼にとつては作戦以外でも人を苦しめることは遊びにか過ぎない。恐るべき妖術を操り、呪殺や怪人などを生み出す事を得意としている。また優れた策士でもあり自らの策を成功させる為怪人もしくは自らをおとりにすることがある。『太平要術』を回収することに成功し、その書に蓄えられた怨嗟の声を悪用して何かを作り、首領に献上しようとしているが現時点ではそれは何か不明である。

### ゲルシヨツカー怪人

二種類の動植物の能力を持つことで互いが持つ短所を克服した改造人間達の総称でシヨツカーの改造人間を遙かに凌ぐ戦闘力を誇る。

#### ゲルシヨツカー戦闘員

怪人の指揮の下で悪事を働く、ゲルシヨツカーの構成員で、戦闘力はシヨツカー戦闘員よりも遙かに上である。戦闘以外にも拉致や謀報などの任務もこなす。また、彼らは裏切り防止の為のゲルパー薬という恐るべき薬を飲まされており、3時間ごとに服用しないと死んでしまう。また、研究や分析を担当する白のスーツと白衣を着用した科学戦闘員もいる。

ネズミマムシ 身長180? 体重65? 作戦名「ネズミビール  
ス作戦」

弱点：マムシの頭を伸ばさなくては毒ガスが使えない。

東京の下水道にて捕獲したドブネズミに九州の山中で捕獲したマムシを組み合わせた合成怪人。ネズミビールスという恐るべき細菌を体内で合成し、それを口からまき散らすことで周囲にいる敵を死に至らしめる。また左手のマムシの頭からは毒ガスを吹き出す。

タコガラス 身長190? 体重70? 作戦名「不明」

弱点：不明

太平洋近海で捕獲した突然変異種の大ダコにブータンの山脈で捕獲したワタリガラスを組み合わせた合成怪人。両手の翼についているタコの足をむちの様に扱い、敵の首を締め上げ窒息死させる戦法を得意とする。また、口からは『タコスミ爆弾』という破壊力のある墨を吐き、カラスバネミサイルという羽状のミサイルを放つ攻撃を

行う。

ワニマジロ 身長175? 体重90? 作戦名「不明」

弱点：不明

オーストラリア北部の河で捕獲した凶暴なイリエワニにアルゼンチンの北東部で捕獲した大アルマジロを組み合わせた合成怪人。全身はダイヤモンドよりも硬く、体を丸めて繰り出す『砲弾スクリューボール』はショットカーの怪人アルマジロングの『弾丸スクリューボール』よりも遙かに威力が上であり、分厚い壁をも破壊する。また水中戦も得意としており、敵を水中に引きずり込み、巨大なあごでかみ殺し、口からは火炎も吐き出す。

クワガオオカミ 身長176? 体重70? 作戦名『戦闘員増員計画』

弱点：頭部にあるクワガタの角を折られると、戦闘力が低下する。

幽州の山中で拉致した黄巾党のアニキに幽州の山中で採取したオオクワガタ、ウラル山脈で捕獲したロシアオオカミを組み合わせた合成怪人。剣の名手で俊敏な動きで敵を翻弄し、クワガタの大顎状の剣で斬り殺す。怪人になったことで彼は凶悪さが増し、愛紗、鈴々も凌ぐ戦闘力を手に入れた。

サルカズラン 身長150? 体重49? 作戦名『戦闘員増員計画』

弱点：体重が仮面ライダーよりも軽い。

幽州の山中で拉致した黄巾党のチビに呉の山中で捕獲したキンシコウ、スリランカの山中で採取したウツボカズラを組み合わせた合成怪人。クワガオオカミよりも俊敏な動きで敵を翻弄し、隙について右手にあるウツボカズラから溶解液を噴出して溶かしてしまう。また、本作で見せる機会はなかったが、どんな急な壁や木でもよじ登る。

クマヤステ 身長220? 体重130? 作戦名『戦闘員増員計画』

弱点：ヤステの部分は人間にはちぎれないが、仮面ライダーの力なら簡単にちぎれてしまう。

幽州の山中で拉致した黄巾党のデクに魏近くの山中で捕獲したツキノワグマ、幽州付近で採取したヤステを組み合わせた合成怪人。怪力とヤステの腕を武器に敵に挑む。みかけによらず俊敏で素早い動きで、相手を翻弄し、ヤステの腕と足には本来ヤステが持たない毒が仕込まれており、相手を毒殺する。また、ヤステの腕を伸ばすことで相手の首を締め上げられる。

トラゾウガメ 身長180? 体重 120? 作戦名『義勇軍殲滅作戦』&『桃花村大火事作戦』

弱点：防御力は桁外れに高いが、同じ箇所集中攻撃されると甲羅にヒビが入る。

南蛮の地方で捕獲したベンガルトラに、ガラパゴス諸島で捕獲したガラパゴスゾウガメを組み合わせた合成怪人で暗黒魔術師の自信作。怪力で相手を苦しめ、口から吐く殺人火炎は改造人間をも焼き尽くし、灰に変えてしまう。また防御力が高く、ライダーキックを跳ね

返し、頭、両手、両足を甲羅に引っ込めて繰り出す『ゾウガメアタック』という技で敵を吹っ飛ばす。

カエルトンボー 身長175? 体重50? 作戦名『黄巾党兵抹殺作戦』&『太平要術回収作戦』

弱点：羽は再生不能なので失うと空中に逃げられなくなる。

アマゾンのジャングルで捕獲したヤドクガエルとブラジルの熱帯雨林で採取したハビロイトンボを組み合わせた合成怪人。口から強力な猛毒液を吐き、あらゆる生物を苦しめてから殺してしまう。また長く伸ばした舌で相手の首を締め付けることができ、空をマツハ1の速度で飛ぶ。

ハチツバメ 身長 169? 体重45? 作戦名『黄巾党兵増員計画』

弱点：武器である右手の毒針状の剣を折られると戦闘力が低下する。

黄巾党首領『張三姉妹』の一人、張宝こと地和に日本の山中で採取したスズメバチ、ジャワ島で捕獲したツバメを組み合わせた合成怪人。フェンシングの名手で毒針状の右手の剣で敵を突き、シヨック死させる。また空中をマツハ2で飛び、声で人々を操り、意のままにする能力もある。



## ゲルシヨツカー怪人大図鑑（後書き）

次回、『三国、暴君董卓を討つ為、袁紹、袁術の元に集うこと』です。

お楽しみに！

白蓮

「はあ・・・」

華琳

「ふう・・・」

本郷猛

「どうしたんだ？ 頭痛そうにため息ついて・・・」

華琳

「それは次回、あいつらが出るからよ」

本郷猛

「あいつら・・・作者がいつている袁紹と袁術の事か？ なぜ、その人達が出ると分かっただけでため息が出るんだ？」

白蓮

「それは次回のSSを読めば、なぜ私達がため息を出すのか分かるぞ」

三国、暴君董卓を討つ為、袁紹、袁術の元に集うこと（前書き）

お待たせいたしました。　いよいよこの作品も董卓軍との戦いに入ります。

当然ながら今回もゲルシヨッカーが関与しています。

後、特に袁紹、袁術の登場の仕方を派手にしてみました。  
それではどうぞ！

三國、暴君董卓を討つ為、袁紹、袁術の元に集うこと

ここは漢王朝の皇帝である霊帝が政治を行っている朝廷。

今、大將軍である何進という女性が霊帝の元へと向かおうとしていた。

何進

「陛下より急なお召しとの事じゃが、何様じゃろ……?」

その時自分の周りを霊帝の後継者候補の一人で仲の悪い張讓と彼が率いる

親衛隊にとりかこまれてしまう。

何進

「何のつもりじゃ!? 張讓!」

張讓

「何のつもりとは見苦しいですね何進將軍……」

何進

「何っ!?!」

張讓

「フッフ……何進大將軍……いや……逆賊何進! 貴様を霊帝暗殺の罪で逮捕する!」

何進

「何っ!？」

何進は我が耳を疑った。靈帝が暗殺されたのいうのだから・・・しかもその身に覚えのない罪を今自分に着せられようになってい

何進

「ま、待てっ! 張讓それは何かの間違い・・・」

張讓

「問答無用っ! 取り押さえろ!」

張讓がそういうと、兵達が一斉に何進と護衛の二人を取り押さえた。

何進

「ぐっ! は、離せ!」

張讓

「ふふふ・・・」

そして張讓はゆっくりと何進に近づくと・・・徐に懐から

何か薬を飲ませる。

何進

「んぐぐっ!?!」

(ゴクン・・・)

何進

「ガハアツ！ 張讓貴様妾に何を飲ませ・・・？」

張讓

「じきに分かりますよ・・・連れて行け！」

「はっ！」

兵が何進を連れて行くと、張讓はその矛先を何進の護衛に向けた。

張讓

「さてと・・・貴方達にはここで死んでもらいましょう」

「な、何ッ！？」

「張讓・・・何進大將軍を連行しただけではなく我らにまで何をするきだ！」

張讓

「ふふふ・・・靈帝を始末し、何進に例の薬を飲ませた今、貴方達にも

用はないのですよ」

「何ッ！？」

護衛の二人はようやく話が見えてきた。どうやら、靈帝を暗殺したのは目の前に

いる張讓の様である。

そして張讓は

張讓

「フッフ・・・全ては偉大なるゲルシヨツカーの為に・・・」

「何ッ・・・げる？・・・それは一体」

護衛が張讓に問おうとしたとき、張讓の姿が突如ゴキブリとカビを組み合わせたような

化け物に変わり、そして周りの兵達も

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

着ている物を脱ぎ捨て、正体を現す。

ゴキブリカビ

「ブブブブ・・・！」

「うわああっ！ ば、化け物っ！」

ゴキブリカビ

「僕はゲルシヨツカーの怪人、細菌使いのゴキブリカビだっ！」

「た、助けッ・・・」

護衛は助けを呼ぼうとしたが、誰にもその声は届かず、

そして目の前の怪人は口から何か白い粉を吹き出し、目の前の二人に浴びせた。

(ブシャアアア！)

それを浴びた二人は苦しみ出す。

「ガアアアア……」

「ぐ、苦しい……」

ゴキブリカビ

「ブブブブ……くくく、どうだ？ 苦しいだろう？ 僕の細菌を浴びた奴は

苦しみなから、……やがて体に生えてくるカビの養分になって死んでいくのだ」

ゴキブリカビがそう言うと、護衛はそのまま倒れてしまう。

(ドサツ！)

その時、ゲルシヨツカーの戦闘員はとっさに息を確かめる。

ゲルシヨツカー戦闘員D

「まだ息があります……」

ゴキブリカビ

「ブブブブ……ほっておいても、どうせこいつらは助かりません  
どっか誰にも見つからない所にも捨てなさい」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

その頃、兵・・・もといゲルシヨッカー戦闘員に連れて行かれた  
何進はある部屋の前に捨てられていた。

そこは皇帝に使える洛陽の領主董卓こと月、そして彼女に仕える武  
将呂布こと恋が滞在し

ている部屋だった。

その部屋にいる月と恋は霊帝が張讓に暗殺されたこと、何進がはめ  
られ毒薬を飲ま

された事を知らないでいた。

その時、部屋で執務をしている月は外からかすかな音がしたことに  
気づく。

月

「・・・誰か外にいるのかな？ 恋ちゃん、開けてみて」

恋

「・・・分かった」

そして、恋が扉を開けた途端・・・二人は驚く・何とそこには大  
將軍である

何進が倒れていたのだ。

月



「か、何進將軍っ!？」

月は慌てて、何進將軍に近づき、彼女に呼びかけた。

月

「何進將軍しつかりして下さい！ 何進將軍！」

必死に呼びかけても反応がない為、恋は思わず、月を何進から離し  
彼女に息があるか確かめる。しかし……

恋

「……駄目」

恋は首を振りながら、もう手遅れだと彼女に伝えた。

月

「そ、そんな……一体誰が何進將軍を……えっ？これは……」

何進の胸元に何かがあるのに気づき、思わず手に取ると

それは毒薬と水筒だったのだ。不審に思った恋はそれが何者かの  
策であることに気づき

とっさに彼女からそれを取り上げようとしたが……

張讓

「か、何進將軍!？」

なんとそこに月が現れるのを待っていたかのように張讓が姿を現し、

わざとらしく

慌てふためる。そして……

張讓

「者ども！ であえであえ！ 靈帝に続き、何進將軍が董卓に暗殺されたぞ！」

張讓の声に反応して朝廷内にいた兵達がこちらに向かってくる足音が聞こえ

てくる。

月

「えっ！？ ち、違い……」

月は慌てて何進を殺したのは自分ではないと言おうとしたが、恋に止められた。

恋

「逃げる……恋達、嵌められた」

月

「!?!」

月は恋のその言葉で自分達が嵌められたことをしり、そのまま恋に連れられて

兵達が来る前に逃げ出した。

そして張讓は二人を追うわけでもなく、ただ逃走する二人を見送るだけであった。

張讓

「計画どおり、逃げましたね。 ですが……洛陽に帰ったらあなた達に

はやってもらうことがまだありますよ……フフフフ……」

張讓は不気味に笑うとその場を去り、後は兵達が董卓を探して慌てふためく

声が響くだけであった。

数週間後、靈帝、何進大將軍が董卓に暗殺され、しかも悪政で民を苦しめ、逆らう者は次々

と殺しているという噂があつたという間に三国中に伝わった。

朝廷より董卓討伐の命を受けた名門とされる袁家の袁紹はめんどくさがりながらも

各諸侯に『志あるならば、悪政を続ける暴君董卓を討つ為に自分の元に集え』と知ら

せる。そしてその手紙は本郷率いる義勇軍にも送られたのだ。

袁紹の呼びかけに答え、義勇軍は出陣し反董卓連合軍がいる本拠地まで赴いた。

目的の地までつくと軍の代表である本郷猛、桃香は軍議に参加する為

に各諸侯が集まっ

ている場所に行こうとしたとき、幽州の太守、白蓮も向かっているのを見かけた。

桃香

「あつ！白蓮ちゃんだ！ お〜い白蓮ちゃん！」

すると白蓮は元気がないように彼女にこう答える。

白蓮

「ああ・・・桃香か」

桃香

「白蓮ちゃんも袁紹さんに呼ばれたの？」

白蓮

「そつだ・・・ハア〜」

今度は浮かない顔をした。

本郷猛

「どうしたんだ白蓮？ なぜそんなに浮かない顔をしているんだ？」

白蓮

「ああ・・・私達を呼んだのは袁紹、袁術という武将ということはお前達も知っているな？・・・」

本郷猛

「ああ、だがその袁紹と袁術がどうしたんだ？」

白蓮

「実はその二人にはあまり領主としていい噂がないんだ」

本郷猛

「はっ？」

桃香

「それってどういう・・・」

白蓮

「ああ・・・」

すると白蓮は二人にこう説明しだした。袁紹は名門である袁家の出身であること

を鼻にかけているが、実際は誰もが認める無能人でかなり浮世離れした人物であること。

ほとんどの仕事は部下任せにしている、自分では何もしないことが多いと噂があること。

しかし、いとこのわがまままで有名な袁術に比べたら、袁紹はまだましな方であることを説

明しだした。

本郷猛

「そついう奴らなのか？袁紹と袁術って・・・」

白蓮

「実際に会ってみたらお前達も私が頭を抱える理由も理解できるぞ」

二人

「……………」

そして二人は白蓮と共に袁紹の待つ天幕までそこには、同じく袁紹に呼ばれたのか

曹操こと華琳、春蘭、秋蘭、そして孫策こと雪蓮、孫権、周瑜がいた。

華琳

「あら貴方達も袁紹に呼ばれたの？」

雪蓮

「は〜い猛 お久しぶりね」

本郷猛

「華琳、雪蓮、君達も来ていたのか」

華琳

「ええ・・・袁紹の奴に呼ばれて仕方なくきてやったのよ」

雪蓮

「それに、これ以上民を苦しめる董卓を同じ領主として見過ごす事もできないわよ」

どうやら孫策の場合は同じ領主として民を苦しめる董卓の悪政に怒り、

これを討つ為、あえて無能で有名な袁紹の元までやってきたようだ。  
とその時、突如その場が暗くなる。

本郷猛

「な、何だ？」

春蘭

「て、敵襲か!？」

その二人は敵が来たのかと思い、一瞬身構えるが・・・

華琳

「落ち着きなさい二人とも どうせこれは・・・」

華琳は何故暗くなったのかを知っており、その訳を説明しようとしたとき

今度は何か楽しそうな音楽が鳴り出した。

そして突如明るくなると、今度は袁軍の武将らしき少女二人が入ってきて

マイクのような者を出すところ言い出す。

顔良（斗詩）

「さあさあ、皆さんお待ちせいたしました！いよいよあの方達の登場です！」

文醜（猪々子）

「三国一の名門袁家の現当主にして、私達の主袁紹様と荊州の太守袁術様です」

ふたりの少女がそういうと今度は一番前にある舞台が煙に包まれる。

すると……

??

「おーっほっほっほっ！」

??

「にょほほほほほ！」

今度は気品のある笑い声と、子供が笑う声が響いてきて煙が晴れると

そこには自分達を呼んだ派手な鎧を身につけた袁紹、そして側にその従姉妹袁術、そして

袁術の側近と思われる七乃という少女がいた。

袁紹

「皆様ようこそおいで下さいました 私が名門袁家の当主袁紹ですわ！

本日は私の呼び出しに答えていただき感謝しますわ 私がいるからには

もう連合軍は勝ったも同然ですわよ おーほっほっほ！」

袁術

「妾は袁術なのじゃ！ 皆の者くるしゅうない 楽にせい！」



七乃

「きゃーっ！ さっすが美羽様！ 器の広さも三国ー！」

袁術

「によほほほ！ もっと褒めてたもう七乃！」

二人の少女は馬鹿笑いをしており、前に座っている本郷達が引いている事にも気づいていない。

そして本郷と桃香ですら呆れて何も言うことができない。

白蓮が頭を抱えるのも理解できる用な気がしてきた。

本郷

「・・・・・・・・・・」

桃香

「・・・・・・・・・・」

白蓮

「なっ？ いうとおりだろ？」

白蓮は桃香と本郷にこっそりこっそりこつ言った。

そして辺りがシーンと静かになると袁紹はこつ言い出す。

袁紹

「あら皆さん感激の余り言葉も出ませんか？ 嬉しい限りですわ」

華琳

「相変わらず派手な演出と無駄使いがお好きなようね袁紹」

袁紹

「あら。クルクル小娘 褒めてくれますの？」

華琳

「別に褒めてないわよ」

袁紹

「あら、そう」

袁紹は華琳が言っていた事は別に気にしていないようである。

そして今度は袁術が雪蓮に話しかける。

袁術

「おおつ孫策ではないか！ お主達も来たのか？」

雪蓮

「ええ・・・まさか貴方も袁紹に呼ばれていたとはね」

袁術

「妾は汗臭い事は嫌いなのだが、朝廷の命ではやむを得まいのじや」

雪蓮

「ねえそれよりもいつになったら、我が軍の合流を認めてくれるのよ？」

袁術

「それはまだまだ駄目じゃ」

七乃

「はい」 まだまだ元孫堅軍の合流は許可できません」

雪蓮

「なんでよ！ 黄巾党の乱で我が軍は十分な戦果を上げたでしょう？」

冥琳

「そうだ！ いつまで貴方達は約束を反故にする気だ！」

二人は真面目に聞いたにもかかわらず、二人は

袁術

「妾が駄目といたら駄目なのじゃ」

七乃

「そうだそうだ」

(ビキッ！)

ふざけた答えを出したのでさすがに器の大きい雪蓮も我慢できなくなり、

おもわず袁術と七乃を殴りたくなったが軍師で親友の冥琳、そして妹の

蓮華に止められる。

冥琳

「駄目よ雪蓮・・・今は堪えて」

蓮華

「そうです。今はまだその時じゃありません姉様」

雪蓮

「分かってるわよ」

二人にそう言われ、雪蓮は怒りを抑える。

気まずい空気が天幕に流れる中、袁紹はこう言い出す。

袁紹

「え、ええっと・・・では気を取り直して、早速ですが董卓さんを討伐する為の

軍議を始めますから皆さん、席について下さい」

袁紹がそういうとその場にいた者はとりあえず、席に着いた。

袁紹

「さて・・・こうして私の下にこうして集まって頂いたのは董卓さんの

ことですね 皆さんも知っていますように、董卓さんは靈帝を暗殺した上、

何進將軍も亡き者にしたあげく、今も悪政で人々を苦しめているそうです

わ ではこのお馬鹿さんを討伐する為、必要な物はなんでしょう？」

その場にいた者はそれが分からず、黙っていると袁紹は

袁紹

「そ・れ・は・・・強く、美しく、門地の高い・・・三国一の名家  
出身の

統率者ですわ〜!!!」

袁紹がこういうと今度はその場に冷たい風が吹き込んできた。

本郷猛

「・・・・・・・・」

桃香

「・・・・・・・・」

華琳

「・・・・・・・・」

白蓮

「・・・・・・・・」

雪蓮

「ふあああ・・・」

直接自分が統率者になるとは聞いていないが、その言葉は自分を

統率者にしろと言っているようなものである。

余りのくだらなさに雪蓮があくびをあげていたとき、袁紹はこうい

う。

袁紹

「あら？ 意見はないという事は全員賛成という事でこの袁紹がこの連合の指揮を執りますわよ？」

本郷猛

「……好きにすればいい」

華琳

「はっ！ 勝手にすれば？」

雪蓮

「異論なし。だけど好き勝手にやらせてもらおうよ」

袁紹

「おゝほっほっほ！ 情けない方々ですわね！ まあ、私が皆様の面倒を見て差し上げますわ！」

袁術

「によほほほほ！ 指揮官就任おめでとうなのじゃ！ 麗羽姉様！ のう？ 七乃」

七乃

「はい」 これ以上おめでたい日はありませんね」

袁紹と袁術が馬鹿騒ぎしている中、本郷は桃香と白蓮にこう言う。

本郷猛

「大丈夫か？ 連合軍の指揮者があんなお調子者で・・・」

桃香

「さ、さあ・・・」

白蓮

「それよりも董卓ってどんな奴か知っているか？」

桃香

「いいえ・・・」

桃香は董卓がどんな人物か知らないそうであるが、本郷はこういう。

本郷猛

「俺の知る限りで董卓は心拗け残忍な上に暴虐非道で、人の命はど  
うと思っていない人物のはず。恐らく是程凶悪な人間はいないだろ  
う」

桃香

「ええっ！？ そんな人なのですか？」

そして本郷はこう考え込む。

本郷猛

「（董卓は確か政治家としてはカリスマ的人物でもあったが、悪政  
で人々を苦しめた  
あげく最後は絶世の美女とされる貂蝉を巡って、我が子同然にかわ  
いがっていた呂布  
に殺されたという）」

本郷がそう考えているとき、袁紹が本郷にこう言う。

袁紹

「ちょっと聞いていますの!?! 本郷さん!?!」

本郷猛

「あつ! ああ、すまない! 聞きそびれていたで?」

袁紹

「貴方達は公孫贄さんと共に後曲にて出陣を待機して下さいませ」

本郷猛

「分かった」

袁紹

「では解散! 各自出陣の準備ができた者から出陣し、?水関を守る董卓さんの

軍を撃破して下さい」

袁紹がこういうと軍議が終わり、それぞれが自分達の軍がいる所へと戻っていった。

天幕に袁紹達以外なくなると袁術はこういう。

袁術

「はあゝ軍議というものは疲れるのゝ 七乃 蜂蜜水を持って参れ」

七乃

「はい ただいま」



七乃がそういうと、袁術用に持ってきた蜂蜜水が入った樽の方へとむかう。

そして天幕の外では、軍議を見ていた呉の兵らしき者はこういう。

????????????

「フフフ・・・奴ら、思った通り、董卓を討伐する気だな

史実通りだ。そして話の内容から？水関では魏と呉の連中が董卓軍の

相手になりそうだ さっそくこの事を暗黒魔術師とゴキブリカビ様に報告

しなくては・・・」

そしてその男は両手をクロスさせると

ゲルショツカー戦闘員

「ギイツ！」

そうさげんだ途端、その呉の兵士はゲルショツカー戦闘員になり、姿をくましました。

果たして、ゲルショツカーは今度は何を企んでいるのであろうか？

(ル・ル・ル〜ルルルッ！『アイキャッチ 新一号』)

三国、暴君董卓を討つ為、袁紹、袁術の元に集うこと（後書き）

我らの仮面ライダーを狙うゲルショッカーが送った次なる使者は？  
水関の魔物ホホジロギリ！？水関で本郷猛を待っていたホホジロ  
ギリは彼に一对一での戦いを挑む。果たしてこの怪人を倒し？水関  
を突破できるのか！？ 次回、「ホホジロギリ  
？水関の死闘！」にご期待下さい！

ホホジロギリ ？水関の死闘！ (前編) (前書き)

話が長くなりそうなので、今回も前編、後編に分けますので、この事をご理解の上SSSをお楽しみ下さい。

## ホホジロギリ ？水関の死闘！ （前編）

（ル・ル・ル〜ルルルッ！『アイキャッチ 新一号』）

その頃、なぜか洛陽にいた張讓はゲルシヨツカー戦闘員の報告を聞き、？水関の戦い

では魏と呉が董卓軍最初の相手になることをしる。

張讓

「そうですか・・・？水関の最初の戦いでは魏と呉の軍が相手になるんですね。」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！ 忌まわしき本郷猛率いる義勇軍は公孫賛の軍と共に後曲にて出陣を待機するそうです。」

張讓

「なら、魏と呉の戦力を大幅に削り、本郷猛をおびき出すまでです。奴を倒せば、もはや我々に敵う奴はいなくなります。ご苦労様でした下がっていいですよ。」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！ では後は暗黒魔術師様に報告を・・・。」

張讓

「頼みますよ。」

張讓がそういうと戦闘員はその部屋を後にする。そして張讓はその部屋にいた者に

こう言い始めた。

張讓

「さてと聞いたとおりです。明日董卓軍を倒す為、連合を組んだ大陸に割拠する諸侯が攻めてきます。貴方達にはそいつらと闘ってもらいますよ」

張讓は董卓軍の軍師賈馱、真名を詠という少女にこういった。

詠

「分かってるわよ！ 戦えばいいんでしょ！戦えば！」

張讓

「おや？意外と素直な返事ですね」

詠

「逆らえばどうなるか分かってるからよ」

詠は自分の目の前で取り押さえられている親友の月とその両親を見つめる。

今すぐにでも助けたいが、またあの姿になられたら、張讓を取り押さえようとした

自分達の兵と同じ目にあわされるのが分かっていたからである。

廊下には体にカビが生えた兵がいくつも倒れている。

それを知っていてか、三国最強の武将で有名な呂布ですら手が出せなかった。

張讓

「ふふふ・・・それでいいんですよ。本郷猛を倒せば、暗黒魔術師様も

首領もこの世界に用がなくなれば、後は僕の好きにしていって言うつていま

したからね。その為には本郷を倒さなければならない。もし、僕の邪魔をしたときは・・・」

張讓はチラツと戦闘員の方を見ると戦闘員は今度は短剣を意識のない月の首下

に当てて、いつでも刺せるようにした。

張讓

「董卓を生かすも殺すも貴方達次第です。」

詠

「張讓・・・あんた人間じゃないわ・・・本物の悪魔よ！」

張讓

「ゲルシヨツカーは目的の為なら手段は選びません。フフフフ・・・」

すると張讓はその姿をゴキブリカビに変える。

ゴキブリカビ

「ブブブブブ……、仮面ライダーとの戦いが楽しみです」

この様子を月に仕えていた武将の一人、張遼こと真名を霞という少女は

何もできないでいた。下手に手出しをすれば、月の命に関わると分かっていたからである。

霞

「（くっ！……うちが何もできへんやなんて……）」

力がありながら、何もできない自分が腹立たしくて仕方なかった。

そしてゴキブリカビは董卓軍の将、華雄にこう話しかける。

ゴキブリカビ

「さあ華雄、取引通り貴方には仮面ライダーと戦ってもらいますよ。勝てば、ゲルシヨツカーは董卓、そしてこの土地には今後一切手を出さない事を約束します。」

華雄

「分かっている。勝てば董卓様を解放して、お前のカビで死にかけている

奴らを治療してくれるんだな？」

ゴキブリカビ

「ブブブブブ……ゲルシヨツカーは嘘はつきません。」

華雄

「分かった……だが一つだけ頼みがある」

ゴキブリカビ

「何ですか？」

華雄

「仮面ライダーとは一対一の勝負で正々堂々と戦いたい。邪魔はしないでくれ」

「どうやら華雄は悪に屈しはしたが、武人の誇りまでは捨てたわけではないようである。」

ゴキブリカビ

「………いいでしょう。」

華雄

「あと前に頼んでいた件についてだが……」

ゴキブリカビ

「依頼通り、？水関を貴方の戦いやすい環境にしましたよ」

華雄

「かたじけない……」

ゴキブリカビ

「では期待していますよ華雄將軍……いやホホジロギリ」

ゴキブリカビがそう言うと、華雄はその姿をホホジロザメとカミキリムシ



を組み合わせた怪人、ホホジロギリに変える。

ホホジロギリ

「ガッブガブガブッ！ 仮面ライダーは私が倒す」

怪人に変身した彼女は主を救う為、仮面ライダーと戦う事を決意した。

ホホジロギリ ? 水関の死闘! (前編) (後書き)

次回、仮面ライダーVSホホジロギリ 果たして勝利するのはどっちだ!

ホホジロギリ ? 水関の死闘! (後編) (前書き)

今回は仮面ライダーとホホジロギリの死闘を描いたSSです!  
果たして前回のSSで張譲は? 水関に何をしたのか!?

ホホジロギリ ？水関の死闘！ （後編）

翌日、董卓軍を倒す為、連合軍は攻撃を開始した。

この戦いにもゲルシヨッカーが絡んでいるとは思いません・・・  
本部で指揮を執っていた袁紹は魏と呉がなかなか？水関を突破したと  
報告にこないのが苛立っていた。

麗羽

「ちよつと！ 斗詩！猪々子！ ？水関を突破したって報告はまだ  
きませんの！？」

美羽

「麗羽姉様・・・少しは落ち着くのじゃ」

七乃

「そうですよ、焦っても戦いには勝てませんよ」

二人は麗羽をなだめようとしたが・・・

麗羽

「お黙りなさい！」

美羽

「ピイツ！」

七乃

「ヒイツ!？」

余りの迫力に二人は何も言えなくなった。

その時袁紹の軍の伝兵が何かを報告する為にやってきた。

「ご報告します!」

猪々子

「どうした?」

猪々子は何があつたのかその兵に尋ね、そしてその兵が言ったことに驚愕する。

猪々子

「ええつ!？」

麗羽

「どうしましたの猪々子?」

猪々子

「はい・・・実は?水関の前にいつの間にか巨大な池が作られていて、深さは大した事ないんですが、水に入って動きが鈍った兵が次々と董卓軍の的になっていいるらしいんです。」

何とか池を突破した兵もいるようですが苦戦しているそうです。」

麗羽

「なんですつて!？」

斗詩

「麗羽様・・・どうしましょう?」

麗羽

「キイー! こうなったら後方で待機させている義勇軍と貧乏領主の公孫贄さんの軍に出陣してもらいますわ!」

斗詩

「え?で、でも・・・前線がただでさえ混乱しているのに・・・そんな事したら余計混乱するのでは・・・」

麗羽

「お黙りっ! どの道、ここままた戦い続けても?水関を突破できなければ、連合軍が董卓の下へ行くのは無理の一言ですわっ! と・に・か・く! 義勇軍と公孫贄軍に前線に出ると指示しなさい!」

斗詩

「は、はいっ!」

斗詩はそう言つと義勇軍と公孫贄軍が待機している方まで向かう。

そして斗詩から麗羽の指示内容を聞いた本郷、白蓮、桃香達は呆然とする。

白蓮

「何ッ? 魏呉両軍の城門突破の援護の為、我々も前に出るだと? 本当にあいつがそういつていたのか?」

斗詩

「すみません。無茶な命令だつて分かつてるんですが・・・？水関にはあるはずのない  
巨大な池がいつの間にか用意されていて魏呉の両軍もその池がある  
せいで苦戦している  
らしいんです。」

愛紗

「池だと？・・・水堀でなくてか？」

斗詩

「はい・・・」

鈴々

「一体何の為に董卓軍は池を作つたのだ？」

斗詩

「それは分かりませんが・・・とにかく袁紹様の命令ですから・・・  
頼みます」

斗詩はそれだけというと麗羽のいる天幕まで戻る。

そして斗詩の姿が見えなくなると愛紗は本郷にこう聞いた。

愛紗

「どうしますご主人様？」

本郷猛

「・・・・・・やむを得ん。出るしかないだろう」

愛紗

「で、ですが……」

本郷猛

「連合軍では総大将の袁紹の命令は絶対だ。逆らうわけには  
いかないだろ」

愛紗

「分かりました」

本郷猛

「朱里、雛里。軍師としての君達の意見も聞きたい」

朱里

「そうですね……袁紹さんの作戦が『全軍の一斉突撃』ですからね  
要塞をしかも、正面が巨大な池で守られているのを攻めるなんて愚  
策としか

いいようがありませんが……」

雛里

「命令があるのでは被害を拡大ないように進軍するしかないでしょ  
う」

本郷猛

「分かった……では早速出陣だ！ 義勇軍は公孫贇軍と共に魏  
呉の

連合軍の援護に向かう！」

桃香

「分かりました！」



そして義勇軍は魏と呉の連合軍の援護に向かうと、斗詩の報告通り？水関の

正面には巨大な池があり、魏と呉の連合軍は水の中に入っては董卓軍が乗っている

小舟に飛び乗ったの戦闘を繰り広げていた。

そして辺りには董卓軍、そして魏呉の兵士達の死体であふれ、

歩くのも困難な状況であった。

本郷猛

「確かに、魏呉の大軍苦戦しているな……」

桃香

「でもご主人様……いつの間に董卓軍はこんな巨大な池を用意したのでしょうか？」

本郷猛

「いや、董卓軍だけでこんな巨大な池を用意できるとは思えない。何者かが手を貸したのかもしれない」

星

「主。もしかしてまたゲルショットカーでしょうか？」

本郷猛

「分からん……だが確かに奴らなら短期間でこんな巨大な池を作ること」

可能だろう」

本郷達が話し合っていると突然・・・

(ゴーン！ ゴーン！ ゴーン！)

？水関から董卓軍に対する合図の音が聞こえると突如、董卓軍が

城門の中へと戻っていった。

華琳

「えっ？」

蓮華

「何なの？」

董卓軍に苦戦していた華琳達も敵が城門の中へと撤退した様子を見て何か

策があるのかと思い。

華琳

「全軍！ 一旦義勇軍の方まで後退しなさい！ きつと何か罠があるはずだわ！」

雪蓮

「呉の軍も撤退だ！」

二人の王が命令を下すと、全軍義勇軍の方まで撤退していき池から這い上がった。

その場には一瞬静けさが訪れるが再び城門が

ギギギと開き出すとそこから？水関を守る將軍らしき人物が出てきた。

しかもたった一人で・・・

本郷猛

「彼女は一体？」

華琳

「あの女がこの？水関を守る将、華雄よ」

本郷猛

「あいつが？」

するとその華雄はこう言い始める。

華雄

「我が名は華雄！ この？水関を守る董卓軍の將軍だ！

連合軍よ！ まずは我々を相手に良く持ったほうだと褒めてやろう！」

華雄の姿を見た愛紗は彼女にこう叫ぶ。

愛紗

「華雄！ 私と立ち会え！」

華雄

「ほう？ その青龍偃月刀・・・お前が義勇軍の関羽か だがあいにく

私が戦いたいのはお前ではない」

愛紗

「何ッ・・・？」

華雄

「私が戦いたい相手は・・・」

華雄は自らの武器である金剛爆斧でその相手は誰か示した。

それは・・・

華雄

「本郷猛！ お前だ！」

本郷猛

「何ッ？」

桃香

「ええっ？ ご主人様と？」

鈴々

「お、お兄ちゃん・・・」

華雄が意外な人物を指名したことから連合軍で動揺が拡がる。

愛紗

「なぜご主人様がお前と戦わなければならぬんだ！」

すると華雄は今度は不気味に笑い始める。

華雄

「くくくつ……動揺しているな？ 無理はあるまい だがこの姿なら  
どうかな？」

すると華雄はその姿を、怪人ホホジロギリに変える。

ホホジロギリ

「ガッブガブガブッ！」

本郷猛

「何ッ！？ ゲルシヨツカーの改造人間！？」

一方魏の方……

華琳

「いつの間にあいつ怪人になったのよ！？」

秋蘭

「まさか今回の戦いもゲルシヨツカーが！？」

呉の方……

小蓮

「嘘でしょ？ あいつ化け物になっちゃった！」

雪蓮

「どうやら戦いの中で感じた嫌な予感が当たったみたいね」

冥琳

「まさか今回もゲルシヨツカーが関与してしようとは」

そして義勇軍の方では怪人ホホジロギリに向かって本郷はこう言う。

本郷猛

「ゲルシヨツカーの怪人か!？」

ホホジロギリ

「ホホジロギリ・・・それが私のもう一つの名前だ! 本郷猛  
連合軍を通して欲しければ、私の望みを叶えてもらおう!」

本郷猛

「何が望みだホホジロギリ!」

ホホジロギリ

「それは・・・貴様との一対一での勝負だ!」

本郷猛

「何ッ? 俺との勝負だと!？」

ホホジロギリ

「そうだ! もし私に勝てたなら、無条件でここを通してやる!  
ガッブガブガブガブッ!」

ホホジロギリはそういうと・・・

本郷は一瞬悩むが、董卓の下へ行くにはここを通るしかない。

本郷猛

「分かった・・・その勝負受けよう」

桃香

「ご、ご主人様!？」

愛紗

「いけません! 畏があるかもしれないですよ」

本郷猛

「いや、それはない　もし畏があつたとしてもいくら奴が怪人でも連合軍の前に

一人で出てくるなんて無謀に等しい。それに怪人を倒せるのはこの俺だけだ

後、奴には聞きたいことがまだある」

本郷はそう言うと義勇軍よりも前に出て変身する為のポーズを取った。

本郷猛

「・・・フンっ!」

(ピュイイイイン!)

本郷猛

「ライダー・・・」

本郷は左手を腰に当て、右腕を左側に持ってきてポーズをとると、

右腕をまた右側に持ってきて、今度は右腕を腰に当て、左腕を右側に持つ

てきた。

本郷猛

「変身っ！」

（ゴウン！）

すると本郷の腰から赤い風車のついたベルトが現れ、

本郷猛

「トオッ！」

本郷がそのままジャンプすると、ベルトから発した凄まじい光が彼を多い光が晴れると

仮面ライダーになった彼はホホジロギリの近くに着地してきた。

（ピュイイイイン！）

ホホジロギリ

「行くぞ！ 仮面ライダー！ 我が戦斧の錆にしてやる！  
ガッブガブガブガブッ！」

ホホジロギリはそう言つと仮面ライダーに飛びかかり戦斧を振り下ろそうとする。

しかし、



仮面ライダー一号

「ハッ！」

後少しの所で攻撃をかわされる。

ホホジロギリ

「チッ！ 運のいい奴だ！ ならこれならどうだ！」

そして今度は戦斧を振り回すが・・・

仮面ライダー一号

「トオッ！」

仮面ライダーは今度は後転でホホジロギリの攻撃をかわす。

そして今度は仮面ライダーがホホジロギリに攻撃してきた。

仮面ライダー一号

「トオッ！ トオッ！」

（バキッ！ バキッ！ ボゴッ！）

戦斧を持っている正面から殴りかかってきたのでホホジロギリは

戦斧で仮面ライダーの攻撃を防ごうとするも・・・

ホホジロギリ

「ガッブガブガブッ！ い、一撃、一撃が重い・・・  
まるで呂布だ！」

戦斧越してもホホジロギリの体に衝撃が伝わる。

そして仮面ライダーはこう言う。

仮面ライダー一号

「ホホジロギリッ！ 霊帝、何進將軍を暗殺したあげく悪政で人々を苦しめる

董卓を庇うばかりか、ゲルシヨツカーに魂を売ったのか！」

ホホジロギリ

「何ッ？」

事情を知らない彼のこの言葉はホホジロギリの逆鱗に触れてしまい

そして一瞬力を出し切り、戦斧で仮面ライダーをはねのける。

仮面ライダー一号

「グウッ!？」

ホホジロギリ

「貴様に・・・貴様に何が分かる!? 私が董卓様を庇うのも私が怪人になったのも・・・!」

仮面ライダー一号

「何だ？」

ホホジロギリは何か言おうとしたが

ホホジロギリ

「い、いや何でもない！ 今は勝負の最中だ！」

そしてホホジロギリは仮面ライダーに向かおうとしたが地上戦ではこちらが不利だと判断し、早速ゴキブリカビに用意させたこの池に入ることにした。

ホホジロギリ

「ついてこい仮面ライダー！ ガッブガブガブッ！」

(ドボンッ！)

ホホジロギリが池に飛び込むと仮面ライダーも後を追って

仮面ライダー一号

「トオッ！」

(ドボンッ！)

と池に飛び込んだ。

ホホジロギリ

「くくくっ・・・かかったな 仮面ライダー」

仮面ライダー一号

「何ッ!？」

ホホジロギリ

「分からないのか？ 私はホホジロザメとカミキリ虫の

合成改造人間だ ガブガブガブツ！」

仮面ライダー一号

「ハッ！」

仮面ライダーはホホジロギリが何を言いたいのか分かった。

そう、水中ではホホジロザメの能力を持っているホホジロギリの

方が有利なのだ。

仮面ライダー一号

「くっ！ 策にはまったか！ この池も俺と戦う為に用意したんだな！」

ホホジロギリ

「その通り くくく・・・今度はこちらの番だ！」

ホホジロギリは水中に潜り、姿を消す。

仮面ライダー一号

「ど、どこだ!？」

ライダーは神経を集中し、どこから攻撃してくるか分からない敵を

警戒しだす。

警戒していたその時、ホホジロギリはライダーの後ろに現れ、背びれ

を水中から出していたが、ライダーも連合軍も気づいていない。

そして・・・

ホホジロギリ

「私はここだ仮面ライダー！」

勢いよく水中から飛び出し、カミキリ虫の羽で速度を調節しながら仮面ライダーに戦斧をおろしっていった。

仮面ライダー一号

「はっ!?!」

ホホジロギリが背後にいるのに気づき、もう避けられないと判断した彼は

とっさにある行動をした。

(ドバーン!)

ホホジロギリが水中に落下したのと同時に水しぶきで連合軍の視界が遮られ、

一瞬どうなったか分からなかった。

そして水しぶきが晴れると・・・

鈴々

「あっ!」

鈴々はその光景に驚いた。なぜなら・・・

ホホジロギリ

「な、何ッ!？」

仮面ライダー一号

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何と攻撃を避けられないと判断した仮面ライダーは戦斧の刃の部分を白刃取り

していたのだ。

ホホジロギリ

「ば、馬鹿な!？ 我が一撃を受け止めたどっ!？」

仮面ライダー一号

「ホホジロギリっ・・・・・・・・確かにお前は強い。だが・・・」

そしてライダーは戦斧をホホジロギリから取り上げ、その戦斧を自分の後方に投げ捨てる。

仮面ライダー一号

「敵に自分がどこにいるのか教えたのが、運の尽きだったな!」

ホホジロギリ

「私は武人だ! この身、人でなくなっても決して卑怯な真似はせん!

ガッブガブガブッ!」

仮面ライダー一号

「そうか……お前は怪人になっても武人の誇りだけは捨てていないんだな？」

ホホジロギリ

「そうだ……さあ、止めを刺せ仮面ライダー！ 武器を取り上げられた時点で私の敗北は決まった」

ホホジロギリは自分の敗北をあつさり認め、自分に止めを刺すようにいう。

どうやらもう覚悟は決めているようだ。

仮面ライダー一号

「そうか……なら、せめて苦しめないようにしてやる」

(ピュイイイイン！)

そしてライダーはライダーキックを放つ時の体制を取り、ホホジロギリに止めを刺そうとしたその時！

(ブウウウウウン！)

突如、虫の羽音が聞こえたと思うと

朱里

「はわっ!?!」

雛里

「あわっ!?!」

その羽音の主は義勇軍の天才軍師を一瞬にして捕らえてしまう。

仮面ライダー一号

「な、何だ!?!」

異常に気づいたライダーが上空をみるとそこにはゴキブリとカビを混ぜた怪人が

朱里、雛里を捕らえていたのだ。

果たして、突如二人の目の前でゴキブリカビに捕まった朱里、雛里の運命はっ!?!?

つづく



ホホジロギリ ？水関の死闘！ (後編) (後書き)

次回、ゴキブリカビに武人の誇りを汚されたホホジロギリの怒りが爆発っ！

華雄 ？水関に死す！（前書き）

今回、ホホジロギリもとい華雄をライダーが助けることになります。  
果たして彼が彼女を救ったその理由は？

華雄 ? 水関に死す!

その空の上には朱里、雛里を人質に取ったゴキブリカビがいた。

ゴキブリカビ

「ブブブブブ……」

朱里

「はわわ……」

雛里

「あわわ……た、助けて……」

二人の少女は恐怖の余り、動くことも出ない。

仮面ライダー一号

「朱里! 雛里!」

ゴキブリカビ

「そこまでです仮面ライダー……動くところの二人の命はありませんよ」

仮面ライダー一号

「貴様もゲルシヨッカーの改造人間か!？」

ゴキブリカビ

「その通り。僕の名前はゴキブリカビです。」

ホホジロギリ

「ガ〜ブガブガブツッ！ ゴキブリカビ！ 何の真似だ！？」

ゴキブリカビ

「そんなことはどうでもいいでしょう？ さあ今のうちに  
仮面ライダーを倒しなさい」

ホホジロギリ

「私は言ったはずだ！ 戦いに水を差すなと！」

ゴキブリカビ

「ブブブブブ・・・私が約束を守ると本気で思っていたんですか？  
私もいったはずですよ？ ゲルシヨツカーは目的の為なら手段  
は選ばないと！」

仮面ライダー一号

「卑怯者め！ ホホジロギリっ！ こうでもしないと私と戦えない  
か！？」

ホホジロギリ

「ち、違う！ あれは奴が勝手にやっていることだ！」

ゴキブリカビ

「話はそこまでです。抵抗した時点でこの二人を殺しますよ」

ゴキブリカビは鋭い爪を朱里、雛里ののど元に当て、いつでもませ  
るようにした。

仮面ライダー一号

「くっ！」

この状況ではライダーはおろか、戦いを見ていた者達もどうすることもできない。

下手に手出しをすれば、二人の命が危ないことが分かっているからである。

ホホジロギリ

「ゴキブリカビ・・・貴様！」

ゴキブリカビ

「僕の目的は仮面ライダーを倒すこと。その為にあなたを利用しただけです。僕の目的の前では貴方の武人の誇りなど何の価値もありません！ ブブブブ・・・」

(ブチンッ！)

ゴキブリカビのその言葉で、怒りが頂点に達したホホジロギリは・・・

羽を激しく震動させ一気にゴキブリカビまで飛び立つと

ゴキブリカビ

「ブブっ!？」

ホホジロギリ

「ガッブガブガブッ！」

ゴキブリカビの顔を殴り飛ばすと、人質にしていた朱里、雛里を取り上げ

彼女達の仲間の方へと下ろした。

ホホジロギリ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

愛紗

「なっ？ 怪人が朱里と雛里を助けた？」

朱里

「あ、あの・・・」

ホホジロギリ

「すまん・・・」

ホホジロギリはそれだけいうと再びゴキブリカビの下へと向かう。

ゴキブリカビ

「何の真似ですか！？ ホホジロギリッ！」

ホホジロギリ

「黙れ！ 武人の名を汚す愚か者が！ガッブガブガブッ！」

怒りのあまり、ホホジロギリにはゴキブリカビの声が届いていない。

そして・・・

ホホジロギリ

「貴様の様な卑怯者にはこれを食らわしてやる！ ガッブガブガブガブッ！」

(ゴオオオオオオッ！)

ホホジロギリは口から火を吐き、ゴキブリカビに浴びせる。

ゴキブリカビ

「ギャアアアアアアッ！」

(ドボンッ！)

高熱に耐えきれず、ゴキブリカビは池に落ちる。

ホホジロギリが止めをさそうとした時

ゴキブリカビ

「ホホジロギリッ！ 董卓がどうなってもいいのですか!？」

ホホジロギリ

「うっ！」

ゴキブリカビの警告にホホジロギリは一瞬ためらい、動きが鈍る。

そして一瞬の間ができたのを見たゴキブリカビは……

ゴキブリカビ

「ブブブブブ……」

ゴキブリカビも口から火を吐き、ホホジロギリに浴びせる。

(ゴオオオオオッ！)

ホホジロギリ  
「グワアアアアッ！」

火炎攻撃に直撃し、そのまま池へと墜落したホホジロギリはそのままとの華雄の姿に戻る。

華雄  
「ぐっ！」

何とか彼女は水面に浮上したが、頭上にはゴキブリカビがいた。

ゴキブリカビ

「ふふふ・・・炎を吐けるのは貴方だけと思ったら大間違いですよ」

華雄

「く、くそう・・・！」

ダメージが大きすぎてもはや華雄には怪人になる力も、戦う力も残っていないかった。

ゴキブリカビ

「さあ、裏切り者にはここで死んでもらいます！・・・  
死ねえええええっ！」

（ブウウウウウウン！）

ゴキブリカビが華雄に止めを刺す為、一気に地上に降りていった。

華雄はもう駄目だと思い、一瞬目をつぶるが、



ゴキブリカビ

「ブブツ!？」

華雄

「……………」

何か異変が起きたので目を開けてみると

華雄

「なっ!？」

仮面ライダー一号

「……………」

何と仮面ライダーが、自分の前に立ちゴキブリカビの攻撃を受け止めていたのだ。

ゴキブリカビ

「お、己っ!仮面ライダー 僕の邪魔をするのですか!？」

仮面ライダー一号

「それ以上やるなら、私が相手になるぞゴキブリカビ!」

ゴキブリカビ

「小癪な! ならお望み通り相手を……………」

ゴキブリカビが仮面ライダーと戦おうとしたその時

??????

「そこまでですゴキブリカビ」

何者かがゴキブリカビの心に話しかけてきた。

ゴキブリカビ

「そ、その声は!?!」

突如、ゴキブリカビの様子がおかしくなったのでライダーも動きを止める。

??????

「後は私がケリをつけます。貴方は洛陽に戻ってライダーを待ちなさい」

ゴキブリカビ

「そ、そんな! 僕はまだ戦え……!」

??????

「ゴキブリカビ! ここで仮面ライダーに敗北したら、勝手な行動をして作戦を乱しただけでなく、敵に敗北した罪で貴方首領に処刑されますよ!」

謎の声がゴキブリカビにそういうと、

ゴキブリカビ

「ぐっ……! わ、分かりました。命拾いしたな! 仮面ライダー!

洛陽で今度こそ決着をつけてあげます! ブブブブ……」

ゴキブリカビはそういうとそのまま、?水関を飛び越え、洛陽の方

へと行ってしまった。

仮面ライダー一号

「行ったか……」

呆然と立ち尽くす華雄を通り過ぎ、仲間達の元へと戻ろうとしたとき我に返った

華雄はライダーにこう聞く。

華雄

「何故だ！？ 何故私を助けた！？ お前に取って私も倒すべきゲルシヨツカーの怪人じゃないのか！？」

華雄にこう言われ、ライダーは振り返るところ答える。

仮面ライダー一号

「お前は武人として、怪人の能力を使わずに私と正々堂々戦った。そしてゲルシヨツカーを裏切る事になる事を承知である子達を助けたな？」

華雄

「そつだ……それがどうした？」

仮面ライダー一号

「それはお前が武人としての誇りを失っていない証拠だ。私の世界『天の国』には武士道精神と呼ばれるものに『敵に塩を送る』という言葉がある。これ

は昔、私の世界にいた上杉謙信という武人が、敵将の武田信玄の領

国が塩

の不足に苦しんでいるのを知り、塩を送らせて助けた事に由来している。つまり、敵であっても困った時はお互い様と言うことだ」

華雄

「そ、そうなのか・・・」

華雄は仮面ライダーにこういわれ、なんとなく納得した。

仮面ライダー一号

「それにお前は、いや董卓軍はゲルシヨッカーに魂を売っていないな？

大方、何か弱みを握られて悪政を行っているな？ 話してくれ —

体何が

あつたのかを」

華雄

「そ、それは・・・」

華雄が何か話そうとしたその時、連合軍にも見えない位置から暗黒魔術師

が手を向けて、ライダーを狙っていることに気づいた。

暗黒魔術師

「ふふふ・・・」

そして彼の手からは黒い火炎球の様な物がライダーに放たれる。

華雄

「はっ！ 危ない！」

華雄はとっさに彼をどかして代わりに自分が暗黒魔術師の攻撃に当たってしまふ。

華雄

「ぎゃああああっ！」

暗黒魔術師

「ちっ！ 本郷にダメージを負わせてゴキブリカビを有利な立場にしようと思

ったのですが・・・まあいいでしょう 予定通り裏切り者を始末したのですから」

暗黒魔術師はそういうと黒い炎に包まれて消える。

そして？水関の池では息が絶えかけている華雄を抱きかかえて

変身をといた本郷は呼びかける。

本郷猛

「おいっ！ 華雄！ しっかりしろ！」

華雄

「うっうう・・・本郷か・・・」

本郷猛

「華雄・・・なぜこんな馬鹿な事を・・・」

華雄

「ふっ……敵に情けをかけられて助けられたのに、目の前でその敵に死なれては夢見が悪いんでな……」

本郷猛

「お前は、最後の最後まで武人の誇りを失わなかったんだな？」

華雄

「そうだ……お前の言う敵に塩を送るといふ言葉の由来に私は心うたれた……うっ！ ゲホッ！ ゲホッ！」

華雄は口から血を吐き出し、それをみるともう自分が死ぬことを悟る。

本郷猛

「華雄！もういいしゃべるな！死ぬぞ！」

華雄

「いや、どうやら私はもう助からないみたいだ……お前の勝ちだ本郷猛！」

本郷猛

「華雄……」

華雄

「さあ行け！ 約束通り、ここを通す……」

（パチンッ！）

華雄は最後の力を振り絞り指をさらし？水関に合図を送ると、

それと同時に城門が開き始め、そして武器を捨てた董卓軍が出てきた。

愛紗

「こ、これはっ!？」

華琳

「どうやら本郷の勝利を？水関の董卓軍は認めたまいたいね」

本郷猛

「すまない華雄……」

そして最後の力を使った華雄は……

華雄

「ぐっ……本郷……董卓様を……うっ……ガハッ……」

何かいおうとした華雄は強く吐血するとそのまま動かなくなり、目を閉じた。

彼女の命がつきだことを確信した本郷はそのまま華雄の亡骸を抱えて池から上がる

と、連合軍の移動の邪魔にならない場所に移す。

そして彼女の武器を隣に置き、彼女の両手を胸に置いて顔を安らかに眠る表情にした。

主の為に戦い、自分を庇って命を落とした武人に対しての本郷のせめての

敬意だとこの戦いを見ていた者達は誰もがそう思った。

その頃、華雄が死んだことをまだ知らない虎牢関では三国志最強の武人で有名な呂布奉先こと恋が待ち構えていた。

凄まじい闘気を発して……

恋

「月に近づく奴……殺す！」

つづく



華雄 ？水関に死す！（後書き）

我らの仮面ライダーの前に立ちふさがる次の敵は最強の武人呂布奉先。

自分の世界では最強の武将として伝わっている呂布奉先から仲間を守る

為に本郷猛は何と仮面ライダーに変身して呂布に挑む。しかし、この時

彼女から語られる事実を彼らはまだ知らないでいた。

次回「改造人間 対 最強武人」にご期待下さい。

改造人間 対 最強武人 (前編) (前書き)

今回は前編のみで仮面ライダーと呂布の戦いは後編になります。

改造人間 対 最強武人 (前編)

本郷を中心にした連合軍が？水関を突破した頃、虎牢関を守備していた

恋、霞に華雄が戦死したことを華雄に仕えていた伝令兵が報告していた。

どうやら、？水関にいた董卓軍が投降している隙を見て虎牢関に来たらしい。

霞

「そうかい……華雄の奴、死んじまったんかい」

「はいっ……勇将、そして猛将らしく立派に戦死されました！」

その事を伝えた兵は涙を流していた。どうやらよほど、華雄を信頼していたのだろう。

霞

「あいつらしいわな。化け物になっても武人の魂だけは捨てへんかったもんな」

恋

「華雄……仇……必ず討つ」

霞

「ああ、うちも同感や！華雄の仇はきっちりとらせてもらうでそれと恋、忘れてへんやろな？もしうちらが負けてもつたら……」

恋

「月が危ない」

霞

「そつや・・・悔しいが、張讓・・・いやゴキブリカビには、絶対かなわへん。」

おかしな粉を浴びた奴らは皆、体にカビを生やして倒れたもんな」

恋

「・・・・・・・・（コクコクッ）」

霞

「だから、月つちや詠、そして洛陽の皆を奴らから解放する為にも」

恋

「連合・・・倒す」

霞

「そつや・・・今は奴らに従うしかあらへん！」

恋

「そして・・・隙を見て、月と詠、洛陽の皆・・・助ける。」

霞

「ああっ！　　ウチは魏の連中の相手したるから、アンタは義勇軍の連中を

相手にしいや！　　斥候の話では、その中に『天の御使い』本郷猛つちゆう

奴がいるらしいで！」

恋

「……………分かった」

霞

「悔しいが、そいつの相手できるのは恋だけや」

二人は「黄巾の乱」においての義勇軍、そして本郷猛の活躍を聞いており、

一瞬身震いしたが、董卓を守る為にも逃げるわけにはいかない。

その時、恋の軍師である陳宮こと真名を音々音という少女が話しかける。

音々音

「恋殿ー！ 霞殿ー！ いざという時はこの音々音に任せるのです！ 本郷だか、近郷だか分かりませんがそんな奴は音々音の「ちんきゆうキック」をお見舞いしてやるのです！」

霞

「アホか！ 相手は素手で黄巾党を撃退したとか、化け物を退治したちゆう噂があるどえらい奴なんやで！ そんなもん効くわけあらへんやろ！」

霞は天の国の関西人に引けをとらないツッコミを思わず、音々音にいれるが…………

音々音

「というのは冗談で、後ろにいるこの火矢部隊に援護させ、逃げるのを援護させるのです。」

音々音に後ろの部隊を見せられて、霞は黙る。

霞

「ま、まあええやろ・・・」

恋

「霞・・・いく」

霞

「ああそつやな！ 連合軍の奴ら、無敵と呼ばれた虎牢関から出てきたうちらを見たら、きつと動揺しよるで」

二人の少女はそついうとそれぞれの敵と戦う為に、虎牢関の外へと赴いた。

その頃、？水関を本郷の活躍で突破した連合軍は最大の難所である虎牢関を

目指していた。ほとんどの兵士が池を越えてきたので下半身が濡れている。

桃香

「うっ・・・下、びっしょりだよ・・・」

愛紗

「我慢して下さい。池を渡るしか？水関を通る方法がなかったんですから……」

ちなみに鈴々、朱里、雛里は池を越えようとすると上半身も濡れてしまうので

それぞれ、本郷、愛紗、星に肩車したので濡れずに済んでいた。

その時、？水関を振り返った本郷はこうつぶやく。

本郷猛

「華雄……彼女は立派な將軍だった。」

星

「ええ。あやつの正々堂々さ。私達にも伝わりましたよ。」

桃香

「怪人さんになっても、武人の魂だけは捨てなかったんだね」

本郷猛

「……」

本郷は思わず黙ると……

鈴々

「それよりもあいつは何で怪人になったのだ？もしかして、ゲルシヨツカー

と董卓軍は手を……」

本郷猛

「いや、あいつは奴らと何か取引をして怪人になった可能性が高い」

星

「主殿。なぜそう言い切れるんですか？」

本郷猛

「奴と戦って分かったが、奴が発する闘気は澄んでいて、やましい気持ちがない」

「伝わってこなかった。それに俺が董卓を悪者扱いした途端、激しく怒りだし」

「た　これは董卓の身に何かあったと考えるもいいはずだ」

愛紗

「えっ？」

本郷猛

「華雄は死ぬ前に俺にこういった。『本郷……董卓様を……うつ……ガハツ……』」

「これは恐らく『本郷、董卓様を助けてくれ』といおうとしたんだろ」

桃香

「それってつまり……」

本郷猛

「ああ……悪政を行って人々を苦しめているのは董卓ではなく、その名を騙るゲル」

「シヨッカー！　董卓は奴らに捕らわれている可能性が高い！」

愛紗



「何で奴らがそんな事を!？」

本郷猛

「……『太平要術』の書を覚えているか？」

鈴々

「えっ？ あの暗黒何とか……に盗られちゃったあの……？」

愛紗

「暗黒魔術師だ！ 鈴々っ！」

鈴々

「そう！ それそれ」

本郷猛

「董卓の名を騙り、悪政で人々を苦しめる事で董卓に対する怨嗟の声を『太平

要術』の書に妖力として蓄えるのが目的なのかもしれない……そしてゲルシヨ

ツカーは華雄と取引して怪人にして、俺に勝利すれば董卓を解放するといっ

たとしたら……」

星

「なるほど、なら華雄が怪人になったのもつじつまが合いますな」

本郷猛

「そして、董卓が人々を苦しめていると知れば、それを討つ為、義勇軍も連合に

参加する事も読んでいたんだろ。この俺をおびき出す為に……」

白蓮

「そんなっ！　ならこの戦いはじゃあ最初から畏だったのか!？」

本郷猛

「ああ・・・だが、例えそうだとしても今更引き返すことはできない。

洛陽の人々を董卓・・・いやゲルシヨッカーから解放する為にもっ  
！」

愛紗

「・・・そうですね。」

鈴々

「なら、このまま前進してゲルシヨッカーを  
ぶっ飛ばせばいいのだ!」

本郷猛

「鈴々のいうとおりだな。ならこのまま虎牢関まで向かい  
そこを突破した後、洛陽に向かうぞ!」

一同

「はいっ!」

本郷猛

「だが、その前に愛紗　鈴々　星　君達にいわなければならぬこ  
とが  
ある。」

愛紗

「何でしょうか？ご主人様」

本郷猛

「虎牢関を護衛しているのは張遼と呂布という武人だが、呂布と戦う場合は

決して一人で戦うな 三人で同時にかかるんだ」

鈴々

「ええっ！？ 何でなのだ！？」

鈴々は本郷の言葉の意味が良く理解できていないようだ。

一人の武人相手に三人がかりは卑怯ではないかと思ったのだ。

白蓮

「おいおい本郷……いくら何でも、それは卑怯じゃ……」

本郷猛

「いや、卑怯とかそういう問題じゃない。 三人がかりでも呂布を止められるか分からないんだ」

星

「それはどういうことでしょうか？」

そして本郷がいった言葉に一同は驚愕する。

本郷猛

「俺の世界では呂布奉先はこの世界最強の武人として知られている。その強さは並大抵の物じゃない」

朱里

「並大抵じゃないってどのくらいでしょうか？」

本郷猛

「そうだな・・・猫が虎に戦いを挑むくらいだな」

愛紗

「ええっ！？ そんなに強いんですか呂布は！」

武術に関しては自信のある愛紗も驚くしかない。

呂布が虎なら、自分達は猫。そのくらい差があると本郷に言われたのだから。

星

「主のいうとおり、呂布がそれ程強い武将ならどう戦えばいいのです？」

本郷猛

「二人で同時に呂布の動きを封じ、一人が呂布に攻撃するんだ  
それしか呂布に勝つ方法がない」

愛紗

「仕方ありませんね。ならその手でいきましょう」

本郷猛

「ああ・・・」

本郷の案に納得していない者もいたが、虎牢関に着いた時

呂布をなめていた者は本郷猛の忠告に感謝することになるのであつた。

(ル・ル・ル〜ルルルツ！『アイキャッチ 新一号』)

改造人間 対 最強武人 (前編) (後書き)

次回、遂に最強の改造人間と最強の武人が激突っ！  
果たして勝利するのはどっちだ！

改造人間 対 最強武人 (後編) (前書き)

ちよつと、恋が残忍な性格になったかもしれませんが、その事を承知の上でSSをお楽しみ下さい。

改造人間 対 最強武人 (後編)

次の日、虎牢関に到着した連合軍は虎牢関から出て自分達を待っていた

董卓軍に驚愕する。籠もって戦えば董卓軍が有利なはずなのに……。

雪蓮

「何のつもりなのかしら？ わざわざ虎牢関から出て、私達を待っているなんて……」

冥琳

「玉碎覚悟で私達に挑むつもりなのよきつと……」

雪蓮

「まあ、何にせよ襲い来る敵はこの南海霸王で切り捨てるだけよ」

雪蓮は微笑んでいたが、武器を持って微笑むその姿は不気味としかいいよう

がない。

冥琳

「ほごほごにね……」

雪蓮

「うっん 分かんない」



冥琳

「ちよ、しえ、雪蓮!？」

周瑜こと冥琳は雪蓮を止めようとしたが、間に合わず雪蓮は一人で董卓軍に斬りか

かっっていく。

そして雪蓮に挑んでいった兵は次々と・・・

「ぎゃああー!」

「ぐわあああつ!」

(ズバツ!ズバツ!)

雪蓮

「あはははははっ!」

剣を交えることなく、一方的に切り倒されていった。

この戦いを見ていた冥琳と雪蓮の妹蓮華と小蓮は思わず

頭を抱え込んでしまう。

冥琳

「あゝあ・・・駄目だ・・・ああなったらもう誰にも雪蓮を止められん」

蓮華

「しかし、やはり姉様は強い。さすが江東の小霸王だ」

小蓮

「いずれ私も雪蓮お姉ちゃんみたいに強くなるんだから！」

彼女達はそういつと雪蓮に続き、前進する。

一方その頃、本郷達は呂布の率いる軍と戦い始め、兵一人一人の強さに苦戦している。

愛紗

「ぐっ！っ、強い！」

鈴々

「こいつら！他の董卓軍よりも強いのだ！」

星

「どつちやら、こいつらを指揮している将はかなり腕の立つ者に見える。」

愛紗

「それってつまり……」

星

「ああ……どつちやら呂布の率いる軍と当たったようだな」

そして……

「ぎゃあああああああ！」

鈴々

「な、何なのだ!？」

突如、袁紹から借りてきた兵士の方から悲鳴が聞こえてきた事に

驚き、彼女達はそこにいつてみるとそこには赤い髪、色黒で入れ墨を入れた少女はたった一人で自分達の兵を虐殺していたのだ。

「ひ、ひiiiiiiiiいっ！ た、助け・・・」

ズバツ！

「ぎゃあっ!」

中には命乞いをした者もいたが呂布は容赦なく切り倒してしまう。

恋

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この余りにも残忍な戦い方に愛紗と鈴々は怒り、愛紗と鈴々は呂布に向か

つていこうとするが、星に止められる。

愛紗

「何をする星!? 早く行かないと仲間が・・・」

星

「落ち着け愛紗！ 主の言っていた事を忘れたのか？  
呂布は最強の武人、3人がかりでも止まられるか分からないと  
お前達だけいっても呂布に瞬殺されるのがオチだ」

愛紗

「ぐっ！ わ、分かった なら手はず通り三人同時に呂布にかかる  
ぞ！」

鈴々

「応ッ！」

そして三人は同時に呂布の前に姿を現すと、呂布も雑魚ではないと  
分かったのか

兵達を虐殺するのを中断し、その場にいた者は愛紗達の後ろに着い  
た。

恋

「お前達、何者？」

愛紗

「我が名は関羽！」

鈴々

「鈴々は張飛！」

星

「私は趙雲だ！」

愛紗

「これ以上、お前の好きにはさせないぞ呂布 今度は私達が相手だ！」

恋

「三人同時にくるのか？」

星

「うぬ、三人で一人にとはどうも悪役みたいでやりづらいがな」

愛紗

「悪役いうな！ こっちだって不本意だが、ご主人様の命令があるんだから仕方ないだろ！」

恋

「……命令？」

鈴々

「そうなのだ！ お兄ちゃんはお前に三人でかかるようにいわれているのだ！」

鈴々がそういうと、呂布は突然笑みを浮かべる。

恋

「フフフ……」

愛紗

「何がおかしい呂布!？」

恋

「お前達の主、頭いい。恋、強い。なめてかかると死ぬ」

愛紗

「何だと!？」

恋

「三人同時に来い！」

鈴々

「何をーっ！」

鈴々は先に呂布に攻撃をしかけるが・・・

鈴々

「なっ！」

なんと鈴々の重い一撃を受け止めそして、

呂布

「・・・威力は強いけど遅い」

ブンッ!

鈴々

「うにゃあ！」

何と怪力の鈴々が払いのけられてしまい

愛紗

「鈴々! くそっ! 次は私だ！」

愛紗は青龍偃月刀で呂布を切り捨てようとするが

呂布

「……………攻撃が単調すぎる」

スツ！

愛紗

「はっ！」

呂布の方天画戟の一撃を何とかかわしたが服が若干切り裂かれている。

愛紗

「あ、危なかった……」

愛紗が若干冷や汗を流すと今度は星が呂布に挑んでみる。

星

「食らえ呂布！ はいはいはいはいーっ！」

黄巾党兵をも瞬殺した目にも止まらぬ早さで攻撃ですが

呂布

「……………早いけど威力がない」

星

「なっ！？」

何と星の攻撃を全て受け止め……

恋

「ふんっ！」

星

「わあっ！」

次の一撃を受け止めた呂布は星をそのまま押し返してしまっ。

そして一度体制を立て直した三人は一カ所に固まる。

恋

「……………」

愛紗

「くっ！ つ、強い！ こいつ本当に強い！」

鈴々

「鈴々より力が強いなんて信じられないのだ」

星

「主のいうとおり、呂布には三人でかかるしかない」

愛紗

「そうだな！ 星、鈴々同時に呂布に攻撃だ！」

星

「承知！」



鈴々

「応なのだ！」

そして三人は同時に呂布に向かい、攻撃するが呂布は三人の攻撃を軽く受け止められてしまう。

この様子を本郷は最初は静観しているも・・・

本郷猛

「まずいな・・・このままでは愛紗達が危ない」

桃香

「それはどういことですか？」

本郷猛

「呂布は防御するだけで、さっきから攻めようとはしていない。あれは愛紗達が疲れるのを待っているんだ」

朱里

「はわわっ！　じゃ、じゃあどうすればいいんですか？」

本郷猛

「俺がいつてくる。今は洛陽に行く為にも愛紗達をここで死なせる訳にはいかない」

本郷はそういうと三人を助ける為に呂布の元へと向かった。

その頃、呂布の策に嵌まっているとは気づかず、愛紗達は次の一撃で

きめようとしていた。

愛紗

「はあはあ・・・っ、次の一撃で決めるぞ！」

星

「合点だ！」

そして

三人

「でりゃあああああ！」

恋

「・・・・・・・・！！」

恋はとつさに最初に攻撃してきた二人の攻撃を受け止めるが

三人目の姿が見えない。

恋

「・・・・・・・・？」

愛紗

「今だ！鈴々」

恋

「っ！！！」

鈴々

「でええええい！ 呂布覚悟なのだ！」

鈴々は後ろから丈八蛇矛で呂布を倒そうとしたが、

呂布

「ふんっ！」

愛紗

「きゃあ！」

星

「くっ！」

呂布は二人を払いのけると、鈴々の一撃を受け止め、

鈴々

「にゃ！？」

恋

「……当たらなければ怖くない」

そのまま押し返してしまふ。

そして呂布は鈴々に止めを刺そうとゆっくりと近づき

恋

「……………」

鈴々

「くっ！ 強いのだ まるでゲルシヨツカーの怪人なのだ」

(ピキッ！)

その一言が呂布の逆鱗に触れてしまい

恋

「恋をあんな奴らと一緒にするな。・・・死ね」

そして呂布は鈴々に止めを刺そうと方天画戟を振り下ろすが

恋

「？」

何といつの間にかその場にいた男により呂布の武器が止められていた。

しかももの凄い力で止めており、方天画戟を動かすことができない。

本郷猛

「今度は私が相手だ 呂布奉先」

恋

「お前誰？ 何故恋の名、知ってる？」

呂布はまだ知るはずもない自分の字を目の前の男が知っていたことに驚いた。

本郷猛

「本郷猛。義勇軍の指導者だ」

恋

「…………お前が『天の御遣い』本郷猛か」

どうやら呂布も本郷のことを知っていたようだ。

そして呂布は本郷に聞く。

恋

「…………華雄を殺したのはお前か？」

本郷猛

「…………彼女は怪人になっても武人の誇りを捨てず

正々堂々と私と戦い、そして邪魔してきた敵から人質にされた

私の仲間を助け、自ら盾になって私を守り命を落とした。私が殺したのも同然だな」

516

呂布は本郷の目、そして澄んでいる彼の闘気を見て、その言葉に嘘が

ないことを理解する。

恋

「…………そうか」

本郷猛

「できれば、俺は君達とは戦いたくない。邪魔してきたゴキブリカ  
ビの

言葉から董卓がゲルシヨツカーに悪逆非道の汚名を着せられたのは  
知っ

ている。彼女を救う為にもここを通してほしい」

本郷は呂布を説得しようとしたが、

恋

「・・・できない」

本郷猛

「何故だ!？」

恋

「お前達通せば、月と洛陽の皆の命ない・・・」

どうやら人質にされているのは董卓だけではないらしい。

しかしここを通る為には呂布を何とかしないとイケない。

そう考えた本郷は

本郷猛

「なら仕方ない。 呂布、君を倒してでもここを通らせてもらう」

本郷はそう言うと愛紗達の前に出て変身する為のポーズを取った。

本郷猛

「・・・フンっ!」

(ピュイイイイン!)

本郷猛

「ライダー・・・」

本郷は左手を腰に当て、右腕を左側に持ってきてポーズをとると、右腕をまた右側に持ってきて、今度は右腕を腰に当て、左腕を右側に持つ

てきた。

本郷猛

「変身っ！」

(ゴウン！)

すると本郷の腰から赤い風車のついたベルトが現れ、

本郷猛

「トオツ！」

本郷がそのままジャンプすると、ベルトから発した凄まじい光が彼を多い光が晴れ

ると仮面ライダーになった彼は恋の近くに着地してきた。

(ピュイイイイン！)

(挿入曲：ライダーアクション)

愛紗

「え、ええっ！？ 人間相手に変身された！？」

何とか体制を整えた愛紗も本郷のしたことに驚くしかない。

いくら相手が強いとは言え、人間である呂布相手に変身したのだから。

恋

「お前……何者？」

仮面ライダー一号

「私は仮面ライダー　ゲルシヨッカーと戦う戦士だ」

恋

「仮面……らいだあ？」

呂布は本郷が突然、昆虫の仮面をつけた戦士に変身したことに驚くがすぐに落ち着いた。

仮面ライダー一号

「そつだ。私はこの世界にやってきたゲルシヨッカーを倒す為  
天の国からやってきた　もう一度聞くぞ　通す気はないんだな？」

恋は軽く頷く。どうやら戦うしかないようだ。

変身したとはいえ、呂布に勝てるのか？

仮面ライダー一号

「行くぞ呂布奉先！　トオツ！」

ライダーはジャンプで呂布までの距離を詰めると、一気に殴りかか



ってきた。

仮面ライダー一号

「トオッ！ トオッ！」

恋

「くっ！」

呂布は何とか受け止めるが、自分と同じく一撃一撃が重い仮面ライダーの攻撃に

驚いていた。

恋

「お、重い・・・それに早い！」

方天画戟を通して彼の攻撃が彼女に伝わる。もしまともに攻撃を受けていたら

ただでは澄まないだろう。

恋

「ふんっ！」

恋はとっさに斬りかかるがライダーは彼女の攻撃を後転でかわした。そして今度はつこうとするも

仮面ライダー一号

「ふんっ！」

恋

「……嘘」

仮面ライダー一号

「トオツ！」

何と足で彼女の攻撃を受け止め、そして蹴りで払いのけてしまう。

払いのけられた方天画戟を持ち直し、攻撃しようとしたが

その度に払いのけられ、そして殴りかかろうとしてきたとっさに

かわす事を繰り返している。

愛紗

「すごい。ご主人様、呂布と互角に戦っている」

鈴々

「行けー！お兄ちゃん、負けるなのだ！」

そして仮面ライダーは呂布の方天画戟を受け止めると、そのまま方天画戟ごと

彼女を地面に叩き付けた。

(ドゴンッ！)

恋

「ガハッ！」

叩き付けられた衝撃で地面はへこみ呂布は何とか起き上がったが、  
もう戦う力は残っていない

ないようであった。

恋

「……………はあ……………はあ……………」

そして仮面ライダーは彼女を説得する為にもう一度、近づくが……

音々音

「今です！放つのです！」

どこからか少女の声がしたと思ったら、突如自分の前に火矢がふつ  
てきて

自分と呂布を遮った。

仮面ライダー一号

「火矢か。まさか伏兵がいたとはな」

音々音

「呂布殿ー！今は逃げるのです！董卓様達は時期を見て助けに  
いくのですー！」

その声は呂布にそういつと呂布は急いでこの場から離れる。

目の前にいる仮面ライダーには絶対勝てないと判断したからだ。

董卓を見捨てる事はできないが、今はここでライダーに倒される訳にはいかない。

その時、逃げようとした呂布にライダーはこう言った。

仮面ライダー一号

「呂布！ 今は逃げろ！ 事情を知らない連合がもうすぐ攻めてくるぞ！」

どうやら彼は呂布を逃がす気で、戦う気のない相手までとは戦わないようだ。

恋

「……………?」

仮面ライダー一号

「董卓は俺が必ず、助ける。」

恋

「……………本当?」

仮面ライダー一号

「それにこれは戦死した華雄の最後の頼みだ。彼女の願いを叶えなければならぬ」

ライダーがそういうと呂布はその場を去る間に彼にこう言った。

恋

「……………恋」

仮面ライダー一号

「何ッ？」

恋

「私の真名……」

仮面ライダー一号

「分かった……また会おう恋」

恋はライダーに真名を教えると、そのままその場を立ち去った。

そして安全な所まで兵を連れてきた恋に音々音はこう話しかける。

音々音

「呂布殿ーっ！ 上手く逃げ出せて良かったですなー！」

恋

「………違う」

音々音

「何が違うのです？ 恋殿？」

恋

「………あの人、恋達わざと逃がした」

音々音

「な、何ですとーっ！」

音々音は恋のいったことに驚く。敵がわざと敵を逃がすなんて戦場

ではあり得ない事だからだ。

音々音

「あのバツタ男！ 何を考えているのです」

すると恋は音々音にこつこついう。

恋

「あの人なら皆、助けてくれる……」

音々音

「ええっ！？ あいつがそんなことを……」

恋

「……（コクッ） 華雄と戦って事情知ったみたい」

音々音

「そうですか？ しかし、あのゴキブリカビからどうやって董卓様達を……」

音々音が疑問に思っていたが

恋

「今は、あの人信じる……」

恋はそういうとそのまま、虎牢関を後にした。

その頃、張遼こと霞は魏の春蘭と死闘を繰り広げていたが

あっという間に華琳の軍に囲まれ、率いていた部隊ごと投降し

新たに華琳に仕えることになっていた。

そして洛陽の真実を知った華琳達も人々をゲルシヨツカーから

解放する為に霞の案内の元、洛陽に向かうことになった。

つづく

改造人間 対 最強武人 (後編) (後書き)

我らが仮面ライダーに襲い掛かるゲルシヨッカー三国時代支部が送った次なる使者は張讓を改造した怪人ゴキブリカビ！ 心優しい董卓と洛陽の皆を人質にしたゴキブリカビを相手に仮面ライダーはとう戦うのか？ 次回「卑劣！ ゴキブリカビを倒せ」にご期待下さい。



卑劣！ ゴキブリカビを倒せ (前編) (前書き)

今回、ゴキブリカビのカビの威力がどのくらいなのか分かってもら  
う為に

華陀に再登場してもらいました。それでは本編をどうぞ！

卑劣！ ゴキブリカビを倒せ（前編）

孫策率いる呉の軍が虎牢関を制圧した頃、呂布を退け、虎牢関も突破した本郷猛達は洛陽に到着した。

そこら辺、破壊し尽くされ、道ばたには体にカビが生えた人々が倒れており、苦しんでいる。

「う、ううう……苦しい……」

「た、助けてくれええ……」

愛紗

「こ、これは……!？」

桃香

「人の体にカビが生えてる!？」

本郷猛

「恐らくこれはゴキブリカビの仕業だ　とりあえず、事情を聞いてみよう」

そして本郷はまだ意識があり、話せる状態にあった老人に事情を聞き始めた。

本郷猛

「しっかりして下さいお爺さん」

「う、うとうとう……貴方達は？」

本郷猛

「我々は反董卓連合軍です。悪政に苦しんでいる貴方達を解放する為に

やってきました。」

「そ、そうですか……」

本郷猛

「話して下さい。一体何があつたのかを？」

「と、董卓様は朝廷から帰られた途端、我々の前に姿を見せなくなつたと思つたら突如、董卓様の代理と称する赤いコウモリのような模様が入つた青い覆面をした集団が現れ、我々に重税、無茶な工事を命じたのです。我々は抗議したのですが、奴らは武力で我々を鎮圧し、そして油虫の様な化け物も現れ、皆に力を植え付けたのです。」

その老人の言葉からはやはり、この戦いの黒幕はゲルシヨッカーであると本郷達は

確信した。

「そして、あの化け物はこう言ったのです。」

鈴々

「何ていったのだ？」

「『恨むなら、董卓を恨め。僕は唯、董卓の命で逆らう貴方達をこうしているに過ぎない。ブブブブ……』と……」

愛紗

「何て卑劣な！」

「我々も董卓様があんな奴らと関係があるとは思いたくないのですが、あいつのカビで苦しんでいる被害者の家族は「こんなことになっ

たのは董卓の所為」だという者が増える始末……」

本郷猛

「街全体で董卓に対する怨嗟の音が拡がっているのか？」

「はい……う、うづうづ 苦しい……」

その老人は突如苦しみだし、そして気を失ってしまった。

本郷猛

「お爺さん！ しっかりして下さい！ お爺さん！」

星

「くっ！ 誰かある！」

伝兵

「はっ！」



効果がない！ 俺の鍼が効かないカビがあるなんて信じられん！」

本郷猛

「恐らくこれはゲルシヨッカーが開発した人工のカビ。ちょっとやそつとでは消えないだろう 人間を苦しめる為に作られたはずだからな」

華陀

「許せん！ カビを利用して人々を苦しめるなんて……」

本郷猛

「このままだとこの人達は死ぬ……」

雛里

「あわわっ！ この人達を救う方法はないんですか!？」

本郷猛

「一つだけある……」

朱里

「えっ？」

本郷猛

「奴らは間違っつて仲間に感染させてしまった場合や、忠誠に誓った者が出た場合  
合に備えて解毒剤も開発しているはずだ」

白蓮

「なるほどっ！ じゃあ奴らからその解毒剤を奪えば……」

本郷猛

「この人達の治療もできるはずだ」

桃香

「じゃあさっそくその解毒剤をいただきにいきましょう」

本郷猛

「ああ、だが忘れるな。我々の目的はゲルショッカーの殲滅だけでなく

董卓の救出もあることを！」

愛紗

「御意！」

本郷猛

「すまない華陀。悪いが俺達が戻ってくるまでこの人達を守ってくれ」

華陀

「分かった！」

本郷猛

「よしっ！ 一部の兵士は華陀を護衛しながら、この人達をゲルショッカー

から守るんだ！」

「はっ！」

本郷猛は義勇軍の兵士達にそう命令すると、ゴキブリカビがいると思われる

城へと向かう。大人数でいくと奴らに悟られると思った本郷は少数の部隊だけで

城へ向かう。

城へと近づくほど、辺りは不気味なまでに静かになり、虫の鳴き声すら聞こえない。

本郷猛

「妙だ・・・不気味なまでに静かすぎる」

鈴々

「だけど・・・辺りで何かに見られている様な気がするのだ」

本郷達が話している時、突如建物にカビが生え始めた。

星

「なんだ？ いままではこんなカビは無かったはず・・・」

鈴々

「ちょっと見てみるのだ」

本郷猛

「よせ鈴々！」

本郷は直感でそれが何か分かったのか鈴々を止めようとしたとき

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」



ゲルシヨツカー戦闘員

「ギギイツ！」

鈴々

「うにゃあ！」

(挿入曲：シヨツカー襲来！)

突如カビがゲルシヨツカー戦闘員に変化したことに驚き、鈴々は思わず尻餅を

ついてしまう。そう、ゲルシヨツカー戦闘員はカビに化けて本郷達の前に姿を

見せたのだ。

そして、本郷達をあっという間に困らせてしまう。

本郷猛

「やはり、貴様らだったか！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「待っていたぞ本郷猛！ そして義勇軍 ここが貴様らの墓場だ！」

本郷猛

「戦闘員の諸君！ お前達を相手するだけ無駄だ！ゴキブリカビの所まで案内してもらおうか！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「その必要はない　なぜなら貴様らはここで死ぬのだからな　やれ  
っ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

隊長格の戦闘員が合図すると、他の戦闘員が本郷達に襲い掛かる。

本郷猛

「戦闘員といえど、こいつらも一応改造人間だ。油断するなよ皆！」

愛紗

「はいつ！」

鈴々

「応なのだ！」

星

「御意！」

そして桃香、朱里、雛里を除いて本郷達は戦闘員に挑んでいった。

本郷猛

「トオツ！　フンツ！　ハツ！」

（バシッ！　バシッ！　バシッ！）

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギィィィィィィィ！」

本郷は戦闘員の攻撃をかわすと、殴り飛ばし、そして蹴り飛ばしていき

鈴々

「オリヤオリヤオリヤー！ 鈴々様のお通りなのだ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイイイッ！」

鈴々は自分より遙かに大きい丈八蛇矛を振り回し、戦闘員をなぎ払い

星

「はいはいはいはいーっ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイイイッ！」

星は素早くつく攻撃で、戦闘員を倒していき屍をつぎつぎ築いていき

愛紗

「ハアッ！ ハアッ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイイイッ！」

愛紗は青龍偃月刀で襲い来る戦闘員を次々切り捨てていった。

そして武人達の強さを侮っていた戦闘員は徐々に追い詰められ

残り一人になった時、本郷が後ろから戦闘員の動きを押さえる。

本郷猛

「さあ答える！ ゴキブリカビのカビの解毒剤はどこだ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「そ、そんなの知らん！」

本郷猛

「嘘をつくな！ カビと同時に手違いがあつたときに備えて解毒剤も開発しているはずだ・・・正直にいえ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「げ、解毒剤は・・・あのし・・・」

戦闘員が本郷の尋問に答えようとした時

(ブシャアアアアアア！)

何か白い粉のような者が飛んできて戦闘員に当たってしまった。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイイイッ・・・」

(ドサツ！)

粉を浴びた戦闘員は苦しみながら、やがて倒れ込んでしまう。

そしてそれと同時に顔に包帯を巻いた少年が現れる。

張譲

「フフフフ……よくここまで来ましたね 本郷猛！  
待ちくたびれましたよ」

本郷猛

「君は一体誰だ？」

愛紗

「お前は張讓！」

本郷猛

「張讓だと？」

愛紗

「ええ、確か噂では董卓が何進將軍を暗殺した現場を見たのは  
この張讓です」

本郷は聞き覚えのある名前に反応した。 確か三国志においては

何進將軍と敵対関係にあつた人物で彼を暗殺した後、軍権を掌握し  
ようと

した悪人であつた。

それを知っているか本郷はあえて張讓にこう聞く。

本郷猛

「靈帝、何進將軍を暗殺し、心優しい董卓に無実の罪を着せ、そして  
今この洛陽で悪政を行い、人々を苦しめているのは君か！」

張讓

「ははははっ！ 凄い洞察力ですね その通り、霊帝、何進將軍を暗殺したのは僕です！」

張讓は自分が霊帝、何進將軍を暗殺した真犯人だとあっさり自白してしまふ。

愛紗

「なっ！？ お前が霊帝、何進將軍を殺した犯人だったのか？」

張讓

「嘘についてどうなるんです？」

星

「何故、そんなことをした！」

張讓

「世の中を混乱させるには、霊帝、何進將軍はゲルシヨッカーにとつては邪魔な存在だったのです。そしてその罪を董卓にきせ、我々が董卓を騙つて悪政を行えば人々の怨嗟の声が多く、『太平要術』に吸収されますからね」

張讓の言葉から一同はゲルシヨッカーの目的は本郷の言つとおり『太平要術』に

怨嗟の声を集める事と分かる。

張讓

「くくくくく……」

張讓は今度は包帯で覆った部分を触りながら笑う

愛紗

「何がおかしい張讓！」

張讓

「いえ・・・？水関で本郷に不意打ちを仕掛けたとき、ホホジロギリに焼かれた傷が疼いただけですよ」

本郷猛

「ホホジロギリ？・・・！ま、まさか貴様は！」

張讓

「そのまさかです・・・フッフッフ・・・」

張讓は不気味な笑いをあげるとその姿は変異し、ゴキブリカビになる。

ゴキブリカビ

「僕がゴキブリカビだ！ブブブブ！」

本郷猛

「やはりな！ゴキブリカビ、お前が洛陽の人達にカビを植え付けたのか！」

ゴキブリカビ

「彼らは愚かな人間です・・・おとなしく我々に従えば、あんな目にあわな

かったのに・・・まあ、結果的には董卓に対する怨嗟の声が増加し

ましたがね

それで暗黒魔術師様の目的が達成できればどうでもいいですがね」

本郷猛

「・・・貴様・・・フンッ！」

(ピュイイイイン！)

ゴキブリカビの言葉で怒りが頂点に達した本郷は変身する為の体制をとる。

本郷猛

「ライダー・・・」

本郷は左手を腰に当て、右腕を左側に持ってきてポーズをとると、右腕をまた右側に持ってきて、今度は右腕を腰に当て、左腕を右側に持つ

てきた。

本郷猛

「変身っ！」

(ゴウン！)

すると本郷の腰から赤い風車のついたベルトが現れ、

本郷猛

「トオッ！」



本郷がそのままジャンプすると、ベルトから発した凄まじい光が彼を多い光が晴れ

ると仮面ライダーになった彼はゴキブリカビの近くに着地してきた。

(ピュイイイイン！)

ゴキブリカビ

「ブブブブ・・・仮面ライダー！ 貴方は私が倒します。」

仮面ライダー一号

「ゴキブリカビ、貴様だけは許さん！」

ゴキブリカビ

「ならかかってきなさい！」

そして仮面ライダーはゴキブリカビに向かっていく。

仮面ライダー一号

「トオッ！ トオッ！」

(バキッ！バキッ！)

はじめゴキブリカビにパンチを加えると

ゴキブリカビ

「ブブブブブ・・・！」

ゴキブリカビもライダーに殴りかかってくる。

そして次の攻撃を当てようとしたとき、

仮面ライダー一号

「フンッ！」

ライダーは後転でゴキブリカビの攻撃をかわし、そして今度は

仮面ライダー一号

「トオッ！トオッ！」

（バシッ！バシッ！）

蹴りでゴキブリカビに攻撃していく。

ゴキブリカビ

「ブブブブブ・・・」

ダメージを負ったゴキブリカビは後退りながら、ライダーとの距離を

とるが・・・

（ピュイイイイン！）

仮面ライダー一号

「トオオオオオオオッ！」

ライダーはポーズを取り、ジャンプすると一気に怪人に近づきそして

ゴキブリカビを捕まえる。そして後方に倒れ込み、ともえなげをす

る。

ゴキブリカビ

「ブブブブブ！」

投げ飛ばされたゴキブリカビは回転しながらライダーから離れていく。

何とか起き上がるが、ダメージが大きすぎて戦える状態ではない。

そして、止めをさそうとライダーが近づいた時

ゴキブリカビ

「くっ！・・・こうなったらライダー！ あれを見る！」

仮面ライダー一号

「何ッ！？・・・ハッ！」

ライダーはゴキブリカビが指さした方向を見るとそこには十字架に貼り付けにされ

体にカビが生えている少女二人がいた。

仮面ライダー一号

「まさか彼女達は？」

ゴキブリカビ

「その通り・・・彼女達が董卓、そしてその軍師賈馱です」

その戦いを見ていた桃香達も貼り付けにされた少女達をみて驚く。

桃香

「あれが董卓さん達なの？」

鈴々

「何かあの綺麗な服を着ている子、優しそうな雰囲気なのだ」

愛紗

「なるほど・・・あれじゃ、董卓軍も奴らに従わざるを得なかったでしょうね」

朱里

「そしてご主人様も私達も手が出せませんよ」

星

「くっ！」

彼女達は何も出来ないことにいらだっている。そして仮面ライダーも人質がいたのでは

下手に手出しができない。

仮面ライダー一号

「己っ・・・ゴキブリカビ！」

ゴキブリカビ

「おっと！動かない方が身の為ですよ？」

（パチンッ！）

ゴキブリカビが指をならすとゲルシヨツカー戦闘員が姿を見せ

二人のど元に刃物を押し当てる。

仮面ライダー一号

「やめるゴキブリカビ！」

ゴキブリカビ

「あの二人を助けたければ、一緒に来てもらいましょうか  
貴方には脳改造を受けて完全な怪人になってもらいます。」

仮面ライダー一号

「……くっ！ わかった」

愛紗

「いけませんご主人様！ 御主人様がゲルシヨツカーに捕まっても  
董卓達が助かる保証はないんですよ！」

愛紗は急いで主の元へかけつけ、ライダーを止めようとする。

しかし彼は

仮面ライダー一号

「今はあの二人の命を救う為にも奴らに従うしかない。もし董卓達  
を助けられ

なかつたら華雄と呂布の思いが無駄になる。」

ライダーはそういつと愛紗にこっそり何かを持たせ、ゴキブリカビ  
の元へと

赴く。

仮面ライダー一号

「さあ・・・お前達のアジトまで連れて行ってもらおうか」

ゴキブリカビ

「賢明な判断です。取り押さえなさい」

ゲルシヨッカー戦闘員

「ギイツ！」

戦闘員はライダーを拘束し、睡眠薬を嗅がせるとそのまま、洛陽の城へと向かっていった。

そして董卓達を十字架から降ろした桃香達は自分達の主が捕まった事に動揺し始める。

桃香

「愛紗ちゃんどうしよう！ 御主人様が・・・」

愛紗

「心配ありません桃香様」

鈴々

「何が心配ないのだ！ お兄ちゃんは捕まったのだぞなのだ！」

愛紗

「いや、あのお方はわざと奴らにお捕まりになったのだ」

白蓮

「何でそんなことを・・・」

愛紗

「恐らく、解毒剤を手に入れる為・・・アジトのありかをしっているのは  
奴らだけですからね」

桃香

「でも、御主人様が危ないことに変わりないよ！助けないと！」

朱里

「で、でもゲルシヨッカーはどこにむかったんでしようか？」

鈴々

「あいつらの居場所が分からないんじゃないでしょうか」

愛紗

「大丈夫だ 御主人様はさっきわたしにこれを渡してくれた」

愛紗は本郷猛から渡された物を見せる。それは・・・

鈴々

「にゃ？ それは・・・」

鈴々も見覚えのあるそれに反応する。

桃香

「えっ？ 何これ？」

愛紗

「これさえあれば・・・御主人様の居場所も分かりますよ」

果たして本郷は愛紗に何を渡したのか？　そしてカビを植え付けられた人々

そして、捕らわれた仮面ライダーの運命は！？

(ル・ル・ル〜ルルルッ！『アイキャッチ 新一号』)



卑劣！ ゴキブリカビを倒せ (前編) (後書き)

次回、仮面ライダーVSゴキブリカビ  
勝利するのはどっちだ！？

卑劣！ ゴキブリカビを倒せ (後編) (前書き)

果たして、前回本郷が愛紗達に渡した物は？

## 卑劣！ ゴキブリカビを倒せ（後編）

（ル・ル・ル〜ルルルッ！『アイキャッチ 新一号』）

ここは洛陽にある董卓が治めていた洛陽の城から少し離れた地下通路内にある

ゲルショッカー、ゴキブリカビのアジト。

そこには捕らわれた仮面ライダー一号が拘束され、手術台に寝かされていた。

そしてその前にはゴキブリカビ、そして暗黒魔術師と科学戦闘員がいる。

暗黒魔術師

「フフフフ・・・ゴキブリカビ、ご苦労様でした。貴方のお陰でショッカー最強の改造人間と言われた仮面ライダーが手に入りました。」

ゴキブリカビ

「ブブブブ・・・後はこいつの脳を我々が改造すれば、こいつは組織の為に動く人形と化し、破壊活動を行うことでしょう」

暗黒魔術師

「今度はライダーに対する怨嗟の声を太平要術の書が吸収するわけですね

ハハハッ！ それにしても、人間の時は私を仕えていた貴方が今度

は私に  
仕えるとはどういう風の吹き回しです?」

ゴキブリカビ

「どうも、何も僕は欲しいのは世界を支配する力。その力があるゲルシヨツカー  
に魅力を感じ、その大幹部である貴方と首領に仕えたくなっただけ  
ですよ」

暗黒魔術師

「なるほど・・・それで自分をゲルシヨツカーに入れてくれといっ  
たのですね?」

ゴキブリカビ

「はい・・・。そして例の物が完成した暁には・・・」

暗黒魔術師

「約束通りこの世界は貴方の物です。支配するなり、滅ぼすなり好  
きにきなさい」

ゴキブリカビ

「ありがとうございます。暗黒魔術師様」

暗黒魔術師

「ハハハッ!・・・さてそろそろ、手術をはじめますよ」

ゲルシヨツカー科学戦闘員

「ギイツ!」

ゲルシヨツカー科学戦闘員が手術を開始しようとしたその時、

(ピン……ピン……ピン……)

ゲルシヨツカー首領の声

「待て……暗黒魔術師よ」

突如首領から止めの命が出たので戦闘員はメスを止める。

暗黒魔術師

「これは首領。一体どうされたのです?」

ゲルシヨツカー首領の声

「義勇軍がこの地下アジトまで向かってきている。モニターを見る  
!」

暗黒魔術師

「な、何ですと!??」

首領からそういわれ、暗黒魔術師は慌ててモニターのスイッチを入  
れると

そこには一直線にこちらに向かってきている関羽達の姿が映ってい  
た。

暗黒魔術師

「一体何故このアジトの場所がばれたのですか?」

ゲルシヨツカー首領の声

「ゴキブリカビ、貴様の所為だ!」

ゴキブリカビ

「え、ええっ!? 僕の所為ですか?」

ゲルシヨツカー首領の声

「ライダーはわざとお前に捕まり、自らの体に発信器を取り付け、仲間をここまで連れてきたのだ!

そして……いつまで眠ったフリをしているつもりだ仮面ライダー!  
ー!」

ゴキブリカビ

「えっ?」

ゴキブリカビは思わずライダーの方を見る。すると……

仮面ライダー一号

「ハッハッハッ……やはり首領、お前の目だけはごまかせなかつたようだな!」

(ブチン! ブチン!)

ライダーは拘束具を引きちぎるといきなり起き上がり、周りにいた科学戦闘員

を蹴り飛ばしてしまう。

仮面ライダー一号

「トオツ! トオツ!」

ゲルシヨツカー科学戦闘員

「ギイイイイッ!」

手術台から降りると、ライダーは暗黒魔術師の前に立ちふさがる。

暗黒魔術師

「チツ！ このアジトまで来る為にわざと我々に捕まったんですね！」

仮面ライダー一号

「暗黒魔術師！ゴキブリカビのカビの解毒剤をこちらに渡してもらおうか！」

暗黒魔術師

「誰が渡す物ですか！ かかりなさい！ ライダーを倒すんです！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイッ！」

ゲルシヨツカー戦闘員がどこからともなく姿を見せるとライダーに襲い掛かっていく。

（挿入曲：レッツゴー！ ライダーキック）

仮面ライダー一号

「トオッ！ トオッ！」

（バキッ！ バキッ！ ボゴッ！）

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイイッ！」

ライダーは襲い来る戦闘員を次々と殴り倒していき、

そして次に短剣を持って襲い掛かってきた戦闘員が近づくと

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

仮面ライダー一号

「フンッ！ トオッ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

攻撃をかわして、そして短剣を取り上げ、次々と切り倒していった。

この様子を見て暗黒魔術師は慌て出す。

暗黒魔術師

「エエイツ！ 何をしていますのです！ 早くライダーを倒しなさい！

ゴキブリカビ！ こうなったのも貴方の責任だ！ さっさとライダーを

倒すのです！」

ゴキブリカビ

「ブブブブッ！ 分かっております」

ゴキブリカビが仮面ライダーに向かっていくと暗黒魔術師は

暗黒魔術師

「くっ！ もはや洛陽での偽董卓悪政計画はここまでですね。



『太平要術』の書を守る為にもここは退かせてもらいましょう。  
フンッ！・・・」

(フッ！)

暗黒魔術師は鞭を地面に叩き付けると、一瞬にしてその場から姿を消した。

そしてライダーは戦闘員を半分近く倒した時、ゴキブリカビはこのままでは

まずいと思ったのか棚に置いてある緑色の液体が入った瓶を戦闘員に渡す。

ゴキブリカビ

「早くこれをもって逃げなさい！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

仮面ライダー一号

「それが解毒剤だな？ 大人しく渡せ！」

ライダーは戦闘員から解毒剤を取り上げようとしたがそれをゴキブリカビが

阻む。

ゴキブリカビ

「貴方のような卑怯者には絶対渡しません！」

仮面ライダー一号

「それはこっちの言葉だ！ 人質を取ったあげく、華雄を騙すような事をした

貴様に言われる筋はない！」

ゴキブリカビ

「華雄？・・・ああ、騙されていると知らず自ら進んで怪人になるという

道を選んだ馬鹿な女ですか？」

(ピキンッ！)

その言葉にライダーは怒りそして、こう言っ。

仮面ライダー一号

「確かに彼女は怪人になるという愚かな選択をした。だが、それは俺に勝利すれば

自らの主である董卓を解放すると言ったお前の言葉を信じてやったことのはずだ！

自らの主の為に戦い、そして命を落とした彼女を否定する権利はお前にない！」

ゴキブリカビ

「フフフフ・・・なら彼女を否定した私をどうします？」

仮面ライダー一号

「決まっている！ お前を倒すだけだ！」

ライダーとゴキブリカビが戦いはじめたとき、戦闘員は瓶を持って

こっそり逃げようと

するが、突然アジトの扉が開いて・・・

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ？」

愛紗

「ハアアアアッ！」

（バキッ！）

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイイイイイッ！」

突如姿を見せた愛紗に殴り飛ばされ、戦闘員は瓶を落としかけるが、その瓶を

鈴々が受け止めた事で割れずにすんだ。

愛紗

「御主人様！ ご無事ですか！」

仮面ライダー一号

「皆！ 来てくれたか！」

鈴々

「おおっ！ お兄ちゃんの持っていたこの受信機のお陰でここまで来ることができたのだ ところでこの透明なツボに入っている物は何なのだ？」

仮面ライダー一号

「それがゴキブリカビのカビの解毒剤だ！ それをもって速く逃げる！」

愛紗

「はっ！」

ゴキブリカビ

「待ちなさい！ そうはさせません！」

愛紗達が逃げようとしたときゴキブリカビは阻みかけたが、ライダーに阻止されてしまう。

仮面ライダー一号

「お前の相手はこの俺だ！」

ゴキブリカビ

「ブブブツッ！ 小癩な！ これでもくらいなさい！」

（ゴオオオオオッ！）

ゴキブリカビは口から炎を吐くが、

仮面ライダー一号

「ハッ！」

簡単にかわされ、そしてその炎は誤ってアジトの起爆装置に触れてしまう。

そして炎の高熱で起爆装置が作動し、アジト内に警告音が鳴り響いた。

(ビーン！ ビーン！ ビーン！)

ゴキブリカビ

「ああっ！ しまった！ もうこのアジトはお終いです！  
ブブブブ！」

ゴキブリカビはとっさに非常用のスイッチを押すと、天井が開きそこから飛び立

っていった。

仮面ライダー一号

「待てッ！ トオオオオオッ！」

仮面ライダーもゴキブリカビの後を追ってその天井から出た。

そして外に出た仮面ライダーとゴキブリカビはお互い距離を保ちな  
がら、

構える。

ゴキブリカビ

「ブブブブッ！」

(ピュイイイン！)

仮面ライダー一号

「……………」

そして最初はゴキブリカビからライダーに殴りかかってきた。

ゴキブリカビ

「ブブブブッ！」

(バキッ！ バキッ！)

しかし次の攻撃はライダーに受け止められ、地面に叩き付けられる。

仮面ライダー一号

「トオッ！」

(ドゴンッ！)

ゴキブリカビ

「ブブブブッ！」

ゴキブリカビは何とか起き上がったが、それと同時にライダーのパンチ、キックなどの

猛攻を受ける。

仮面ライダー一号

「トオッ！ トオッ！ トオオッ！」

(バキッ！ バキッ！ ボゴッ！)

ゴキブリカビ

「ブブブブッ！」

そしてライダーは、

仮面ライダー一号

「トオッ！」

(バキッ！)

ゴキブリカビを蹴り飛ばし、大きなダメージを負わせる。

ゴキブリカビ

「ブブブブッ！ く、くっそう・・・」

起き上がったゴキブリカビにはもはや戦う力がない。

トドメを刺すときだと判断したライダーは必殺技の構えをとりそして

(ピュイイイイン！)

仮面ライダー一号

「行くぞ！トオオオオオオオオオッ！」

(ビュオオオオオオオン！)

仮面ライダー一号

「ライダーアアアアアア・キイイイイイック！」

大空高く跳び上がったライダーは必殺のキックをゴキブリカビに命中させた。

(ドゴッ！)

ゴキブリカビ

「ブブブブッ！」

ゴキブリカビはライダーキックで10メートルまで跳ばされ、地面に叩きつけられる。

何とか立ちあがったと同時にその姿は張譲の姿に戻る。

張譲は口から血を吐きながらライダーにこういう。

張譲

「ゴホッ！・・・お、己っ！ 仮面ライダー！ 僕を倒して終わりだと思わないことです！ ゲルシヨッカーは僕に変わる次の怪人を生み出し貴方にけしかけてきますよ！」

仮面ライダー一号

「例えそうだとしても、俺はこの世界を守る為に戦うだけだ！」

張譲

「フッ・・・果たしてどこまで戦えるのか見物ですね。うっ・・・地獄で貴方の戦いを見届けさせてさせてもらいますよ。うっ・・・い、偉大なるゲルシヨッカー首領と暗黒魔術師様に栄光あれえええええっ！」

張譲はゲルシヨッカーに対する忠誠を絶叫しながら後方に倒れ、そして



(ドドオオオオオオン！)

激しく爆発死し、同時に洛陽の地下通路内にあったアジトも

(ドオオオオオオン！)

爆発し、それと同時に暗黒魔術師の声がどこからともなく聞こえてくる。

仮面ライダー一号

「？」

暗黒魔術師の声

「仮面ライダー！ ゴキブリカビの仇はいずれ討たせていただきます。

そして、いつまでも貴方が勝つとは思わない事です。首領に献上する

物を作るのに協力して頂く為にかつて貴方を苦しめた方々に蘇っていた

だくことにしました。今度はその方々との共同戦線になりますから、残

された時間を有意義にすごすことですね。フハハハハハハッ！」

暗黒魔術師の声はそのまま聞こえなくなった。

その頃、ゴキブリカビのカビの解毒剤を手に入れた愛紗達は早速、それを

華陀に渡し、華陀は鍼の先端を解毒剤に浸すと、今にも死にかけて

いる患者に

その鍼を振り下ろした。

華陀

「ハアアアアアアアツ！ 元気になれええええっ！」

すると、鍼を刺された人に生えたカビはあっという間に消えてしまった。

(フツ！)

星

「おおっ……これは」

桃香

「カビが消えましたね」

鈴々

「凄い効き目なのだ」

華陀

「ああっ……俺の鍼でも治せなかったのに、この薬を使った途端、一瞬でカビが消えた。とりあえず、洛陽の人と董卓達はこの方法で助けられそうだ」

愛紗

「華陀殿 頼みます 早く彼らを治して下さい！」

華陀

「ああっ！ 任せておけ！ 全力全開！ うおおおおおおっ！」  
華陀はそう言うと他の人達の治療にかかり次々と治していく。

その頃、ライダーから本郷の姿に戻った彼はサイクロンを走らせながら

愛紗達の元へと向かっていった。

洛陽の人々、董卓達を助け出しゲルシヨツカーの偽董卓悪政計画、  
そしてゴキブリカビ

の三国支配の野望も本郷猛、そして連合軍の活躍により潰えた。

だがゲルシヨツカーはなおもこの世界に猛威を振るおうとしている  
のだ。

そして暗黒魔術師が残した謎の言葉、はたしてあの方達とは一体何  
者なのか？

その事が頭をよぎりながらも、本郷猛はゲルシヨツカーから世界を  
守るといふ

決意を固めていくのであった。

つづく

卑劣！ ゴキブリカビを倒せ (後編) (後書き)

次回、『本郷猛、董卓、賈馱に裁きを下すこと』にご期待下さい！

**本郷猛、董卓、賈馱に裁きを下すのこと（前書き）**

今回は連合軍が来る前に起こった事と董卓こと月が本郷に厳しい処分を求める

SSです。それでは本編をお楽しみ下さい。

本郷猛、董卓、賈馱に裁きを下すのこと

数時間後、華陀は董卓達を含め、洛陽の人々の治療を終えた。

華陀

「ハア・・・ハア・・・や、やっと終わった・・・」

休憩なしでゴッドヴェイダーの治療を続けていたからか若干やつれている。

愛紗

「お疲れ様でした。華陀殿」

華陀

「ああ・・・全員の治療は今終わった。とりあえず、俺はもう休ませてもらおう。」

華陀はそういつと義勇軍の本部がある場所まで戻っていく。

それと同時に本郷がサイクロンを走らせて帰ってきた。

本郷猛

「ただいま皆。」

桃香

「お帰りなさいませ ご主人様」

鈴々

「お帰りなのだ！お兄ちゃん」



少女二人が目を覚ましかけ、そして賈馱はわずかに目を開けると

詠

「?・・・・・・・・!! え、ええええつ!!」

見慣れない男女が自分達を見ていたので、思わず僕は飛び起きてしまふ。

詠

「あ、アンタ達一体誰なのよ! それに僕達をどうしようというのよ!?!」

月

「・・・・・・・・? 詠ちゃ・・・・・・・・!」

月も起きると知らない人を見て驚いたのか僕の方へよってきた。

月

「あ、貴方達 誰ですか!?!」

本郷猛

「俺達は連合軍だ」

詠

「れ、連合!?!」

詠は驚いて腰を抜かしそうになる。無理もない。自分達の命を狙っている連合が



目の前にいるのだから。

本郷猛

「怖がらなくていい。俺達は君達に危害を加える意思はない。既に君達がゲルシヨッカーに悪政を強いられていたのは分かっていることだ

それにこの洛陽に奴らはもういない」

詠

「ええっ？　じゃあ　張讓は？　ゴキブリカビは！？」

本郷猛

「俺が倒した　そして奴らから奪った解毒剤で君達を助けたんだ」

詠

「嘘っ！？」

賈馮は信じられないことを聞いて驚いた。何故なら自分達の兵も、敵わなかった

化け物を目の前の男が倒したといっているのだから。

詠

「あいつを倒したって本当なの？　とても僕には信じられないよ」

本郷猛

「外を見てごらん。　奴らはどこにもいないはずだ」

詠は本郷にそう言われて、城の外を見てみると洛陽の民が呉と魏の

軍の施し

を受けており、そして全員の体からカビが消えているのが確認できた。

そしてゲルシヨッカーの怪人らしい姿は確認できなかった。

どうやら目の前の男の言うことは本当らしい。

詠

「これって・・・っ、つまり皆・・・助かったの？」

鈴々

「今気づいたのかなのだ？」

詠

「だってそうでしょ？ 化け物を倒したっていつてもすぐには信じられないわよ」

本郷猛

「無理もない。そして、君が董卓だな？」

本郷は綺麗な服を着た少女にそう聞いたとき

詠

「違っ！ 僕が董卓・・・」

鈴々

「嘘なのは丸わかりなのだ」

詠

「何で分かるのよ？」

鈴々

「だって目が泳いでいるし、お姉ちゃん 冷や汗かいているのだ」

鈴々にそう指摘され、詠は子供に嘘を見透かされ落ち込んでいると董卓はこう答える。

月

「はい、私が董卓です。」

本郷猛

「君なら真実を知っているはずだ 一体この洛陽で何があったのかを話して欲しい」

月

「……あれは数週間前のことです。 張讓に何進將軍暗殺の濡れ衣を

着せられた私は恋ちゃ・呂布さんと一緒にその場から急いで離れ、この洛陽まで逃げてきたのですが……」

月は数週間前にあった事を彼らに話し始める。

数週間前

朝廷から逃げ帰った月と恋は洛陽の城へと入ると、そこにはいるは

ずのない人物が

いたのだ。

張讓

「やあ、遅かったですね 董卓？」

月

「ちよ、張讓！ どうしてここに!？」

月は驚く。何故ならこの城から朝廷までは数日かかる距離であり、何とか追ってきたとしても自分達よりも先につくはずがないのだ。

張讓

「飛んできて先回りしたんですよ」

恋

「・・・飛ぶ？」

恋は張讓が意味不明な事を言ったので困惑したとき、そこへ賈馱と張遼

そして華雄がやってきた。

華雄

「董卓様！ 何事ですか!？」

詠

「ちよ、月！ どうしたのよ!？」

月

「詠ちゃん 華雄さん！ この人、靈帝と何進將軍を殺したの！」

霞

「何やてっ!?!」

恋

「しかも、恋達はめた・・・」

詠

「えっ!?!」

詠は事情を把握すると、すぐにこっぴど。

詠

「誰かある！ 直ちにこの男を捕らえなさい！」

「はっ！」

詠に呼ばれた兵士達は張讓を捕らえる為に彼に向かっていくが・・・

張讓

「愚かな・・・フフフ・・・」

張讓は突然不気味に笑い出すと、その姿はゴキブリカビになった。

ゴキブリカビ

「ブブブブ・・・！」

「うわああっ！ ば、化け物！」

兵は突然張讓が怪物に変身したことに驚き、一瞬怯んでしまい怪物の口からでる粉に当たってしまつた。

「ぐ、苦しい……」

そついうとそのまま床に倒れ、そして体にカビが生えてきた。

しかもそれだけでなく

ゴキブリカビ

「かかれっ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイ！」

どこに潜んでいたのか戦闘員は次々と姿を現し、董卓の兵士を次々と切り倒してしまつた。

そして兵士が全滅すると、霞、華雄、恋は月、詠、音々音を守りながら後退る。

ゴキブリカビも元の張讓の姿に戻ると、彼女達にゆっくりと近づいていった。

張讓

「フフフフ……逃がしませんよ」

霞

「来るなや！ 化け物！」

霞が威嚇するも、張譲は怯まなかった。

張譲

「そう邪険にしないで下さい。僕はただ董卓にあることを洛陽の民に命じて欲しくてここに来ただけです」

月

「そ、それは一体？」

月は張譲に質問すると張譲は何と、民達に無茶な治水工事、重税、そして逆らう者は処刑

する事など考えられないことを月にするように言ってきた。

月

「そ、そんな酷い事出来ません！」

張譲

「できないじゃない！ やるんです！ これは命令だ！」

詠

「命令つて……あなた 何の権利があつてそんな事いうのよ！」

張譲

「ふふふ……やはり逆らいますか……ならこれならどうです？」





月  
「げるしよつかあ？」

ゴキブリカビ

「ブブブブ・・・聞き慣れない言葉ですから上手く話せなくて当然ですね？」

それよりも、返事は？」

ゴキブリカビが戦闘員の方をみると戦闘員は月の両親の首元にナイフを押し当てる。

月

「や、止めて！」

ゴキブリカビ

「止めて欲しければ、どうすればいいか分かっているはずですよ」

ゴキブリカビにそう言われると、月は思わず一瞬悩む。民を苦しめたくは

ないが、ここで両親を殺されるわけにもいかない。彼女は悩みに悩んだ末

・・・遂に・・・

月

「わ、分かりました・・・」

詠

「ちよ、月？」

月

「お父さん、お母さんを殺されたくないよ」

「月、馬鹿なことを言うな・・・」

「そうです。貴方達だけでも逃げなさい・・・」

両親は月達に逃げるようにいうが

ゴキブリカビ

「黙れっ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

戦闘員はゴキブリカビの合図で両親を気絶させた。

月

「ああ止めて！ 言うとおりにしますから・・・」

月は涙を流しながら、ゴキブリカビに慈悲をことう。

そして、彼女はゲルシヨツカーのいうままに悪政を行わざるを得なくなり、

それから連合軍が来るまでの間、悪政により洛陽では董卓に対する怨嗟の聲が

拡がっていった。

本郷猛

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

月

「こうして私は連合軍が来るまでの間、悪政で人々を苦しめてしま  
い、逆らった者は

ゴキブリカビと戦闘員に酷い目にあわされ、死んだ人も出ました」

愛紗

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

月

「でももうこれ以上悪政を行うことに耐えられなくなった私は、両  
親をこっそり助け出して、皆でこの洛陽を逃げようとしたんですが、  
その前にゴキブリカビに見つかってしまい・・・」

月はこんな事を言い出す。

月の両親が監禁されている部屋を発見した月は両親を助けると、皆  
で洛陽から逃げようと

したが

ゴキブリカビ

「ブブブブッ！」

詠

「ゴ、ゴキブリカビ！ どうしてここに！？」

ゴキブリカビ

「僕を甘く見てもらっては困りますね。」

実はゴキブリカビは城中に監視カメラを設置して月達の行動を見ていたのだ。

現代の物であるカメラを知らなかった為、月達はゴキブリカビが離れていても

自分達を監視できるとは知らなかったのだ。

ゴキブリカビ

「逃げだそうとした報いを受けてもらいます。　ブブブッ！」

ゴキブリカビは口からカビを吐き出し、月に浴びせる。

月

「きゃあああっ！」

そして粉を浴びた月は苦しみだしはじめ

月

「く、苦しい……た、助けて……」

詠、恋、霞

「月！」

音々音、華雄

「董卓様！」

その場にいた者は急いで月の元へと近づき、その体にはカビが生えているのを見た。

桃香

「・・・・・・・・」

月

「私達は皆で洛陽から逃げたそうとしたんですがあいつに見つかってカビを浴びせられてそこからの記憶が・・・・」

鈴々

「一体その後どうなったのだ？」

月

「す、すみません。ここで目を覚ますまでその後何があったかは・・・・」

詠

「今度は僕が話すよ月・・・・月がカビを浴びせられた後、あいつはこういったの」

月にカビを浴びせるとゴキブリカビはこういう。

ゴキブリカビ

「愚かな奴だ・・・大人しく従っていればこんな事になりませんでしたのに」

その場にいた者はゴキブリカビを睨み付けるが月の二の舞になるのが分かっていた

ので手が出せなかった。

ゴキブリカビ

「本来なら、皆さん処刑ですが、ここは一つ取引と行きましょう」

霞

「取引やてっ？」

ゴキブリカビ

「そう、もしこの条件を呑み果たすことができたなら、カビを植え付けた皆さんの

治療、そして今後一切この洛陽に危害を加えないことを約束します。

「

詠

「何なのよその条件って？」

ゴキブリカビ

「君達の中の誰かが改造手術を受けて、怪人になって仮面ライダーと戦ってもらえばいいだけの話です。」

華雄

「何なんだ？ その仮面らいたあというのは？」

ゴキブリカビ

「『天の御遣い』の話聞いたことはありませんか？」

音々音

「そういえば、数ヶ月前に幽州の地にその様な人物が来たと聞いたことがありますか……」

ゴキブリカビ

「そう・・・そして仮面ライダーとはその『天の御遣い』が変身した姿のことです  
そいつのせいで黄巾党も壊滅しましたし・・・」

詠

「ええっ!？」

詠達は怪人からその事を聞いて驚く。黄巾党が潰滅したのは知っていたが

まさか天の御遣いによって潰滅させられたとは驚くしかない。

ゴキブリカビ

「どうです? もし仮面ライダーを倒せたら、洛陽の人々、そして董卓を  
解放するように首領に掛け合ってもいいんですけど・・・」

ゴキブリカビにそう言われ、華雄は主、そして洛陽の民を救う為、  
人間として決して応じてはならない取引に応じることを決意する。

華雄

「分かった・・・なら、その改造手術 私が受けよう」

詠

「ちよ!?! 華雄!?!」

霞

「あんだ正気か？」

華雄

「董卓様を救う為にはこれしか方法がない」

ゴキブリカビ

「ほう？ いいのですか？ 一度改造されたら二度と人間には戻れませんよ？」

華雄

「構わん！ 怪人になってそのライダーを倒し、董卓様が解放されるなら

この華雄、人としてのこの身、惜しくはない！」

ゴキブリカビ

「分かりました。ならこっちに来なさい 華雄」

華雄

「分かった。」

詠

「ちよ！？ 華雄 駄目」

詠は思わず華雄を止めようとするも華雄は仲間にくっつく。

華雄

「心配するな。 何しろ私は長生きするたちだからな (^-^-)」

笑みを浮かべた彼女の顔には決意と覚悟が含まれているようにも見え、





仲間を助け出し、そして別の敵から私を守る為に自ら盾に……」  
本郷に華雄が死んだことを告げられた彼女は

月

「そ、そんな……う、うわああああああああっ！」  
遂に泣き出してしまふ。無理もない。家族同然でもあつた華雄が  
もうこの世に

いないと知らされたのだから。

詠

「じゃ、じゃあ呂布は？ 陳宮は！？ 張遼は！？」

桃香

「呂布と陳宮つて人なら、ご主人様が退けてどこかに逃げましたよ。  
張遼つて人は  
たぶん曹操さんの軍に投降したと思います」

詠

「そ、そう……」

詠はせめてその3人だけが無事だと知らされホツとした。しかし月は  
何か覚悟を決めたのか本郷にこう言い始める。

月

「あなたが『天の御遣い』様ですか？」

本郷猛

「そうだ、それがどうしたんだ？」

すると彼女は本郷にこういう。

月

「お願いです！ 私を殺して下さい！」

一同

「ええっ!？」

詠

「何言ってるのよ!？ 月!？」

詠は驚く。命乞いするなら分かるが自分から進んで殺してくれなんていうのはおかしい。

愛紗

「お主、正気か!？」

月

「いいんです。これで、私が不甲斐ないばかりに張讓に人殺しの汚名を着せられたあげく、両親の命惜しさに悪政を強いて民を苦しめ、逆らった人達もあの人達に殺されました。そしてこれ以上の悪政に耐えられなくなった私は両親と仲間だけを連れて逃げようとしたから、華雄があんな事に・・・」

鈴々

「別にお姉ちゃんが悪いわけじゃ・・・」

月

「いいのよ。私はこの洛陽を治める領主として決してしてはならないことを  
してしまったの・・・それに真実を知っても洛陽の皆の私に対する憎しみ  
は消えないでしょう・・・」

詠

「ゆ、月・・・」

月

「私にできる事は、『天の御遣い』様に倒されること・・・それで洛陽の  
人々の悲しみと怒りが癒やせるなら・・・」

本郷猛

「董卓・・・」

本郷は董卓の覚悟に驚く。小さい体ながら、領主としての責任を感じ  
るが故に

自分にできる最大限の責任を果たそうとしているのだと・・・

そう悟った本郷は・・・

本郷猛

「・・・分かった」

一同（鈴々）

「ご、御主人様！？（お兄ちゃん、本郷！？）」

一同は本郷は董卓を説得し、生きろというと思っていたが思いもしないことを

いっただので驚いていたのだ。

そして本郷は変身する為の構えをとる。

本郷 猛

「……………フンっ！」

（ピュイイイイン！）

本郷 猛

「ライダー……………」

本郷は左手を腰に当て、右腕を左側に持ってきてポーズをとると、

右腕をまた右側に持ってきて、今度は右腕を腰に当て、左腕を右側に持つ

てきた。

本郷 猛

「変身っ！」

（ゴウンー！）

すると本郷の腰から赤い風車のついたベルトが現れ、  
ベルトから発した凄まじい光が彼を多い光が晴れると本郷は仮面ラ  
イダー  
になっていた。

(ピュイイイイン！)

初めて本郷が変身した姿を見た月、詠は驚く。

詠

「あ、あんたがゴキブリカビがいていた・・・」

月

「仮面ライダーさん・・・？」

仮面ライダー一号

「そつだ・・・最後に聞く。　言い残すことはないか？」

月

「はい・・・洛陽の皆には『許してくれとはいいません。』

ただ私が死ぬことで、皆に笑顔が戻るなら私は喜んで神様の元へと  
召されます』と伝えて下さい。」

仮面ライダー一号

「分かった。」

その時、詠が止めに入ろうとしたとき、仮面ライダーは攻撃の体制

をとり

拳を月に向け、そして……

(ピュイイイイン！)

仮面ライダー一号

「ライダーアアアアアアアア・パアアアアンチッ！」

その一撃のパンチは少女に向けられてゆっくりと振り下ろされていく。

詠

「だ、駄目えええええつ！」

詠は止めようとしたが間に合いそうにもない。

これでいい、自分のせいで多くの人々を傷つけ、死なせてしまったのだから……

そう思う董卓は仮面ライダーの攻撃を避けようともせず、ただ目をつぶるだけであった。

しかし……

(ドゴオオオオオオオオンッ！)

その音は人間を殴った音ではないどころか自分は痛みすら感じていない。

何かかと思い月は恐る恐る目を開けると、目の前の仮面をつけた人物は

自分ではなく、なんと自分の後ろにいた自分をさそうとしていた覆面をつけ

た人の体をその人の拳は貫いていた。

白蓮

「なっ？ いつの間に戦闘員が？」

鈴々

「こいつら 性懲りも無く、董卓を狙っていたのかなのだ!？」

愛紗

「もしかして御主人様？ こいつから董卓を守る為に変身を？」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギ、ギイイイイツ・・・」

覆面の人はそのまま後に倒れると、溶けて消えてしまう。

それと同時に覆面の人を倒した人は後ろを向いて、月にこういう。

仮面ライダー一号

「悪政を強いて人々を苦しめていた暴君董卓は、この私仮面ライダーが倒した。」

月

「えっ？ あ、あの・・・」



月はライダーの言うことがよく分からず困惑します。

仮面ライダー一号

「ここにいるのはその董卓に捕らわれていた唯の女の子達だ。そう  
だろ？皆」

愛紗

「ええっお見事ですご主人様」

鈴々

「凄いのだ！お兄ちゃんが悪い董卓をやっつけて  
お姉ちゃん達を助けたのだ！」

朱里

「これで洛陽の人達は自由の身です」

一部は本郷の意図に気づいたのか、あえて彼にあわせていた。

(ボシュン！)

ライダーは変身を解除し、二人の少女を見つめると董卓は彼にこう  
聞く。

月

「あの・・・なぜ・・・私を殺さないのですか？ 脅されていたと  
はいえ

、私は悪政を行っていた身、死罪になってもおかしくないのに・・・

」

本郷猛

「死ぬことだけが罪を償うことにはならない。もし犯した罪を償いたいのなら生きてどう償うのか考えろ」

月

「でも・・・」

本郷猛

「それにこれは華雄の最後の頼みだ。彼女は死ぬまで君の事を心配していた。」

月

「華雄の・・・？」

本郷猛

「それに、俺は君のように心優しい人間を殺せないし、ゲルシヨツカーに殺された人達の為にも君は生きて、俺達と共に奴らと戦う義務がある」

詠、月

「・・・・・・」

本郷猛

「共にいこう。そしてどうすれば罪を償えるのか、その方法を見つめよう」

二人の少女はその男の器の大きさに感激し、涙が出そうになる。

この人なら信用できる。真名を預けられる。そう思った少女二人は

月

「・・・分かりました。私の名は董卓 字は仲穎 真名は月です」

詠

「僕は名を賈馱 字を文和。真名は詠よ この真名アンタ・・・  
いえ貴方に預けます」

本郷猛

「分かった・・・心して君達の真名受け取らせてもらう」

二人

「はいっ！」

こうして義勇軍に月、詠という二人の少女が新たに仲間に加わった。

その後、義勇軍は二人を守る為に洛陽の城を焼き払い、董卓は本郷が倒した事に

して、連合、そして洛陽の民にそういうと、洛陽で歓声が起こり誰もが、本郷を

街を解放した英雄として称えるのであった。

つづく

**本郷猛、董卓、賈馱に裁きを下すのこと（後書き）**

暗黒魔術師

「フフフ・・・太平要術の書に蓄えられた妖力でかつてライダーを苦しめたあの

シヨツカー大幹部、ゾル大佐、死神博士、地獄大使、そしてゲルシヨツカー大幹

部ブラツク將軍を蘇らせることができます。復活した彼らと協力して今度こそ

仮面ライダーを血祭りにしてあげましょう。次回『復活！ゾル死神地獄ブ

ラツク』にチャンネルを合わせて下さいよ。　　ハハハハッ！」

復活！ソル 死神 地獄 ブラック（前書き）

今回暗黒魔術師が四大幹部を復活させる為に唱えた呪文は訳すところ  
んな

意味になります。

『怨嗟の声を喰らう 悪しき書よ 我願う 暗黒に身を寄せし者達  
に再び悪しき  
魂を与えたまえ！』

## 復活！ソル 死神 地獄 ブラック

ここはゲルシヨッカー三国時代支部本部司令室。

その本部にいる暗黒魔術師と戦闘員の前には四つの棺が置かれていた。

暗黒魔術師は太平要術の書を取り出すと、徐にこういう。

暗黒魔術師

「ふふふふ・・・邪眼様が仮面ライダー達に破れた後、あの発電所からこのお方達

を回収しましたが、かつて仮面ライダーを苦戦させたこのお方達を復活させ、お力

を借りればさらに『太平要術の書』に妖気を蓄えることができるはずです。『世界征

服』の野望を持ちながら、潰えた者達よ・さあ、目覚めの時です」

そついうと暗黒魔術師は不気味な呪文を唱えはじめる。

暗黒魔術師

「エンガン・・・ボエゾグ・・・ラグアギ・・・キギヨヨ・・・パセベガグ・・・アンボグ・・・ビリゾゾ・・・レギモン・・・ダヂビズ・・・ダダヂアギキタラ・・・ギギゾ・・・ガダゲジヨオオオオオッ！」

すると太平要術の書は青く光り出し、その光は書から離れると四つに分離して、棺に降り

注いだ。

(バリバリバリバリッ！)

光を浴びた棺はしばらく帯電した状態になり、やがてガタガタッとゆれだすと・・・

(バンッ！)

勢いよく棺の蓋が開き、中からそれぞれ、軍服を着て、眼帯をつけた男。

白い紳士服を着て、白い蝶ネクタイ、黒いマントを羽織った老人。

フナムシの様な格好、鷲のベルトをして鞭を持った男。

そして軍服を着て、胸に勲章。ゲルシヨツカーのシンボルマークが入ったヘルメット

をした男が出てきた。

?????

「……………ここは一体どこだ？」

?????

「儂らは確か忌まわしきライダーに倒され、地獄にいったはずだが……」

?????

「問題はなぜ儂らがここにいるのかだ……」

???????

「我が輩達は何者かによつて再び命を与えられたのか？」

暗黒魔術師

「その通り。初めましてになりますね？　ゾル大佐、死神博士、地獄大使

そしてお久しぶりですね？　ブラック將軍？」

暗黒魔術師にそう言われるとブラック將軍は彼の方を見る。

ブラック將軍

「貴様は暗黒魔術師・・・」

ゾル大佐

「ブラック將軍　貴方はこの男を知っておられるのか？」

死神博士

「誰だこいつは？」

ブラック將軍

「貴様らがしらんのも無理はない。こいつの名は暗黒魔術師。新しくゲルシヨツカーの大幹部になった男だ」

地獄大使

「何と・・・ならここはゲルシヨツカーの本部なのか？」

死神博士

「そして、儂らに命を与えたのも貴様か？」

暗黒魔術師



「その通り。ただしここは日本でも貴方達の知っている世界でもありませんがね」

死神博士

「どづいいう意味だ？」

暗黒魔術師

「そう怖い顔をしないで下さい死神博士　今説明しますので・・・」

暗黒魔術師は4人の幹部にこう説明する。ここは1700年以上昔の中国で

後漢の時代であること。　この世界では三国志で有名な英雄達が全員、可憐な

少女達であること。　自分は首領にある物を作り献上する為に、この時代にゲルシ

ヨツカー三国時代支部を設立し、その功績で大幹部になった事。

そして・・・ゲルシヨツカーの敵である本郷猛こと仮面ライダー一号がこの世界に来て

おり、『天の御遣い』という救世主としてゲルシヨツカーに敵対していることを説明

した。

ゾル大佐

「信じられん・・・ここが1700年以上前の別の世界の中国だと！

？　しかし、外の映像  
を見せられては信じざるを得んな」

地獄大使

「本郷の奴も、この世界に来ておるのか！？　ちよつどいい  
奴は儂が自ら血祭りにしてくれるわ！」

死神博士

「あの忌まわしき本郷猛！　奴に倒されたこの悔しさ！　忘れよう  
とも忘れられん！」

地獄と死神はかつて仮面ライダー一号に倒された悔しさを思い出し、  
地獄は鞭を

地面に叩き付け、死神は歯ぎしりしながら、暴れ出す。

暗黒魔術師

「落ち着いて下さい。倒された悔しさは理解出来ませんが・・・」

二人

「うるさい黙れ！」

二人は怒りの余り、暗黒の声は聞こえていない。

戦闘員も動揺しはじめ、このままではゲルショックカーの指揮に関わ  
ると

思われたその時

ゾル大佐

「二人ともいい加減にしなさい！ 幹部である我らがこのような姿態を見せては  
ゲルシヨツカーの指揮に関わる！」

ブラック將軍

「ゾル大佐の言うとおりだ！ 貴様ら恥ずかしくないのか！」

死神博士

「うっ・・・」

地獄大使

「確かに、ここで儂らが暴れても意味が無い・・・」

二人が冷静さを取り戻したその時

(ピイン・・・ピイン・・・ピイン・・・)

ゲルシヨツカー首領の声

「ゾル大佐・・・死神博士・・・地獄大使・・・ブラック將軍よ・・・」

ゲルシヨツカーのシンボルマークから首領の声がしてくる。

ゾル大佐

「そ、その声は!？」

死神博士

「もしや・・・」

地獄大使

「シヨツカー・・・」

ブラック將軍

「ゲルシヨツカーの首領!？」

ゲルシヨツカー首領の声

「答えよ・・・再び命を与えられた貴様らが望むものはなにかを・・・」

ゾル大佐

「・・・はは・・・我らの望みは・・・」

死神博士

「・・・ただ一つ」

地獄大使

「『世界征服』に・・・」

ブラック將軍

「うごきます・・・」

ゲルシヨツカー首領の声

「ならば、今後は暗黒魔術師の命令を儂の命令として従い、怪人と戦闘員達を指揮するのだ」

ゾル大佐

「首領の命令とあらば仰せのままに・・・」

死神博士

「そして『世界征服』成功の暁には仮面ライダーの首を貴方に捧げましょう」

ゲルシヨツカー首領の声

「頼むぞ・・・全ては俺が世界の支配者になる為に」

ゲルシヨツカー首領がそういった時

ゾル大佐

「ですがその前に・・・」

ゾル大佐はある戦闘員に近づき、前にたつ。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイ？」

戦闘員は何だ？と思ったその時

(ピシッ！)

いきなりゾルに軽く鞭で叩かれてしまう。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！？」

ゾル大佐

「服装が乱れておる！」

何と彼は戦闘員の服装の乱れを指摘する為に近づいたのだ。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギ、ギイツ！ も、申し訳ございません！ ゾル大佐！（慌てて服装を整える）」

ゾル大佐

「服装の弛みは精神が弛んでいる証拠だ！私が蘇った以上、ゲルシヨツカーにおける服装の弛みは絶対に許さん！」

地獄大使

「はははっ！ 相変わらず堅い男じゃ！」

ゾル大佐

「そういう地獄大使殿もベルトが曲がっておられますぞ！それでは部下への示しがつきません！」

地獄大使

「おおっと！ これは失礼！ 三度も蘇ったからつい気が弛んでしまったわ  
ワハハハハッ！」

地獄大使も示しをつける為に慌てて、シヨツカーシンボルマークのベルトを

整える。

死神博士

「ふん・・・首領の御前だというのに、くだらん漫才をみせるとはな」

大幹部の中で最年長である死神博士はゾルと地獄のくだらないやりとり

あきれていた。

ブラック將軍

「全くですな死神博士。今は仲間同士で漫才をしている場合ではない！」

ゾル大佐

「分かっておりますよ」

その時暗黒魔術師が四大幹部にこう話し始める。

暗黒魔術師

「では復活早々、申し訳ありませんが『太平要術の書』に妖力を多く蓄える

為にも我々はこの世界の人間どもの怨嗟の声を集めなければなりません。それ

にはかつて仮面ライダーを苦戦させたあなた方の力が必要です。まずはゾル大佐

、地獄大使」

ゾル大佐

「何だ？」

地獄大使

「儂らは何をするのだ？」

暗黒魔術師

「貴方がたにはある怪人を指揮してもらいます。入りなさいイルカリラ」

暗黒魔術師がそういうと、イルカとゴリラを合成したような怪人が入ってくる。

イルカリラ

「ドルルルルルルル……」

地獄大使

「暗黒魔術師、この改造人間は？」

暗黒魔術師

「彼の名はイルカリラ……催眠術を得意とする改造人間です。」

ゾル大佐

「催眠術だと？」

暗黒魔術師

「今から彼のお力をお見せしましょう。連れてきなさい」

すると、今度は戦闘員に連れられて、この支部で奴隷として働かされていた

男が入ってきた。

「く、くそ！ 離せ！ 離しやがれ！」

暗黒魔術師



「イルカリラ・・・貴方の催眠術でこの男を操ってみせなさい」

イルカリラ

「ドルルルル・・・かしこまりました暗黒魔術師様」

イルカリラはそういうと、男の前に立つ。

「ひいひいっ」

するとイルカリラは手を男に向け、怪しげな動きをみせると、それと同時に怪しい

怪音波が男の中に入ってくる。

「（な、なんだ？・・・意識が段々遠く・・・）」

イルカリラ

「うるたえるな・・・俺の目を見る・・・今からお前はゲルシヨツカーの手先として

働くのだ・・・さあ、ゲルシヨツカーの為に働け・・・」

「・・・ゲルシヨツカーのためにどんなことでもします。」

あっという間にその男は洗脳されてしまう。

ゾル大佐

「これは見事だ あっという間に催眠状態になった」

地獄大使

「これからこの改造人間を使って何をする気だ？」

暗黒魔術師

「それはですね……」

暗黒魔術師は二人に作戦の内容を説明すると……

ゾル大佐

「なるほどそれは面白い」

地獄大使

「それなら本郷も迂闊には手はだせまい」

暗黒魔術師

「では任せましたよお二方。」

ゾル大佐

「分かった」

地獄大使

「ハハハッ！ この地獄大使に任せただ。大船に乗ったつもりでいる」

暗黒魔術師

「フフフ……期待を裏切らないで下さいね では私は用事がありますので……」

暗黒魔術師は司令室にある通信機を使い、どこかに連絡しようとしている。

果たしてどこに連絡しようとしているのか？

そして暗黒魔術師の立てた計画とは一体？

つづく

復活！ソル 死神 地獄 ブラック（後書き）

ワニマジロ

「物語も一時現代編に戻り、戦いははますます激しさを増す。次回はいよいよ

この俺ワニマジロの出番だ！ くくく・首領の期待に応える為にも仮面ライダー二号を俺の『砲弾スクリューボール』でぶっ飛ばしてやる。次回『装甲怪人ワニマジロ』を絶対見るよ！ グワングワングワン！」

装甲怪人ワニマジロ (前編) (前書き)

話は一時現代編に戻り、今まで謎に包まれていた怪人ワニマジロの能力が明らかに！？

## 装甲怪人ワニマジロ（前編）

ここは長野県の山中。人里離れた山の中であるゲルシヨツカーの怪人が自らの能力の

テストを行っていた。

??????

「砲弾スクリユウボオオオオオオオール！！」

その怪人は球体になると、一直線に山に向かって体当たりをする。

（ドゴオオオオオオオン！）

するとその山はみるみる崩れだし、美しかったその山は崩壊して瓦礫とかしてしまふ。

この怪人こそタコガラスと同じく、ゲルシヨツカーに入った怪人ワニマジロ

なのだ！

ワニマジロ

「グワングワングワン！ 素晴らしい たった一撃で山が崩壊した」

そして近くにいた戦闘員は本部にいるブラック將軍に連絡する。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ブラック將軍 ワニマジロの性能実験は見事に成功しました」

ブラック将軍の声

「よろしい・・・では作戦を第二段階に移行せよ」

そしてワニマジロは本来の姿である銀色の髪をした少年、左慈に戻る。

左慈

「ははははっ！ 待っているよ一文字隼人 てめえは俺がぶっ殺してやる！」

翌日、長野県で山が原因不明の崩落をしたという事件はたちまちニュースになり

この事は『少年仮面ライダー隊』にいた一同に知れ渡る。

滝和也

「地震が起こったわけでもないのに、山が崩落するなんて考えられねえな」

ユリ

「きつとゲルショッカーの仕業よ」

立花藤兵衛

「だとしたら、奴らは何の為に山を吹っ飛ばしたんだ？」

一文字隼人

「きつと新しい改造人間の性能実験でしょう やつらはきつと近いうちに

何か仕掛けてくるはずですよ」

ヨッコ

「やったあゝ 不吉なこと言わないでよ隼人さん」

(ジリリリリ・・・)

電話がなったのでユリは応対する為に電話にでた。

ユリ

「はい、こちら少年仮面ライダー隊本部・あらナオキ君どうしたの？  
えっ!？」

そのただならぬ様子に隼人と滝が彼女に声をかける。

一文字隼人

「どうしたユリ？」

滝和也

「何かあったのか？」

ユリ

「大変よ二人とも! 市付近でゲルシヨツカーの戦闘員が男の子を追いかけているのをナオキ君とミツル君が見たっていうの!」

一文字隼人

「何だつて? さっそく動き出しやがった

奴ら今度は何を企んでいるんだ」

滝和也



「そんなことより、いくぞ隼人！」

一文字隼人

「おおっ！」

二人はそういうとその少年を救う為、バイクで現場へと赴いた。

これが怪人ワニマジロの策だとしらずに・・・

(挿入曲：シヨツカー襲来！)

そして 市では少年が必死に逃げていた。

その後を戦闘員が必要に追う。

???

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「まで！小僧！」

???

「くそっ！ 絶対捕まるもんか！」

その少年は必死に逃げ、人の通りの多いところに出て、戦闘員を振り切った。

しかし・・・

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

???

「うわあっ！見つかった！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「逃げ切れると思ったか小僧！」

その少年は逃げようとするも、後方も戦闘員に阻まれ、完全に取り  
囲まれてしまう。

???

「お願いします！ 誰にも言わないから見逃して！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「駄目だ！ 我々の計画を聞いた者は殺すのが掟だ！」

???

「そ、そんなさ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「言い残すことはもうないな？ 観念しろ」

その時

一文字隼人

「待てっ！ゲルシヨツカー！」

一文字隼人と滝和也が疾風のごとく現れて、バイクから飛び降りると

目の前の戦闘員をなぎ払う。

一文字隼人

「セヤアツ！」

滝和也

「ふん！ ふん！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「グイイイツ！」

目の前の戦闘員を倒し、その少年を守るように前にいる戦闘員の正面に出る。

滝和也

「大丈夫か？ 坊や」

???

「た、助けて！ 殺される！」

一文字隼人

「なぐに、お兄ちゃん達が来たからにはもう安心だ」

ゲルシヨツカー戦闘員

「どけっ！ 一文字隼人！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「その小僧は我々の計画を知った！ 生かしておけん！」

滝和也

「計画だと？ ならますますこの子を殺させるわけにはいかねえな！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「何をつ！ かかれ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

一人の戦闘員の合図で他の戦闘員が一斉に隼人と滝に襲い掛かる。

一文字は剣で切りつけようとした戦闘員の攻撃をかわし、次の攻撃が

来たとき、剣を持った手を受け止め、剣を取り上げると、戦闘員達を

次々と切り倒していく。

一文字隼人

「はあっ！ はあっ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイイツ！」

滝和也

「おらっ！ おらっ！」

滝は少年を庇いながら近づいてくる戦闘員を蹴り飛ばしていく。

ゲルシヨツカー戦闘員

「己ッ！ 一時退くぞ！ 覚えている！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイイイイッ！」

これ以上はこつちが不利だと判断したのか、戦闘員は撤退を始める。

戦闘員が引き上げると、一文字隼人は少年の無事を確認する為に

少年に近づいた。

一文字隼人

「坊や怪我はないか？」

???

「う、うん。ありがとう。お兄ちゃん達は？」

一文字隼人

「俺の名は一文字隼人。」

滝和也

「俺は滝和也。少年仮面ライダー隊の隊長だ」

???

「少年仮面ライダー隊？もしかしてあの」

一文字隼人

「そう。そのもしかしての少年仮面ライダー隊だ」

滝和也

「なぜ奴らに追われていたのか、詳しい話を聞きたいから一緒に本

部まで来て

くれないか？ ええっと・・・」

元慈

「僕は元慈っていう名前だよ」

一文字隼人

「そうか・・・じゃあ元慈君 一緒に来てくれるかい？」

元慈

「うん！」

その少年はそういって隼人のバイクに乗り、安全な少年仮面ライダー隊の本部へ

と赴いた。

その様子を逃げたフリをした戦闘員が影からこっそり見て、ブラック將軍に

報告している。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ブラック將軍、Wは作戦通り一文字隼人と滝和也に接近いたしました。」

ブラック將軍の声

「よし・・・後は奴に任せて、お前達はゲルパー薬を暗黒魔術師のいる

世界まで運ぶ準備をせよ」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

戦闘員はそういつとゲルパー薬を運ぶ為準備を始めた。

その頃、少年仮面ライダー隊本部では

立花藤兵衛

「しっかし、こんな子供まで殺そうとするなんて奴ら一体何を考えてやがるんだ？」

ヨッコ

「そうよね。 猛さんがいなくなって数週間、ゲルシヨツカーは何かやるとは思っていたけど・・・」

立花藤兵衛

「はあ・・・ネズミマムシの後に現れた謎の怪人タコガラス 猛はその怪人の後を追っていったらしいが・・・奴は無事なのか」

滝和也

「大丈夫ですよおやっさん。 本郷はきつと無事です」

一文字隼人

「そうです。 今は奴が帰るのを待っていますよ」

立花藤兵衛

「そうだな。 今は信じて奴を待つか・・・」

一文字隼人

「それよりも・・・元慈君・・・一体なぜ君は奴らに追われていたんだ？」

元慈

「うんとね、あいつらを偶然見かけた時こういつていたの『これは暗黒魔

術師のいる世界まで運ぶゲルパー薬だ。絶対こぼすなよ』って・・・」

一文字隼人

「何ッ！？ ゲルパー薬だと？」

滝和也

「あのおっそろしい薬のことか!？」

その場にいた者はその薬の名を聞いて驚く。ゲルパー薬。

それは戦闘員に飲まされる裏切り防止の為の薬。それを服用したら最後

三時間に一回服用しなければ、体が燃えて死んでしまう恐ろしい薬だ。

チッコ

「一体その薬を何の為に使うのかしら？」

ナオキ

「それに暗黒魔術師って何者なんだろ？」

一文字隼人

「きつと新しいゲルシヨッカーの大幹部だ。」



滝和也

「その話が本当だとして一体奴らどうやってゲルパー薬を運ぶつもりだ」

一文字隼人

「その暗黒魔術師の力で、次元に穴を開けそこまで運ぶつもりだろ」

ミツル

「ちよつと信じられないよな」

一文字隼人

「だがこの子が嘘をいつている様には見えん。教えてくれ元慈くん

今ゲルパー薬

はどこにあるんだ？」

元慈

「うんとね 市の工場の倉庫。そこで奴らの話を聞いてしまつて見つかったの あいつら明日の昼にそれを 山まで運ぶらしいよ」

滝和也

「確かその工場は倒産して今は誰も入れないっていう」

立花藤兵衛

「なるほど……ゲルパー薬を隠すにはうつつつけの場所だな」

一文字隼人

「よし……早速明日、その山まで行ってみよう」

滝和也

「とりあえずもう遅いから、今夜はここに泊まっていった方がいいよ」

元慈

「うん。分かった。その前にちょっとトイレ……」

元慈はそういうとトイレの方まで向かう。

一文字隼人

「滝。あれ……」

滝和也

「ああ……」

その二人はこの時、その少年に不審なところがあることに既に気づいていた。

そして夜、ここに泊まることになった一文字と滝は眠りについていった。

そしてその二人に不気味な影が忍び寄る。

??

「ふふふ……まんまと二人に接触できたぞ。馬鹿な奴らだ二人に近づくと為にわざわざ子供に化けたのに気づかないなんて」

その者は懐から凶器を取り出すと、それを一文字に向ける。

??

「ふふふ……こいつさえ倒せばこの世界を守る奴がいなくなる」

そして凶器を振り下ろそうとするが

(フンツ！・・・ピトツ！)

??

「何ツ!？」

一文字隼人

「本性を現したな 上手く子供に化けたつもりだろうが既にお前が  
ゲルシヨツカー

のメンバーだというのはもう分かっている!」

なんと彼は寝たふりをしてそいつが本性を現すのも待っていたのだ。

滝和也

「まさか子供にまで化けて隼人を殺そうとするなんてせこい奴だぜ!  
そうだろ? 元慈君?」

元慈

「くっ! なぜ分かったんだ!？」

一文字隼人

「お前がトイレに行ったとき、壁にお前の影がなかった。  
その時俺達はお前がゲルシヨツカーかもしれないと思ったんだ」

滝和也

「さあっ! 正体を現せ!」

元慈?

「なるほど影か・・・これは盲点だったな　ならこの姿も意味がねえなっ！」

するとその少年は光に包まれ、頭部にゲルショッカーの入れ墨を入れた銀髪の少年

に変わる。

左慈

「はははっ！・・・」

一文字隼人

「何者だ！？」

左慈

「俺の名は左慈元放　次元を管理し、てめえらを殺す為にやってきた男だ！」

滝和也

「次元だと？　何の事だ？」

左慈元放

「てめえらが知る必要は無い」

一文字隼人

「なぜ俺達の命を狙う！？」

左慈元放

「知れたこと！　本郷猛の仲間が俺達にとっても敵！　現時点でゲルショッカー」

の最大の障害である一文字隼人、そしてFBIの犬、滝を殺すのが俺の任務だ」

一文字隼人

「なるほどな・・・だが、正体もばれたいま、お前の任務は失敗だ！」

滝和也

「おとなしく降参して、ゲルパー薬のあるその工場まで案内してもらおうか」

左慈元放

「ふふふふふ・・・」

一文字隼人

「何がおかしい貴様！」

左慈元放

「俺が何も考えないで、ガキの姿でここに来たと本気で思ってやがるのか？ 既にばれたときの対策も考えている。そして俺はただの人間ではない！」

一文字隼人

「何ッ！？　するとお前はゲルシヨッカーの改造人間？」

左慈元放

「そう・・・俺はイリエワニと大アルマジロの合成改造人間ワニマジロだ！」

そして左慈は姿を怪人ワニマジロに変える。

ワニマジロ

「グワングワングワン！」

果たしてこの怪人を相手に二人はどう立ち向かうのか!?

(ル・ル・ル〜ルルルツ! 『アイキャッチ 新二号』)

装甲怪人ワニマジロ (前編) (後書き)

次回、二号敗北!?

装甲怪人ワニマジロ (後編) (前書き)

ワニマジロの砲弾スクリューボールVSライダーキック  
果たして勝つのかどっちか!?



## 装甲怪人ワニマジロ (後編)

(ル・ル・ル〜ルルルッ！『アイキャッチ 新二号』)

少年仮面ライダー隊本部。一文字と滝は正体を現した敵ワニマジロと

にらみ合っていた。

滝和也

「なんてせこい奴だ！ 子供の姿で俺達に近づき不意を突こうとするなんて！」

ワニマジロ

「俺様の正体を見破った事は褒めてやろう だが、てめえらではこの俺様には勝てない！ かかれっ！」

すると・・・

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

どこに潜んでいたのか戦闘員達は姿を現し、滝と一文字に襲い掛かってきた。

彼らは襲い掛かる戦闘員達に向かっていく。

一文字隼人

「セアッ！ セアッ！」

(バシッ！ バシッ！ バキッ！)

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

一文字は襲い来る戦闘員を殴り払い、

滝和也

「おらっ！ ふんっ！」

(バシッ！ バシッ！)

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

滝は戦闘員を蹴り飛ばしていく。

ワニマジロ

「チッ！ 役立たずどもが！ 覚えていろよ！」

ワニマジロは外に出ると本部の前に止めてあった車に乗り込み

逃亡を図った。

一文字隼人

「待てっ！ 滝 ここは任せたぞ！」

滝和也

「分かった！」

一文字はそういうと外までいき、バイクでワニマジロの乗った車を追跡し始めた。

奴にとって有利な場所に誘い込まれているとはしらずに……

(ブオオオオオオオン！)

ワニマジロ

「グワングワングワン！ 追ってきているな……ようじこのまま、湖まで

案内してやる」

そして湖に着くと、車から戦闘員、そしてワニマジロが降りてきて

一文字隼人に襲い掛かってきた。

一文字隼人

「セアッ！ セアッ！」

一文字隼人は襲い来る最初の戦闘員の攻撃を受け止め、カウンターを

決める。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイツ！」

そして、次に襲ってきた戦闘員の攻撃も受け止め、地面に叩き付けた。

一文字隼人  
「はっ！」

ゲルシヨツカー戦闘員  
「ギイツ！」

今度はロツドを持った戦闘員が襲い掛かってきたので、その戦闘員の攻撃を

受け止める。

ゲルシヨツカー戦闘員  
「ギイツ！？」

一文字隼人  
「ふんっ！」

そして武器を取り上げ、次々襲い掛かってきた戦闘員達をなぎ払っていった。

ゲルシヨツカー戦闘員  
「ギイイイイイイッ！」

そして、戦闘員をあらかじめ倒すと、ワニマジロと戦う為、変身することにした。

一文字隼人  
「フンッ！」

(ピュイイン！)

彼は両腕を右の方向に水平に出し、ポーズをとる

そしてゆっくりと弧を描きながら、両腕を今度は左側に持って行って左手の拳を天に向け、右手を左に向け拳を握る。

そしてそれと同時に彼の腰に真紅のベルトが現れ

—文字隼人

「変・・・身ッ！」

するとベルトに描かれていたライダーマークのシャッターが開き

中から風車が顔を現した。

—文字隼人

「トオオッ！」

それと同時に彼は高く跳び上がり、ベルトの風車から出る凄まじいエネルギーを

浴びると仮面ライダー二号に変身して、着地した。

(ピュイイン！)

(挿入曲：ライダーアクション)

ワニマジロ

「変身しやがったか！　だが、それでいい　油断されてあっけなく

倒されては俺様の性能をテストした意味がねえからな！」

仮面ライダー二号

「やはり、あの事件は貴様の仕業だったのか！ なぜ子供の姿で俺に近づいた!？」

ワニマジロ

「決まっている！ 仮面ライダーの弱点は心の優しさだと分かったからだ！

グワングワングワン！」

仮面ライダー二号

「心の優しさだと?」

ワニマジロ

「そう・・・子供の姿ならお前も疑う訳がないと思ったが、まさか見破られるとは

な・・・ますます殺しがいがある！」

仮面ライダー二号

「人の優しさを踏みにじるとはっ！ ならますますお前の様な邪悪な怪人を見過ごすわけにはいかない！」

ワニマジロ

「グワングワングワン！ ならかかってこい！」

ワニマジロが挑発すると、二号はワニマジロに殴りかかっていく。

仮面ライダー二号

「セアッ！ セアッ！」

しかし

(ボゴッ！ ボゴッ！)

仮面ライダー二号

「なっ!？」

なんと装甲が堅いからか攻撃が効いていないみたいだ。

ワニマジロ

「なんだ？ 蚊でも止まっていたのか？」

仮面ライダー二号

「なんて堅い装甲だ」

ワニマジロ

「今度は俺様の番だ！ グワングワングワン！」

(ゴオオオオオオッ！)

仮面ライダー二号

「ハッ！」

なんと口から火炎放射をワニマジロは吐き出し、二号は間髪攻撃を回避する。

そして・・・

仮面ライダー二号

「セアッ！ セアッ！」

（バシッ！ バシッ！）

ワニマジロ

「グワワワン！」

ワニマジロに連続蹴りをくらわせ、ダメージを与えていく。

仮面ライダー二号

「フンッ！ フンッ！」

（バキッ！バキッ！）

そして二号ライダーはパンチでワニマジロの関節部分を狙うが・

仮面ライダー二号

「うっ！？ こども堅い」

ワニマジロ

「甘いぞ！ そこを狙うことも既に想定済みだ！

そして、受けてみる！俺の必殺技を！」

仮面ライダー二号

「何ッ！？ 必殺技だと！？」

ワニマジロ

「そっだ グワワアアアアン！」

ワニマジロはいきなり仮面ライダーの様に高くジャンプすると、空



中で球体になり、

彼に向かっていった。

ワニマジロ

「砲弾スクリウウウウボオオオオオオル！」

仮面ライダー二号

「はっ！ フンッ！」

（ドゴオオオオオオオオオン！）

ライダーは何とか攻撃を交わしたが、衝撃でダメージを負い、そしてワニマジロが攻撃し

てきた地点には巨大なクレーターができていた。

もし直撃していたら、身体がバラバラになっていたかもしれない。

仮面ライダー二号

「な、なんて威力だ！」

ワニマジロ

「ちっ！ もう一度おみまいしてやる！ グワングワングワン！」

仮面ライダー二号

「何のっ！ トオオッ！」

ワニマジロとライダーは同時に跳び上がり、ワニマジロは砲弾スクリューボール

の体制にそしてライダー二号は怪人の技を破り、自身のもつ最強のキック

を放つ為に空中で回転しだす。

ワニマジロ

「砲弾スクリュウウウウボオオオオオル！」

仮面ライダー二号

「ライダーアアアアアアア・卍キイイイイイイイイック！」

(ドゴオオオオン！)

それぞれの技が空中で激突し、激しい爆発が起こった。

そして……

仮面ライダー二号

「うわあああつ！」

何と二号が力負けし、そのまま後方にあった湖に落ちてしまつた。

ワニマジロはその場に立ち、勝利の雄叫びを上げ始めた。

ワニマジロ

「グワングワングワン！ 勝ったぞ！ 仮面ライダー二号はこの俺、ワニマジロが倒したぞ！ 後は暗黒魔術師のいる世界までいき、本郷猛をこの俺が始末してやる。そういえば、奴はサッカーの大幹部どもを復活させたらしいが、果たしてライダーなんか倒された負け犬

どもが役に立つのか？」

ワニマジロはそういうと、車に乗り込み、ゲルパー薬のある工場までいった。

その場に誰もいなくなると、湖からライダー二号が上がってきた。

そして彼は本来の姿、一文字隼人に戻る。

一文字隼人

「行ったな・・・くそっ・・・なんて奴だ　ライダー卍キックも効かないなんて

あのまま戦っていたら俺は完全に倒されていた・・・それに奴の話からどうやら

本郷の奴は無事のようにだが、シヨッカーの大幹部達がこの世界で復活したとしたら、本郷が危ない！」

一文字はそういうと一度本部へと帰ることにした。

その頃滝から事情を聞いた立花藤兵衛とライダーガールズ、そしてナオキ、ミツルは

驚愕した顔をしていた。

立花藤兵衛

「まさか、あの坊やがゲルシヨッカーの改造人間だったなんてな・・・」

ナオキ

「ごめんなさい会長。僕達がしっかりしていればこんな事には・・・」

ミツル

「まさか畏だつたなんて・・・」

ナオキとミツルは落ち込む。無理もない。畏だと気づかず、ゲルシヨツカーが

少年を追いかけ回していると通報したのは自分達なのだから・・・

ユリ

「あらナオキ君達は悪くないわよ。悪いのはナオキ君達を利用したゲルシ

ヨツカーよ」

滝和也

「それよりも心配なのは隼人の方だ。化け物を追って外に出たがあいつは無事なのか・・・」

その時、本部に一文字がずぶ濡れの姿で入ってきた。

一文字隼人

「やあ皆。無事か？」

チヨコ

「隼人さん！？ ど、どうしたのよ？ ずぶ濡れになって！」

立花藤兵衛

「一体何があつたんだ？」

一文字隼人

「恐ろしい敵でしたよ。あのワニマジロって言う怪人。途中で仮面ライダー」

が助けに来てくれましたが、奴の砲弾スクリューボールの前ではライダーのライダーキックも歯が立ちませんでした」

滝和也

「何ッ!? ライダーが負けた!?!」

ナオキ

「じゃあライダーは死んじゃったの?」

一文字隼人

「いや死んじやいない。俺もライダーも死んだふりをしてなんとか助かったんだ」

ミツル

「よ、良かった」

一文字隼人

「それよりもおやっさん。」

立花藤兵衛

「何だ?」

一文字隼人

「これからすぐにワニマジロの後を追います。どつやら奴の行く世界には

本郷がいるようです。」

立花藤兵衛

「何ッ!? 猛は無事だったのか!？」

一文字隼人

「ええ・・・どうやら奴らはその世界でシヨツカーの大幹部達を復活させたらしいんです。本郷を助けにいかないと」

滝和也

「何だつて!？」

立花藤兵衛

「奴らが!？」

一文字隼人

「ゲルパー薬もシヨツカーの大幹部が行う計画に必要なんでしょう手遅れになる前に何としても止めなくては・・・」

滝和也

「俺もいくぞ!隼人」

一文字隼人

「いや滝。お前はここに残れ」

滝和也

「け、けどよ!」

一文字隼人

「お前までいなくなったら戦う力のないあの子達がゲルシヨツカーに狙われる可能

性がある。あの子達を守れるのはお前だけなんだ」

一文字は少年ライダー隊のナオキとミツルをみる。確かにライダーがいなくなったら

まっさきに少年ライダー隊の少年がゲルシヨッカーの標的にされるかもしれない。

この子達を守れるのは自分だけだ。

一文字隼人

「計画を阻止したら、すぐにこの世界に帰ってくる。頼む滝……おやっさん」

一文字は滝に深々と

滝和也

「……分かった 隼人」

立花藤兵衛

「死ぬなよ。必ず生きて帰ってこいよ」

一文字隼人

「はいっ！」

一文字はそう言うとそのままバイクで 山まで向かう。

そこではワニマジロの指揮の下、ゲルパー薬を積んだ物と思われる

箱を戦闘員が運んでいたのだ。

ワニマジロ

「早くしろよ！これはゾル大佐と地獄大使の『怪人塾』計画に必要な物だ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

その様子を隼人は隠れた場所でみていて、敵の目的を知る。

一文字隼人

「やはり、ゲルパー薬は何かの計画に必要な物だったのかそれにゾルと地獄大使だとっ！？　ワニマジロの言う通り奴ら別の世界で蘇っていたのか？　それに『怪人塾』とは一体・・・そうか・・・奴らの計画が何か分かった！」

一文字はそういってこっそりと戦闘員に近づき、そして・・・

一文字隼人

「フンツ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！？」

戦闘員は何が起こったか理解できず、そのまま気絶すると一文字に覆面と服を

はぎ取られてしまう。

一文字隼人



「悪いな。ちょっと貸してもらっぜ」

一文字は戦闘員に化けると、ワニマジロの所までいき、整列するとワニマジロが何か説明を شدした。

ワニマジロ

「いいか戦闘員ども！ 俺様達はこれから、暗黒魔術師の世界までこの

ゲルパー薬を運び出す。これから暗黒魔術師が向こうの世界に続く扉を開く。

俺様達はそこを通過して向こうまでいく。これは『怪人塾』計画に必要な

ゲルパー薬だ。もし、これが使い物にならなくなったらお前達の命はない。

それだけはいっておく」

(バリバリバリッ！)

その時、彼らの前の空間に穴が開く。どうやらこれが扉のようだ。

ワニマジロ

「よし！ 出発だ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイッ！」

戦闘員はワニマジロの案内の元、その穴へと入る。その中に一文字がいるとも知らな

いで・・・

果たして一文字はゲルシヨッカーの野望を阻止できるのか？

そしてワニマジロのいう『怪人塾』とは一体なんなのか！？

つづく

装甲怪人ワニマジロ（後編）（後書き）

我らの仮面ライダーを狙うゲルショッカー三国時代支部が送った次なる使者

は催眠怪人イルカリラ ゾル大佐と地獄大使は暗黒魔術師の計画に従い、この

怪人を使って子供達に殺人教育を施そうとしている。果たして仮面ライダーはこの

計画を阻止し、子供達を助けることができるのか！ 次回「イルカリラ 恐怖の怪人塾」にご期待下さい。

イルカリラ 恐怖の怪人塾 (前編) (前書き)

今回、ゾル大佐と地獄大使が遂に本郷猛と再会っ！

## イルカリラ 恐怖の怪人塾 (前編)

一文字隼人が本郷のいるこの世界まで来る数週間前、本郷率いる義勇軍が治安を

治めたことにより幽州付近の街は少し穏やかになっていた。

外で子供達が自由に遊べるようになってから、子供達の間ではある遊びが流行っていた。

それは・・・

仮面ライダー？

「待てえええええっ！」

黄巾党兵？

「うわあああああっ！」

黄巾党兵？

「逃げろおおおおおっ！」

仮面ライダーのお面を被った子供が黄巾党兵の格好をして逃げ回る子供を追いかけ回し

丘まで追い詰めていった。

そう子供達の間で流行っていたのは仮面雷陀ごっこなのだ。

ルールはなく、ライダーに扮した子供が敵の黄巾党兵に扮した子供

を相手に戦うというと

てもシンプルな遊びだが、それだけこの遊びにはライダーに対する子供達の強い憧れがあ

るように思える。

そして小さい丘に追い詰められた黄巾党兵？はもう逃げられないと判断し、ライダー？

に反撃していた。

黄巾党兵？

「ええいつ！」

しかし、攻撃が軽く受け止められ

仮面ライダー？

「トオツ！」

軽く蹴りを入れられるとそのまま後ろに上がり、

黄巾党兵？

「ええいつ！」

仮面ライダー？

「とおっ！」

今度は軽く拳をお腹に入れられたのだ。そして・・・

(ピュイン！)

仮面ライダー？

「仮面雷陀っ！」

そういうと、黄巾党兵に扮した子供達は一斉にその少年に土下座し始める。

黄巾党？

「ごめんなさいっ！ 悔い改めます。もう二度と悪いことはいたしません！」

黄巾党兵？

「どうか許して下さい！」

そして仮面ライダーのお面を被った少年はお面を外すところいう。

仮面ライダー？

「やっぱり天の御遣い様はカッコいいや！」

黄巾党兵？

「一度でいいから会ってみたいな」

黄巾党兵？

「あつたら俺握手してもらうんだ！」

黄巾党兵？

「あら無理よ。御遣い様は黄巾党の乱、董卓の乱での功績でこの街の県令になって  
今は多忙の身よ 簡単には会ってくれないわよ」

黄巾党兵？

「そんなことよりもそろそろ交替してよ やられ役の黄巾党兵役ば  
っかり」

じゃ、つまんないよ」

仮面ライダー？

「駄目だよ！ 今日僕が一日、御遣い様の役をやっていい約束だ  
よ」

黄巾党兵？

「あら私だって御遣い様の役をやりたいわよ」

仮面ライダー？

「やったよ」

すると今度は仮面ライダーに扮した少年が逃げ出し、想定できない  
ことに驚いた

子供達も一斉に彼を追いかけた。これでは立場が逆である。

黄巾党兵？

「まて〜！」

黄巾党兵？

「まて〜！」

そして逃げる少年の前にある男が出てきた。見たところ、牧場主の  
様な姿をしている。



「君達、ちよつといいかな？」

男に呼び止められ、ライダー？、黄巾党兵？に扮した少年達は立ち止まった。

仮面ライダー？

「何ですかおじさん？」

「君達は見たところ、天の御遣い様が大好きなようだね？」

黄巾党兵？

「うん、そうだよ。あの人はかつこいいし、僕達の為に戦ってくれたんだもん  
皆の憧れさ」

黄巾党兵？

「一度でいいから会ってみたいけど、あの人は今、多忙の身で会えないんです」

「ふ〜ん、だったら今から特別に『天の御遣い様』に会わせてあげようか？」

黄巾党兵？

「えっ？ おじさん 『天の御遣い様』と知り合いなの？」

「知り合いも何も仲のいい友達なんだよ さっ！ 天の御遣い『仮面雷陀』」

に会いたい子は僕についておいで」

仮面ライダー？

「今からですか？ でも、もう帰らないとお母さんが・・・」

「無理なら別にいいんだよ？」

仮面ライダー？

「どつする？」

黄巾党兵？

「こんな事滅多にないかもしれないよ？ 夕ご飯前に帰れば大丈夫だよ」

仮面ライダー？

「そうだね・・・じゃあ、行こう！」

「決まったみたいだね？」

その男は遊んでいた子供達をある場所まで連れて行った。

そこには馬車があったのだ。

「さあ、これに乗って」

「はい！」

子供達は笑顔でその馬車に乗り込むと馬車はすぐに走り出した。

そしてその後を中々決心がつかなかった少年が必死に走りながら追いかけていった。

「おい！待ってよ！ やっぱり僕も行くよ！」

必死になって追いかけていると誰かにぶつかってしまふ。

??

「はにゃ!？」

「うわあああっ！」

??

「いたたた・・・コラッ！ ちゃんと前見て歩くのだ！」

「ご、ごめんなさい・・・ああっ！ 貴方は張飛將軍！」

ぶつかった相手は丁度、警邏の最中この辺を見回っていた鈴々だった。

鈴々

「お前は鈴々といつも一緒に遊んでいる・・・こんな所で何しているのだ？」

「馬車を追いかけていたんです。皆で遊んでいたら、天の御遣い様と友達っていうおじさんが現れて『天の御遣い様』に会いたい子は僕についておいでっていつて、皆行っちゃったんです。」

鈴々

「はにゃ？ 友達？」

「そうです。確かにそのおじさんは御遣い様と友達って・・・」

鈴々

「おかしいのだ・・・だってお兄ちゃんにはおじさんの友達はいないはずなのだ」

「えっ!? でも確かに友達だつて・・・」

鈴々

「鈴々は嘘つかないのだっ!」

「と言うことは・・・」

鈴々

「ゆ、誘拐なのだああああああああっ!」

「ええっ!?!」

鈴々からその事を聞いて初めて自分が騙された事を知る。

鈴々

「皆を誘拐した奴はどっちにいったのだ!?!」

「あ、あつちです。」

その少年は馬車がいった方向を指さすと、鈴々はいつのまにかそこにいた

豚に乗って後を追う前に・・・

鈴々

「鈴々はこのままそいつを追うのだ! お前はこの事を城にいるあ

い・・・じゃない関羽に知らせるのだ！ そうすれば、お兄ちゃんも来てくれるのだ！」

「は、はいっ！」

その少年が城の方へ向かうと、鈴々は後を追いつめる。

その頃、騙されたとも知らないで馬車に乗っていた子供達は・・・

男にこう尋ねる。

「あの～まだですか？」

「ん？心配かい？ なんなら、今すぐに天の御遣い様に会わせてもいいんだよ？」

「えっ？ この馬車に天の御遣い様が？」

「ああ・・・君達の後ろを見てごらん」

「えっ？」

その男に言われ、子供達が振り返ると・・・

イルカリラ

「ドルルルルルルル・・・」

何と馬車の荷台の中からイルカリラが姿を現した。

「うわああああっ！」

「ば、化け物！」

助けを求めようとして子供達は大声を出そうとしたが・・・

頭の中に変な音が入ってきて・・・子供達の意識が段々遠くなつていった。

「（あ、あれっ？・・・意識が段々遠く・・・）」

イルカリラ

「うるたえるな・・・俺の目を見る・・・今からお前達は・・・ゲルシヨツカー怪人塾の生徒になるのだ・・・さあ・・・俺の可愛い生徒達よ。」

・・・イルカリラ先生の言うことを聞くのだ・・・」

その怪人がそういうと・・・

「はい・・・イルカリラ先生」

その子供達は完全に催眠状態になった。

イルカリラ

「ドルルル・・・よしよし・・・いい子達だ」

その時、

鈴々

「こらっ！ その馬車止まるのだ！ 誘拐した鈴々の友達を返すのだ！」

なんと鈴々が豚に乗ってももの凄い速さで追ってきたのだ。

「大変です 追ってきていますよ！」

イルカリラ

「構わん。このまま振り切れ！」

ゾル大佐の声

「いや待てイルカリラ……新しい指令を伝える」

イルカリラ

「新しい指令とは？ ゾル大佐」

ゾル大佐の声

「暗黒魔術師から聞いたが、その追ってきている少女は張飛翼徳らしいな？」

「そいつも怪人塾の生徒にするんだ」

イルカリラ

「ドルルル……面白い……あのガキを我々の手で教育するんですね？」

「おい止める！」

「はいっ！」

男は怪人から指令を受けると馬車を止める。

鈴々

「はにゃ!?!」

突然馬車が止まったことに驚き、鈴々も思わず豚を止める。

「ブヒブヒブヒッ！」

鈴々

「いきなり止まるなのだっ！」

鈴々がそういった時、馬車からイルカリラが降りてきた。

イルカリラ

「ドルルルルルル……」

鈴々

「ゲ、ゲルシヨツカーの怪人っ！」

イルカリラ

「その名も催眠怪人イルカリラだ……張飛翼徳……俺の目を見る」

鈴々

「はにゃ？」

鈴々は思わず怪人の目を見てしまうと、怪しい音が頭の中に入ってくる。

そして怪人の目が回転しているように見えた。

それと同時に鈴々の意識が段々遠くなっていく。



鈴々

「な・・・なんなのだ・・・？ 意識が段々遠く・・・」

イルカリラ

「ドルルルルルルル・・・」

そこからは鈴々の意識が途切れてしまっているのであった。

この様子を馬車に取り付けられていたカメラを通して、ゾル大佐、地獄大使

そして暗黒魔術師が見ている。

暗黒魔術師

「ふふふふ・・・想定外でしたが、まさかあの張飛翼徳がこっちからくるなんて

ついてきますね。」

ゾル大佐

「最初あの小娘が三国志の英雄の一人、張飛翼徳とは信じられなかったが、あの小娘の戦う様子の映像を見て間違いなくあれは張飛だと信じざるを得なかったな」

地獄大使

「ふふふふ・・・それにしても、面白い世界だ 儂らの知っている三国志の英雄が皆、女だとはな・・・あの魔王と恐れられた曹操ですら女だから笑いが止まらぬわ。ワハハハハッ！」

暗黒魔術師

「でしよう？ 笑うのは構いませんが、私の今回の計画は何か分か

「つていますよね？」

地獄大使

「ああっ……『怪人塾計画』のことじゃろ？」

暗黒魔術師

「ええっ……この時代の子供に我々の殺人教育を施し、特定の人物、地域を襲わせるんです。それに……」

ゾル大佐

「まさか子供がやったとは誰も思わないだろうな」

暗黒魔術師

「後、子供をさらわれた親、子供に襲われた者達の怨嗟の声もこの書に吸収されるので、まさに一石二丁」

地獄大使

「わはははっ！それは面白い……では次の指令は何ですか？  
暗黒魔術師殿」

暗黒魔術師

「このままイルカリラに子供、特定の人物の拉致を続けるように指示を……そして  
地獄大使 貴方には怪人塾の塾長を そしてゾル大佐貴方には学年主任をやって  
もらいます。」

ゾル大佐

「任されよう」

地獄大使

「承知した」

暗黒魔術師

「ではこれが拉致すべき三国志の英雄達です。」

暗黒魔術師はそう言うと、拉致する予定の武人達の写真とプロフィール

を載せた書類をゾルに渡す。

ゾル大佐

「ほう……ではまずは魏の国の武人達を拉致するか……」

地獄大使

「行け！ イルカリラ！」

イルカリラ

「ドルルルルル……！」

イルカリラは地獄大使から指令を受けると魏にいる武人達を拉致する為に

魏へと赴いた。

その頃、鈴々の友人から事情を聞いた愛紗は早速付近を警備兵を連れて捜査したが

子供どころか鈴々の行方も分からなくなり、既に数日が立っていた。

そして執務室で仕事をしていた本郷の元に愛紗、桃香、星が訪ねてきた。

愛紗

「失礼します御主人様。」

本郷猛

「桃香達か どうだ？ 鈴々と子供達は見つかったのか？」

星

「申し訳ございません。あ奴と子供達の行きそうな所を中心に捜査したの

ですが、発見できませんでした。」

桃香

「誘拐された子供達が心配です。」

本郷猛

「早く助けださないと・・・親御さんが悲しんでいる。中には余りの事で寝込んだ人もいるらしい」

桃香

「ええっ？」

その時、執務室に給仕服を着た月と詠が入ってきた。

月

「失礼します。皆さんお茶が入りました。」

詠

「熱いから気をつけてね」

本郷猛

「ああ・・・ありがとう 月、詠」

月

「あつ・・・それと魏の国の曹操様と呉の国の孫策様がご主人様に面会を求められています。」

月は曹操と孫策が本郷に会いに来たと伝える。ちなみに彼女達は董卓はまだ生きて

本郷に匿われていることに気づいているが、洛陽での真実を知っていた為、あえて何もいわないのだ。

本郷猛

「何ッ？ 華琳と雪蓮が？」

愛紗

「その二人が同時に会いに来るなんて珍しいですね」

本郷猛

「きつとただ事じゃない。何か俺に相談があつてきたんだ。通せ」

詠

「分かりました」

月と詠によつて通された華琳と雪蓮は本郷に会つと、事情を説明した。

それは……

本郷猛

「何だつてつ!? 君達の国でも誘拐事件が!？」

華琳

「ええつ……まさか貴方の所でも子供達が誘拐されていたなんてね私の所は子供達だけじゃなく、荀?、程?、典章、許緒つていう名の部下まで街に行つたときにさらわれたのよ」

雪蓮

「私の場合は、妹の尚香を誘拐されちゃつたのよ うっうっう……」

「

華琳

「孫策……気持ちは分かるけど貴方は一国の王なんでしょ? 泣いちゃ駄目よ」

雪蓮

「だつて……だつて大切な妹なのよ!」

江東の小霸王にも妹思いな一面があるらしく、本郷は雪蓮の意外な一面に驚いていた。

華琳

「泣けば妹さんが帰ってくるの? 今は泣いている場合じゃないわ」

華琳にそういわれると

雪蓮

「わ、分かったわ 今は、泣いている場合じゃないわね」

雪蓮はそついうと涙をぬぐう。

本郷猛

「くっ・・・俺達の国以外でも誘拐事件があつたなんて・・・」

愛紗

「確か目撃者の子供の話では、天の御遣いの友人と名乗る男が子供達を連れて行つたそうで・・・」

華琳

「えっ？ 貴方達の国もなの？ 実はこっちも誘拐犯は貴方達と同じ手口を  
使つたらしいわ」

雪蓮

「私の国も同じよ！」

本郷猛

「どうやら犯人は俺のことをよく知っていて、そして俺をだしにして子供達を誘拐したようだな」

桃香

「もしかしてまたゲルシヨッカーですか？」

雪蓮

「あいつらの仕業なの！？　じゃあ、子供を誘拐してその怨嗟の声を集めるのが目的！？」

本郷猛

「いや、それだけで満足するような奴らじゃない  
奴らは利用できる物は利用して人の命を奪おうと企む奴らだ」

その時、

（ガシヤアアアアアン！）

扉が壊れるような事がして、一同が驚いた。

本郷猛

「な、何だ！？」

朱里

「ひ、雛里ちゃああああああん！」

星

「朱里の悲鳴だ！」

愛紗

「きつと雛里に何かあったんだ！」

本郷猛

「行ってくる！」

本郷は慌てて執務室から出ると、朱里がいる台所まで向かう。そこ



には台所には大きな穴

が開いていた。

本郷猛

「一体何があつたんだ！」

朱里

「御主人様！ 私がちよつと目を離している隙に雛里ちゃんがゲルシヨツカーの怪人につ！」

本郷猛

「何だつて！？ どっちにいった！？」

朱里

「このまままっすぐの方向です！」

本郷猛

「分かつた！」

本郷は外に出るとすぐにサイクロンに乗り、ゲルシヨツカーの怪人が逃げたと思われる

方向までバイクを走らせる。

（ブオオオオオオオオオオオッ！）

そしてすぐに怪しい馬車を見つけた。

本郷猛

「あれだなっ！」

本郷はサイクロンを馬車の隣につける。

そして中に拘束されている雛里とゲルシヨツカーの怪人を確認する。

（挿入曲：シヨツカー襲来！）

雛里

「んー！ んー！ ごしゅじんしゃま、しゃしゅしえけ！

（御主人様！助けて！）」

本郷猛

「止まれっ！ 雛里を返せ！」

イルカリラ

「来たな本郷猛・・・構わんこのまま奴を振り切れ！」

「はっ！」

馬車を動かしている男もイルカリラの実験で操られている為、命令に従うが

「ああっ！ しまった！」

手違いで崖の方までいってしまふ。しかも下には川が流れていた。

イルカリラ

「ええいっ！ 道を間違えたな下手くそっ！止まれっ！」

(キキイイイイイイツ！)

そして馬車は止まると中から、怪人、戦闘員、男が降りてきて  
本郷もサイクロンから降りる。

イルカリラ

「ドルルルルル・・・本郷猛 俺の邪魔をするな！」

本郷猛

「ゲルシヨツカーの改造人間め！」

イルカリラ

「俺の名はイルカリラだ！」

本郷猛

「イルカリラ・・・貴様が三国の子供達を誘拐した犯人か！」

イルカリラ

「その通りだっ！」

本郷猛

「言えっ！ 誘拐した子供達をどうする気だ！」

イルカリラ

「知れたことっ！ 太平要術の書に怨嗟の声を吸収させ、子供達に  
はゾル大佐と

地獄大使の『怪人塾』で行われる殺人教育を受けさせるのだ！」

本郷猛

「何ッ!？」

本郷は聞き覚えのある名前に反応する。ゾルは正義の系譜事件の時、あの発電所で

オオカミビールス、そして完全な肉体を量産して怪人軍団を作ろうとした。その時は

二号との協力でゾルの計画は阻止して、地獄大使はガラガラヘビの改造人間、ガラガ

ランダに変身して自分に襲い掛かったが、死闘の末、倒した敵であった。

本郷猛

「そうか・・・暗黒魔術師のいつていた『あの方達』とは奴らのとだったのか!」

イルカリラ

「ゾル大佐と、地獄大使だけではないっ！ 死神博士とブラック將軍もこの世界で蘇ったのだ!」

本郷猛

「何だとっ!？」

本郷はイルカリラの言葉に耳を疑った。ただでさえ、手こずったあのシヨツカー大幹部と

ブラック將軍を相手に勝つことが出来るのか？

イルカリラ

「聞きたいことはそれだけか？ ならこのまま殺してやる！  
かかれっ！ 戦闘員ども！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイッ！」

戦闘員は一斉に本郷猛に襲い掛かっていく。

本郷猛

「フンッ！ トオッ！」

本郷は襲い掛かってきた戦闘員の攻撃を受け止め、地面に叩き付け

本郷猛

「ハアッ！」

（ドカッ！）

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイッ！」

次に向かって来た戦闘員を蹴り飛ばし

本郷猛

「トオッ！ トオッ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイッ！」

そして次々襲い来る戦闘員を殴り倒していく。

イルカリラ

「己ッ……こうなったら俺の脳波破壊電波を受けて見る！」

(キイイイイイインッ！)

イルカリラが両手を本郷に向けると

本郷猛

「何ッ!? ……うっうっうっ！ ……あああああああッ！」

突如、本郷は頭を抱えだして苦しみだした。

イルカリラ

「どうだ？ 俺の特技は催眠だけでなく、相手の脳に直接ダメージを与える事ができるのだ！ ドルルルルル……」

本郷猛

「凄い攻撃だ！ このままでは俺の脳が破壊されてしまう……  
フンッ！」

(ピュイイイイン！)

命の危機を感じた本郷はここで変身することにした。

本郷猛

「ライダー……」

本郷は左手を腰に当て、右腕を左側に持ってきてポーズをとると、右腕をまた右側に持ってきて、今度は右腕を腰に当て、左腕を右側に持つ

てきた。

本郷猛

「変身っ！」

（ゴウン！）

すると本郷の腰から赤い風車のついたベルトが現れ、

本郷猛

「トオッ！」

本郷がそのままジャンプすると、ベルトから発した凄まじい光が彼を多い光が晴れ

ると仮面ライダーになった彼はイルカリラの目の前に着地した。

（ピュイイイイン！）

そして仮面ライダー一号とイルカリラは互いに構えながらお互いの出方を見る。

仮面ライダー一号

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

イルカリラ  
「ドルルルル・・・」

そしてイルカリラからライダーに向かっていく。

イルカリラ  
「ドルルルルル！」

仮面ライダー一号  
「フンッ！」

(バキッ！)

仮面ライダー一号は攻撃をかわすと、一撃をイルカリラに入れた。

イルカリラ  
「ドルルルルル・・・！」

イルカリラは一瞬怯むが、

イルカリラ  
「ドルルルルルルルルッ！」

イルカリラも負けじと強烈なパンチを連続でライダーにおみまいる。

(バキッ！ バキッ！ ボゴッ！)

仮面ライダー一号



「ウウウッ！」

さすがゴリラの能力を持っているだけあってその一撃一撃は多くの改造人間を倒して

きた仮面ライダーの肉体にも響いた。

しかしここで負けるわけにはいかない。ゲルショッカーにさらわれた子供達を救う為にも

そう思う彼は・・・

仮面ライダー一号

「フンッ！」

（ピュイイイイン！）

体制を立て直し、イルカリラに向かっていく。

そして今度はライダーが怪人に攻撃していく。

仮面ライダー一号

「トオッ！ トオッ！ トオッ！」

（バキッ！ バキッ！ ボゴッ！）

イルカリラ

「ドルルルルッ！」

重い一撃、一撃は怪人にダメージを与えていった。

そしてライダーは怪人の体をつかむと

イルカリラ

「ドルッ!？」

仮面ライダー一号

「トオオオオッ!」

高くジャンプすると

仮面ライダー一号

「ライダー返し!」

背負い投げの要領でイルカリラを投げ飛ばした。

イルカリラ

「ドルルルルッ!」

しかし投げ飛ばされたイルカリラは地面に激突しながらも

まだ戦えるようであった。

イルカリラ

「仮面ライダーっ! 俺はこの程度の攻撃では死なん!」

仮面ライダー一号

「まだやるかイルカリラ!」

双方が戦い出そうとした時、

ゾル大佐

「そこまでだっ！」

突如聞き覚えのある声がしたので、双方戦うのを止め声のした方向をみると

そこには忘れようとも忘れられない敵が二人いた。

仮面ライダー一号

「ゾルっ！ 地獄大使！」

地獄大使

「フフフツ・・・また会ったな仮面ライダー一号。再会できて僕は嬉しいぞ」

地獄大使は笑っていたが、その笑みには一号に対する憎悪が含まれていた。

ゾル大佐

「お互いこんな世界で再会するとは思わなかったな仮面ライダー一号。」

そして、あの発電所ではよくも私の計画を台無しにしてくれたな！だが、この程度で諦める私ではない！」

ゾルはかつて『正義の系譜』事件で一号に倒され、計画も阻止された事を思い出し鞭をライダーに向けた。

仮面ライダー一号

「人類の未来を脅かす計画など、私が何度でも打ち砕いてやる！」

地獄大使

「フフフツツ……いつまで強がっていられるかな？」

仮面ライダー一号

「何ツ!？」

地獄大使

「これを見たまえ……」

なんと地獄大使はいつの間にか雛里を自分達の方に引き寄せ人質にしていた。

雛里は地獄大使のアイアンクロード動きを封じられていた。

雛里

「ご、ご主人様……」

余りにも怖いのか、雛里は泣いている。

仮面ライダー一号

「雛里っ!」

ゾル大佐

「彼女は貴様にとって大切な存在のはずだ！ それでもまだやる気か」

仮面ライダー一号

「くっ……相変わらず卑怯な所だけは変わってないな貴様ら!」

地獄大使

「君のその言葉……褒め言葉として受け取っておくよ  
こいイルカリラ！」

イルカリラ

「ドルルルッ！」

イルカリラは地獄大使の合図で、高く跳び上がり彼らの元まできた。

ゾル大佐

「生徒は充分集まった。早速『怪人塾』の開校だ！」

地獄大使

「もうすぐゲルパー薬もこの世界に届く。あの薬があれば、もはや貴様にもどうすることもできまいっ！」

仮面ライダー一号

「何ッ!？」

ゾルと地獄大使はそういうと、そのままイルカリラと共に姿を消してしまう。

そしてその場には仮面ライダー一号と戦闘に巻き込まれ気絶した馬車を動かしていた

男だけが残った。

果たして仮面ライダーは子供達を助け出し、『怪人塾計画』を阻止できるのか!？

(ル・ル・ル〜ルルルルッ！『アイキャッチ 新一号』)

## イルカリラ 恐怖の怪人塾 (前編) (後書き)

次回、怪人塾開校！ 後、後編には再生怪人を登場させる予定です  
のでどの怪人を再登場させてほしいか感想掲示板で教えて下さい。  
ただし・・・

このSSに登場するオリジナルのゲルシヨッカーの怪人に限るとい  
う条件で

お願いします。

イルカリラ 恐怖の怪人塾 (中編) (前書き)

今回、ネズミママシ、カエルトンポー、トラゾウガメなどを復活させてみました。

それではSSの方をどうぞ！



## イルカリラ 恐怖の怪人塾 (中編)

(ル・ル・ル〜ルルルッ！『アイキャッチ 新一号』)

そしてゲルシヨッカー三国時代支部では、イルカリラによって誘拐された子供達

が洗脳され、戦闘員の服を着て顔にコウモリの特種メイクを施された状態でゾルの

言葉を聞いていた。

ゾル大佐

「三国時代の少年、少女諸君。はじめまして 私はゲルシヨッカー怪人塾 学年主任のゾル大佐だ。諸君らは我々に選ばれし優秀な存在である。やがてゲルシヨッカーはこの世界を混乱させ、逆らう者を武力で抑えつけ支配する。その時諸君らは同じ年代の少年少女の指導者になるのだ！」

ゾルが鞭を向け子供達にそういうと

「ギイイツ……」

催眠状態の子供達は苟？、程？、典章、許緒、そして雛里を中心に分かったとでもいうか

のように軽く頷いた。

ゾル大佐

「ではここから塾長である地獄大使殿からありがたいお言葉がある。心して聞くのだ！」

「ギイイツ……」

ゾルが一度その場から離れると今度は地獄大使が挨拶を始める。

地獄大使

「少年少女諸君。はじめまして 私がゲルシヨッカー怪人塾塾長の地獄大使である。

まずは諸君らがこの怪人塾に入学できたことを祝福させてもらう。おめでとう……。

そしてこの怪人塾ではこの時代ではまだ存在しない武器を授業の題材に取り入れる事があるが、優秀な改造人間の元での指導があれば、直ぐにでも理解できることであろう。また諸君らはジュニア戦闘員の指導者の資格を得る為に特別な教育を受けなければならない。本日よりその授業を開始する。この資格を得る事ができれば諸君らも改造人間になれる機会が与えられる。」

地獄のその言葉に少年少女が反応しているとゾルが再び少年少女の前に立った。

ゾル大佐

「まずはゲルシヨッカー首領に忠誠を誓うのだ。……偉大なるゲルシヨッカーに栄光をつ！」

すると

『偉大なるゲルシヨッカーに栄光をつ！ ギイイイツ！』

全員首領に忠誠の誓いを立てたのだ。

ゾル大佐

「授業開始！ 第一科目は火薬の扱い方についての勉強だ！」

「ギイイイツ！」

子供はゾルと地獄に答えると授業を受けると戦闘員に、教室まで案内される。

一人を除いて……

ゾル大佐

「どうした鳳統土元。私達に何か言いたいことがあるのか？」

雛里（催眠状態）

「ゾル大佐、地獄大使……怪人塾の生徒に推薦したい女の子がいます。」

ゾル大佐

「言ってみたまえ」

雛里（催眠状態）

「諸葛孔明……私の親友です」

ゾル大佐

「諸葛亮？……あの蜀の国の天才軍師か？」

地獄大使

「ほう？　ならあの小娘も引き入れてみるか」

その頃、城に帰った本郷はとりあえず、皆に事情を説明していた。

華琳

「『怪人塾』計画ですって!？」

本郷猛

「ああ・・・どうやら奴らはさらった子供達に殺人教育を受けさせるつもりだ」

雪蓮

「何の為に？」

本郷猛

「恐らく三国を子供達に襲撃させるため・・・」

桃香

「ええっ!？」

愛紗

「そんな恐ろしいことを奴らは企んでいたんですか？」

本郷猛

「ああ、後・・・皆にいわなければならぬ事はそれだけではない」

星

「どづいづいとどしょうか？」

本郷猛

「実は・・・シヨツカーの大幹部ゾル大佐、死神博士、地獄大使、  
そし  
て今俺達と敵対しているブラック將軍という恐ろしい敵を暗黒魔  
術師が太平要術の力で蘇らせた 今回の計画もそいつらが指揮して  
いる」

愛紗

「何者なんですか？そいつらは・・・」

本郷猛

「かつて俺と一文字が倒した目的の為なら女、子供までも利用して  
平気で殺す事もいとわない悪魔のような奴らだ。シヨツカーの中で  
奴らほど恐ろしい敵はいなかった」

桃香

「そんな恐ろしい人達が蘇ったんですか？」

本郷猛

「ああ・・・それと奴ら今回の計画の為にゲルパー薬を俺の世界か  
ら運びだ  
そうとしている」

月

「げるばあ薬？」

詠

「それはどんな薬なのですか？」

本郷猛

「ゲルシヨツカーの戦闘員に飲まされる裏切り防止の為の薬だ。」

それを服用したら最後、三時間に一回服用しなければ死んでしまう  
かつて俺は戦闘員がゲルパー薬を飲めなかった為に目の前で体が燃  
えて

死んでしまったのを見た」

(ゾクッ！)

これを聞いた一同はその光景を想像してしまい、思わず身震いして  
しまう。

桃香

「い、今・・・恐ろしい光景をうっかり想像してしまいましたよ」

月

「私なんて今夜、悪夢を見てしまいそうです(ブルブルブルッ！)」

華琳

「なんでそんな恐ろしい薬を貴方の世界から・・・  
！！・・・ま、まさかゲルパー薬を使うのは・・・」

本郷猛

「察しがいいな華琳。ゲルシヨツカーは子供達にゲルパー薬を飲ま  
せる気だ。

もし飲まされたら、俺でも華陀でも助けられん。ゲルパー薬には  
解毒剤が・・・  
ない・・・」

愛紗

「そ、そんな・・・」

雪蓮

「じゃ、じゃあもう尚香達はもうゲルパー薬を飲まされちゃったの？」

本郷猛

「いや、まだなはずだ。ゲルパー薬もまだこの世界に届いていないし、それに子供達に十分な教育を施していない段階でゲルパー薬を飲ませても意味がない」

本郷がそう雪蓮に説明すると

雪蓮

「わ、分かったわ」

一瞬取り乱しかけた彼女も落ち着きを取り戻した。

本郷猛

「とにかく・・・今いえるのは余り時間がないことだけだ。急がないとこの世界にゲルパー薬が届けられてしまう。子供達に飲まされる前に何とかしなくては・・・だが、ゲルパー薬が届けられる正確な位置が分からなければどうしようもない」

「・・・・・・・・・・」

その頃ゲルシヨッカー三国時代支部では怪人達が子供に自分達の武器の扱い方を説明して

いた

ネズミママシ

「ゲルシヨツカー197型自動小銃は25連発で有効射程距離は2000メートルである。」

そしてこの下のゲルシヨツカー197型自動機関銃は30連発で有効射程距離は2500メー

トルである。これがゲルシヨツカー戦闘員に配備される二大小銃である」

「・・・・・・・・・・」

子供達は真剣にネズミママシの講義を聴き、ふざけた態度をとろうとしているものは

いなかった。

そして射撃場、ネズミママシの講義で銃の扱い方を教えられた子供達はカエルトンボーの

指揮の下、射撃の特訓をしていた。

最初は桂花は銃を的に撃つらしい。

桂花

「ギイッ!」

(ドガガガガッ!)

銃弾は全体的に命中し、崩れ落ちると、新しい的が現れた。



カエルトンボー

「次……」

季衣

「ギイイツ！」

（ドガガガガッ！）

季衣も桂花と同じく銃弾を全体的に命中させる。

武道場……ここではトラゾウガメの指揮の下、柔道、剣道、合気道

等現代の武術を中心に訓練をしている。

鈴々（催眠状態）

「ギイイイツなのだ！」

「うわあああああっ！」

鈴々と訓練をしていた男の子が鈴々に打ち負かされると、トラゾウガメがその

少年にこういう。

トラゾウガメ

「グオオオオオン！ なさけない！ もっと気合い入れろ！ そんなんでは改造人間にはなれんぞ！」

「ギイイイイツ！」

トラゾウガメにそう言われた少年は再び鈴々に向かっていく。

トラゾウガメ

「そこっ！ 気を緩ませるな！ 戦場では敵がどんな手を使うのかわからん！

そんな戦い方では死ぬぞ！」

「ギイイイイイツ！」

トラゾウガメがそういった指導をしているので、柔道、剣道、合気道の訓練はどちらかが

完全に戦闘不能になるまで続けられた。

こういった戦闘訓練を子供達は施され、完全なゲルシヨツカーの構成員になりつつあった。

数日後、本郷のいる城では馬車を動かしていた男が意識を取り戻そうとしており、驚いた

月が一同を呼び、その様子を伺う。

「うっうっうっうっ……」

本郷猛

「意識を取り戻しかけている」

桃香

「えっ？」

雪蓮

「本当なのっ!?!」

数日前から本郷の所で泊まり込んでいた雪蓮、華琳も慌ててその男のいる部屋までいく。

そして男はうつすらと目を開けると、何と目の前に曹操、孫策、劉備、そして本郷猛

が目の前にいたので驚きはじめる。

「なっ! ななっ!?! 何故孫策様、曹操様、劉備様、本郷様が目の前につ!?!」

雪蓮

「惚けるんじゃないわよ! あんたがウチの妹をさらった奴らに荷担していたのは分かってるのよ!」

(ガシッ!)

雪蓮は大切な妹を誘拐された怒りがこみ上げ、思わず男の胸ぐらをつかんでしまう。

「ひ、ひいいいつ! 待って下さい! 私が本当にそんな事をしたのですか!?!」

雪蓮

「そつよ！さあ答えなさい！ 小蓮はいまどこにいるのよ！？ 答えないと・・・」

「そ、それが全く心当たりがなくて・・・」

雪蓮

「ふざけないでっ！」

「ひいひいっ！」

雪蓮は南海霸王を鞘から抜刀しようとする、華琳と桃香に止められる。

華琳

「止めなさい孫策！ 心当たりがないっていつている人間から無理矢理聞こうとしても無駄よ！」

桃香

「そつですよ！ この人の目を見て下さい これが嘘を言っている人間の目に見えますか？」

桃香にそういわれ、雪蓮はその男の目を見る。その目は潤んでおり、とても嘘をいっている

る様には見えなかった。

雪蓮

「・・・どうやら嘘はいつていないみたいね。命拾いたわね貴方。二人が止めなかつたら私は貴方を斬り殺していたわ」

「は、はい・・・」

本郷猛

「何でもいいんです。何か覚えている事があつたら俺に教えて下さい」

「何かといわれましても・・・そういえば・・・」

本郷猛

「何か思い出したんですか？」

「あの時、この街まで続く山道を馬車を使って移動していたら、偶然おかしな

洞窟を見つけて、不審に思った私は興味本位でその洞窟に入つてしまい、そのまま

ゲルシヨッカーとやらに捕まって奴隷として強制的に働かされていたんです。そし

てしまいいは、あの化け物の実験台とやらにされて、気づいたら・・・ここにいたんです。」

愛紗

「なんと・・・では、この男もゲルシヨッカーの被害者だったのですか？」

本郷猛

「どうやらイルカリラの催眠術で操られて自分が何をしたか覚えていないみたいだな」

「へえ、なんだかよく分かりませんが、私とんでもない事をしてし

まった様でどうお詫びすればよいのやら、・・・」

雪蓮

「お詫びの前にアンタが見つけたっていう洞窟までさっさと案内しなさい！

妹を助けないとっ」

本郷猛

「待て雪蓮！」

雪蓮

「何よ!?!」

本郷猛

「向こうには怪人だけじゃない！ゾル大佐、地獄大使もいるんだっ！こんな大人数で下手に動いたら奴らは子供達に危害を加えかねん！」

華琳

「じゃあどうすれば・・・！」

その時、朱里が本郷にこう言い始める。

朱里

「ご主人様！私がおとりになりました！」

その言葉に一同が驚き、視線は彼女に集中した。

桃香

「朱里ちゃん！何をいつて・・・」

(挿入曲：ロンリー仮面ライダー(スローバージョン))

朱里

「ゲルシヨツカーの目的が子供に殺人教育を受けさせることなら、また新たに

子供を誘拐する必要があるはず ならご主人様の発信器を持った私  
がわ

ざとあの人達に捕まれば……」

本郷猛

「駄目だ朱里っ！ 雛里を心配する気持ちは理解できるが余りに危  
険すぎる！

奴らは山賊の様に愚かな連中じゃない もし策だとばれたら朱里ど  
ころか子供

達の命もないんだぞっ！」

朱里

「確かに雛里ちゃんを助きたい一心はあります！ でも私はそれ以  
上に誘拐されて、殺人

兵器にされている人達を助きたいんです！ 誰かを傷つけて取り返  
しのつかない事にな

る前に……」

本郷猛

「朱里……」

朱里

「お願いします！ ご主人様っ！ お願いします！」

すると今度は朱里は土下座までしました。その様子から本郷に朱里の皆を救いたいという

想いが届き、彼の心を動かす。

本郷猛

「分かった。なら朱里に任せる」

朱里

「ありがとうございますご主人様！」

本郷猛

「・・・ただしこれは遊びじゃないんだっ！もし失敗したら、皆の命がない事をあらかじめ分かっておくんだ」

朱里

「は、はいっ！」

そして本郷と朱里は誘拐された子供達、そして雛里を救出する為行動を開始する。



イルカリラ 恐怖の怪人塾 (中編) (後書き)

次回、仮面ライダー2号 真・恋姫無双の世界に現る！

イルカリラ 恐怖の怪人塾 (後編 その1) (前書き)

今回遂に仮面ライダー二号参戦!

イルカリラ 恐怖の怪人塾 (後編 その1)

そして朱里は外に出ると、ゲルシヨツカーにわざと捕まる為に行動を開始した。

そこら辺を歩いていると後方から馬車が走ってきて、そして雛里が顔を出した。

雛里

「朱里ちゃん！」

朱里

「はわわわっ！？ ひ、雛里ちゃん！？」

朱里は思わず驚くがすぐに冷静になった。恐らくこれは罠だ。

ゲルシヨツカーが自分を捕まえる為に雛里を利用しているということに気づく。

だが、これは好都合だ。探していたゲルシヨツカーが自分から姿を見せたのだから。

そう思った彼女は馬車が走っていった方へと向かい、隠れて朱里を護衛していた本郷

もサイクロンでその後を追う。

後を追う朱里は、馬車が止まっている事に気づき、急いで馬車に近づくと

予想通り中から怪人が姿を見せる。

イルカリラ

「ドルルルルルル……」

そして、イルカリラの催眠術で意識が途切れる瞬間彼女は

朱里

「（ご主人様つ……後は任せます……）」

と考えて意識を失うとそのまま、連れていかれてしまう。

そして本郷は気づかれない様に馬車を追跡し、アジトがあると思われる

洞窟まで辿り着いた。

本郷猛

「（ここが奴らのアジトか……待っている子供達 今助けてやるからな）」

本郷は戦闘員に見つからないようにこっそりアジトに忍び込み、子供達が

捕らわれている部屋を探し出す。

そしてある部屋に入るとそこにはゲルシヨッカー科学戦闘員だけだったのだ。

ゲルシヨツカー科学戦闘員

「ギ、ギイツ!? ほ、本郷猛っ!?!」

その科学員は戦闘員と違い戦闘力が低い為とっさに逃げ出そうとするがあっという間に

本郷に捕まり、羽交い締めされてしまう。

本郷猛

「さあ答えろっ! 子供達はどこだ!?!」

ゲルシヨツカー科学戦闘員

「い、いう! いうからやめてくれっ!」

そしてその科学員は子供達がいる場所まで案内する。案内された所には『ゲルシヨツカー

怪人塾第二期生宿舎』と書かれた部屋があり、その部屋の鍵を開けさせるとそこには眠ら

された子供達、そして朱里もいた。

どうやら誘拐された子供達は一時的にここに集められて、再びイルカリラの強力な催眠術

を受けていたようだ。

本郷は部屋に入ると直ぐに朱里に近づく。

本郷猛

「朱里！　しつかりしろ朱里！」

朱里

「うっううっ……ご主人様……ここは？」

朱里は本郷の強い呼びかけに答え、直ぐに目を覚ました。

本郷猛

「ゲルシヨツカーのアジトだ　よくやってくれた朱里　お陰で最近  
さらわれた子供達を  
見つけ出せた」

本郷はとりあえず褒めると次に朱里の頭を撫でる。

朱里

「えへへっ……あれっ？……雛里ちゃんがいません！」

朱里は本郷から褒めら頭を撫でられた事を喜ぶも、その部屋には親  
友である雛里がいない

ことに気づく。

本郷猛

「そっいえば、何か妙だ……」

本郷は直ぐに違和感に気づいた。ゲルシヨツカーに誘拐された子供  
は雛里を含め、既に数

百名以上。その部屋には30名の子供しかいないのだ。

本郷猛

「おいつ！ 残りの子供はどこにいる！」

本郷はすぐに科学員を締め上げ、問いただす。

ゲルシヨツカー科学戦闘員

「だ、第一期生は怪人塾における科目を全て修了して、卒業試験を受ける為に

X地点に・・・」

その時、何か液体の様な者が科学戦闘員に飛びかかってくる。

本郷はとっさによけるが液が科学戦闘員にもろに命中し、そして・

・

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギ、ギイイイイイイッ・・・」

科学戦闘員は苦しみはじめ、床に倒れるとそのまま溶けて消滅してしまう。

本郷と朱里は液体の飛んできた方向を見るとそこには見覚えのある怪人がいたのだ。

カエルトンポー

「アゝブラッ！ 馬鹿者がっ！ 本郷に子供達の居場所を教えるとは」

本郷猛

「貴様はカエルトンポーッ！」

朱里

「はわわっ！ でもこの怪人さんはご主人様と華蝶仮面さんが倒したはず・・・」

カエルトンボー

「改造人間は死なんっ！ 破壊された箇所さえ直れば、何度でも蘇るのだ！」

本郷猛

「カエルトンボー！ 第一期生の子供達に何をさせる気だっ！」

カエルトンボー

「貴様がそれを知る必要は無いっ！ かかれっ！」

ゲルシヨツカー 戦闘員

「ギイイツ！」

突如現れた戦闘員は朱里と本郷に襲い掛かってくる。

朱里

「はわわっ！」

戦う力がない朱里は本郷の後ろに隠れ、そして本郷は彼女を庇うかのように

戦闘員と戦闘を繰り広げる。

本郷猛

「トオツ！ トオツ！」



ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイツ！」

剣で彼を突き刺そうとした戦闘員は殴り払われ、そして・・・

本郷猛

「フンツ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイツ！」

後ろから本郷に襲い掛かろうとした戦闘員は彼の回し蹴りを受けて蹴り飛ばされ

本郷猛

「トオツ！ トオツ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイツ！」

そして次々襲い来る戦闘員を殴り払っていった。

カエルトンボー

「やるなっ！本郷猛」

本郷猛

「後はお前ただカエルトンボー！」

本郷が変身しようとしたその時

カエルトンボー

「愚かなり本郷猛！ 復活したのは俺だけではない！」

本郷猛

「何ッ！？」

カエルトンボー

「今だ！ ネズミマムシ！」

ネズミマムシ

「チュチュウウン！」

どこかから白いガスのような物が天井から降ってきて朱里、本郷に降り注がれる。

朱里

「はわわっ！？ 何なんでしゅか？ この霧は？」

本郷猛

「いかんっ！ これは睡眠ガスだっ！口を塞げ朱里！」

しかし、もう手遅れだったらしく・・・朱里は本郷の近くで眠ってしまう。

朱里

「スヤスヤ・・・」

本郷猛

「朱里・・・くっ・・・」

(ドサッ！)

さすがの本郷猛も強烈な睡魔に勝てず、眠りについてしまった。

そして眠った二人を前に二体の怪人はこう言い始める。

ネズミマムシ

「チュチュウウウン！ 万が一を考えてここに残っていてよかったな

カエルトンボー」

カエルトンボー

「ああっ・・・ゾル大佐の言うとおりだ。本郷め 留守の間にこのアジトに来るなんてな」

ネズミマムシ

「本郷め・・・そんなに子供達に会いたいなら会わせてやろうチュチュウウウン！」

そして二体の怪人は眠った本郷、朱里を運び出す。

数分後、本郷は意識を取り戻す。彼の回復力は人間の数十倍なので数分眠るだけで

体力を回復できるのである。

彼は目を覚ますと自分と朱里はガラスのようなケースにいた。

本郷猛

「はっ！？ こっは」

そして本郷はそのケースから脱出する為にケースに殴りかかる。

本郷猛

「ふんっ！」

しかし・・・

（バリバリバリッ！）

本郷猛

「ぎゃあああっ！」

何とケースには高圧電流が流れており、それが彼にダメージを与えてしまう。

本郷猛は5万ボルトの電流にも耐えられるが、ダメージは受けてしまふのだ。

本郷猛

「くっ！ 高圧電流の壁か・・・」

地獄大使

「その通り・・・目が覚めたかね・・・本郷猛君」

するとケースの外にはいつの間にかゾル大佐と地獄大使が本郷の目の前にいたのだ。

本郷猛

「ゾル！ 地獄大使」

ゾル大佐

「貴様がその檻から脱出しようとする事はすでに予想していたことだ  
内部からの脱出は不可能だ」

地獄大使

「そしてあれを見たまえ」

本郷猛

「何ッ！？ ……はっ」

本郷は地獄大使の指さした方向を見るとそこにはゲルショッカー戦  
闘員の制服を

着て、自分達の時代の武器を持った数百名の子供達がいたのだ。よ  
く見るとその中には雛

里、鈴々の姿も確認でき、近くでは暗黒魔術師が何やら呪文を唱え  
ていた。

本郷猛

「こっ、これは！？」

ゾル大佐

「どうだね？ 彼らは我々の怪人塾における殺人授業を全て修了し、  
ゲルショッカー

の正式な構成員にする為の卒業試験を今から受けるのだ」

本郷猛

「一体何をさせる気だ!？」

地獄大使

「知れたこと! 魏、呉の様な巨大な国をこの子供部隊に襲わせ、指定した特定の人物を抹殺させるのだ さすれば、怨嗟の聲がまた『太平要術』の書に蓄えられるはずだ」

ゾル大佐

「だが・・・その前にやるべき事がある。貴様に妨害されたお陰で、卒業試験合格後に投与すべき例の物を子供達に先に投与せねばならなくなつた」

本郷猛

「まさか・・・」

ゾル大佐

「察しがいいな・・・今からゲルパー薬を子供達に投与する!」

本郷猛

「何だと・・・?」

ゾル大佐

「我々の殺人教育で彼らは優秀な構成員になり、そしてゲルパー薬を投与することで決して組織を裏切る事のない戦闘マシンになるのだ どうだね? 素晴らしいとは思わないか?」

本郷猛

「止めるっ！ 止めるんだっ！」

地獄大使

「はっはっはっ！ そうだ悔しがれ！ もっと悔しがるんだ！ 僕は貴様が悔しがる顔をずっと見たかった。だが僕らが貴様から受けた屈辱はこんなもんじゃない！ このケースの中で何も出来ないことに絶望するがいいっ！」

本郷猛

「貴様ら……」

その時、暗黒魔術師が近くにやってくる。

暗黒魔術師

「お二人とも。戯れ言はそこまでです。ゲルパー薬が届きましたよ」

地獄大使

「おお……そうか」

ゾル大佐

「本郷猛はどうする？」

暗黒魔術師

「連れて行きましょう。彼の怨嗟の声も役に立つはずですよ。」

地獄大使

「ワハハハハッ！ さすがは暗黒魔術師殿だ！ 抜け目ないな」

そして暗黒魔術師は本郷、朱里をケースごとゲルパー薬のある場所まで連れて行った。

そこには時空を越えてゲルパー薬を運んできたワニマジロと戦闘員がいた。

ワニマジロ

「グワングワングワンッ！ 久しぶりだな干吉！」

暗黒魔術師

「こつちこそお久しぶりですねワニマジロ・・・いや左慈」

暗黒魔術師がそういうとその怪人は人間態になる。

左慈元放

「ふうっ・・・やっぱりこつちの世界じゃあこの姿が一番落ち着くぜ」

暗黒魔術師

「それで一文字隼人はどうしました？」

左慈元放

「心配するな。俺がきつちりぶっ殺したぜ！ 俺の『砲弾スクリュール』」

をまともに受けて、生きているとは思えねえ」

本郷猛

「なっ！？ 一文字が死んだ！？」

左慈元放

「てめえが本郷猛だな？ 俺は左慈元放 滝の抹殺には失敗したが、てめえがアテにしている一文字は死んだ。てめえは俺がぶっ殺して



やる。今のうちに念仏でも唱えておくんだな」

左慈からそう聞いて本郷は啞然とした顔になる。もうどうする事も出来ないのか？

暗黒魔術師

「フフフフ・・・で、ゲルパー薬は？」

左慈元放

「大丈夫だ きちんとこの世界まで持ってきた さあ、さっそくガキどもに投与しようぜ」

暗黒魔術師

「分かりました。では早速ゲルパー薬を出して下さい。」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

戦闘員がゲルパー薬を出そうとしたとき、突如一人の戦闘員がそれを阻む。

??????

「セアツ！ セアツ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイツ！？」

予想していないこと事が起こった事にゾル達、そして本郷も驚き、ゾルはこう問い詰める。

ゾル大佐

「何の真似だ貴様！」

するとその戦闘員はこう言い出す。その声は私が忘れようとも決して忘れられない

男の声であった。

??????

「ゾル！ 前にも言ったはずだ！ 何度蘇ろうとも……」

そしてその戦闘員は覆面と服を脱ぎ捨て正体を現した。

一文字隼人

「お前の望みは決して叶わない！」

ゾル大佐

「き、貴様は一文字隼人っ！？」

左慈元放

「馬鹿な！ てめえは俺がぶっ殺したはずだ！」

暗黒魔術師

「何がぶっ殺したです！ 生きているじゃないですか！」

一文字隼人

「自分の技を過信しすぎていたようだな。あの時、お前の技がわずかにずれた

お陰で俺は一命を取り留めたのだ！」

左慈元放

「何ッ!?　なんて悪運の強い奴だ」

地獄大使

「くっ!　本郷だけでなく、一文字までこの世界に来たか!」

一文字隼人

「ゾル!　地獄大使!　左慈元放!　そして貴様が暗黒魔術師だなっ!?　悪魔に魂を売り、そして罪のない子供達にゲルパー薬を飲ませようとした貴様らだけは許さん!」

一文字は四人を指さし、そういった。

地獄大使

「ええいつ!　若造の分際で生意気な!」

ゾル大佐

「忌々しい奴め!」

暗黒魔術師

「どうやら、自己紹介は必要ないみたいですね　ですが貴方はここで死になさい!

行きなさい!　戦闘員の諸君!　イルカリラ!」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイッ!」

イルカリラ

「ドルルルルッ!」

戦闘員とイルカリラは一文字の後方にある川から姿を見せると、彼に襲いかかった。

しかし・・・

一文字隼人

「トオオツ！」

彼はとつさに攻撃をかわし、ジャンプする。そして一気に暗黒魔術師の後方まで向かって

いった。

暗黒魔術師

「あ、危ないっ！」

暗黒はとつさに避けた為、彼の蹴りは本郷、朱里を閉じ込めたケースに命中してしまい

(ガシャアアアアアアン！)

暗黒魔術師

「ああっ！ しまった！」

地獄大使

「馬鹿者っ！ 何をやっているんだ！」

一文字はすぐさま本郷の元に駆け寄りこう問いかける。

一文字隼人

「本郷 無事か！」

本郷猛

「一文字、生きていたのかっ!？」

一文字隼人

「話は後だ! とりあえず今はこいつらを倒すのが先決だ!」

本郷猛

「そうだな・・・いくぞっ!」

一文字隼人

「おおっ!」

本郷はまだ眠っている朱里を抱えると一文字と共にジャンプする体制に移った。

そして・・・

本郷、一文字

『トオオオオオオオッ!』

敵から離れた場所までいくと、本郷は朱里を後方の岩にもたれさせ、そして

彼らは変身する為のポーズを行う。

本郷猛、一文字隼人

『フンッ!』

【ピュイイイン！】

本郷猛

「ライダー……」

一文字隼人

「変身っ！」

本郷猛

「変身っ！」

彼らの腰にベルトが現れ、一文字のベルトのシャッターが開くと、二人は同時に

跳び上がる。

本郷猛、一文字隼人

『トオオオオオオオオッ！』

それぞれベルトから発する凄まじい光が彼らを包み込み、本郷を仮面ライダー一号

に、そして一文字を仮面ライダー二号に変えて、変身した二人がイルカリラ達の近くに

着地してきた。

（ピュイイイイン！）

(ピュイイイイン！)

(挿入曲：レッツゴー！ ライダーキック)

遂に再会した二人の仮面ライダー、果たして子供達を助け出し、  
怪人塾『計画を』

阻止できるか!？

イルカリラ 恐怖の怪人塾 (後編 その1) (後書き)

次回、ダブルライダー対イルカリラ！ 果たして勝利するのはどっちだ！



イルカリラ 恐怖の怪人塾 (後編 その2) (前書き)

仮面ライダー一号、二号、華蝶仮面 奮闘!

3つの正義が悪を討つ!

イルカリラ 恐怖の怪人塾 (後編 その2)

その頃朱里は意識を取り戻し、崖の上から下の様子を伺うとそこには……

(挿入曲：レッツゴー！ ライダーキック)

朱里

「はわわっ！？ ご主人様が二人っ！？」

そこには仮面ライダーが二人、ゲルシヨッカーとにらみ合っていた。

そして二人の仮面ライダーはゆっくりとゲルシヨッカーに歩み出し、ゲルシヨッカー

は少しずつ後退っていった。

仮面ライダー一号

「……………」

仮面ライダー二号

「……………」

ゾル大佐

「ええいっ！ かかれっ！」

ゲルシヨッカー

「ギイイッ！」

ゾルの合図で戦闘員は仮面ライダーに向かっていくが

仮面ライダー一号

「トオッ！ トオッ！」

（バキッ！ バキッ！ ボゴッ！）

ゲルショツカー戦闘員

「ギイイイッ！」

一号に向かっていった戦闘員はある者は殴り払われ、ある者は蹴り飛ばされていった。

仮面ライダー二号

「セアッ！ フンッ！ ハアッ！」

ゲルショツカー戦闘員

「ギイイイッ！」

（バシッ！ バシッ！ バシッ！）

二号に向かっていった戦闘員は蹴り飛ばされ、またある者は投げ飛ばされていった。

そして二人のライダーは戦闘員を全て倒すと、再びゾル達に向かっていく。

ゾル大佐

「ええいっ！こうなったら地獄大使殿 我々も行くぞっ！」

地獄大使

「応とも はあっ！」

今度はゾル大佐、地獄大使も自ら二人の仮面ライダーに向かっていき、

ゾルは鞭で二号に、地獄大使は鞭とアイアンクローで一号に攻撃を仕掛けるが

ゾル大佐

「はっ！」

(ピッ！ ピッ！ ピッ！)

仮面ライダー二号

「フンッ！」

地獄大使

「エエイッ！ ハアッ！」

(バシッ！ バシッ！)

仮面ライダー一号

「フンッ！」

二人の仮面ライダーはとっさに二人の幹部攻撃を避け、そして

仮面ライダー二号

「ハアッ！」

(ドガッ！)

二号はジャンプしてゾルに飛び掛かり、殴り飛ばす。

ゾル大佐

「グウッ！」

ゾルは転倒し、衝撃で帽子がとれてしまった。

仮面ライダー一号

「トオッ！」

地獄大使

「グワアッ！」

地獄大使に至っては一号に蹴り飛ばされ、壁に叩き付けられてしま  
う。

地獄大使

「己ッ！ さらに手強くなっておるわ」

ゾル大佐

「だがこの程度で我々は怯まん！」

二人の幹部はまだ二人のライダーと戦おうとしたが、暗黒魔術師が  
それを止める。

暗黒魔術師

「どつやら、ここまでの様ですね。退きますよ お二方」

地獄大使

「何ッ!？」

左慈元放

「何のつもりだっ!干吉」

暗黒魔術師

「もしここで我々大幹部が敗北し、ライダーに倒されたら例の物が作れなくなります」

左慈元放

「ふざけんなっ! 本郷猛と一文字隼人は俺がぶっ殺・・・」

暗黒魔術師

「左慈! 今は私が貴方の上官だ 私の言うことを聞きなさい! さもなくば・・・命令に背いたとして貴方を殺しますよ?」

暗黒魔術師は凄まじい殺気を発し、その殺気にさすがの左慈も怯み

左慈元放

「くっ!・・・分かったよ ひきやあいんだろ!?! 退きやあ!」

ゾル大佐

「確かに幹部である我々がここで死ぬわけにはいかない」

暗黒魔術師

「では行きますよ」

仮面ライダー一号

「待てっ! 逃げるのか!？」

暗黒魔術師

「戦略的撤退です。心配しなくても貴方達の相手は用意しました」

左慈元放

「覚えているよ！ 仮面ライダー一号、二号！」

暗黒魔術師と左慈はそう言い残すと、妖術でその場からゾル大佐と地獄ごと

姿を消してしまつと、代わりに崖の上からネズミマムシ、トラゾウガメ

、カエルトンボーが現れ、そして後方をイルカリラと戦闘員に囲まれてしまつ。

ネズミマムシ

「チュチュウウウン！」

トラゾウガメ

「グオオオオオオン！」

カエルトンボー

「アゝブラゝ！」

イルカリラ

「ドルルルルッ！」

そして二人のライダーは怪人に囲まれると互いの背中を預けるかのように背を合わせ、

互いの敵とにらみ合う。

仮面ライダー一号

「行くぞ一文字！」

仮面ライダー二号

「おおっ！」

二人のライダーは互いに怪人に向かって走り出し、一号はネズミマムシ、カエルトンボー

二号はトラゾウガメ、イルカリラに向かっていった。

仮面ライダー一号

「トオッ！ トオッ！」

一号は襲い掛かってきたネズミマムシを蹴り飛ばして

カエルトンボー

「ア〜ブラ〜！」

（ビュビュン！）

カエルトンボーが飛ばしてきた毒液を間一髪避けると、

仮面ライダー一号

「トオッ！」

今度はカエルトンボーの方まで跳んでいき、



仮面ライダー一号

「トオツ！トオツ！トオツ！」

（バキッ！バキッ！ボゴツ！）

打撃でカエルトンボーにダメージを与えていきそして・

仮面ライダー一号

「トオツ！」

（バキッ！）

カエルトンボー

「アブラ〜！！！」

強烈なパンチで思いっきり殴り飛ばしていく。

カエルトンボーがかなり前まで飛ばされると一号は

（ピュイイイイイン！）

仮面ライダー一号

「行くぞっ！ トオオオツ！」

一号は高く跳び上がり・・・

仮面ライダー一号

「ライダーアアアアッ・・・」

(ドカツ！)

壁を蹴り、

仮面ライダー一号

「いならずまああああああっ！」

また壁を蹴って勢いをつけると

仮面ライダー一号

「キイイイイイック！」

(ドゴンッ！)

カエルトンポー

「アブラー！」

壁を二回蹴った事で威力を増したキックはカエルトンポーに見事命中して

そのままイルカリラが飛び出してきた川まで吹っ飛ばされてしまう。

(ドボンッ！)

川からカエルトンポーは這い出すが、ダメージに耐え切れずに

カエルトンポー

「ア〜ブラアアアアアアアアアッ！」

(ドオオオオオオンッ！)

川の中に転倒し、爆発炎上するのであった。

仮面ライダー一号

「……………」

ネズミママシ

「チュチュウウウン よくもカエルトンポーをつ！」

仮面ライダー一号

「来いっ！ ネズミママシ！」

ネズミママシ

「チュチュウウウン！」

ネズミママシはママシの右手を伸ばして攻撃してくるが

仮面ライダー一号

「ハアッ！」

攻撃を避けられてしまい、さらに・

仮面ライダー一号

「トオオッ！」

攻撃を避けたライダーが跳び上がり、

仮面ライダー一号

「ライダーフライングチョップ！」

(ズバツ！)

高く跳び上がることで威力を増すライダーフライングチョップでマムシの腕を切り落とさ

れてしまう。

ネズミマムシ

「チュチュウウウン！」

ネズミマムシは思わず切断させた腕を引っ込め左手で出血を抑えようとしたため、隙

が生じた。この隙についてライダー一号は技の構えをとり

(ピュイイイン)

仮面ライダー一号

「トオオッ！」

高く跳び上がり、空中で月面宙返りをして

仮面ライダー一号

「ライダーアアアッ！月面キイイイイック！」

(ドゴッ！)

ネズミマムシ

「チュチュウウウウン！」

威力を増したキックをモロに受けたネズミマムシは滝の方まで吹っ飛ばされそのまま

崖下へと転落し……

(ドオオオオオオオンッ！)

爆発炎上してしまう。

その様子を一号は崖の上から見てすぐさま、二号の元へと向かう。

一方で仮面ライダー二号はトラゾウガメ、イルカリラとの戦いを繰り広げていた。

仮面ライダー二号

「セアッ！セアッ！」

トラゾウガメ

「グオオオオオンッ！」

(バキッ！バキッ！)

トラゾウガメは防御力も高い怪人だが、仮面ライダー二号はショッカーから『力の二号』

と恐れられていた存在でありパワーだけは一号よりも遙かに上であった為、トラゾウガメ

も二号の攻撃を防ぐので精一杯であった。

トラゾウガメ

「グオオオオオンツ！ こ、この俺が追い詰められているだつ！？」

仮面ライダー二号

「セアツ！ セアツ！ ハツ！」

（バキッ！ バキッ！ バキッ！）

二号は容赦なくトラゾウガメに殴りかかってダメージを与えていき

トラゾウガメは・・・

トラゾウガメ

「グオオオオオンツ！」

（ゴオオオオオオツ！）

殺人火炎で反撃するが、これを二号は

仮面ライダー二号

「トオオツ！」

ジャンプしてかわし、そして

仮面ライダー二号

「ライダーアアアアアアアッ！」

（バキッ！）

トラゾウガメに向かっていった二号は空中からトラゾウガメを殴りつける

仮面ライダー二号

「反転ッ！」

再びジャンプして空中で宙返りをすると再びトラゾウガメに向かっていき

仮面ライダー二号

「ダブル・ペアアアアンチ！」

(ドゴンッ！)

二度のパンチを喰らわした。

トラゾウガメ

「グオオオオオオンッ！」

この威力には敵わず、トラゾウガメは吹っ飛び壁に激突してしまう。

何とか立ち上がるも・・・ダメージに耐えきれずに

トラゾウガメ

「グオオオオオオンッ！」

(ドオオオオオオンッ！)

爆発炎上し、その辺が赤い炎に包まれてしまう。

そして残すはイルカリラのみとなり、二号がイルカリラとにらみ合っていた時

そこに一号も駆けつけ、二人のライダーがイルカリラをにらみ合う。

イルカリラ

「ドルルルルルッ！」

仮面ライダー一号

「・・・・・・・・・・」

仮面ライダー二号

「・・・・・・・・・・」

イルカリラ

「己ッ！ ダブルライダー！ 俺の脳波破壊電波を受けてみる！」

イルカリラが両手を二人のライダーに向けるが、

仮面ライダー一号

「避けるっ！」

仮面ライダー二号

「おおっ！」

二人のライダーはとっさに攻撃を避けると、脳波破壊電波が命中した地面は

（ボンッ！）



爆発し、火花が飛び散った。

イルカリラ

「くそっ！・・・かかれっ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイッ！」

また戦闘員が姿を現し、二人の仮面ライダーに向かっていく。

仮面ライダー一号

「トオッ！ トオッ！」

（バシッ！ バシッ！）

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイッ！」

一号は迫ってきた戦闘員を次々蹴り飛ばして、そして二号は襲い掛かってきた戦闘員を

仮面ライダー二号

「セアッ！ セアッ！」

（バキッ！ バキッ！ ボゴッ！）

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイッ！」

殴り飛ばし、そして武器を持って襲い掛かってきた戦闘員の武器を

取り上げ

て、次々となぎ払っていった。

そして戦闘員が全滅すると、二人の仮面ライダーは再びイルカリラに挑もうとする。

(ピュイイイン！)

仮面ライダー一号

「……………」

イルカリラ

「ドルルルルル……………」

仮面ライダー二号

「イルカリラっ！ もうここまでだ！ 大人しく観念しろ」

イルカリラ

「己ッ！ 仮面ライダー一号、二号！ こうなったら……………」

するとイルカリラは右手をどこかに向けてこう言い出す。

イルカリラ

「来い……………俺の可愛い生徒達よ……………このイルカリラ様を助けるのだ！」

すると、待機していた子供達が一斉に動き出し、機関銃などの武器を持って

ゆっくり仮面ライダー一号、二号に向かっていった。

仮面ライダー一号

「何ッ!？」

仮面ライダー二号

「しまった。こんな手が残っていたとは……」

イルカリラ

「どうだライダー？ 貴様らが守るべき子供が相手では戦う事もできまい」

そして一号、二号の前には

仮面ライダー一号

「鈴々っ！ 雛里っ！」

何とゲルシヨツカーのコスチュームを着た鈴々と雛里が一号の前に姿を見せたのだ。

しかも、近くには魏の桂花、季衣、流琉、風、そして雪蓮の妹小蓮もいた。

鈴々

「ギイイツなのだ……」

雛里

「ギイイツ……」

仮面ライダー一号

「皆ッ！ 正気に戻れ！」

仮面ライダー二号

「本郷！ 落ち着け 操られているから説得しても無駄だ！」

仮面ライダー一号

「くっ……」

さすがのライダーもこれにはどうする事もできず、ゆっくりと後退するしかない。

例え自分の命が危なくても、子供達を相手に戦うわけにはいかない。

仮面ライダー一号

「どうすればいいんだ？」

そして一番最初に鈴々と雛里が銃を向け、ダブルライダーに発砲する。

（バアン！ バアン！）

仮面ライダー一号

「ハッ！」

仮面ライダー二号

「ハッ！」

二人の少女の発砲をとっさに避ける。ゲルショッカーの事だ。

あれはただの銃ではないはず。もし命中していたら、ひとたまりもない。

仮面ライダー一号

「狙いが正確だ……さすがはゲルショッカーの教育を受けただけある」

仮面ライダー二号

「本郷……関心している場合かよ」

「文字の言つとおりだ。どうすればいいのか？」

そして子供達が一斉にダブルライダーに銃を向けたとき、どこからか

声がある。

?????

「待ていつ！子供達ッ！」

その声にその場にいた者は全員驚き、声のした方向をみると

崖の上にいた朱里の隣に白い服を着て後ろを向いた女性がいた。

仮面ライダー一号

「おおっ！彼女は！」

仮面ライダー二号

「何だあの女は？」

イルカリラ

「貴様何者だ!? こっちむいて名を名乗れ!」

朱里

「は、はわわっ!? いつのまに?」

朱里はいつのまにか、隣にいた星・もとい華蝶仮面に驚いていた。

(挿入曲：見参！華蝶仮面)

?????

「ある時は、常山の昇り龍、またある時は義勇軍の勇将、  
しかしてその実態は!」

そしてその女は振り返ると怪人にこういう。

華蝶仮面

「乱世に舞い降りた一匹の蝶! 美と正義の使者! 華蝶仮面推参!」

イルカリラ

「か、華蝶仮面?・・・そうか貴様がトラゾウガメとカエルトンボ  
ーが言っていた

人間でありながらライダーと同じく我らゲルシヨッカーに刃向かう  
存在っ!」

華蝶仮面

「ほう? 貴様がなぜ死んだそやつらの名を知っているかしらんが、  
この世界を守るのはライダーだけではないっ! 私もいる限り貴様  
らの好き勝手にはさせん!」

(ビシッ！)

華蝶仮面はビシッと指を向けてヒーローらしいセリフをイルカリラにいうと、

華蝶仮面

「トオッ！」

何とライダーの近くまで飛び降りてきたのだ。

仮面ライダー一号

「来てくれたか華蝶仮面」

仮面ライダー二号

「本郷、彼女は一体？」

仮面ライダー号

「彼女の名は華蝶仮面。人間でありながら、ゲルシヨッカーと戦おうとする

勇気ある戦士だ」

華蝶仮面

「仮面ライダー殿 何故二人いるのかお聞きしたいが今はあの怪人を倒すのが先決ですな」

彼女は仮面ライダーの手袋、ブーツをよく見るとどちらが自らの主かを判断する。

イルカリラ

「こしゃくな……だが、一人増えたところでこの人数を相手に

どう戦う?」

イルカリラの言うとおりだ。相手はイルカリラだけではない。子供達もライダーと

華蝶仮面に襲い掛かってくるだろう。しかし・・・

華蝶仮面

「フフフ・・・」

イルカリラ

「ドルルル・・・何がおかしい? 気でも違ったか!」

華蝶仮面

「私がつた一人でここにきたと思っているのか?」

イルカリラ

「何ッ!? まさか・・・」

愛紗

「その通りだ!」

すると別のところから、愛紗、華琳、雪蓮が武装した状態で姿を見せる。

しかも義勇軍の兵をつれて・・・

イルカリラ

「な、何ッ?」



仮面ライダー一号

「愛紗達も来ていたのか？」

イルカリラ

「いつのまにこんな近くに……」

その時、華琳と雪蓮がイルカリラに武器を向けてこういう。

華琳

「そのの化け物。よくも私の可愛い部下を連れ去ってくれたわね  
たっぷりお礼してあげるわ！」

雪蓮

「あら？、お礼なら私もあるわよ……大切な妹を誘拐されたこの  
怒り、受けてみなさい！」

イルカリラ

「何をっ！？」

その時、愛紗が義勇軍にこう言い始める。

愛紗

「行け！ 義勇軍の兵よ！ ただし相手は黄巾党兵と同じ操られた  
存在だ

決して殺してはならぬ！」

「うおおおおっ！」

愛紗の合図で一斉に義勇軍は子供達に向かっていく。

「ギイイツ！」

「ギイイツ！」

（ドガガガッ！）

子供達は義勇軍に向けて発砲しましたが、彼らは前回カエルトンボに襲われた一件で

高い防御力を誇る盾を用意していたので、義勇軍は子供達の攻撃を防ぎながら、突撃

していく。

子供達は必死に攻撃し出すが、そのうち

（カチカチッ！）

とうとう銃弾がつきてしまい、銃弾のつきた子供達は一斉に義勇軍に白兵戦を仕掛けるた

めに向かっていく。

「ギイイイイイイイツ！」

そして鈴々、雛里には愛紗、桂花達には華琳、小蓮には雪蓮が向かっていく。

この様子をみたイルカリラは

イルカリラ

「くそっ！ こうなったら、ライダー、華蝶仮面 貴様らの首だけでも・・・」

「ドルルルルッ！」

イルカリラは無謀にもライダーと華蝶仮面に向かっていく。

ダブルライダー

「トオオッ！」

ダブルライダーは向かって来たイルカリラを同時に殴り飛ばして

（ドゴンッ！）

イルカリラ

「ドルルルルッ！」

イルカリラが一步後退ると、今度は華蝶仮面が向かっていく。

華蝶仮面

「ハアアアッ！」

（ズバッ！）

イルカリラ

「ドルルルルッ！」

龍牙で斬り付けられたイルカリラからは火花が飛び散り、そして今度は一号が

仮面ライダー一号

「トオッ！」

(ドゴンッ！)

イルカリラ

「ドルルルルッ！」

回し蹴りをイルカリラに命中させ、その反動でイルカリラは蹴られた方向に跳んだ。

イルカリラは起き上がるも、そこに追い打ちをかけるように一号が  
迫り、

仮面ライダー一号

「トオッ！ トオッ！」

(ボゴッ！ ボゴッ！)

イルカリラの腹部を殴りつけ、一号が離れると今度は二号が迫り、  
強烈なパンチ

をお見舞いする。

仮面ライダー二号

「セアッ！」

(ボゴッ！)

イルカリラ

「ドルルルルッ！」

イルカリラは殴り飛ばされた反動で前方へ吹き飛び、背を向けて倒れると、そこへ

華蝶仮面が迫り

華蝶仮面

「ハアッ！」

(ズバッ！)

その龍牙の一撃はイルカリラの背びれを斬り落としてしまう。

イルカリラ

「グワアアアアアッ！ 俺の・俺の背びれがアアアアアアアアアッ！」

突如怪人が苦しみだした様子を見て三人は驚き出す。

仮面ライダー一号

「奴の弱点は背びれだったのか」

仮面ライダー二号

「やるなら、今だぜ」

トドメを刺すときと判断した二号は一号にそういつ。

仮面ライダー一号

「そうだな・・・行くぞ一文字ッ！」

仮面ライダー二号

「おおっ！」

(ピュイイイイイン！)

そして二人の仮面ライダーは同時にポーズを取ると、同時に跳び上がる。

ダブルライダー

「トオオオオオッ！」

そして……

ダブルライダー

『ライダーアアアアアアア・ダブルキイイイイイイイイック  
』！

(ドゴンッ！)

イルカリラ

「ドルルルルルッ！」

その強烈な蹴りは見事に命中し、イルカリラを吹っ飛ばした。

イルカリラは崖から転がり落ちていき、下についたのと同時に……

(チュ……ドオオオオオオオッ！)

爆発してしまう。

そしてイルカリラが死んだのと同時に、子供達の様子が変わる。  
初めは抵抗していた子供達も突如動きを止め、持っていた武器を  
落としたのだ。

「あれっ？……僕達何をしていたんだろ？」

「確か……『天の御遣い様ごっこ』をしていたはずなのに……」  
子供達が正気に戻った事を悟った義勇軍も戦うのを止める。

鈴々

「はにや？ 鈴々は今まで何をしていたのだ？ 確か誘拐された友  
達を  
助ける為に馬車を追っていたはずなのに……」

愛紗

「鈴々っ！」

鈴々が正気に戻ったことを知った愛紗は涙があふれそうになるが、  
悟られないように彼女を力強く抱きしめる。

鈴々

「あ、愛紗！？ こんなところで何をしているのだ？」

愛紗

「何をしているのだ？ じゃない！ 馬鹿馬鹿ッ！ 人を心配させお

って……」

愛紗の様子を見て自分が皆を心配させていた事に気づく。

鈴々

「よく分からないけど、ごめんなさいなのだ」

鈴々はとりあえず、愛紗に謝るのであった。

そして正気を取り戻した者の中には、

雛里

「あわわっ……こんな恥ずかしい姿を見られて、もうお嫁に行けないです」

困惑する者や

風

「ほうほう、これは皆さん風とおそろいの格好ですね」

興味を持つ者

桂花

「い、いやあああああっ！ 何よ！？この悪趣味な服！？こんな姿華琳様に見せられないわ！」

華琳

「あらっ？ 私は別に気にしないけど……」

桂花



「か、華琳様っ!? み、見ないで下さい!」

恥ずかしがる者

季衣

「きゃはははっ! 流琉! 何だよその変な格好!?!」

流琉

「季衣だつて人のこといえないでしょ!?!」

季衣

「あっ! ホントだ!」

流琉

「アツハハハハッ!」

思わず笑う者

小蓮

「お姉ちゃん?」

雪蓮

「小蓮・・・」

小蓮

「雪蓮お姉ちゃあああああん!」

そして小蓮は雪蓮に抱きつく。

小蓮

「うえええん！ 怖かったよおおおおっ！」

雪蓮

「よしよしっ・・・もう大丈夫よ」

自分の格好を気にする前に家族との再会を喜ぶ者がいた。

中には誘拐された事を思い出し、困惑している子供達がいる。

この様子を仮面ライダー一号、二号、そして華蝶仮面がみていた。

仮面ライダー一号

「これで怪人塾計画は失敗だな・・・」

仮面ライダー二号

「後はゲルパー薬を処分するだけだな」

仮面ライダー一号

「だがその前に皆の所に行くぞ 困惑している子供達を落ち着かせなくては・・・」

一号、二号が皆の所に行こうとしたとき、華蝶仮面だけはどこかにいっつとずる。

仮面ライダー一号

「どこに行くんだ？ 華蝶仮面」

仮面ライダー二号

「皆の所に行かないのか？」

華蝶仮面

「皆を助けたのは貴方達です。私はただ影ながら貴方達に協力しただけです」

仮面ライダー一号

「いやそんなことはない……君も皆を助けた……私も何度も危ないところ

を君に救われた 君も立派な正義の味方だ」

華蝶仮面

「そ、そうですか……？」

仮面ライダー二号

「そうさ……さあ、行こう華蝶仮面」

二人のライダーにそう言われ、華蝶仮面は子供達の元に行くことを決意する。

仮面ライダー一号

「皆、もう大丈夫だ 落ち着け」

「あつ！ 御遣い様が……二人ツ！？」

愛紗

「ご主人様が二人ツ？ どっちが本物だ！？」

鈴々

「それに変態仮面なのだっ！」

華蝶仮面

「変態仮面ではないっ！ 華蝶仮面だ！」

鈴々の言葉が聞こえたのか彼女は思わずこつ反論する。

仮面ライダー二号

「おいおいっ本郷……どういことだ 御遣い様って何のことだ？ それにご主人様って……」

仮面ライダー一号

「説明は後です 今は子供達を落ち着かせるのが先決だ」

仮面ライダー二号

「そ、そうか……」

そして一号、二号、華蝶仮面は子供達を落ち着かせる為に、子供達に

近づき、子供達も憧れの仮面ライダーに会えた喜びから、自分から彼らに

近づき、握手をねだる者もいた。

夕方、子供達を親の元に帰す仕事を終えた本郷、一文字は本郷のバイクに鈴々、

一文字のバイクに雛里を乗せ、城に帰っていく。

「御遣い様、ありがとっ！ さようならっ！」

子供達は手を振りながら、城に戻っていく彼らを見送り、本郷、一文字もバイクに乗って

子供達に手を振る。

ゲルシヨツカーの怪人塾計画は一号、二号、そして華蝶仮面の活躍で失敗に終わった。

だが、ゲルシヨツカーの驚異はまだまだこの世界の平和を脅かそうとしている。

これからもより強力な怪人が現れることだろう。

行けっ！ 本郷猛！ 一文字隼人ッ！

戦えっ！ 我らの仮面ライダー！

つづく

イルカリラ 恐怖の怪人塾 (後編 その2) (後書き)

次回、一文字隼人、本郷に紹介されるの  
ことを楽しみにっ！

一文字隼人、本郷に紹介されること（前書き）

今回、改めて本郷猛が一文字隼人を皆に紹介し、皆は彼に真名を預けます。

一文字隼人、本郷に紹介されること

仮面ライダー達が子供達を救出したその夜、城に戻った本郷猛は

この世界にやってきた一文字隼人に事情を説明していた。

一文字隼人

「ここは1700年以上も前の昔の中国だって!? つまり俺達は  
三国時代にいるってか?」

本郷猛

「ああ、そうだ。」

一文字隼人

「お前がいなくなって2週間、この世界に2週間もいたのか?」

本郷猛

「2週間? 俺は半年近く、この世界にいるんだが・・・」

一文字隼人

「えっ? どういうことだよ? こっちではお前がいなくなって  
既に2週間経過したんだぞ」

本郷猛

「何だと・・・? ..そうか、この世界と俺達の世界の  
時の流れ方は若干ずれているのか」

一文字隼人

「浦島太郎の話と同じで、こっちの方が時が経つのが早いのか?」



本郷猛

「現に俺がいなくなつて2週間しか経っていないと言つんだ間違いない」

一文字隼人

「そうか・・・それにしても、ここが三国時代なんてちよつと信じられないな」

本郷猛

「だがここは俺達の知っている三国時代とはちよつと違う」

一文字隼人

「なつ？ それはどういう・・・？」

その時、執務室のドアを誰かがノックする。

(コンコンツ)

本郷猛

「どうぞ・・・」

そして部屋に桃香、愛紗、鈴々、星、朱里、雛里そして華琳、季衣、流琉、桂花、風、

雪蓮、小蓮、月、詠が入ってきた。

愛紗

「失礼しますご主人様」

一文字隼人

「君達はさっきあの現場にいた・・・」

桃香

「えっ？ あなたは？」

現場にいなかった桃香はそこに見知らぬ男がいたので少し驚いていた。

本郷猛

「彼か？ 彼は一文字隼人 俺の友人だ」

一文字隼人

「よろしくっ！ 俺は一文字隼人 フリーのカメラマンだ」

隼人はそういうと愛紗達にカメラを見せる。

桃香

「か・め・ら・ま・ん？」

鈴々

「それってどんな人なのだ？」

一文字隼人

「ああ・・・写真という絵をこのカメラで撮るのを仕事とする人達のことだ」

一文字はここが三国時代と聞いており、カメラの事を知らない彼女達に

自分の事を説明していた。

そんな中、愛紗だけが必死に何かを考え込んでいる。

愛紗

「一文字隼人？　・・・一文字隼人・・・　！　あ、あの一文字隼人ですか！？」

桃香

「えっ？　・・・・・・・・・・ああっ！」

桃香も何かを思い出したのか彼をみて、驚く。

そう、黄巾党との戦いの後、本郷がゲルシヨッカーについて話していたとき

天の国で本郷猛の代わりに天の国でゲルシヨッカーと戦い続けていたという男の名。

そう、もう一人の仮面ライダーである。

桃香

「あ、あなたも仮面ライダーなのですか？」

一文字隼人

「！！　どうしてそれを知っているんだ！？」

本郷猛

「俺が話したんだ」

一文字隼人

「本郷、お前が話したのか」

本郷猛

「そうだ・・・」

二人が話していると華琳が二人の間に割って入る。

華琳

「へえ〜・・・あなたも改造人間なのっ？　あなたも中々凜凜しい顔を  
しているのね」

一文字隼人

「君達は一体？」

愛紗

「私は姓は関、名は羽、字を雲長と申します。」

桃香

「私は姓は劉、名は備、字は玄德です。」

鈴々

「鈴々はね、姓は張、字は飛、字は翼徳。真名は鈴々なのだ」

星

「我が名は趙雲　字は子龍です。」

朱里

「私は姓は諸葛。名は亮。字は孔明です」

雛里

「私は姓は鳳統。字は士元です」

月

「給仕の月です。ご主人様のお友達にお会いできて光栄です。」

詠

「同じく給仕の詠です。」

華琳

「我が名は曹操。字は孟徳。そして、この子達は私の配下、右から荀？、程？、典韋、許緒よ」

華琳は配下の彼女達に代わり、一文字に彼女達を紹介した。

ちなみにそうしたのは、男嫌いの荀？こと桂花が絶対に自分から男に名を名乗らない

と思ったからである。

そうなれば、一文字に対する無礼とされ、批難されていたであろう。

そして次に雪蓮が自己紹介を始める。

雪蓮

「私は孫策。字は伯符よ」

小蓮

「私は孫尚香。真名は小蓮よ。シャオって呼んでね。お兄ちゃん達

「

一文字隼人

「ええっ!？」

一文字は彼女達の名を聞いて驚いていた。まるで本郷が初めて愛紗達とあつた

時に自分達の名を聞いて驚いていたのだ。

愛紗

「どうしましたか？」

一文字隼人

「あっ……い、いや何でも……」

すると本郷の所でこっそりより彼にこういう。

一文字隼人

「本郷……どういうことだよ？ 曹操、孫策、劉備と言えば、三国志の中でも

有名な英雄じゃないか？ 何故有名な英雄が全員女なんだ？」

一文字は彼女達の名を聞いて驚いていた。無理もない。

本来なら男であるはずの英雄達（尚香を除く）が全員、美少女なのだから……

本郷猛

「これが俺達の知っている三国時代とは違うといった理由だ。ここ

では何故か武将達  
が全員女なんだ どうやらここは別の世界の三国時代らしい」

一文字隼人

「へ、へえ〜・・・ゲルショツカーめ こんな時代で何を作ろう  
としているんだ？」

そうだ聞きそびれた事がある。何故、仮面ライダーが天の御使いと  
呼ばれているんだ？

それにお前が主ってどういうことだよ？」

本郷猛

「ああ実はな・・・」

本郷は一文字にこう説明しだす。

『天の御使い』とはこの戦乱を治める為に天より遣わされた使者、  
つまり救世主

の事であり、偶然空から落ちてきた自分を目撃した桃香達から天の  
御使いと思われ

た事。

彼女達に最初にあつた頃、力を貸してくれと頼まれたが、タコガラ  
スを追わなけれ

ばならず、一度は『天の御使い』でない事を理由に断ろうとしたが、  
落胆させてしまった

彼女達の様子をみて一時的に力を貸し、彼女達の主になることを決

めたこと。

そして、この時代にいないはずのゲルショッカーの怪人も現れて人々に襲い掛

かった時、仮面ライダーに変身して奴らと戦い、人々を守ってきたこと。

彼女達に自分が改造人間になった経緯を説明して、改めて受け入れられたこと。

こうして、自分は『天の御使い』仮面ライダーとして、この世界を暗黒魔術師率いるゲル

ショッカー三国時代支部から守る為に戦う事を決意したことを説明した。

一文字隼人

「そんな事があったのか？」

本郷猛

「ああっ・・・それよりも、隼人。お前はどっやってこの世界に俺がいるって分かったんだ？」

一文字隼人

「いや、俺はな、あの左慈元放ってガキと戦っているとき、偶然この世界にお前がいるって知ってこの世界に向かった奴を追ってきたんだ」



本郷猛

「左慈？ あの銀髪の少年の事か？」

一文字隼人

「ああ・・・」

今度は一文字が本郷に説明し出す。あの銀髪の少年の名は左慈元放。子供に化け、

自分と滝を殺そうとしたこと。

その正体はイリエワニと大アルマジロの合成改造人間ワニマジロだったこと。

奴との戦いの際、ワニマジロの必殺技『砲弾スクリューボール』に『ライダーニキック』

で挑んだが、威力はワニマジロの技の方が上で一度は敗北してしまった事。

そして自分が死んだと思ったワニマジロは徐に、本郷がこの世界にいること。

そしてシヨツカーの大幹部達が復活したことをしゃべり、本郷の危機を知った自分は

こっそり戦闘員の中に紛れ込み、この世界まで追ってきたことを話した。

本郷猛

「あの少年の正体は実は改造人間ワニマジロでライダーにキックも打ち破る技『砲弾スクリューボール』か……この世界にくる前にそんなことがあったのか」

一文字隼人

「ああつ……」

その時、華琳たちが二人の間に割って入る。

華琳

「お話の最中申し訳ないけど、そろそろ、話に割って入ってもいいかしら？」

一文字隼人

「ああつ悪い……あつそれから……張飛ちゃんと尚香ちゃんだったな？」

君達に聞きたいことがある」

鈴々

「何なのだ？」

小蓮

「シャオ達に答えられることお兄ちゃん？」

一文字隼人

「君達は自分の名以外に別の名を名乗っていたな？ それはいつた  
い……」

鈴々

「真名の事かなのだ？」

一文字隼人

「真名？」

本郷猛

「親しい者の中で呼ぶことを許される本当の名で、許可なくその者の真名を呼べば、殺されても文句がいえぬ。この世界ではそついう決まりなんだ」

それを本郷から聞いた一文字は思わず驚く。

一文字隼人

「！！・・・あ、あつぶね・・・うっかり真名を呼んだらここにいる全員を敵にしていたかもしれないな」

一文字は思わず冷や汗を流す。口は災いの元とよく言われるが、許可なく真名を呼んでし

まったら殺される。たまった物ではない。

鈴々

「別に気にしないのだ。ゲルショツカーから友達と鈴々を助けてくれた

お兄ちゃんは特別なのだ」

小蓮

「うん　だから、気にせず私達を真名で呼んでね」

一文字隼人

「そ、そうか……では改めてよろしく 鈴々ちゃん シャオちゃん」

鈴々

「うんなのだ」

一文字は鈴々と小蓮に改めて挨拶すると、今度は桃香達の方をみた。

一文字隼人

「この子達に真名というものがあるなら、当然君達にも……」

桃香

「はい……私達にも真名がありますよ」

鈴々

「この際だから、お姉ちゃん達も一文字のお兄ちゃんに真名を預けるのだ」

愛紗

「そうだな。私の真名は愛紗です」

桃香

「私は桃香」

星

「星です 以後お見知りおきを」

朱里

「私の真名は朱里でしょ」

雛里

「私は雛里です・・・」

華琳

「我が部下を救ってくれたお礼に、私も真名を預けるわ　私は華琳  
よ」

季衣

「あの〜華琳様・・・」

華琳

「何っ？・・・季衣」

季衣

「僕達も真名をこの人達に預けていいですか？　助けられた恩がありますし」

華琳

「いいわよ」

華琳から許しが出ると、彼女達は順番に本郷と一文字に挨拶し始める。

季衣

「僕の名前は許緒　字は仲康　真名は季衣だよ　華琳様から聞いたけど、

兄ちゃん達が僕達を助けてくれたんだよね？　ありがとう」

流琉

「私は典章 真名は流琉です。 助けていただいて誠にありがとうございます。」

風

「私は程？ 字は仲徳 真名は風ですよ 風と呼んで下さい。そしてこれが……。」

風は頭にある人形に触ると

宝？

「俺は宝？」。よろしくな。」

本郷猛

「ああっよろしくな宝？」

宝？

「おおっ……？」

風

「どうしたですか？ 宝？」

宝？

「いや、人形の俺にまともに挨拶する人がいるのが珍しくてな」

彼女達が本郷、一文字に自己紹介している時、桂花がどさくさに紛れて

その部屋から出ようとしていることに華琳が気づき、呼び止める。

華琳

「あらっ？ どこに行くの桂花？」

桂花

「（ギクツ！） ちょ……ちょっと厠に……」

月

「厠ですか？ でしたら、ご案内いたしましょうか？」

桂花

「い、いいわよ！ 別に子供じゃあるまいし……」

明らかに様子のおかしい桂花に華琳はこっぴどく詰める。

華琳

「まさか貴方。 男に真名を教えるのが嫌だからっというて

厠にしばらく籠もって……うやむやにしようとか思っているんじゃないでしょうね？」

桂花

「（ギクツ！） い、いいえっ！ 決してそんなことは……」

凶星だったのか彼女は冷や汗を流しながら、彼女から目を背ける。

彼女の様子に華琳は頭を抱えながら、こっぴどく詰める。

華琳

「はあ……貴方ねよく考えてみなさい。 もし、この二人が助けてくれなかったら、貴方一生あの服を着たままだったのかも知れないのよ？」

桂花

「うっ！」

華琳

「そうならずに済んだんだから、感謝を込めて真名を教えてあげてもいいんじゃない？」

桂花

「うっ……うっう……（悔しいけど、このバツタ男達に助けられなかったら、私は今でも……）」

華琳にそう言われ、桂花はしぶしぶ自分も自己紹介することにした。

桂花

「私は荀？ 字は文若 真名は……け、桂花よ！ 私が男と馬鹿に真名を教えることなんて、滅多にないんだから感謝しなさいよね！」

桂花は真名を教えたが、その場に何となく気まずい空気が流れる。

誰だってそんな自己紹介をされたら、不愉快に思ってしまうだろう。

本郷猛 & 一文字隼人

「は、ははは……」

本郷と一文字は思わず苦笑いしてしまう。

愛紗と鈴々は桂花を睨み付け、このままではまずいと思った華琳は

華琳



「今の桂花の無礼は私がわびるわっ！ 桂花には良く言い聞かせるから

許してあげてっ！」

本郷猛

「い、いいや・・・俺達は別に気にしていない」

本郷がそういうと、愛紗と鈴々は桂花を睨み付けるのを止め、華琳は桂花の耳元で

こつこつとさやく。

華琳

「（魏に帰ったら、お仕置きよ。覚悟しておきなさい桂花・・・）」

華琳の声には怒りが籠もっており、本気で怒っていると桂花は悟る。

桂花

「（ひ、ひひひひひひっ！）」

自業自得なので、誰も桂花を庇おうと思う者はいなかった。

その時、一文字は真名を預けてくれた彼女達にこつと聞く。

一文字隼人

「いいのか？ いきなり、この世界に来たばかりの俺にそんな大切な物を

預けて・・・」

愛紗

「何をおっしゃいますか！？ ご主人様不在の『天の国』でゲルシヨッカーと

戦われ、そして子供達を救ってくれた貴方が悪い人間であるはずがありません。」

愛紗がそういうと皆も頷く。

一文字隼人

「そ、そうか……。では改めてよろしく皆」

桃香

「はいっ！……あの〜それで貴方をこれから何とお呼びすれば良いでしょうか？」

一文字隼人

「そうだな……。本郷と同じく『ご主人様』じゃ、誰のことか分からないしな

……。俺のことは一文字さん、もしくは隼人さん。抵抗があるなら、一文字様とでも

呼んでくれ。なければ気軽に隼人でもいいぞ」

一文字がそういうと、

一同

「分かりました」

一文字隼人

「これからは俺も人々を守る為にゲルシヨッカーと戦う。奴らと戦う為にも

皆の力を貸してくれっ！」

一同

「はいっ！」

こうして、三国時代に一文字隼人という心強い味方がやってきた。

彼もまた、ゲルシヨッカー三国時代支部と戦う事を誓うのであった。

その後、魏に戻った桂花は

桂花

「か、華琳様……もう許して下さい……」

華琳

「駄目よっ！ これはお仕置きなのよ！ さあ、次は廊下を雑巾がけしてきなさい！」

桂花

「ひひひひひひっ……」

本郷と一文字に無礼な態度をとった罰として、城の掃除を全部一人でするように命じられたのだ。

ちなみに魏の城はかなり巨大で、とても一人で掃除しきれぬ物ではない。

桂花は逃げたくなかったが、華琳の命を受けた春蘭、秋蘭が見張っていて

逃げ出すことができなかった。

こうして桂花は掃除を終えるまで、勝手に休むこともできなかった  
という。

つづく

一文字隼人、本郷に紹介されるのこと（後書き）

我らの仮面ライダーを狙うゲルシヨッカー三国時代支部が送った次なる使者は化石怪人タルボナイト！ 死神博士とブラック將軍は古代の地層に眠っていたタルボサウルスとアンモナイトの化石を合成し、タルボナイトを生み出した。果たして仮面ライダーは恐竜の力を持ったこの怪人に勝利する事が出来るのか！？ 次回「蘇った化石怪人 タルボナイト」にご期待下さい。

蘇った化石怪人 タルボナイト (前編) (前書き)

これが、今年最後の投稿です。次回は来年の投稿になります。それでは皆さん  
よいお年を！

蘇った化石怪人 タルボナイト (前編)

ゲルシヨツカー三国時代支部本部改造手術室。

不気味な怪音が響く中、ある一人の凶悪な山賊の男に、改造手術が施されようとしていた。

(挿入曲：闇に蠢く者)

死神博士

「フフフフ……人々のいう龍の谷から発見した龍の骨 だが、だがこれは龍の骨

ではない 7500万年前、この大陸を支配していた恐竜タルボサウルスの骨だ」

死神は手術台の近くに置いていた化石について戦闘員と暗黒魔術師に説明しだす。

そして今度はブラック将軍が自身の持っている化石についてを説明し出した。

ブラック将軍

「そしてこれが、同じく龍の谷より発見した恐竜が生まれる以前より前に誕生し、海を泳いでいたアンモナイトの化石である」

そして、その化石に左慈が興味深そうに近づいた。

左慈元放

「ほう……これが化石か？ 初めてみるな で、こんな石っこ

るで何を作るきだよ？」

暗黒魔術師

「今からこの二つの化石を粉末状にして、特殊液体で溶かし、合成血液を作りあげて・・・」

死神博士

「そして、その血液をこの凶悪な男の血液と取り替えるのだ」

数分後、粉末状にされた二つの化石は混ぜ合わされ、そして特殊液体で

解かされ合成血液になった。

ゲルシヨツカー科学戦闘員

「合成血液、完成いたしました。」

ブラック將軍

「よし、さっそく取り替えだ」

ゲルシヨツカー科学戦闘員

「ギイツ！」

科学戦闘員はブラック將軍から移植の指示を受けると、合成血液の入った点滴の針を

男に右腕に刺し、今度は男の人間の血を抜くための鍼を左腕に突き刺す。



そして、スイッチが入ると、合成血液が男の体に入り、赤い真つ赤な血がどんどん抜けて

ガラスケースの中へとたまっていった。やがて、男の顔はどす黒くなり、そして徐々に

変貌していき、完全に怪人へと変貌していった。

その姿は8割が肉食恐竜タルボサウルス、右腕がアンモナイトの体の特徴を持っていた

怪人だったのだ。

そうこの怪人こそ、ゲルシヨッカー三国時代支部が新たに生み出した怪人

タルボナイトなのである。

タルボナイト

「グオオオオオオッ！」

タルボナイトは起き上がると、雄叫びをあげ、右腕であるアンモナイトの無数の

触手を動かした。

そして手術室から全員出て、司令室に入ると、そこに用意されていたワインのグラス

を全員手に持ち、ワインが全員のグラスに注がれると死神博士がこ

う言い出す。

死神博士

「偉大なるゲルシヨツカー首領と、化石怪人タルボナイトの完成を祝って乾杯……」

ブラック將軍

「乾杯ッ！」

ブラック將軍を筆頭に全員がグラスをゲルシヨツカーのシンボルマークに向ける。

すると、シンボルマークから首領がこう言い始める。

ゲルシヨツカー首領の声

「死神博士とブラック將軍、暗黒魔術師、左慈元放　そしてゲルシヨツカー三国時代支部のために乾杯だ……」

ブラック將軍

「いや……その乾杯はゲルシヨツカー最大の敵である仮面ライダーを始末し、

例の物を貴方に献上するまで全員御辞退させていただきます。」

どうやら、この辞退は全員で決めた辞退のようである。

ゲルシヨツカー首領の声

「聞こう。君達の計画をつ……」

死神博士

「はいっ……この三国から離れた『龍の聖域』と呼ばれる土地には

龍の谷を遙かに凌ぎ、保存状態の良い恐竜の化石が眠っていると  
われます。そこを我々が見つけ、化石を発掘して新たな化石怪人に  
改造し、三国を一気に制圧するのです」

ブラック將軍

「だが、当然の事ながら、仮面ライダーが邪魔してくる恐れもある。  
まずは手始めに

この女……」

ブラック將軍がモニターを指さすと、そこにはある女性が映し出さ  
れていた。

それは、朱里と雛里の恩師であり、名を司馬 徽 字を徳操。人々  
から水鏡先生と

呼ばれる女性だった。

暗黒魔術師

「この女性の名は司馬 徽 徳操。 人々から水鏡と呼ばれる人物  
です。」

死神博士

「我々の調査で、この女が最近、聖域を守る者より『龍の牙』と呼  
ばれる化石を入手したことが分かりました」

ゲルシヨツカー首領の声

「『龍の牙』？ なんだそれは？」

ブラック將軍

「はい……それは……」

ブラックが首領に龍の牙とは何の化石なのかを説明する。それはタルボナイトの

もともになったタルボサウルスより遙かに強力な力を持った恐竜の化石であった。

ゲルショツカー首領の声

「よろしい……。では、タルボナイト　今すぐこの女から龍の牙を奪い取りに行くのだ！」

タルボナイト

「グオオオオオオオッ！　お任せ下さい首領」

タルボナイトはそういうと、すぐに戦闘員を連れて司馬　徽の元へと向かう。

そして、ここは山奥に構えられた司馬　徽の屋敷。司馬　徽は時々、近くの村を

訪ねては、子供に勉強を教えたり、調合した薬を使って病人を治療したりして生計を立て

て生活していた。

夜、寝ていると彼女は何かの気配に気づいて目を覚ました。

水鏡

「……………何かしら？　今、物音が聞こえた

様な・・・まさか・・・泥棒？」

彼女は一瞬身震いするが、ここには貴重な薬草、そして最近入手したアレがある。

盗まれる訳にもいかないので、彼女は寝台から飛び起きると、すぐに貴重品がある

倉庫へと向かった。

倉庫内へと入った彼女は明かりを使って周りを見るが誰もいない・・・。

水鏡

「変ね？・・・気のせいだったのかしら・・・」

彼女は念のため、アレが入っている箱を探し出して、盗まれていないかを確認する。

水鏡

「良かった・・・無事ね・・・」

彼女は安心して小屋から出ようとしたその時・・・

タルボナイト

「グオオオオオオオオッ！」

水鏡

「きゃああああああああああっ！」

小屋から出た直後、目の前に怪物が現れ彼女は思わず悲鳴を上げる。

そして……

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギギイツ！」

覆面の男達も現れ、彼女の前に立ちはだかった。

タルボナイト

「お前が司馬 徽 徳操だなっ!？」

水鏡

「そ、そうですね、い、一体誰ですか？ 貴方はっ!？」

タルボナイト

「俺はタルボナイトだっ！ 水鏡先生 貴方が持っている『龍の牙』を

大人しく我々に渡していただきたい」

水鏡

「龍の牙……何の事ですか？」

タルボナイト

「惚けるな！ 貴様が最近龍の聖域の者より龍の牙を譲り受けたことは既に知っている！大人しく渡せ！」

タルボナイトが合図すると戦闘員は、彼女に迫ってくる。

水鏡

「えいつ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

このままではまずいと思った水鏡はとっさに一人の戦闘員に体当たりして、

隙を作るとそのまま屋敷から出て森へと逃げ出す。

タルボナイト

「ええいつ！ 逃がすな！ 追えッ！ 追えええっ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイッ！」

戦闘員は合図を受けると逃げる彼女を追い始めた。

水鏡

「ハアツ・・・ハアツ・・・ハアツ・・・ハアツ！」

彼女は後ろを振り返らず、止まらず必死に走り続ける。

もし、捕まれば龍の牙を奪われるだけでなく、自身の命もないだろう。

そして、怪人達をかなり引き離れた彼女は気づかれない様に、茂み

の方に隠れる。

隠れていると、そこにタルボナイトと戦闘員が現れた。

タルボナイト

「グオオオオツ！ 逃げ足の速い奴め！ 探せ！ 探すんだ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイツ！」

そしてタルボナイト達はそのまま行ってしまふ。

水鏡

「どうやら・・・逃げ切ったみたいね・・・あの化け物・・・この『龍の牙』を狙っていたみたいだけど、何でこれを欲しがっているのかしら？」

はっ！ そういえば、明日朱里と雛里が帰ってくるんだっただわ！

あの子達が危ない！」

水鏡はそういうと、朱里達がいる街まで走り出す。

翌朝、朱里と雛里は鈴々、一文字隼人に連れられて恩師である水鏡の所まで向かっていった。

た。

ちなみに義勇軍は董卓の乱で人々を救った功績で新しく皇帝となった献帝より、益州の

土地と兵を与えられそこに引越したばかりであった。



色々仕事があつたのだが、朱里、雛里は早めに仕事を終わらせ、  
一文字はこの

世界に来たばかりなのでまだするべき仕事が決まっておらず、鈴々  
は仕事を終える

と愛紗から「朱里、雛里が一度恩師の元へと報告に帰るそうだ。護  
衛としてついて

行け」と言われ一文字と一緒についてきたのである。

朱里

「　　水鏡先生に会うの久しぶりだね雛里ちゃん」

雛里

「うん・・・水鏡先生元気かな？」

鈴々

「そつえば、水鏡先生ってどんな人なのだ？」

朱里

「はいつ・・・水鏡先生は身寄りのない私達を引き取ってくれて、  
知識だけじゃなく  
愛情も与えてくれたんです。」

雛里

「そんな水鏡先生を私達は本当のお母さんの様に思っているんです。」

「

一文字隼人

「そうか・・・本郷から聞いたが、君達は軍略にかけては優秀らしいな？」

それは、その水鏡先生に教えられたことなのか？」

朱里

「はいっ！　いつか私達の知恵を世の中に役立たせたくて、水鏡先生に  
教えてもらっただんです。」

一文字隼人

「そうか・・・それにしても、いい天気だな」

鈴々

「本当なのだ！　本郷お兄ちゃんも桃香お姉ちゃんも愛紗も星も一緒に来れば良かったのに・・・」

朱里

「仕方ないですよ。ご主人様はお仕事が終わった後、治水工事の視察に出ましたし

桃香様はお仕事をサボって遊んでいた分、今日中にやらないといけない仕事がありますからね　それに愛紗さんは・・・」

その頃、益州の執務室

桃香

「ふえ〜ん！　こんなに仕事があるなんて思わなかったよ〜！」

桃香は山積みになっていた書類を一つ、一つ片付けていたが一向に終わらない。

桃香

「もう・・・ダ〜メ〜・・・ちょっと休まないと死んじゃう・・・  
・・・そうだ・・・こっそり遊びにいつて息抜きをしよう」と

桃香はそういうと机から離れて、音を立てないようにソロリソロリと扉の方まで向かい出ようとしたが

(ギイイイッ)

愛紗

「どちらにいかれるのですか桃香様？」

桃香

「あ、愛紗ちゃん!？」

何とそこには今日は休みのはずの愛紗がいたのだ。しかも青龍偃月刀を持って。

笑みを浮かべているが、明らかに怒っている顔で。

桃香

「ど、どうしたのかな？ 今日愛紗ちゃんお休みだったんじゃない・・・」

桃香は思わず冷や汗を流し、愛紗に訪ねると・・・

愛紗

「ご主人様に『桃香が仕事をサボって街へいくかもしれないから、終わるまで見張っていてくれ』って治水工事の視察に行かれる前に私に命じられたのです」

と彼女は答えた。ちなみにそう命じたのは前にも何回か仕事を

サボっていたからだ。

桃香

「そ、そんなご主人様の鬼〜！」

愛紗

「なにが鬼ですか！？ 桃香様が仕事をサボったせいで仕事の納期を何回遅らせなければならなくなったと思っっているんですか！ おかげで皆迷惑しているんですよ！」

桃香

「うっ！」

愛紗

「本来なら、桃香様一人に仕事をしてもらうところですが、もう時間も余りありませんので、私も手伝います。さあ、執務室に戻って下さい！」

桃香

「ふえ〜ん！」

桃香は愛紗に引つ張られ再び執務室に入り、仕事をするはめになった。

朱里

「今、愛紗さんは桃香様の見張り兼仕事の補助をしていますし、星さんは今日は新兵の軍事教練をする日ですからね」

鈴々

「それなら、仕方ないのだ」

雛里

「でもご主人様は治水工事の視察が終わったら、こっちにくるらしいですよ」

鈴々

「それは良かったのだ　それにしても一文字お兄ちゃん」

一文字隼人

「何だい鈴々ちゃん？」

鈴々

「お兄ちゃんもサイクロンを持っているのにどうして乗ってこなかったのだ？　鈴々、乗りたかったのに」

一文字隼人

「ああつ・・・あれに乗ってきたら朱里、雛里が置いてけぼりになるだろ？」

「だから乗ってこなかったんだ」

朱里

「そうですね……鈴々ちゃんだけサイクロンに乗せてもらおうなんて

不公平です!」

その時、彼らの前方から誰かが寝巻姿で走ってくるのが見えてくる。

しかも何やら慌てているように見える。

一文字隼人

「ん？ だれかくるぞ?」

雛里

「えっ？ あ、あれって?……」

朱里

「あっ!? す、水鏡先生っ!?!」

彼女達は前方から走ってくる女性を見て驚いた。何とそれは自分達の

恩師だったのだ。

朱里

「水鏡先生! どうしたんですか? そんな格好で!?!」

朱里は思わず彼女の元へとよろうとするが……

水鏡

「朱里、雛里? 来ちゃ駄目っ! 逃げてっ!」

雛里

「えっ!？」

水鏡が何故そう言ったのかと思ったその時

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギギイツ！」

(挿入曲：シヨツカー襲来！)

突如ゲルシヨツカー戦闘員と・・・

タルボナイト

「グオオオオオオッ！」

怪人が姿を現し、彼女達を取り囲んだ。

朱里

「ゲ、ゲルシヨツカー！」

水鏡

「しまった追いつかれたわ！」

タルボナイト

「追い詰めたぞ！水鏡先生ッ！ さあ、大人しく『龍の牙』を渡せ！」

水鏡

「お断りします！絶対渡しません」

タルボナイト

「グオオオオツ！なら、殺してでも渡してもらおう！　まずはこの小娘らからだ！」

一文字隼人

「そうはさせんぞっ！」

タルボナイト

「貴様は一文字隼人ツ！？　どうしてここにっ！？」

一文字隼人

「そんなのどうでもいい！　貴様もゲルショツカーか！？」

タルボナイト

「その通り！　俺は恐竜タルボサウルスとアンモナイトの化石から改造され

たタルボナイトだ！」

一文字隼人

「何ッ！？　タルボナイト！？」

タルボナイト

「俺はその女から『龍の牙』を奪えと指令を受けて行動している。邪魔をするな！」

一文字隼人

「『龍の牙』？　それは何だ！？」



タルボナイト

「貴様を知る必要はない！ かかれっ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

ゲルシヨツカー戦闘員は一斉に短剣を取り出すと、一文字に向かっ  
ていった。

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

一文字隼人

「ハアツ！」

（ドガッ！）

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ！」

一文字は戦闘員を殴り飛ばし短剣を取り上げると、襲い来る戦闘員を  
次々切り倒していった。

一文字隼人

「セアツ！ フンツ！」

（ズバツ！ズバツ！）

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイイイツ！」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイツ！」

一文字隼人

「ハアツ！」

（カキンッ！）

一文字は間一髪戦闘員の攻撃を受け止めると、鈴々に「う言っ。

一文字隼人

「鈴々ちゃん！今のうちにその人と朱里ちゃん、雛里ちゃんを連れて逃げる！」

鈴々

「分かったなのだ！」

鈴々が水鏡先生と朱里達を連れて逃げだそうとしたとき、目の前の戦闘員を払いの

け、タルボナイトと戦う為、変身することにする。

一文字隼人

「フンッ！」

（ピュイイン！）

彼は両腕を右の方向に水平に出し、ポーズをとる

そしてゆっくりと弧を描きながら、両腕を今度は左側に持って行って左手の拳を天に向け、右手を左に向け拳を握る。

そしてそれと同時に彼の腰に真紅のベルトが現れ

一文字隼人

「変・・・身ッ！」

するとベルトに描かれていたライダーマークのシャッターが開き

中から風車が顔を現した。

一文字隼人

「トオオッ！」

それと同時に彼は高く跳び上がり、ベルトの風車から出る凄まじいエネルギーを

浴びると仮面ライダー二号に変身して、着地した。

(ピュイン！)

鈴々は逃げている時、一文字が変身した姿を初めて見て、立ち止まる。

鈴々

「あれが一文字お兄ちゃんが変身した仮面ライダーなのか？」

鈴々が見た仮面ライダーは手袋、ブーツが赤であるのが特徴であった。

朱里

「鈴々ちゃん！ 逃げますよ！」

鈴々

「お、応なのだ！」

鈴々が再び逃げ始めると二号はタルボナイトと睨み合い始める。

仮面ライダー二号

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

タルボナイト

「グオオオオオツ」

まずは二号がタルボナイトに向かっていく。

仮面ライダー二号

「セアアアツ！」

（バキッ！ バキッ！）

二号は殴りかかるが

タルボナイト

「何だ？それで攻撃しているつもりか？」

なんと二号の攻撃は効いていないみたいだ

仮面ライダー二号

「何ッ!?!」

タルボナイト

「ホントの攻撃はこつやるんだ! グオオオオオッ!」

(ドゴンッ!)

何と二号ライダーは一撃のパンチで殴り飛ばされ木に叩き付けられた。

二号がぶつかった木々は衝撃でいくつも倒れてしまう。

仮面ライダー二号

「くっ!」

そして今度はアンモナイトの触手を伸ばしてきた。

仮面ライダー二号

「ハッ!」

二号は間一髪かわし、代わりにアンモナイトの触手は木々に絡みつき

木々は徐々に枯れ始めてしまう。どうやら養分を吸い取られてしまったようだ。

もし、これが命中していたら血液を吸い取られていたのかもしれない。

仮面ライダー二号

「危なかった……」

そして二号は再びタルボナイトに向かっていく。

仮面ライダー二号

「セアッ！ セアッ！」

二号はタルボナイトに蹴りで攻撃する。

（バシッ！ バシッ！）

タルボナイト

「グオオオオオオッ！」

若干効いているようだが、致命傷にはならなかった。

タルボナイト

「己っ！ライダー 焼け死ね！ グオオオオオオオッ！」

（ゴオオオオオオッ！）

今度はタルボナイトは口から火炎を吐き出し、二号に浴びせようとする。

仮面ライダー二号

「ハッ！」

何とかかわしたが、ダメージを受けずにすんだ。

そして、再びタルボナイトに向かっていくが、

タルボナイト

「グオオオオオッ！」

(バシッ！)

仮面ライダー二号

「グハアッ！」

何とタルボナイトは左に体を反転させ、アンモナイトの触手を鞭の様に振る舞い、

二号をはね飛ばした。

仮面ライダー二号

「くっ！　なんて力だ！　こいつ今までの改造人間とは違うっ！

これが恐竜の力を持った改造人間の力なのか！」

自分だけではこの怪人に勝てない。そう判断した二号は鈴々達が

充分安全な所に逃げたのを確認するとそろそろ頃合いだと判断し、

撤退することにする。

仮面ライダー二号

「来いっ！　サイクロン！」

ライダーはベルトにあるダイヤルを回すと

(ポンッ！)

そこにサイクロンが姿を現す。

仮面ライダー二号

「トオオッ！」

二号はジャンプするとサイクロンに飛び乗った。

タルボナイト

「逃げるかライダー！」

仮面ライダー二号

「逃げるのではない！ 戦略的撤退だ！ もうあの子達も逃げ切ったしな！」

タルボナイト

「何ッ！？ しまった おとりだったか！」

タルボナイトは戦うのに夢中で肝心の水鏡を逃がしてしまったことに気づく。

仮面ライダー二号

「次は必ず貴様を倒す！ そして『龍の牙』は何か分からんが貴様らには

絶対渡さん！」

二号はそういつとサイクロンを朱里達が逃げた方向まで走らせる。

(ビュオオオオオオオ！)



タルボナイト

「己っ！ 陽動だったとは！ 覚えている二号！」

タルボナイトはそう叫ぶが既に二号の姿も確認できなくなっていた。

その頃、朱里達は必死に益州まで走っていた。

朱里

「ハアッ！ ハアッ！ が、頑張ってください！水鏡先生！ もうすぐ益州です」

水鏡

「ええっ・・・ありがとうね。二人とも・・・  
ええっとそっちの子は？」

鈴々

「自己紹介は後なのだ！」

水鏡

「そっね。今は逃げるのが先決ね」

鈴々

「あっ！ あそこに人がいるのだ！」

鈴々は目の前に歩いている黒いマントらしき物を羽織っている老人が

いるのに気づいた。

雜里

「あのお爺さんが歩いている方向は怪人がいる方向です。止めないと！」

朱里

「すいませ〜ん！ そのお爺さ〜ん！」

朱里に呼び止められるとその老人は歩くのを止め立ち止まる。

死神博士

「フフフフフフフフ……」

朱里

「……！」

朱里、雛里、鈴々、水鏡は思わず言葉を失う。その老人からは生気が感じられず

まるで死人の様な雰囲気漂ってきた。

死神博士

「何か……ご用かな？ お嬢さん方……」

死神にそう言われた瞬間、朱里は本能的に危険を察知し、雛里、鈴々の手を

とると

朱里

「（ゾクッ！） い、いいえっ！ 何でもありません！ 失礼しました！」

水鏡先生！　行きましょう！」

水鏡

「ええっ！」

彼女も本能的に何か危険を察知したのか、そのまま走り去ってしまった。

そしてその老人に見えないところまでいくと、鈴々はこう言った。

鈴々

「さっきのおじいちゃん　もの凄く不気味だったのだ！」

朱里

「鈴々ちゃん、ちょっと失礼でしょう……でも確かに不気味だったね

まるで、死人にでも遭遇したような……」

雛里

「それにあの人……どこかで見たような気がします。」

雛里は前にゲルシヨツカーに誘拐されていたとき、死神博士の

顔を見ていたが、誘拐されたショックではつきり思い出せないでいた。

朱里

「それよりも、早く益州に行きましょう！　そしてこの事を  
ご主人様に報告するんです！」

鈴々

「合点なのだ！」

そして彼女達が益州まで戻っていた時、彼女達が逃げた方向を見た死神博士は

タルボナイトに指令を出していた。

死神博士

「タルボナイトよ・・・タルボナイトよ・・・あの小娘達はあの女を連れて益州まで向かった。ただちに追跡し、必ず龍の牙を手に入れるのだ！」

死神は通信機でタルボナイトに指令を送る。

タルボナイト

「分かりました。死神博士 タルボナイトの名にかけて必ず龍の牙を手に入れて見せます」

そして、タルボナイトは逃走した朱里達を追って益州まで向かい始めるのであった。

果たして、ゲルショッカーが狙う龍の牙とは一体何か！？

(ル・ル・ル〜ルルルッ！『アイキヤツチ 新一号&新二号』)

蘇った化石怪人 タルボナイト (前編) (後書き)

次回、龍の牙の正体が明らかにつ！

蘇った化石怪人 タルボナイト (中編) (前書き)

新年明けましておめでとございます。今回、龍の牙の正体が遂に明らかにつ！

後、ヒルカメレオンも若干ですが出演しています。

蘇った化石怪人 タルボナイト (中編)

(ル・ル・ル〜ルルルッ！『アイキャッチ 新一号&新二号』)

そして益州の城、執務室。治水工事の視察を終えた本郷が朱里、雛里達の元へと向かおう

としたその時、朱里、雛里、鈴々が息を切らしながら見慣れない寝巻姿の女性を連れて執

務室に入ってきた。

本郷猛

「どうしたんだ朱里、雛里、鈴々。そんなに慌てて・・・それにそちらの方は？」

朱里は息が切れかけながらも、本郷にこういう。

朱里

「ご主人様・・・ゲ、ゲルシヨツカーの怪人が・・・ハア・・・ハア・・・」

本郷猛

「何ッ？ 今そいつはどこにいる!？」

鈴々

「一文字のお兄ちゃんが足止めしているのだ。 おかげで逃げることができたのだ」

その時、一文字隼人が部屋に入ってきた。

一文字隼人

「やあ、皆無事か？」

本郷猛

「一文字、無事だったか」

一文字隼人

「ああ・・・敵はタルボナイトという改造人間だ」

本郷猛

「タルボナイト？・・・」

一文字隼人

「奴は恐竜タルボサウルスと海にいたアンモナイトの化石から改造された改造人間だ 恐竜の力をもっているだけに今までの改造人間とは桁外れに強い」

本郷猛

「ゲルシヨツカーめ・・・そんな恐ろしい改造人間まで作ったのか？」

その時、鈴々が二人の間に割って入ってきた。

鈴々

「はいっ！本郷お兄ちゃん」

本郷猛



「何だ鈴々？」

鈴々

「きょうりゆうって何なのだ？ それに化石って？」

本郷猛

「そうか・・・この時代はまだ、恐竜と化石のことは知られていないから知らないのも当然だな。恐竜というのは人間が生まれるずっと大昔、この世界で生きていた巨大なトカゲ達の事だ。そして化石とは大昔の動物の骨や植物が長い間土に埋まっていたことで石になったものだ」

雛里

「巨大なトカゲ？」

本郷猛

「トカゲって言っても、今生きている生き物達のように植物を食べるもの、他の恐竜を襲って食べるもの。子を育てる者、群れで暮らすもの、空を飛ぶもの。小さい体を持つ者がいれば、逆に巨大な体を持つ物までいて、かつては人間よりずっと長くこの世界で生きていたんだ。」

鈴々

「ふん・・・？」

・ 鈴々はまだ良く分かっていない顔をしたので本郷はしかたなく・・・

本郷猛

「恐竜を絵で描くとこんな感じになる・・・」

と貴重な紙と墨と筆で様々な恐竜の絵を描く。本郷の描いた絵には  
ティラノサウルス（ゴ

ジラスタイル）、トリケラトプス、ブロントサウルス、ステゴサウ  
ルス、プテラノドン、ア

ロサウルス（ゴジラスタイル）・・・

など様々な種類の恐竜の絵を描き、鈴々達に見せると・・・

鈴々

「か、格好いいのだ！ とくにこのティラノなんか・・・」

鈴々は子供らしくティラノの魅力に惹かれ

朱里

「はわわっ！？ ほ、ホントにこんな生き物が昔いたんですか!？」

朱里は自分も知らない動物がいた事に驚く。

雛里

「あわわ・・・こ、怖いです」

雛里は恐竜の恐ろしさに思わず震え出す。

それぞれ、子供らしい反応をみせた。ちなみにゴジラスタイルとは

直立姿勢の事であり、本郷のいた1971年から1990年代まで

はティラノなどの肉食恐竜は

この姿勢であると考えられていたのだ。

本郷猛

「ハハハツ……子供らしい反応だな」

一文字隼人

「それよりも本郷。気になるのはそのタルボナイトが狙っている」  
龍の

牙』だ」

本郷猛

「龍の牙？」

一文字隼人

「ああっ……この女性が持っている……紹介が遅れたが、この人が朱里ちゃんと雛里ちゃんの恩師水鏡先生らしい」

すると、水鏡先生は立ち上がり、本郷と一文字に丁寧に挨拶するとこういう。

水鏡

「はじめまして私は水鏡です。朱里、雛里から聞きましたが、あなた  
たが  
天の御遣い様ですね？」

本郷猛

「はい……私の名前は本郷猛。人々からは天の御遣いと呼ばれて

います」

一文字隼人

「そして、俺は一文字隼人。本郷と同じく天の国からやってきました。」

水鏡

「まあ・・・それより、先ほど危ないところを助けて頂きありがとうございます。おかげでこの子達も、この『龍の牙』も無事です。」

水鏡は木の箱を本郷達に見せる。恐らくその中に龍の牙があるのであろう。

本郷猛

「話して下さい。『龍の牙』とは何なんですか？」

水鏡

「はい・・・『龍の牙』とは以前龍の聖域を守るある人物の子供が病気になるたとき

私が調合した薬で治した時、お礼として譲り受けた物なんです。何でもかつてこの世

界を支配していた龍の王の牙で、自分の一族はこの牙を魔除けとして使っていると

か・・・」

本郷猛

「見せてもらってもいいですか？」

水鏡

「ええっ・・・いいですよ」

水鏡は箱を開けると、今度は布で包まれた何かが出てきた。彼女が布をほどくと

(シユルルル！)

本郷猛

「なっ!?!」

一文字隼人

「こ、これは!?!」

その牙を見た彼らは驚く。なぜなら、

本郷猛

「この大きさ……この形……これは……ティラノサウルスの牙だ!」

一文字隼人

「奴ら、これを狙っていたのか!」

鈴々

「ティラノなんとかって……お兄ちゃんが描いたこのきょうりゅうのことなのか?」

鈴々は本郷が描いたティラノの絵を指さした。

本郷猛

「ああ……そうだ……そうか……奴らの狙いが分かった」

一文字隼人

「だとしたら、これが奴らに奪われたら大変な事になるぞ」

朱里

「あの・・・何でそんなに慌てているんですか？」

本郷猛

「実はな・・・ティラノサウルスは今俺が描いた絵の中・・・いやあらゆる

動物の中で最強だと言われているんだ」

一文字隼人

「奴らはきつとこの龍の牙・・・もとい『ティラノサウルスの牙』で改造人間を作るつもりだ たたであえ、タルボナイトに手こずったのにティラノの改造人間が作られたら俺達でも勝てるか分からない」

朱里

「ええっ!?!」

朱里はこの言葉に驚いた。今まで怪人に勝ってきた彼らがそういつたのだから。

本郷猛

「それだけじゃない・・・この龍の牙の正体がティラノサウルスの牙なら龍の聖域も

恐らく恐竜の化石が多く眠る場所の事はず ゲルシヨッカーはそこも狙っている

かもしれない。そうなったら化石怪人がまた作られてしまう しかも大量に・・・」

本郷から事の重大さを聞かされた彼女達は青ざめた表情になり……

雛里

「あわわっ！ た、大変です〜！」

朱里

「光景を想像するだけでも恐ろしいですよ〜！」

二人は本当に化石怪人が大量に生み出され、街を襲撃する想像をしてしまい

慌てだし

水鏡

「何てことなの！？ 魔除けとしていただいた物なのに、こんな事になるなんて……」

水鏡は龍の牙を持っていた事を後悔しはじめる。しかし、鈴々だけは

鈴々

「落ち着くのだ！ なら、龍の牙が奪われないようにすればいいだけの話なのだ！」

といい彼女達を落ち着かせる。

本郷猛

「そうだ鈴々の言うとおりだ。水鏡先生 貴方に非はありません。自分を責めないで

下さい。俺達がいる限り『龍の牙』は絶対ゲルショッカーに渡した

りはしません」

一文字隼人

「それには益州の城の中です。うかつにあんな目立つ姿で敵の中に忍び込むほど奴らは馬鹿じゃありませんよ。ここにいる限り安全です」

水鏡

「ありがとうございます。お二人の言葉で少し安心しました」

本郷猛

「では今日はここに泊まっていって下さい。ゲルシヨツカーが貴方とこの子達を狙っている可能性があります」

水鏡

「・・・ではお言葉に甘えさせていただきます」

こうして、水鏡は安全のため、今日はこの城に泊まることになった。

この様子をタルボナイトがかなり離れた場所から双眼鏡を使って

見ていたと知らずに・・・

タルボナイト

「ガアアアアア・・・本郷猛、一文字隼人め 出張りおって・・・

龍の牙は必ず我々が頂く。だが、奴らの言つとおりこんな目立つ姿ではすぐに

見つかってしまう・・・そうだ俺にはこの方法があった！」



そういうとタルボナイトは近くにいた兵の前に姿を現す。

タルボナイト

「ガアアアアアッ！」

蜀軍兵士A

「ば、化け物！」

タルボナイト

「貴様の体を貸してもらっぞ……」

タルボナイトはそういうと触手を使って兵士を捕まえる。

蜀軍兵士A

「うわああああっ！」

するとタルボナイトは男に取り込まれるかのように、その体が段々見えなくなっていく。

しばらくすると、そこには蜀軍兵士A？しかいなかった。ただし、先ほどとは違い肩に

アンモナイトを乗せている。

蜀軍兵士A？

「ふふふふ……これで、奴らの城に堂々と入り込めるぞ。それにこの男の今日の勤務は夜からだ。俺はついているぜ」

そして夜……

桃香、愛紗が必死に仕事をしている時彼女達と夜勤の兵士以外は眠りについていた。

それをいいことに・・・蜀軍兵士A？は堂々と城の中を探り、龍の牙を探し出すが

中々見つからない。

蜀軍兵士A？

「くそっ・・・あいつらどこに龍の牙を隠した？早くしないと、余り時間がない」

そして一つの部屋の前に立った彼はその部屋をのぞくと、そこには何と水鏡が寝てい

たのだ。

そして偶然彼女を発見した蜀軍兵士A？は通信機で死神博士、ブラック將軍に連絡する。

蜀軍兵士A？

「タルボナイトより、死神博士、ブラック將軍へ・・・、タルボナイトより、死神博士、ブラック將軍へ・・・」

そして彼の通信にブラック將軍が答える。

ブラック將軍の声

「タルボナイトか・・・どうだ龍の牙を手に入れたか？」

蜀軍兵士A？

「申し訳ございませんブラック將軍。龍の牙はまだですが、代わりに水鏡先生を見つけました」

ブラック將軍の声

「なら、その女を拉致せよ。そうすれば、奴らも龍の牙をその女の命と引き替えに渡すはずだ」

蜀軍兵士A？

「なるほど……ではさっそく……」

その兵士は通信を切ると、その部屋に入り寝ている水鏡に近づく。

そして起きないように睡眠ガスを彼女の顔に吹き付ける。

(シュツ！)

ガスを吹き付けた後、ガスが効いているか確認するため、

耳元で指を鳴らしてみた。

(パチンツ！)

水鏡

「スー……スー……」

反応がない。

そして彼女をさらおうとしたその時

(ピッカー・・・)

部屋が不気味な赤色に輝きだし、光り輝く方を見ると、そこには目を赤く輝かせる

仮面ライダー一号がいた。

蜀軍兵士A？

「ほ、本郷様!？」

仮面ライダー一号

「人間に化けて水鏡先生をさらおうとした事は既に想定していたことだ

ゲルシヨツカーの改造人間!」

蜀軍兵士A？

「な、何の事ですか？ 私は唯、水鏡先生の様子がお変わりないか様子を見ようとしただけで・・・」

仮面ライダー一号

「俺は今日ここに水鏡が来ているとは兵士達には一言もいっていない」

蜀軍兵士A？

「えっ?」

仮面ライダー一号

「今みたいに兵士に化けて、水鏡先生をさらおうとした可能性があ

つたからな  
さあ、正体を現せ！」

蜀軍兵士A？

「ちっ！ こちらの考えはお見通しだったわけか！  
いいだろう 正体を見せてやる！」

するとその兵士についていたアンモナイトが離れ、兵士が倒れこむと同時に

タルボナイトになった。

タルボナイト

「ガアアアアッ！」

仮面ライダー一号

「お前がタルボナイトか！？」

タルボナイト

「その通りだ仮面ライダー一号！ 二号を圧倒させた俺の能力を見せてやる！」

仮面ライダー一号

「何っ！？」

タルボナイト

「ガアアアアアッ！ ついてこい仮面ライダー！」

タルボナイトはそういうと外に迎え、ライダーも彼の後を追った。

そして城から離れた庭

タルボナイトと仮面ライダー一号は互いににらみ合う。

仮面ライダー一号

「・・・・・・・・」

タルボナイト

「ガアアアッ！」

そしてタルボナイトから一号に向かっていった。

タルボナイト

「グオオオオッ！」

仮面ライダー一号

「何ッ!?!」

(ドゴオオオオオオオン！)

とっさに腕をクロスさせ、攻撃を防ぐが衝撃が体に伝わる。

仮面ライダー一号

「くっ！」

タルボナイト

「グオオオオオオッ！」

一瞬怯むが、ライダーは体制を立て直しタルボナイトに向かっていった。

仮面ライダー一号

「トオツ！ トオツ！」

タルボナイト

「ガアアアッ！」

タルボナイトに鋭い蹴りを入れていき、ダメージを与えていく。

しかし・・・

タルボナイト

「ガアアアアアアッ！」

仮面ライダー一号

「んっ!？」

次の蹴りを受け止められ、そして

タルボナイト

「グオオオオオツ！」

仮面ライダー一号

「グハアッ！」

右手の触手ではね飛ばされてしまった。

仮面ライダー一号

「くっ！ なんて力だ 確かに一文字の言っどおり並大抵の力ではない」

タルボナイト

「グオオオッ！ ようやく理解したか仮面ライダー！」

仮面ライダー一号

「私一人ではこいつには勝てないか・・・」

タルボナイト

「そっだ 貴様はここで倒してやる 俺に一人で戦いを挑んだ事を後悔するが

いい・・・」

仮面ライダー一号

「私一人ではな？・・・」

タルボナイト

「グオオオッ！？ どういう意味だそれは！？」

仮面ライダー二号

「こっついう意味だ！」

何と二号が二人の横から現れ、そして

仮面ライダー二号

「トオオッ！」

高く跳び上がると

仮面ライダー二号

「ライダー・キイイイイイック！」



(ドゴンッ！)

タルボナイト

「グオオオオオオンッ！」

タルボナイトをライダーキックではね飛ばすとすぐさま一号のもとによる。

仮面ライダー二号

「本郷、大丈夫か！？」

仮面ライダー一号

「ああ大丈夫だ・・・」

仮面ライダー二号

「やはりお前の読み通り、人間に化けてきやがったな 全く無茶しやがるぜ

・・・たった一人だけでタルボナイトを待ち伏せして」

仮面ライダー一号

「すまん・・・だが、二人同時に動けば奴に気づかれ逃げられる恐れもあつたんだ

だから油断しているフリをする必要があつた」

タルボナイト

「俺が逃げる？・・・ふざけるな！」

何と二号のキックを受けたタルボナイトが起き上がってきた。まるで何もなかったかの

ように……

タルボナイト

「俺様はかつてこの大陸を支配したタルボサウルスの力を持った改造人間だ！

貴様らごときに負けてたまるかっ！」

今度はタルボナイトは凄まじい殺気を二人に放つ。

仮面ライダー一号

「凄まじい闘気だ……」

仮面ライダー二号

「かつて王者だっただけに、プライドも高いという訳か」

仮面ライダー一号

「だが、私達も負けるわけにはいかないっ！」

仮面ライダー二号

「ああっ……そうだな！」

二人のライダーがタルボナイトに向かおうとしたその時

ヒルカメレオン

「キエエエエエエッ！　そこまでだ！」

突如、声がした方をみるとそこには見たこともない怪人が

水鏡先生を抱えていた。

タルボナイト

「あなたはヒルカメレオン！」

タルボナイトが敬語を使った事からどうやら、この怪人はタルボナイトより

階級が上らしい。

仮面ライダー一号

「貴様は何者だ!?!」

一号はヒルカメレオンに向かってこう叫んだ。正体はブラック將軍だが

まだ彼らはこの時ブラック將軍の正体を知らなかったのだ。

ヒルカメレオン

「そうか・・・そういえば、まだ貴様らは俺の事を知らなかったな俺の名はゲルシヨツカーの怪人吸血ヒルカメレオンだ!キエエエツ!」

仮面ライダー二号

「ヒルカメレオン!?!」

ヒルカメレオン

「そうだ!」

仮面ライダー一号

「いつからそこにいた!?! そしていつの間に、水鏡先生をさらっ

「たんだ！」

ヒルカメレオン

「貴様達が出て行った後すぐにだ！」

仮面ライダー一号

「何っ！馬鹿な！あの場には俺とタルボナイト以外、誰も……」

ヒルカメレオン

「俺には体を見えなくする能力があるのだ！

その能力を使って隠れていたのだ！このようにな」

（シュウウウウウン……）

ヒルカメレオンは一瞬姿を消すと、再び姿を現す。

ヒルカメレオン

「キエエツ！」

仮面ライダー一号

「そんな能力があるのか？」

ヒルカメレオン

「行くぞタルボナイト……水鏡は我々の手中にある」

タルボナイト

「分かりました……グオオオオオツ」

タルボナイトは空中で反転ジャンプしてヒルカメレオンの側まで寄った

ヒルカメレオン

「行くぞ……」

仮面ライダー一号

「待て逃がすかつ！」

ライダーはとつさに追おうとしたが、

ヒルカメレオン

「やはりおつてくるか……貴様らはこれでも相手にしているっ！」

(バラランッ！ バラランッ！)

ヒルカメレオンは右手から何かをばらまき出す。よくみるとそれは

仮面ライダー一号

「ヒ、ヒル？」

なんと巨大なヒルであった。しかも無数にいる。

ヒルカメレオン

「キエエエッ！ それは人間の血を根こそぎ吸い尽くす吸血ヒルだ  
早く始末しないと

寝ている人間どもの血が吸い尽くされるぞ」

仮面ライダー二号

「何だどっ！？」

ヒルカメレオン

「今俺達を追うか、ヒルどもを始末するかどっちを選ぶかな？  
ハッハッハッハッハッ……」

ヒルカメレオンはそういうとタルボナイトごと姿を消してしまふ。

仮面ライダー二号

「まずいぞ！どうする本郷！？」

仮面ライダー一号

「決まっている！吸血ヒルを先に始末するんだ！ 寝ている人々に  
犠牲を

出すわけにはいかないっ！」

仮面ライダー二号

「そうだな！ 行くぞっ！」

仮面ライダー一号

「おおっ！」

そういうとダブルライダーは、吸血ヒルを始末するために、向かっ  
ていき

一つ、一つ、処分していった。

果たして捕らわれた水鏡先生の運命はっ！？

蘇った化石怪人 タルボナイト (中編) (後書き)

次回、ダブルライダーは捕らわれた水鏡をどうやって助け出すのか！？

蘇った化石怪人 タルボナイト (後編) (前書き)

果たして、仮面ライダーはどうやって水鏡を救うのか!?  
そして今回タルボナイトの意外な弱点が明らかになっ!



蘇った化石怪人 タルボナイト (後編)

そして翌日、目を覚ました朱里達は外の光景を見て驚いていた。

見たことのない大きさのヒルを次々仮面ライダーがつぶしていたのだから。

朱里

「はわわわっ!? なんなんにしゅかこれは?」

そして、一匹のヒルが朱里達に襲い掛かろうとしたとき

仮面ライダー一号

「トオッ!」

(ドゴンッ!)

雛里

「あわっ!?!」

間一髪最後のヒルを殴り潰し、朱里達を守った。

朱里

「はわわ・・・はわわわ・・・」

彼が殴った地面は陥没しており、驚いた朱里は思わず腰を抜かしてしまっ。

仮面ライダー一号

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

ずっとヒルを処分していたから、若干息が上がっていた。

そして、執務室。吸血ヒルの死骸を月と詠、兵士達が片付けていた頃

本郷、一文字は皆に今朝の事情を説明して、そして朱里、雛里に

土下座をして謝っていた。

本郷猛

「すまん朱里、雛里！ 守るといつておきながらお前達の恩師をさらわれてしまった！ 弁解の言葉もないっ！」

一文字隼人

「俺も謝る。 本当に申し訳ない！」

彼女達は彼らのしていることに動揺している。仮にも国で一番偉い立場の二人が家臣

である自分達に頭を下げたのだから。

朱里

「そ、そんな。 ご主人様、一文字様 頭を上げて下さい。 貴方達を攻めるつもりはありません。 それにご主人様達の判断は正しかったと思いますよ。 もしその・・・吸血ヒルを処分しなかったら、誰かが死んでいたでしょう」

鈴々

「そうなのだ！ 悪いのはそのヒルカメレオンって奴なのだ！」

雛里

「それに今は水鏡先生を助ける方が先だと思われます」

この時、本郷の命で桃香を見張っていた愛紗もこう言っている。

愛紗

「私達が知らないところでそんな事があつたなんて・・・  
何故一言相談してくれなかつたんですかご主人様！」

本郷猛

「奴らが俺達の信頼している人間に化け、侵入してくる恐れがあつた。」

だから愛紗達にはあえて何も話さなかつたんだ。」

その時、窓から何かが飛んでくるのに本郷が気づく。

本郷猛

「危ないっ！」

すると外から窓に何かが飛び込んできて、その場にいた物は全員はとっさに避けた。

本郷は外から飛んできた物を見るとそれは紙がついたナイフであつた。

本郷猛

「ナイフだ・・・」

桃香

「ないふ？」

本郷猛

「短剣の事だ……」

するとそのナイフから何か声が聞こえてくる。

死神博士の声

『諸葛亮孔明、鳳統土元に告ぐ……』

それは朱里、雛里に当てた死神博士からのメッセージだった。

本郷猛

「この声は死神博士っ！」

桃香

「えっ？ それってご主人様が言っていたショッカーの大幹部の？」

本郷猛

「そっだ……」

死神博士

『お前達の恩師水鏡は我々が預かっている。返してほしければ、龍の牙を夕方、益州の荒野まで持ってこい。持ってこなかった場合、水鏡先生の命は保証しない……』

死神からのメッセージはそれだけいうと、そのまま何も聞こえなくなってしまう。

一文字はとっさにナイフについていた紙をとると、それは龍の牙を

持つて行く

正確な場所が印された地図だった。

一文字隼人

「くそつ！ 朱里ちゃん、雛里ちゃんの恩師の命と引き替えに『龍の牙』を渡せつてか？」

悪魔め！」

本郷猛

「水鏡先生を見捨てるわけにはいかないが、『龍の牙』も渡すわけにはいかない。

そんな事をしたら、俺達も敵わない改造人間が作られ、そして龍の聖域にある化

石が奴らの物になってしまう」

朱里

「そ、そんな……ではご主人様は水鏡先生を結局見捨てられるのですか!？」

本郷猛

「そうはいつていない。それに奴らは約束を守るような輩じゃない。きつと利用価値がなくなったら、朱里、雛里、そして水鏡先生を殺す気だ」

一文字隼人

「死神博士はショツカーの大幹部の中で最も残忍な奴だ 本当にやりかねん」

一文字がそういうと、その場は静かになる。

本郷猛

「とにかく、何か策があればな……せめてタルボナイト・奴の弱点が分かれば……」

一文字隼人

「そうだな……恐竜とアンモナイトの化石から改造された奴をどっすれば

……ん？ 待てよ？ 化石？……そうだ！」

一文字は何か思いついたのか、突然大声を上げる。

本郷猛

「どうした一文字？ 何か思いついたのか？」

一文字隼人

「ああつ……もしかしたら奴の弱点はアレかもしれない」

本郷猛

「アレ？」

一文字隼人

「前にもシヨツカーの改造人間にユニコルノスという化石怪人がいただろ？」

奴の弱点は何だったと思う？」

本郷猛

「えっ？……ああっ！ アレか！」

本郷はその弱点が何か分かったのか、思わずポントと手を叩いた。

桃香

「あの〜……その弱点って何なんですか？」

本郷猛

「ああっ……それはな……」

本郷はその弱点について話す。それは生物が生きる上で必要な物であつた。

星

「それが弱点とは信じられません……」

一文字隼人

「だが試してみる価値はある。もう夕方まで時間がない」

本郷猛

「それでだ……朱里、雛里には俺が昨日のうちに作ったこれをもつて

奴らの所までいってもらう」

本郷猛は徐に机から何かを取り出してそれを置いた。

朱里

「はわわっ!?!? こ、これって……」

雛里

「これをもつていくんですか？」

本郷猛

「ああっ・・・そして桃香、愛紗、鈴々、星・・・」

桃香

「何でしょうか？」

本郷猛

「君達には奴の弱点かもしれないアレを用意してある地点で待機してもらおう」

愛紗

「その地点とは？」

本郷猛

「ここだ・・・」

本郷は地図を指さした。そこは水鏡が捕らえられていると思われる場所からさほど

遠くはない場所であった。

愛紗

「分かりました。ではそこで待機します」

本郷猛

「よしっ！ さっそく行動開始だ！」

桃香

「はいっ！」



愛紗

「御意！」

鈴々

「応なのだ！」

星

「はっ！」

朱里

「御意です」

雛里

「はいつ」

そして、夕方益州の荒野まで来た朱里、雛里は例の物を持って水鏡  
がいると思われる

地点まで来た。

そこには誰もいないが、朱里はこう叫んだ。

朱里

「死神博士！ 諸葛亮孔明と鳳統土元です！ 要求通り『龍の牙』  
を持ってきました！  
姿を見せて下さい！」

するとその場には見覚えのある老人とみたことのない服を着て、兜  
をかぶり鞭を持った

男がいた。

そして、水鏡は十字架に縛り付けられていた。

死神博士

「フフフ・・・また・・・会ったな・・・お嬢さん方」

朱里

「はわわっ！ あの時のお爺さん！」

雛里

「もしかして・・・あなたが・・・」

死神博士

「その通り・・・儂が・・・死神博士だ」

ブラック將軍

「そして我が輩の名はブラック將軍だ 以後お見知りおきを・・・」

水鏡

「朱里、雛里！ 何で来たの！？ 私の事はいいから早く逃げなさい！」

ブラック將軍

「黙れっ！」

（ビシッ！）

水鏡

「きゃあー！」

ブラック將軍は抵抗が出来ない状態の水郷を鞭ではたいた。

朱里

「水鏡先生っ！」

朱里は思わず、よりたくなるが、ブラック將軍に阻まれる。

ブラック將軍

「動くな！ この女を返して欲しければ、『龍の牙』をそこにおけ  
！」

朱里

「じゃあこつちもお願いがあります。龍の牙を渡して欲しかったら  
水鏡先生を  
自由にして下さい！ 先生との交換で『龍の牙』を渡します。それ  
ができない

なら、『龍の牙』はここで破壊します！」

ブラック將軍

「何だと!？」

ブラックは彼女達のいう事に驚いていた。どうやらこちらの考えて  
いることはお見通しだ

ったようである。

朱里

「どうしますか？ 私達が『龍の牙』を破壊すれば、水鏡先生を助  
ける手段を失いますが貴方達も改造人間を作れなくなりますよ！」

ブラック將軍

「くっ……！」

死神博士

「……いいだろう……」

ブラック將軍

「し、しかし……死神博士っ！」

死神博士

「かまわん……水鏡先生を放してやれブラック將軍」

ブラック將軍

「はっ！」

ブラック將軍はそういつと十字架に縛られていた水鏡を解放し、そして少し手前

まで近づいた。

ブラック將軍

「要求通り水鏡は放したぞ。今度は貴様らの番だ！」

朱里

「分かっていますよ」

朱里、雛里はそういつと手前まで近づき、朱里達は龍の牙を、ブラック將軍は

水鏡を差し出した。

ブラック將軍は『龍の牙？』を手に入れると、そこから離れそして朱里、雛里は

水鏡によつて泣きじゃくる。

朱里

「水鏡先生〜！ 良かったです本当に良かったです〜 うえええん！ ひつく ひつく〜！」

雛里

「水鏡先生〜！」

水鏡

「朱里、雛里……ゴメンね……私のために……」

水鏡は思わず彼女達を抱きしめる。本当は彼らが怖かったのだろう。しかし、自分を助けるためにあえてそれを我慢していたのだ。

それを悟った彼女は二人を抱きしめる。その光景はまるで本当の親子のようにも

見えた。

そんな時ブラック將軍から龍の牙を受け取った死神博士はタルボナイトを呼ぶ。



やれタルボナイトッ！」

タルボナイト

「グオオオオオッ！」

タルボナイトが彼女達に向かっていったその時

一文字隼人

「セアッ！」

タルボナイト

「グオオオオオッ!?!」

間一髪、一文字隼人が割って入ってきてタルボナイトを殴り飛ばした。

死神博士

「己ッ一文字隼人！ 邪魔をするか！」

一文字隼人

「俺だけじゃないぜ！ そして死神博士！ お前の持っている龍の牙をよく見る！」

死神博士

「な、何ッ!?!」

死神は龍の牙をよくみると、石と言うより金属のような感じがあり、そして中からは……

（チクタク……チクタク……）

死神博士

「ま、まさか・・・爆弾!？」

一文字隼人

「今だ本郷!」

本郷猛

「おおっ!」

本郷への合図を聞いた死神はとっさに危険を察知し、偽龍の牙を空に投げ飛ばした。

死神博士

「くっ!」

(ブンッ!)

爆弾は空に投げ飛ばされたのと同時に

(ドドオン!)

爆発し、同時にその場に本郷猛も姿を見せ、水鏡、朱里、雛里の

前に立った。

本郷猛

「残念だったな。死神博士　今のは俺が昨日のうちに作り上げた偽物だ!」

こんな事もあるつかと朱里達には偽物を持たせていたのだ!」



死神博士

「何だとっ!?!? なら本物の『龍の牙』はどうした!?!?」

一文字隼人

「本物は悪用できないように完全に破壊し、海に捨てた!」

ブラック將軍

「何ッ!?!?」

本郷猛

「悪の野望のために使われようとしたものなぞ、最初からないほうがいいんだ!」

死神博士

「己っ……こうなれば!」

(パチンッ!)

死神博士が指を鳴らすと、その場に戦闘員が姿を現し、本郷、一文字を取り囲んだ。

ブラック將軍

「行けっ!」

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイツ!」

戦闘員はブラック將軍の合図で本郷、一文字に向かっていくが

本郷猛

「行くぞ一文字ッ！」

一文字隼人

「おおっ！」

本郷の合図で本郷は朱里、雛里を一文字は水鏡を抱えると、高くジャンプ

して戦闘員の襲撃をかわした。

本郷猛、一文字隼人

『トオオッ！』

朱里

「はわわっ！？」

雛里

「あわわっ！？」

突然の事で彼女達は本郷があり得ない高さまでジャンプしたことに驚き

そして彼女達を安全な場所まで連れて行くと変身の為のポーズをはじめ。

本郷猛、一文字隼人

『フンッ！』

(ピュイイイン！)

本郷猛

「ライダー……」

一文字隼人

「変身っ！」

本郷猛

「変身っ！」

彼らの腰にベルトが現れ、一文字のベルトのシャッターが開くと、二人は同時に

跳び上がる。

本郷猛、一文字隼人

『トオオオオオオオオッ！』

それぞれベルトから発する凄まじい光が彼らを包み込み、本郷を仮面ライダー一号

に、そして一文字を仮面ライダー二号に変えて、変身した二人が着地してきた。

(ピュイイイイン！)

(ピュイイイイン！)

(挿入曲：レッツゴー！ ライダーキック)

仮面ライダー一号

「朱里、雛里っ！ 水鏡先生を連れて逃げろっ！」

朱里

「御意です！」

仮面ライダー二号

「行くぞ本郷ッ！」

仮面ライダー一号

「おおっ！」

二号の合図で、一号も戦闘員に向かっていく。

仮面ライダー一号

「トオッ！ トオッ！ トオッ！」

（バキッ！ バキッ！ ボゴッ！）

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイッ！」

一号に挑んだ戦闘員は連続で殴られ、そして蹴り飛ばされる。

仮面ライダー二号

「セアッ！ セアッ！ ハアッ！」

（バキッ！ バキッ！ ボゴッ！）

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイツ！」

一方、二号に挑んだ戦闘員はある者は蹴り飛ばされ、あるものは

仮面ライダー二号

「フンッ！」

(ドゴッ！)

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイツ！」

ひじうちをくらい、後方に飛ばされてしまう。

そして棒を持って一号に戦いを挑んだ戦闘員は

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイツ！」

仮面ライダー一号

「フンッ！」

棒を受け止められ、そして・・・

仮面ライダー一号

「トオッ！」

(ドカッ！)

ゲルシヨツカー戦闘員  
「ギイイツ！」

蹴り飛ばされ、棒を奪った仮面ライダー一号は次々と戦闘員をなぎ払っていった。

そして二号はある戦闘員から奪い取った短剣で次々と戦闘員を切り倒していく。

仮面ライダー二号

「ハッ！ ハッ！」

（ズバツ！ ズバツ！）

ゲルシヨツカー戦闘員

「ギイイツ！」

そしてこの様子をみた死神とブラック將軍はここまでだと判断し撤退を決意した。

死神博士

「ここまでか・・・退くぞ・・・ブラック將軍」

ブラック將軍

「はっ！ 死神博士っ！」

そして二人は鞭を地面に叩き付けると

（フッ！）

あっという間に姿を消してしまふ。

一方戦闘員を倒した一号、二号はタルボナイトに向かっていた。

タルボナイト

「ガアアアッ・・・己ッ・・・仮面ライダーッ！」

仮面ライダー一号

「行くぞっ！タルボナイトッ！」

仮面ライダー二号

「俺達が相手だっ！」

タルボナイト

「ガアアアッ！」

タルボナイトはアンモナイトの触手を槍の様に伸ばして一号、二号を突き刺そうと

するが・・・

仮面ライダー一号

「ハッ！」

仮面ライダー二号

「ハッ！」

一号は右に、二号は左に寄り、タルボナイトの攻撃を交わした。

タルボナイト

「次はこれだっ！ グオオオオオッ！」

(ゴオオオオオオッ！)

タルボナイトは口からの火炎放射でダブルライダーを攻撃しようとするが

仮面ライダー一号

「トオッ！」

仮面ライダー二号

「セアッ！」

この攻撃もかわされてしまう。

タルボナイト

「グオオオオッ！」

タルボナイトは火炎攻撃中は他の攻撃が出来ないため、一定時間動けないのだ。

仮面ライダー二号

「今だッ！ 本郷！」

仮面ライダー二号

「おおっ！」

二号の合図で一号はタルボナイトに近づき、一号がタルボナイトの右半身を



そして二号がタルボナイトの左半身を抑える。

タルボナイト

「グオオオツ!?!」

火炎攻撃中で身動きがとれないタルボナイトはとっさに火炎攻撃を止めるが

ダブルライダーは高く跳び上がると、タルボナイトも跳び上がってしまう。

ダブルライダー

『トオオツ!』

タルボナイト

「グオオオオツ!」

(ビュオオオオオオン!)

そしてある地点まで連れてきた。

タルボナイト

「グオオオツ! こんな所まで連れてきて何のつもりだ!?!」

(ブンツ!)

仮面ライダー一号

「うわっ!」

仮面ライダー二号

「うわあっ！」

タルボナイトはダブルライダーをふりほどくと

仮面ライダー一号

「今だ愛紗！」

愛紗

「分かりました！」

タルボナイト

「グオオッ！」

一号が誰かに合図を出したのにタルボナイトは動揺し、上を見上げると

樽が三個、上から転がり落ちてくる。

タルボナイト

「ここに連れてきたのはこれが狙いか！　だが甘い！　グオオオオッ！」

（ブンッ！）

タルボナイトはアンモナイトの触手を振り回して落ちてきた樽を壊す。

すると

（ブシャアア！）

樽の中から何かが出てそれがタルボナイトにかかってしまう。

(バシャー！)

タルボナイト

「グオオオツ！？」

何かにかかったタルボナイトはずぶ濡れになり、かかってきた何かをみると

それは

タルボナイト

「み、水だとっ！？」

そしてそれと同時に自信の体の反応が鈍くなっているのを感じた。

タルボナイト

「グオオツ！？ な、何だ！？ 動きが段々鈍く・・・」

仮面ライダー二号

「やはり水が弱点だったか・・・」

仮面ライダー一号

「タルボナイトツ！ お前は恐竜とアンモナイトの改造人間でも元は化石っ！ 水を吸収した今、お前は無敵ではなくなった！」

タルボナイト

「グオオオツ！？」

仮面ライダー一号

「行くぞッ！」

仮面ライダー二号

「オオッ！」

そして最初に一号がタルボナイトに連続で殴りかかった。

仮面ライダー一号

「トオッ！トオッ！トオッ！」

（バキッ！バキッ！ボゴッ！）

タルボナイト

「グオオオオオンッ！」

今度は攻撃が効いている様である。

次は二号がタルボナイトに蹴りで攻撃を繰り返した。

仮面ライダー二号

「セアッ！ セアッ！ セアッ！」

（バシッ！ バシッ！ バシッ！）

タルボナイト

「グオオオオッ！」

つづいて一号が

仮面ライダー一号

「トオッ！」

(バキッ！)

仮面ライダー二号

「セアッ！」

(バキッ！)

仮面ライダー一号

「トオッ！」

(バキッ！)

仮面ライダー二号

「セアッ！」

(バキッ！)

交互にタルボナイトにパンチで攻撃していく。

タルボナイト

「グオオオッ！」

そして最後に

ダブルライダー

『トオオオオッ！』

(バキッ！)

タルボナイト

「グオオオオオンッ！」

二人同時に攻撃し、タルボナイトを殴り飛ばした。

そしてタルボナイトは立ち上がるともはや戦う力は残っていないようであった。

タルボナイト

「こ、この俺が・・・負ける・・・だと？」

トドメを刺すときだと一号は判断し、二号に合図する。

仮面ライダー一号

「行くぞッ！」

仮面ライダー二号

「おおっ！」

(ピュイイイイイン！)

そして二人の仮面ライダーは同時にポーズを取ると、同時に跳び上がる。

ダブルライダー

「トオオオオオオッ！」

そして……

ダブルライダー

『ライダアアアアアアアアア・ダブルキイイイイイイイイック  
』！』

(ドゴンッ！)

タルボナイト

「グオオオオオンッ！」

タルボナイトはライダーダブルキックでかなり前まで蹴り飛ばされ、  
地面に

転がりこむとそのまま石化してしまう。

(ピキピキピキッ！)

仮面ライダー二号

「一体どうなつたんだ!？」

仮面ライダー一号

「そうか……奴は化石から作られた改造人間。本来あるべき姿の  
化石に戻ったのか……」

そしてタルボナイトだった物にヒビが入り、一号はとっさに危険を  
察知する。

仮面ライダー一号

「危ないっ！爆発するぞ！」

二人はとっさにそこからジャンプで離れると

(ドオオオオオオオン！)

化石化したタルボナイトは爆発した。

(挿入曲：仮面ライダーのうた)

そして変身を解いた二人は自分達の帰りを待っていた朱里達の前へと駆け寄る。

朱里

「ご主人様！ 勝ったんですね！」

本郷猛

「ああっ・・・仮面ライダーの勝利だ」

鈴々

「鈴々は絶対お兄ちゃん達が勝つって信じていたのだ・・・それにしても

お水が弱点だなんて変な怪人だったのだ・・・」

一文字隼人

「死神博士は化石から強力な改造人間を作れるが、弱点までは克服できなかったようだな」

本郷猛

「だが、油断はできん。今回はお前が化石怪人の弱点の手がかりを思い出さなかったら



負けていたかもしれん。」

一文字隼人

「そうだな・・・それにしても、水鏡先生申し訳ありません。せっかくお守りとして頂いたという『龍の牙』を勝手に処分して・・・」

水鏡

「いえ、お守りとして頂いた物が悪いことに使われるくらいなら、あんなものない方がいいのです。それに私は『龍の牙』以上にこの子達が無事である方がよっぽど嬉しいです」

水鏡はそういうと朱里、雛里を抱きしめる。

朱里

「えへへっ・・・」

雛里

「えへへっ」

桃香

「まるで本当の親子ですね」

これを見て本郷達はこの三人の笑顔と絆を守れたと理解する。

本郷猛

「ははは・・・さあ、帰ろう！俺達の家へっ！」

愛紗

「はいっ!」

鈴々

「応なのだっ！」

本郷はこういうと自分のサイクロンに朱里、隼人は自分のサイクロンに鈴々

愛紗は自身の馬の後ろに雛里、星は馬の後ろに水鏡を乗せて、桃香はそのまま

馬に乗って城へと帰っていった。

ゲルショツカーの恐るべき改造人間『タルボナイト』はダブルライダーの

活躍で倒され、『龍の牙』奪取計画は失敗し及び龍の聖域制圧も未然に阻止された。

だが、この程度で諦めるゲルショツカーではない。また新たな強力な怪人を送り込ん

でくるだろう。しかし、二人は決してゲルショツカーに屈することはない。

血の繋がりはなくとも、本当の親子と変わらない絆が確かにあったと理解したのである。

この絆を守る為にも二人はこれからも戦い続けなければならない。

戦え！ 本郷猛！ 戦えっ！ 一文字隼人っ！

戦えッ！ 我らの仮面ライダー！

つづく

蘇った化石怪人 タルボナイト (後編) (後書き)

次回ゲルショッカー怪人大図鑑 その2 お楽しみにっ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7925s/>

---

仮面ライダー 打ち砕け！暗黒魔術師の野望

2012年1月12日02時55分発行